

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第1集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1

箱崎遺跡

—HZK1601・1603・1604 地点—



2018

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第1集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1

箱崎遺跡

— HZK1601・1603・1604 地点 —



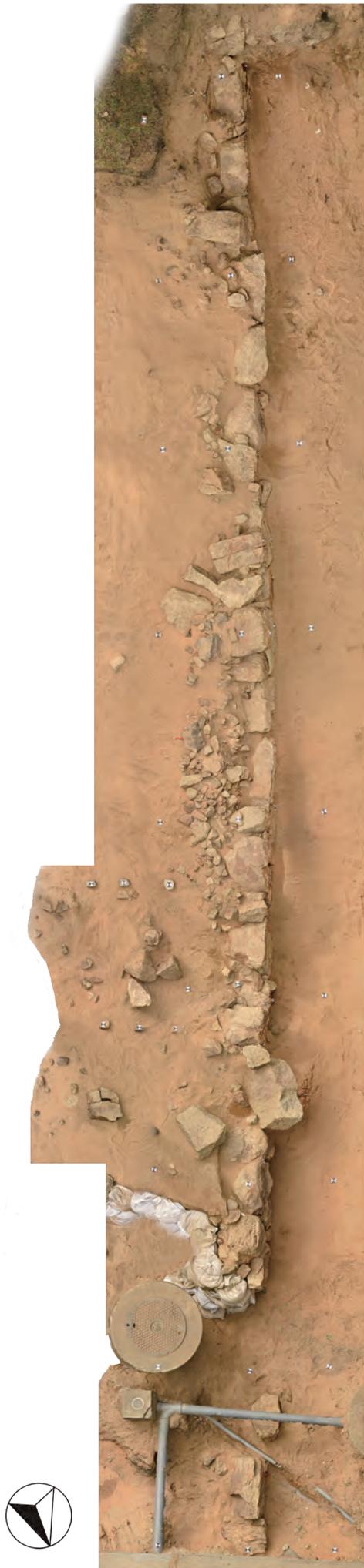
2018

九州大学埋蔵文化財調査室

表紙について

表紙は、九州大学のシンボルカラーであるワインカラーに、九州大学馬出キャンパスや箱崎キャンパスの調査で出土した食器に施されていた「九」をあしらって図案化したものである。

(デザイン担当：石井若香葉)



HZK1603地点西地区 石積み遺構 SF01・SF02



(1) HZK1601地点
調査区全景（北西から）



(2) HZK1601地点
溝状遺構SD01（南東から）



(3) HZK1601地点
石片散布状況SX01
（南西から）

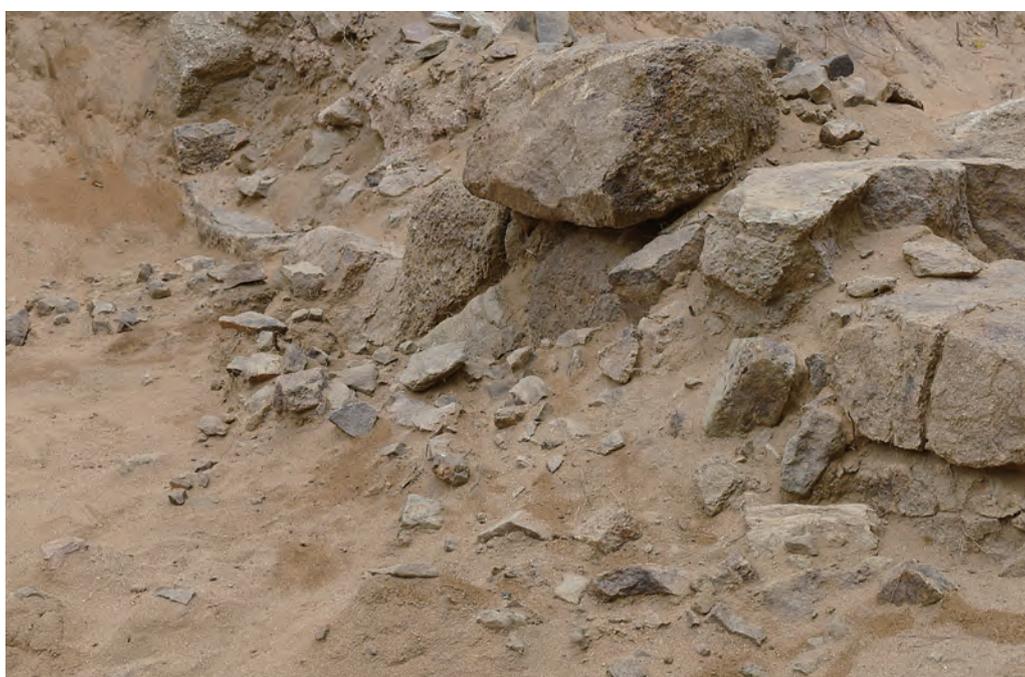
(1) HZK1603地点
西地区石積み遺構 SF01
(北東から)



(2) HZK1603地点
西地区石積み遺構 SF01
(北西から)



(3) HZK1603地点
西地区石積み遺構 SF01
裏込石散布状況 (南西から)





(1) HZK1604地点
西地区全景（北東から）



(2) HZK1604地点
西地区防音講義室犬走下
石積み遺構 SF03
（北西から）



(3) HZK1603地点
西地区石積み遺構 SF04
（西から）

序 文

ここに九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集が刊行されることを、九州大学の考古学専攻教員として心から喜びたい。かつ、学内の埋蔵文化財保護行政へ一定の責務を果たせたことに、安堵の感を抱いている。なぜなら、九州大学では、平成10（1998）年に『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』（第五冊図版編）を刊行して以来、これまで学内調査の発掘報告書を全く刊行してこなかったからである。また、筑紫地区以外では九州大学埋蔵文化財調査室として正式な発掘調査を行ってこなかったことも、自責の念に繋がっている。

昭和53（1978）年に九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室を立ち上げ、助手1名体制で筑紫地区（春日原地区キャンパス）の発掘調査を実施してきた。平成12（2000）年には全学組織の九州大学埋蔵文化財調査室に改名したものの、箱崎キャンパスの遺跡調査は全く行ってこなかった。筑紫地区の施設整備の一応の完成を以て発掘調査が終了し、西健一郎助手の退職を以て、平成19（2007）年に九州大学埋蔵文化財調査室は休止することとなった。その後、筑紫地区出土遺物に関しては学術研究員が遺物整理を続けてきたが、学内での発掘調査は行ってこなかった。

箱崎キャンパスにおける元寇防塁関連遺構は、大正2（1913）年に九州帝国大学医科大学の中山平次郎教授によって既にその存在が指摘され、その位置も推定されていた。それにもかかわらず、戦後の新制大学になって以降もその存在は顧みられず、記録保存の措置も施されてこなかった。平成12（2000）年に九州大学埋蔵文化財調査室に改変されて以降も、その努力は全くなされなかった。九州大学統合移転推進事業において、平成27（2015）年度に九州大学埋蔵文化財調査室を本格的に再開し、2名の教員を配置して、平成28（2016）年度から箱崎キャンパス内での発掘調査を実施してきた。その過程で、防塁遺構を発見したことについて、遅きに失したという叱責をいただくかもしれない。しかし、かろうじて遺跡保護への手がかりが得られたという意味では、九州大学として一定の責務を果たすことができたと考えている。そして、その位置はほぼ中山平次郎先生の推定と同じもので、箱崎キャンパスの中を南北に貫いて続くものであった。その点でも、発見された防塁遺構は、まさしく箱崎の元寇防塁に比定できるであろう。

これまで元寇防塁調査では石積みの土塁のみが注目されていたが、石積みの背後に空堀を有する防塁遺構があることが初めて明らかとなった。それは箱崎キャンパスがひろがる砂州の稜線に沿って南北に続くものであった。そして、空堀出土の遺物から、建治2（1276）年頃に築造された元寇防塁は弘安の役以降も薩摩の武士たちによって守り続けられていた可能性が示されている。今後、防塁遺構の全面的な展開を明らかにし、周辺における関連遺構の存在の有無を確認していかなければならない。また、従来の箱崎遺跡との関係についても、面的に明らかにする必要があるだろう。

2017年12月24日

九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は、平成28（2016）年5月16日から6月8日、同年8月22日から10月14日、平成29（2017）年2月20日から3月24日にかけて九州大学埋蔵文化財調査室が実施した箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス地区（以下、本遺跡）における埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査については、調査地点の略号を年度ごとに通し番号で付している。本書では、2016年度に実施したHZK1601地点・HZK1603地点・HZK1604地点の発掘調査成果を報告する。
3. いずれの調査地点も調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室であり、調査担当者は福田正宏（九州大学埋蔵文化財調査室・室員）、森 貴教（同・室員）である。
4. 発掘調査・整理作業の参加者はⅡ－1章およびⅢ－1章に記した。
5. 検出遺構および土層の実測は福田、森が行い、株式会社パスコが測量支援を行った。製図は福田・森と、三阪一徳（九州大学埋蔵文化財調査室・室員）、谷 直子（同・室員）が行った。
6. 出土遺物の実測および製図は、谷が行った。
7. 遺構および遺物の写真撮影は、福田、森、谷が担当した。
8. 本書に使用した2万5千分の1地形図は、国土交通省国土地理院が発行した『福岡』である。
9. 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修（1967）『新版標準土色帖』に準拠した。
10. 本書で用いる平面直角座標および方位は世界測地系で示し、標高は海拔（東京湾平均海面T.P.からの高さ）を表す。九州大学箱崎キャンパス（福岡市東区箱崎6-10-1）内の基準点新規埋設にかかる2級・3級基準点測量と4級水準測量は、株式会社パスコに業務委託した。
11. 本書で使用する遺構記号は、以下の通りである。
SD：溝、SF：石積み、SK：土坑・貯蔵穴、SQ：近代遺産、SX：その他
12. 本書Ⅰ章～Ⅲ章の執筆は、福田、森、三阪、谷のほか、宮本一夫（九州大学埋蔵文化財調査室長）が分担執筆した。文責は各文末尾に明記した。Ⅳ章は著名論文とし、福田、森、谷のほか、足立達朗（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター助教）、田尻義了（九州大学アジア埋蔵文化財研究センター准教授）、佐伯弘次（九州大学大学院人文科学研究院教授）、堀本一繁（福岡市博物館学芸員）、下山正一（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター客員研究員）、市原季彦（堆積環境リサーチ）、岩永省三（九州大学総合研究博物館教授）が執筆した（所属は本書刊行時）。Ⅴ章は福田が執筆した。
13. 本書に掲載した調査記録および出土遺物はすべて、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。今後、教育研究の場で積極的に活用されることが期待される。
14. 本遺跡の発掘調査・整理作業にあたって、以下の方々から格別のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
井上繭子、梅崎恵司、榎本義嗣、折田悦郎、柿添康平、菅野智則、北野博司、北山峰生、木島孝之、久住猛雄、黒木貴一、後藤 直、佐藤一郎、佐藤浩司、高瀬哲郎、主税英徳、常松幹雄、徳留大輔、富井 眞、中島恒次郎、服部英雄、福蘭美由紀、堀 賀貴、堀内秀樹、本田浩二郎、桃崎祐輔、吉田大輔、米倉秀紀（敬称略、五十音順）
15. 本書の編集は福田と森が行い、宮本が監修した。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

I	箱崎遺跡－九州大学箱崎キャンパス地区－について	1
1.	九州大学箱崎キャンパス発掘調査の体制	1
2.	2016年度調査について	5
3.	周辺の遺跡	11
4.	基本層序	15
II	HZK1601地点（理学部二号館前南地点）の発掘調査	18
1.	調査の経過と結果	18
2.	層序と年代	20
3.	遺 構	24
4.	遺 物	27
5.	小 結	38
III	HZK1603・HZK1604地点（中央図書館前南地点）の発掘調査	39
1.	調査の経過と結果	39
2.	層序と年代	44
3.	遺 構	46
4.	遺 物	62
5.	小 結	66
IV	分析と考察	68
1.	石積み遺構構築石材の岩石学的分析	足立達朗・田尻義了 68
2.	石積み遺構構築石材の調達について	森 貴教 79
3.	九州大学箱崎キャンパス地区出土遺物の特徴	谷 直子 82
4.	九州大学病院キャンパス採集の大型石材について	森 貴教 89
5.	箱崎の元寇防塁と薩摩	佐伯弘次 92
6.	史跡元寇防塁地蔵松原史跡指定地について	堀本一繁 99
7.	九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境	福田正宏・下山正一・市原季彦・森 貴教・谷 直子 108
8.	中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス	岩永省三 125
V	まとめ	146

図 版

報告書抄録

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

1.九州大学箱崎キャンパス発掘調査の体制

(1)九州大学埋蔵文化財調査室再編の経緯(表1)

九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室は、1978年の春日原地区キャンパス(現、筑紫地区キャンパス)の取得にともなう建物新営などの施設整備の埋蔵文化財調査を担当する組織として設立された。1978年6月に春日原地区埋蔵文化財調査委員会を設置し、その指導のもとに調査室が配置されることとなった。実際の発掘調査は春日原地区埋蔵文化財調査会があたることとなり、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室の助手が調査会の企画・運営にあたることとなった。1978年6月に横山浩一文学部教授が調査室室長に就任、同年7月に永井昌文医学部教授が調査会会長に就任し、同年8月に西健一郎文学部助手が着任した。この後、筑紫地区での発掘調査が1998年の第56次調査まで継続する。

1988年には、永井昌文教授に代わって同年7月1日に平田寛文学部教授が調査会会長に就任し、1989年横山浩一教授退官後、同年4月1日に西谷正文学部教授が調査室長に就任した。1990年7月1日には、調査会会長に丸山雍成文学部教授が就任し、『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第一冊)が1992年3月に刊行された。1992年7月1日には中村質文学部教授が調査会会長に就任し、中村教授の指導の下、第二冊が1993年3月、第三冊が1994年3月、第四冊図版編が1995年3月、第五冊図版編が1998年3月に刊行された。これにより、筑紫地区の1993年の55次調査までの発掘調査について一部報告がなされた。

1996年4月には中村質教授の退官にともない、川勝賢亮文学部教授が調査会会長に就任する。その後、筑紫地区(春日原地区キャンパス)以外においても、九州大学のキャンパス内に遺跡が存在することから、2000年度には九州大学埋蔵文化財調査委員会が組織され、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室も九州大学埋蔵文化財調査室に改名された。一方、1997年度を以て調査会は解散となり、筑紫地区の最後の発掘である1998年の第56次調査は、埋蔵文化財調査室が直接発掘調査を実施した。なお、1993年には箱崎地区と六本松地区への統合移転が福岡市西区の元岡地区を中心に行われることが決定したが、伊都キャンパスの埋蔵文化財調査に関しては、福岡市土地開発公社が伊都キャンパス予定地を先行取得し、2000年4月から福岡市教育委員会文化財部が埋蔵文化財調査を行い、福岡市土地開発公社による造成後、九州大学へ提供されることとなった。伊都キャンパス予定地からは、その後、福岡市教育委員会文化財部によって元岡石ヶ原古墳など貴重な埋蔵文化財が続々と発見されたため、その現地保存を含め、開発側の大学が遺跡の保存と開発の調整を行うことが求められた。そこで、学内に存在する文化財の現地保存あるいは記録保存などについて判断する、学内の専門家による文化財ワーキンググループが、1999年10月に新キャンパス計画委員会のなかに設置された。ワーキンググループ長は、2008年までは有馬學比較社会文化研究院教授、2009年からは岩永省三総合研究博物館教授が務め、現在に至っている。なお本ワーキンググループについては、2015年からキャンパス計画及び施設管理委員会のなかに位置づけられている。

1998年の第56次発掘調査をもって、筑紫地区での施設整備が一応完成した段階で、九州大学での埋蔵文化財調査も収束することとなる。このため、1999年度以降、九州大学埋蔵文化財調査委員会も事実上機能しなくなる。これにより、発掘調査報告書が刊行されないまま、筑紫地区での埋蔵文化財調

表1 九州大学埋蔵文化財調査室関係者

年 度	調査会会長	埋蔵文化財 調査委員長	調査室長	調査室教員
昭和53 (1978)		武谷 健二 神田 慶也	横山 浩一	西 健一郎
昭和54 (1979)	永井 昌文	神田 慶也	横山 浩一	西 健一郎
昭和55 (1980)	永井 昌文	神田 慶也	横山 浩一	西 健一郎
昭和56 (1981)	永井 昌文	神田 慶也 田中 健蔵	横山 浩一	西 健一郎
昭和57 (1982)	永井 昌文	田中 健蔵	横山 浩一	西 健一郎
昭和58 (1983)	永井 昌文	田中 健蔵	横山 浩一	西 健一郎
昭和59 (1984)	永井 昌文	田中 健蔵	横山 浩一	西 健一郎
昭和60 (1985)	永井 昌文	田中 健蔵	横山 浩一	西 健一郎
昭和61 (1986)	永井 昌文	田中 健蔵 高橋 良平	横山 浩一	西 健一郎
昭和62 (1987)	永井 昌文	高橋 良平	横山 浩一	西 健一郎
昭和63 (1988)	永井 昌文 平田 寛	高橋 良平	横山 浩一	西 健一郎
平成元 (1989)	平田 寛	高橋 良平	西谷 正	西 健一郎
平成2 (1990)	平田 寛 丸山 雍成	高橋 良平	西谷 正	西 健一郎
平成3 (1991)	丸山 雍成	高橋 良平 和田 光史	西谷 正	西 健一郎
平成4 (1992)	丸山 雍成 中村 質	和田 光史	西谷 正	西 健一郎
平成5 (1993)	中村 質	和田 光史	西谷 正	西 健一郎
平成6 (1994)	中村 質	和田 光史	西谷 正	西 健一郎
平成7 (1995)	中村 質	和田 光史	西谷 正	西 健一郎
平成8 (1996)	川勝 賢亮	杉岡 洋一	西谷 正	西 健一郎
平成9 (1997)	川勝 賢亮	杉岡 洋一	西谷 正	西 健一郎
平成10 (1998)		杉岡 洋一	西谷 正	西 健一郎
平成11 (1999)			西谷 正	西 健一郎
平成12 (2000)			西谷 正	西 健一郎
平成13 (2001)			西谷 正	西 健一郎
平成14 (2002)			西谷 正	西 健一郎
平成15 (2003)				西 健一郎
平成16 (2004)				西 健一郎
平成17 (2005)				西 健一郎
平成18 (2006)		有川 節夫		西 健一郎
平成19 (2007)		有川 節夫 今西裕一郎	田中 良之	
平成20 (2008)		今西裕一郎	田中 良之	
平成21 (2009)		今泉 勝己	田中 良之	
平成22 (2010)		今泉 勝己 川本 芳昭	田中 良之	
平成23 (2011)		川本 芳昭	田中 良之	
平成24 (2012)		川本 芳昭	田中 良之	
平成25 (2013)		川本 芳昭	田中 良之	
平成26 (2014)		川本 芳昭 安浦 寛人	田中 良之	
平成27 (2015)		安浦 寛人	宮本 一夫	福田 正宏・森 貴教
平成28 (2016)		安浦 寛人	宮本 一夫	福田 正宏・森 貴教
平成29 (2017)		安浦 寛人	宮本 一夫	福田 正宏・森 貴教・三阪 一徳

査室の事業が停止することとなる。2007年3月の西健一郎助手の退職にともない、九州大学埋蔵文化財調査委員会では埋蔵文化財調査室を休止することとした。

ところが2007年度になり、伊都キャンパスへの統合移転事業により、埋蔵文化財調査室が保管する資料の仮置き場であった箱崎キャンパスの旧応力研生産研本館（旧法文学部棟）解体のため、その地下室から収蔵資料を工学部3号館へ移設することとなった。このため学術研究員を雇用し、その任にあてることとなった。まず、田中良之比較社会文化研究院教授が2007年4月に埋蔵文化財調査室長に就任した。その後、田尻義了が2007年7月に学術研究員に着任し、資料のデータベース化などを試

みながら、移転事業を行った。この過程で未整理資料の存在が判明し、筑紫地区（春日原地区キャンパス）発掘資料の再整理を試みることとなった。2009年には再整理の初歩的成果として、九州大学総合研究博物館と共同で平成20年度公開展示「奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—」を九州国立博物館で開催し、好評を博した。2010年に新キャンパス計画委員会の文化財ワーキンググループとは別に、埋蔵文化財調査委員会のもとに埋蔵文化財検討ワーキンググループが設置された。2010年2月から現在に至るまで、後者のワーキンググループ長を岩永省三総合研究博物館教授が務めている。その後、2013年には九州大学教育研究活性化制度により、比較社会文化研究院と人文科学研究院が共同してアジア埋蔵文化財研究センターを設立した。アジアにおける埋蔵文化財調査法の開発や分析化学との学際研究により、新たな埋蔵文化財調査・研究を行う機関である。また、学内における埋蔵文化財の保存に関する助言も行うことになった。田尻義了が2013年5月にアジア埋蔵文化財研究センター准教授に採用されるのにもない、石川健が2013年5月に学術研究員に就任した。現在も引き続き、筑紫地区埋蔵文化財調査の再整理を実施している。

伊都キャンパスへの統合移転事業の一環として箱崎地区を売却するにあたり、中世の箱崎遺跡が箱崎キャンパス内にもひろがっていることが、福岡市経済観光文化局文化財部（2011年度までは福岡市教育委員会文化財部）の試掘調査によって判明していた。埋蔵文化財の記録保存を行った後に建物基礎の解体を実施し、箱崎地区売却が可能となる。かかる箱崎地区跡地売却を円滑に行うため、九州大学埋蔵文化財調査委員会では、2015年6月16日開催の埋蔵文化財検討ワーキンググループの検討結果にもとづき、2015年7月27日の委員会において、埋蔵文化財調査室を再編し、助教2名を配して、予定期間内での売却を目指すべく、箱崎地区の埋蔵文化財調査を実施することが決定した。これらの予算には箱崎地区売却益を充てることとし、特定プロジェクト教員として採用されることとなった。ここで、九州大学埋蔵文化財調査室が本格的に復活することとなった。2015年9月1日には、宮本一夫副学長が埋蔵文化財調査室長に就任した。同年9月17日に九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会を設立するとともに、埋蔵文化財調査室選考委員会を立ち上げた。その後、助教選考を行い、同年10月28日の埋蔵文化財調査室運営委員会で2名の候補者を決定するとともに、同年11月11日の人文科学研究院での資格審査を経て、同年11月16日の役員会で候補者の承認を得た。こうして、福田正宏と森貴教が助教として2015年12月1日付けで採用になった。

2016年度から箱崎地区での発掘調査を始めたが、発掘調査では調査会方式はとらず、作業員などを九州大学が直接に雇用することとした。こうして、2016年10月には中央図書館の南側に位置するHZK1603地点で元寇防塁とみられる遺構の発見に至っている。その後、2017年4月1日付けで福田正宏が准教授に昇任した。また、円滑に発掘調査報告書を発行するため、遺物整理に専念する形で谷直子が学術研究員として採用され、同年4月1日に着任した。さらに2017年10月1日には三阪一徳が助教として採用され、室員が増員された。

一方、筑紫地区（春日原地区キャンパス）の出土遺物の再整理は石川健学術研究員によって並行して進められているが、2016年度から5カ年計画で再整理を終了するための新たな予算化がなされ、総括報告書を2020年度中に刊行し、事業を終了することとなった。

(2) 平成29(2017)年度九州大学箱崎キャンパス発掘調査体制

九州大学埋蔵文化財調査委員会

委員長	安浦 寛人	理事・副学長
副委員長	宮本 一夫	副学長
委員	村上 裕章	法学研究院長
	福本 康秀	マス・フォア・インダストリ研究所長
	住本 英樹	医学研究院長
	小山内 康人	比較社会文化研究院長
	林 潤一郎	先導物質化学研究所長
	岩永 省三	総合研究博物館教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授
	堀池 幸浩	企画部長
	新津 勝二	総務部長
	迫田 浩一郎	財務部長
	山本 聖一郎	施設部長

九州大学埋蔵文化財検討ワーキンググループ

委員長	岩永 省三	総合研究博物館教授
委員	宮本 一夫	人文科学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委員長	宮本 一夫	埋蔵文化財調査室長
委員	岩永 省三	総合研究博物館教授
	坂上 康俊	人文科学研究院教授
	佐伯 弘次	人文科学研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	辻田 淳一郎	人文科学研究院准教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室

室長	宮本 一夫
准教授	福田 正宏
助教	森 貴教
	三阪 一徳
学術研究員	石川 健
	谷 直子

(宮本一夫)

2. 2016年度調査について

(1) 調査の方針

本学埋蔵文化財調査室では、九州大学統合移転推進事業にともない、箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス地区（以下、本キャンパスと呼ぶ）における埋蔵文化財の発掘調査を実施している。現在の発掘調査体制が整備された平成27（2015）年12月以降、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課との間で、本キャンパスにおける埋蔵文化財発掘調査の方針・計画に関する協議を重ねてきた。そのなかで、記録保存にとどまらず遺跡を保護・活用すること、学術的な観点から遺跡を価値評価することの重要性が指摘された。

本キャンパスの南側に接する福岡市東区箱崎地区には、古代末～近世に形成された箱崎遺跡が分布しており、その分布は本キャンパス内にもひろがる可能性がある。福岡市文化財部埋蔵文化財調査課は、本キャンパス内の複数箇所において、埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査を実施してきた。福岡市によるこれまでの試掘調査結果によると、箱崎遺跡包蔵地の分布範囲は、本キャンパス南西部（旧工学部エリア）にまでひろがっている可能性が高い。その密度は、北東部（農学部エリア）にむかって、徐々に低くなると考えられる。ただし、キャンパス内に張りめぐらされた地下埋設物の制限により、試掘調査による掘削が深部の遺物包含層に到達していない可能性が高い地点もある。そのため、箱崎遺跡の包蔵範囲が正確に把握されているとは言いきれない。

本キャンパスの箱崎遺跡包蔵地のなかで埋蔵文化財の保存状態が最も良好と予測される区域は、旧応力研生産研本館の周辺に位置する。平成20（2008）年度に福岡市教育委員会がこの区域の南側に隣接する住宅地区で発掘調査を実施しており（箱崎遺跡第61次調査）、12世紀～13世紀を中心とした集落と近世遺構の存在が確認されている（今井編2010）。そのため、北側に接する旧応力研生産研本館周辺の地下には、中世と近世の生活面が包蔵されている可能性がある。

それとは別に、本キャンパス内には、鎌倉時代の蒙古襲来に関連する石築地があったとされてきた。大正2（1913）年、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎（1913）が、その存在をはじめて指摘した。中山は、文永の役直後の博多湾沿岸一帯に築かれた、「高く砂堤を盛り、頂上に純然石より成った障壁を築いた」（中山1915：311頁）遺構のことを「防塁」と称した。そして、九州帝国大学医科大学と同工科大学の敷地内で博多湾汀線とほぼ平行して残る土手状の隆起（凸地）が、文献記録にも残る箱崎の元寇防塁であると考えた（中山1913・1984）。

中山がみた凸地は、工科大学を貫いて、地蔵松原新墓地の付近で終わるとされている。地蔵松原新墓地とは、明治末期に、農科大学（農学部エリア）の東を走る鉄道線路（現在のJR鹿児島本線）の東側に新設された公共墓地のことを指す。昭和3（1928）年頃、旧陸軍の大刀洗航空隊が農学部全景を上空撮影した。その空中写真¹⁾をみると、鉄道線路東側にひろがる農耕地帯のなかに地蔵松原新墓地が写っている（図1）。地蔵松原新墓地は、平成5（1993）年～平成8（1996）年に全面改葬・集約整備され、その一部が福岡市箱崎1号墓地として東区宮松3丁目に現存する（図2参照）。大正9（1920）年に、地蔵松原新墓地の北部とみられる地点で発掘が行われ、大型礫群が列をなして積まれた遺構が検出された（武谷1922）。この石積み遺構は、百道地区や生の松原地区など、博多湾岸の西部で確認されてきた元寇防塁とは、構造や立地条件が異なっていた。だが中山は、博多湾の海浜部における土砂堆積構造の地域差をもとに、これもまた元寇防塁の一例であると解説した。当時、箱崎地区の元寇防塁であるという氏の意見に対する異論は出なかったようだ。その後、発掘調査地点は、昭



図1 昭和2年11月1日大刀洗航空隊撮影 農学部全景空中写真（九州大学大学文書館所蔵）

和9（1934）年、当時の史蹟名勝天然記念物保存法により史蹟元寇防塁として指定された。現在は元寇防塁史跡指定地（地蔵松原地区）として保存され、地蔵松原公園として活用されている（図2参照）。

元寇防塁史跡指定地（地蔵松原地区）は、箱崎の砂州上を南北にのびる元寇防塁の最北地点に当たると考えられた。中山は、工科大学と農学部との中間にあった工科大学運動場の脇に残っていた隆起（凸地）に注目し、これが元寇防塁の痕跡であると考えた。「工科大学地内に入り、農科大学の境内より次第に海面に背きて右折し、今の鐵道線路と交叉」（武谷1922：35）という記述にしたがえば、本キャンパス内に元寇防塁が築造されていたとすると、旧運動場周辺となる旧理学部エリアから、農学部エリアを屈曲しながら経由して、元寇防塁史跡指定地（地蔵松原地区）に至るといふ、防塁推定ラインを引くことができる。

この推定ラインとJR鹿児島本線とが交叉する区画において、平成5（1993）年と平成12（2000）年に福岡市教育委員会が発掘調査を実施している。平成5年は鐵道線路の西に接する九州大学農学部圃場内（図3参照）、平成12年は鐵道線路軌道下が調査の対象とされた。調査の結果、両地点とも、比較的原位置に近い状態で、元寇防塁の構築材とみられる礫群が散布することが確認された。図2には、現在地蔵松原公園内（実線）とJR鹿児島本線の西側に隣接する九州大学保有地内（破線）に設置された、防塁の位置と方向を示す標柱間を結んだラインが引かれてある。これまでの調査結果から、地蔵松原史跡指定地からJR鹿児島本線近辺までの範囲においては、元寇防塁包蔵地ラインを推定することができる。

だが、この推定ラインの延長線が本キャンパス内のどこを通るのかを確定することは難しい。武



図2 箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド

谷（1922）で述べられたように、農学部エリアからほぼ北にむかって延びる防塁ラインは大正期の博多湾汀線から逸れて斜行しはじめるにせよ、その角度や屈曲点を知ることは難しい。ただし、川上（1941）が、農学部エリアの防塁ラインについて、中山とおなじく隆起に注目した記述を残している。「運動場を経過して農学部との境界に於て著しき隆起線あり。農学部に入りて尚隆起線を連続し夫より消えて農学部の動植物教室農学教室を経過し右折して東北に向ひ柵外に出て箱崎町共同墓地に於て約四間発掘せられて築石の露出せるを見たり」（同前：77）。隆起線の長さは約16間（29m強）だったとされる。この隆起線は現在、本キャンパス内に残っていないが、戦前の建物名が記載されているため、指摘されたラインについては、おおよそ復元することができる。

防塁の築造が開始されたのは建治2（1276）年頃であり、工科大学の創設は明治44（1911）年、農学部は大正8（1919）年である。また、帝国大学創設以来、工学部エリアも農学部エリアも、建物の増改築や地下埋設物の設置・改修などの工事にともない、機械掘削の影響をたびたび受けてきた。中山（1913など）によると、本キャンパスの元寇防塁は、大正期にすでに大きく破壊されていたようである。また、元寇防塁の機能が失われてから九州帝国大学の建造物群が建てられるまでの約600年間、本キャンパスが所在する箱崎の砂州は継続的に利用されてきた歴史をもつ。その間、防塁石材が継続的に抜き取られ、再利用されていた可能性は十分にある。元寇防塁あるいはそれに関連する遺構・包含層は、長期間にわたり、上部から人為攪拌の影響を繰り返し受けてきたため、原型を保っている地点はごく限られていることが予想される。

本キャンパスは、宇美川が多々良川と合流して博多湾に流れだす所に形成された砂州の上に位置する。また、筥崎宮付近を中心に分布する箱崎遺跡が、北に延びる箱崎の砂州の先端方向にひろがっていく所に位置する。古代末～近世に形成された箱崎遺跡は、淘汰のよい海浜砂層を主体とする海岸砂丘上にもひろがること知られている。下山（1989）が「箱崎砂層」と呼んだこの砂丘は、中粒砂もしくは粗粒砂によって構成される。砂層中部（標高-0.2m）に含まれる木炭の放射性炭素（ ^{14}C ）年代は $2580 \pm 110 \text{ BP}$ （Gak-13399）と報告されており、縄文時代晩期～弥生前期頃には相当な規模で砂丘が形成されていた可能性がある（下山1998）。海岸砂丘に立地する箱崎遺跡は、各種自然作用（博多湾側からの海成・風成作用や内陸側からの河川作用など）と、土地利用史にともなう上部からの人為攪拌との、双方の影響を繰り返し受けながら形成され、埋没したはずである。また、博多遺跡群において大庭（2013）が指摘したように、石列や砂丘列の位置と関係して、防塁築造後の砂州上における周辺住人による土地利用や行動範囲が長期的に制約された可能性についても考慮する必要がある。したがって、本キャンパスにおける元寇防塁を含む箱崎遺跡の価値評価を行うにあたり、長期的な遺跡形成／埋没過程や立地環境に関しても理解することが求められる。

その一方で、明治44（1911）年の工科大学創設以来、本キャンパス内には多数の歴史的建築物が建てられてきた経緯もある。近年、幕末～第二次世界大戦中に建設された日本の近代化遺産が、急速に社会的関心を集めている。九州帝国大学とそれを引き継いだ九州大学の建造物群は、福岡市東区箱崎地区における街づくりの歴史において重要な役割を担ってきた。大学校舎は地元、箱崎地区における貴重な近代化遺産であるという見解にしたがい、本学埋蔵文化財調査室では、地上文化財のみならず、上屋解体後に地下に残された旧校舎基礎部についても、一定の歴史的評価を与える必要があると判断した。そのため、煉瓦積遺構など、建築・設計に関わる定量的な情報に乏しい建造物のうち、保存状態が良好な遺構に関しては、埋蔵文化財の一部として記録保存の対象とする方針を立てた。



図3 平成28年度発掘調査地点の位置

(2) 調査範囲と調査区

本キャンパスの中央を、福岡市地下鉄箱崎線がほぼ南北方向に縦断して走る。その東側が理系地区、西側が文系地区となっている。地下鉄箱崎線の西側は、帝国大学創設期の海浜部であり、昭和初期に埋め立てられている。そのため、文系地区は、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が把握する埋蔵文化財包蔵地の範囲外となっている。理系地区が、本キャンパス内の埋蔵文化財調査対象地となる。

本キャンパスにおける埋蔵文化財調査に先だち、調査区への基準点測量を行うため、世界測地系対応の2級基準点3点(Q-1、Q-10、Q-12)、3級基準点9点(Q-2、Q-3、Q-4、Q-5、Q-6、Q-7、Q-8、Q-9、Q-11)を、GNSS測量機にて新設した(図2参照)。基準点の標高については、4級水準測量観測(2.9km)により、直接水準測量を行った。測量作業は、株式会社パスコに業務委託し、平成28(2016)年4月12日から同年5月20日に実施した。

また、理系地区全体に30mメッシュの大グリッドを設定した(図2参照)。原点は、Aラインと1ラインとの交点となり、西鉄貝塚駅の北東側に接した学外地に位置する。西北西-東南東方向にのびるX軸(A区~S区)に、真北から東に27.767385°傾くY軸(1区~42区)が直交する。各調査地点の平面位置は、たとえばM20区、S40区のように、大グリッド名で原則表記することにした。このグリッドは、本学の統合移転推進事業にともなう各種工事でも共用されている。ただし、埋蔵文化財の分布は、調査対象区域外となる学外に及ぶことが予測される。そのため、埋蔵文化財調査用の大グリッドのマス目に関しては、30mメッシュを原則とし、キャンパス外に対象範囲を一部拡大する。

大グリッドは、10mメッシュの小グリッド9つに等分される。大グリッドの北西端を基点としてX軸上に西から①区、②区、③区と続き、Y軸上に南へ1列進んだX軸上に西から④区、⑤区、⑥区が続く。さらにY軸上に南へ1列進んだX軸上に、西から⑦区、⑧区、⑨区が続く。小グリッドに区分して説明することが必要となる場合は、たとえばM20-①区、S40-②区のように、大グリッド名に枝番号を付して表記する。

本キャンパス内の発掘調査区は、建物解体・更地化のスケジュールや、埋蔵文化財調査に先行して実施される土壌汚染調査の結果に応じて設定されている。調査区は上述したグリッドラインを基準として原則設定するが、事情により、一部が不規則になることも予想される。そのため、グリッド名を調査地点名とせず、「箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス」の略号HZKを頭文字とし、各年度(西暦)の下2桁の末尾に年度内の調査番号(2桁)をつけた計4桁の通し番号を付すことで、調査地点名とすることにした。また、箱崎キャンパスにおける解体前の建物群との位置関係を、別称として書き添えることにした。たとえば、大グリッドJ25~M25区、J26~M26区のなかに設定した2016年度第1次発掘調査区はHZK1601地点となる。旧理学部二号館の南側に接する舗装路の脇に位置するので、その別称は「理学部二号館前南地点」となる。

(3) 2016年度発掘調査の概要

前述した調査の方針にしたがい、平成28(2016)年度は5月~6月にHZK1601地点(理学部二号館前南地点)、8月にHZK1602地点(船舶海洋工学実験室周辺)、8月~10月にHZK1603地点(中央図書館前南地点・第1次調査)、2月~3月にHZK1604地点(中央図書館前南地点・第2次調査)で発掘調査を行った(図3参照)。HZK1601地点・HZK1603地点・HZK1604地点は、本学埋蔵文化財調査室が主体となり発掘調査を行った。本書では、これら3地点の調査結果を報告する。

HZK1602地点に関しては福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が試掘調査を担当し、本学埋蔵文化財

調査室はそれに立ち会った。平成28（2016）年8月2日に、船舶海洋工学実験室周辺の3カ所（A地点・B地点・C地点）で重機掘削による試掘調査が行われた。A地点では、GL-3.4mにひろがる地下水層まで掘り下げたが、遺物包含層は確認できなかった。B地点では、GL-3.0mの位置から、人骨（四肢骨片）1点が出土した。近現代の各種攪拌作用の影響を強く受けて液状化した箱崎砂層中から単独で出土したものである。C地点では、GL-2.0m、GL-2.5m、GL-3.0mの位置から、破損品も含む陶製甕棺が各々1個体出土した。GL-2.5mで出土した甕棺破片には人骨が共伴した。B地点、C地点から出土した人骨と甕棺は、糟屋郡箱崎町の工科大学の建設地に存在したとされる近世・近代墓地に関連するものであろう。明治44（1911）年の大学設立に際して、それまでの墓地機能は地蔵松原新墓地へ移設されたが、一部は元々の位置に残されたと考えられる。HZK1602地点の南180mに位置する地蔵の森（創立75周年記念庭園：図3参照）にも、近世の墓石など、関連文化財があることが知られている。したがって、この周辺は、一連の近世～近代遺跡の包蔵地範囲内に含まれる可能性が高い。工科大学関連建物の建設に際して、寛永8（1631）年に福岡藩二代藩主、黒田忠之が建立した勝軍地蔵堂などが移設されたと伝わる。それらとともに、今後、詳細調査が必要とされる。

HZK1602地点の出土遺物に関しては、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が発見の届出を行い、本学埋蔵文化財調査室が整理・分析を担当した。本学埋蔵文化財調査室が担当した分析結果については後日報告する。（福田正宏）

3. 周辺の遺跡

箱崎遺跡（図4-1）は、現在の福岡市東区箱崎から馬出の範囲に所在する。遺跡は、博多湾を西に臨む南北にのびる砂州上に形成されている。砂州の東端を宇美川が流れ、北側では北流する宇美川と西流する多々良川が合流して博多湾に流れ込む。このような地形から、砂州は複雑な浸食・堆積作用を継続的に受けてきたと考えられる。この砂州を構成する要素のうち、箱崎遺跡の人類活動と深く関わるのは「箱崎砂層」である。箱崎砂層は完新世に形成され、その構成は石英質あるいはマサ質の中・粗粒砂が主となる。分布は福岡市東区箱崎付近を模式地とし、同馬出、博多区呉服町・中洲、中央区天神・地行、早良区西新町を中心に、一部は東区和白・香椎・舞松原、西区姪浜・生の松原・今宿に及ぶ。箱崎砂層中位に含まれる木片の放射性炭素年代測定値は 2580 ± 110 BPを示し、縄文時代晩期～弥生時代前期頃には相当な規模の砂層が形成されていたと推定されている（下山1989）。

さて、箱崎遺跡における先史時代以降の土地利用の実態が把握されはじめたのは、福岡市地下鉄2号線（箱崎線）建設を契機とした、昭和58（1983）年の福岡市教育委員会による発掘調査以降である（池崎編1988）。それ以前の『福岡市文化財分布地図』（福岡市教育委員会1981）には、元寇防塁推定線が記載されるのみであった。以降、市教育委員会に加え、福岡県教育委員会と九州大学埋蔵文化財調査室を含め、平成28（2016）年度までに計82次にわたる調査が実施されてきた。これらの発掘調査および文献史料の研究成果にもとづき、箱崎遺跡と周辺の遺跡における時代ごとの状況について簡略にまとめておきたい。

箱崎遺跡第6次調査では、12世紀後半頃の土坑からの出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の所産と推定される薄手の両刃石斧が出土している（加藤編1996）。第20次調査では古墳時代前期の竪穴住居から、縄文時代晩期～弥生時代前期の刻目突帯文土器の口縁部片2点が出土している（榎本編2003）。同時期の明確な遺構は現在のところ未確認であるが、これらは箱崎砂層の形成時期を

裏づける遺物として注目される。以降の時期については、第30次調査において弥生時代後期前葉の甕棺墓が発見されているにとどまる（松浦編2006）。箱崎遺跡周辺では、南側に位置する吉塚祝町遺跡（図4-5）第2次調査で弥生時代前期の土坑（壙）墓と推定される遺構（星野編2017）、同第1次調査で中期中葉の甕棺墓が検出されている（大庭編2000）。吉塚遺跡（図4-6）第1次調査では、明確な時期は不明であるが、貨泉や銅鏃が出土しており注目されている（池崎ほか編1989）。

古墳時代については、箱崎遺跡第8次調査で前期初頭の堅穴住居が発見されて以降、前期を主とし中・後期を含む居住域・墓域が遺跡東部の宇美川沿いに形成されたことが判明しつつある。同調査では飯蛸壺のみが多数検出された土坑や、堅穴住居から複数の飯蛸壺が出土しており、当時の漁撈活動を示す資料として注目されている（田上編1999）。また、第26次調査では前期の周溝墓と甕棺墓が複数検出されている（松浦編2004）。箱崎遺跡の南側にひろがる吉塚本町遺跡（図4-4）から博多遺跡群（図4-8）にかけても同様に、古墳時代の遺構が認められる。なかでも、堅粕遺跡（図4-7）第4次調査では後期の馬具を副葬した土坑墓が検出された点は特筆される（井澤ほか編1992）。箱崎遺跡の北側には前方後円墳である名島古墳（図4-3）が所在し、同古墳から三角縁神獣鏡が出土している（池崎ほか1990）。

ところが、箱崎遺跡では古代に入ると再び生活の痕跡が希薄になる。第10次調査で、近世の井戸から8世紀代の土師器がわずかに出土しているが（田上編1998）、当該期に位置づけられる遺構は未確認とされる。一方、箱崎遺跡の南に位置する吉塚遺跡の中央付近には、大同元（806）年に創建された東光院が位置する。そして、同遺跡と吉塚本町・吉塚祝町・堅粕遺跡一帯からは、越州窯系青磁・緑釉陶器・墨書土器など特殊な遺物が出土しており、律令期の公的施設が存在した可能性が指摘されている（大庭編2000）。また、博多遺跡群に関する明確な文献記録は今のところみられないが、発掘調査の成果を通じ、古代の官衙が存在したと推定されている（大庭2009など）。

中世前後における箱崎遺跡周辺の状況については、榎本（2008）と佐藤（2013）によって簡潔に整理されている。これらを参照し、以下にその概要を述べておく。延長元（923）年に、飯塚市大分に所在した大分八幡宮が遷座され筥崎宮が創建されたと伝えられる。箱崎遺跡第26次調査で筥崎宮創建期にあたる10世紀前半の方形堅穴が検出されるなど（松浦編2004）、発掘調査においても、ちょうどこの頃から箱崎遺跡が再び利用されはじめたことがわかっている。なお、10世紀前半～11世紀中頃の遺構は筥崎宮東南部に分布する傾向がある。『今昔物語集』には、11世紀初頭頃、大宰府官人でもあった筥崎宮司・秦貞重らが日宋貿易に積極的に関与し莫大な利益をえたことが記される（佐藤2013）。第26次調査で北宋代前半の越州窯系青磁（佐藤編2005）、第40次調査でイスラム陶器（赤坂編2007）が出土しており、これらは左記の文献記録を裏づける考古資料といえる。また、第26次調査で出土した石帯巡方など、官人との関連がうかがわれる遺物も出土している（佐藤編2005）。

11世紀後半～12世紀前半は、井戸・土坑・溝をはじめとした遺構の分布が北側にひろがり、遺構数も増加する。畿内産土器の量が他遺跡に比べて多い点については、永承6（1051）年に筥崎宮が京都南部の石清水八幡宮の別宮になったこととの関連性が指摘されている。当該期以降、中国陶磁器が増加するのに加え、第51次調査では「綱」が記された墨書土器が出土している（屋山編2007）。こういった事象は、「博多綱首」をはじめとする博多の宋商人を介した日宋貿易の存在を示す証左となる。ほかにも、高麗青磁・高麗系瓦が出土している点が注目されている（榎本2008、佐藤2013）。

12世紀後半～13世紀前半は、遺構数の増加と分布の拡大がみられ、南は筥崎宮周辺、北は九州大学箱崎キャンパス東南端付近の範囲に遺構が及ぶようになる。この時期以降、確実に墓が築造される



図4 箱崎遺跡とその周辺（国土地理院2008『1/25,000地形図 福岡』を引用・改変）

ようになり、第21次調査で鏡をはじめとする多数の副葬品をもった土坑墓・木棺墓が検出されている(榎本編2002)。また、当該期には青銅・ガラスの鑄造関連遺物が確認され、龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・白磁など輸入陶磁器も普遍的にみられるようになる(榎本2008、佐藤2013)。

13世紀後半～14世紀における遺構の分布範囲は、前時期と同様である。文献記録によると、文永11(1274)年の文永の役に際して、鎌倉幕府側では元軍の上陸に備えて竹崎季長が箱崎に滞在し、対する元軍の一部は箱崎から上陸したという(井上2008)。そして、戦乱にともなって筥崎宮は焼失したとみられている。発掘調査では焼土層と被熱した陶磁器が九州大学箱崎キャンパス東南端付近から南に300m、東西幅100mの範囲に分布していることが確認され、元軍の兵火に起因する可能性が指摘されている(佐藤2013)。文永の役を受け、鎌倉幕府は建治2(1276)年に西の今津地区から東の香椎地区にわたる博多湾沿岸一帯に元寇防塁を築造した。このうち箱崎地区は薩摩国によって造営分担され、西の御笠川から東の多々良川河口付近に及ぶ約3kmの範囲に防塁が築かれたと考えられている。元寇防塁をめぐる調査・研究成果については、I-2章およびIV-8章岩永論文を参照されたい。韓国で発見された新安沈没船は、至治3(1323)年に中国寧波から博多にむかう途中で沈没したものであり、ここから「筥崎」の銘が入った木簡が複数発見されている。これに加え、ほかの文献史料からも箱崎周辺が交易拠点あるいは海上交通の要衝であったことがわかる(榎本2008)。

15・16世紀になると、箱崎遺跡北側の九州大学箱崎キャンパス東南端付近と、南側の筥崎宮南側に遺構が集中するようになる(佐藤2013)。筥崎宮の南辺に沿うように、数回にわたり掘り直された溝が検出されており、これらは区画機能をもつと推定されている(榎本2008)。

箱崎遺跡では、中世の明確な道路は検出されておらず、地割については未だ不明な点が多い。ただし、道路にとまなう可能性がある溝はいくつか発見されている。また、多々良川と宇美川の河口付近の内海に「箱(筥)崎津」が存在したと推定されるが、その位置や構造はよくわかっていない。今後の発掘調査の蓄積により、地割や「箱(筥)崎津」の実態解明が期待される。なお、箱崎遺跡の約2km南には、「中世日本最大の貿易都市」(大庭2009ほか)として知られる博多遺跡群が位置する。同遺跡の発掘調査は、昭和52(1977)年の福岡市地下鉄1号線(空港線)建設を契機とする(小畑・池崎編1984)。吉塚祝町・堅粕・吉塚遺跡でも中世の遺構が確認されている。

近世の箱崎遺跡周辺における注目すべき歴史的事象として、名島城(図4-2)の築城があげられる。大友氏の筑前支配の拠点となったのは立花山城である。天文年間(1532～1555年)に立花鑑載によって立花山城の支城が名島に築造され、これが名島城の前身となる。天正15(1587)年に豊臣秀吉が島津討伐を実施し九州を平定したことを受け、小早川隆景が立花山城に入り、天正16(1588)年に名島城の築城が開始された。これ以降、慶長5(1600)年まで小早川氏の居城となる。この間、名島城は秀吉の朝鮮出兵へむけた拠点のひとつを担ったとされる。関ヶ原の戦い以降は、初代福岡藩主黒田長政が名島城を居城としたが、慶長6(1601)年の福岡城の築城開始から慶長12(1607)年の完成にともない名島城は廃城となる。絵図や文献記録から、名島城周辺には城下町が形成され、家臣団屋敷地や町屋が存在したことがわかる。福岡城築城にともない城下町も福岡城下に移されて以降、名島付近は小規模な村落になったとみられる(荒牧2013)。平成2(1990)年以降、福岡市教育委員会によって本格的な発掘調査が実施され、本丸を中心とする範囲の構造が解明されつつあるが(佐藤編1993など)、名島城下町の実態については未解明な部分が多い。名島城から約2km南に位置する箱崎遺跡でも、こういった事象と連動して何らかの土地利用の変化があったと推定されるが、その実態はわかっていない。

近現代における箱崎遺跡周辺の景観や土地利用の変化における画期として、九州帝国大学の創設があげられよう。その系譜は、慶応3（1867）年に福岡藩の藩校として、現在の福岡市中央区大名に設立された養生館にもとめうる。九州帝国大学の直接的な前身となるのは、明治36（1903）年、現在の病院キャンパスに京都帝国大学福岡医科大学が創設されたことである。そして、明治44（1911）年に九州帝国大学が創設され、このとき福岡医科大学を医科大学とし、箱崎地区に工科大学が新設された。以降、大正8（1919）年に医科大学が医学部、工科大学が工学部に改称されるとともに農学部が設置され、大正13（1924）年には法文学部、昭和14（1939）年に理学部が設置される。戦後は、昭和22（1947）年に九州帝国大学が九州大学に改称され、昭和24（1949）年に新制九州大学が創設されることとなる。以上から病院地区が最も古いキャンパスであることがわかるが、箱崎キャンパスは1911年の工科大学（工学部）設置以降、農学部（1919年）、法文学部（1924年）、理学部（1939年）の設置にともない、敷地を増やしながらか設も拡充されていく（折田2017）。箱崎周辺の景観や土地利用の変化と九州（帝国）大学がこれに与えた影響を考えるうえで、箱崎遺跡の近現代遺構の調査は注目されよう。（三阪一徳）

4. 基本層序

周辺地区におけるこれまでの発掘調査と本キャンパス内における試掘調査の結果から、本キャンパスは直線距離で1 km強離れた筥崎宮境内を中心として古代末以降に発展した箱崎遺跡の北側縁辺部に位置するといえる。したがって、本キャンパス内の調査対象地には、古代～近代（九州帝国大学期）の埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高い。

箱崎遺跡では、福岡市教育委員会により、これまで80以上にわたる発掘調査が実施されている。佐藤（2013）が、箱崎遺跡における古代末～中世の遺構の変遷に関して、時期を七つにわけて解説している。示された時期区分は、本キャンパス内における並行期の遺構分布や遺物出土状況の時期差を捉えるのに適している。そこで、古代末～中世の時期区分に関しては、佐藤（前掲）の区分案（箱崎遺跡Ⅰ期～Ⅶ期）を用いる。その一方で、遺跡が形成された箱崎の砂州上の海岸砂丘（箱崎砂層）の形成開始は縄文時代晩期を遡る可能性がある（下山1998）。今後調査が進むことにより、古代末より古い考古堆積物が発見される可能性がある。だが本報告時までに、その存在は確認されていないので、ひとまず、遺跡形成が開始する上限年代は箱崎遺跡Ⅰ期（10世紀～11世紀前半）を遡らないと考えておく。

以上のことから、本調査室が埋蔵文化財調査の対象とする遺跡の段階区分（基本層序）を、次のように認定する。Ⅶ層以下は、現時点で不明である。

Ⅶ層	表土・現代攪拌	新制九州大学誕生以降（1947年～現在）
Ⅵ層	近代	九州帝国大学期（1911～1947年）
Ⅴ層	17世紀～19世紀	江戸時代～明治時代初（九州帝国大学工科大学設立前）
Ⅳ層	15世紀～16世紀	室町時代（箱崎遺跡Ⅵ～Ⅶ期に相当）
Ⅲ層	13世紀後半～14世紀	鎌倉時代後半～南北朝時代（箱崎遺跡Ⅳ・Ⅴ期に相当）
Ⅱ層	12世紀後半～13世紀前半	平安時代末～鎌倉時代前半（箱崎遺跡Ⅲ期に相当）
Ⅰ層	10世紀～12世紀前半	平安時代中期～後期（箱崎遺跡Ⅰ・Ⅱ期に相当）

（福田正宏）

註

- 1) 九州大学大学文書館所蔵。この写真が掲載されている『(昭和六年度) 農芸科学科第七回卒業記念写真』(昭和6年3月第7回卒業生寄贈)には、「農学部遠景—空中写真(昭和二年十一月一日大刀洗航空隊撮影ノ原写ニヨル)」と説明書きが付けられているが、九州大学大学資料室編(2003:1)は、海岸線や校内建物の配置等から、昭和3年頃に撮影されたと推定している。

文献

- 赤坂 亨編 2007『箱崎28—箱崎遺跡第40・41次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第949集、福岡市教育委員会
- 赤崎敏男編 1979『九州大学春日原地区埋蔵文化財調査概報』九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 荒牧宏行 2013「織豊系城郭の変化—名島城から福岡城へ—」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史—特別編、福岡市、258-367頁
- 池崎讓二編 1988『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ 博多—高速鉄道関係調査(4)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集、福岡市教育委員会
- 池崎讓二・後藤 直・柳沢一男・本田光子・成瀬正和・曾根田論 1990「名島古墳調査報告」『福岡市立歴史資料館研究報告』第14集、43-74頁
- 池崎讓二・杉山富雄・小畑弘己・宮井善朗編 1989『吉塚—国道3号線改良工事に伴う吉塚第1次地点遺跡の調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第202集、福岡市教育委員会
- 井澤洋一・菅波正人・山口讓二編 1992『堅粕1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第274集、福岡市教育委員会
- 井上繭子 2008「博多の元寇防塁」『中世都市博多を掘る』海鳥社、48-51頁
- 今井隆博編 2010『箱崎39—箱崎遺跡第61次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1092集、福岡市教育委員会
- 岩永省三・田尻義了編 2009『九州大学総合研究博物館 平成20年度公開展示・九州国立博物館トピック展示 奴国の南—九大筑紫地区の埋蔵文化財—』九州大学総合研究博物館
- 榎本義嗣 2008「箱崎」『中世都市博多を掘る』海鳥社、52-55頁
- 榎本義嗣編 2002『箱崎13—箱崎遺跡第21次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第705集、福岡市教育委員会
- 榎本義嗣編 2003『箱崎14—箱崎遺跡第20次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第767集、福岡市教育委員会
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について—」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史—特別編、福岡市、302-317頁
- 大庭康時 2009『中世日本最大の貿易都市・博多遺跡群』新泉社
- 大庭康時 2013「中世博多の地割りと地形変遷」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史—特別編、福岡市、232-241頁
- 大庭康時編 2000『吉塚祝町1—吉塚祝町遺跡第2次調査の概要—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第624集、福岡市教育委員会
- 小畑弘己・池崎讓二編 1984『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ 博多—高速鉄道関係調査(1)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集、福岡市教育委員会
- 折田悦郎 2017「九州帝国大学の創設・発展と箱崎キャンパス」『平成29年度九州史学会シンポジウム・要旨』2頁
- 加藤隆也編 1996『箱崎4—箱崎遺跡群第6次・7次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第459集、福岡市教育委員会
- 川上市太郎 1941『元寇史蹟(地之巻)』秀巧印刷所
- 九州大学大学資料室編 2003『九州大学大学資料室ニュース』22
- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて—」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史—特別編、福岡市、242-247頁
- 佐藤一郎編 1993『名島城跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第318集、福岡市教育委員会
- 佐藤一郎編 2005『箱崎23—箱崎遺跡第26次調査報告(2)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第853集、福岡市教育委員会
- 下山正一 1989「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告(地質)』16-1、37-58頁
- 下山正一 1998「福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために—』九州大学出版会、11-44頁

- 田上勇一郎編 1998『箱崎6—箱崎遺跡群第10次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第551集、福岡市教育委員会
- 田上勇一郎編 1999『箱崎7—箱崎遺跡群第8次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集、福岡市教育委員会
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足—香椎発掘の石土混塁と地藏松原発掘の石塁—」『筑紫史談』25、33-36頁
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大学
- 中山平次郎 1915「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」『元寇史蹟の新研究』丸善、309-335頁
- 中山平次郎 1984 [1913]「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会 [『福岡日日新聞』連載論文] 213-238頁
- 西健一郎編 1992『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第一冊)、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎編 1993『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第二冊)、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎編 1994『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第三冊)、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎編 1995『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第四冊図版編)、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 西健一郎編 1998『九州大学埋蔵文化財調査報告—九州大学筑紫地区遺跡群—』(第五冊図版編)、九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室
- 福岡市教育委員会 1981『福岡市文化財分布地図 東部1』
- 星野恵美編 2017『吉塚祝町2—吉塚祝町遺跡第2次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第912集、福岡市教育委員会
- 松浦一之介編 2004『箱崎21—箱崎遺跡第26次調査報告(1)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第815集、福岡市教育委員会
- 松浦一之介編 2006『箱崎26—箱崎遺跡第30次調査報告(1)—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第914集、福岡市教育委員会
- 屋山 洋編 2007『箱崎31—箱崎遺跡第51次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第952集、福岡市教育委員会
- 山田広明 2012「第三節 箱崎の四季—旧糟屋郡」『春夏秋冬・起居往来』新修福岡市史—民俗編1、福岡市、223-235頁

II HZK1601地点（理学部二号館前南地点）の発掘調査

1. 調査の経過と結果

（1）調査地点の位置と調査に至る経緯

HZK1601地点（理学部二号館前南地点）は、旧人工分子集合組織体研究棟、旧工学研究科共同研究棟、旧学際教育・研究交流棟（リセウム悠遠）の北側に位置する。舗装路を挟んだ北には、旧理学部二号館が接している（図5参照）。

本地点の西側（博多湾側）には、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課による元寇防塁包蔵地推定ラインが引かれていた。平成25（2013）年、このラインに近接する本地点最西部の数地点（9917調査34-2Tr、9917調査34-1Tr）で、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課が試掘調査を行った。そこでは、元寇防塁、あるいはそれに関連する遺構・遺物の存在は確認されず、白磁や土師器などが出土したと報告されている。一方、本地点は工科大学敷地と農学部敷地との間に存在した旧運動場の敷地内に位置するため、帝国大学創設期以来、大型基礎をとまなう建造物は建てられていなかった。したがって、本地点は近代以降の大規模掘削や機械攪拌の影響を大きく受けておらず、遺物包含層や砂丘の自然堆積が良好に残っていると予測された。

そこで、遺跡が立地する砂州や海岸砂丘（浜堤）の自然堆積環境と人間活動痕跡との関係性を長期的に捉えるべく、箱崎浜の埋め立て前の汀線（現在の福岡市地下鉄箱崎線の位置にほぼ相当する）に対してほぼ直角となる、東西方向に長い調査区を設定して、発掘調査を実施する計画を立てた。

調査に先だち、平成28（2016）年4月16日付けで福岡県教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。この届出は、同月28日付けで受理された。現地調査は、同年5月16日に開始した。

（2）調査要項

調査名	箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス理学部二号館前南地点(HZK1601地点)発掘調査
文化財名	箱崎遺跡 九州大学埋蔵文化財調査室調査次数：HZK1601 福岡市調査番号：1612、福岡市調査次数：箱崎遺跡第80次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	530㎡
調査原因	学術研究
調査期間	平成28（2016）年5月16日～同年6月8日
遺物量	パンコンテナ5箱（内寸54cm×34cm×15cm）
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室（室長：宮本一夫）
発掘担当	福田正宏、森 貴教
調査作業員	安部芳範、井上光江、梶原久美子、坂上裕児、下田和弘、杉森宏治、堤 末子、網島年朗、永濱弘子、武藤マリ子、横谷明美
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香菜

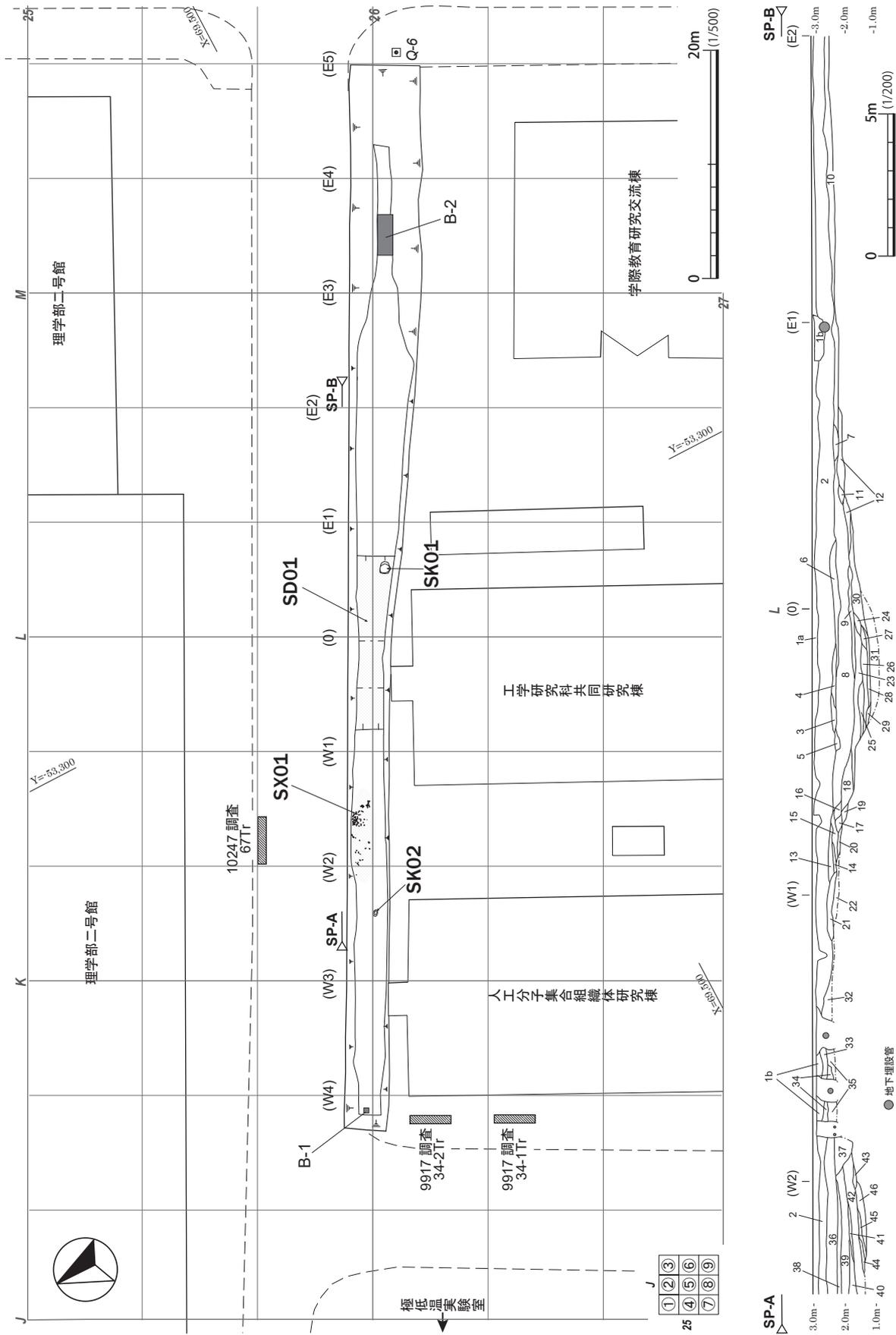


図5 HZK1601地点調査区全体図

（3）調査の経過

HZK1601地点の調査を開始するにあたり、26ラインをほぼなぞる全長約93mの調査区を設定した（図5参照）。調査区の北側半分はJ25区～M25区に収まるが、南側はJ26～M26区にも及ぶ。

調査では、重機掘削によって表土と近代以降の攪拌痕を除去した後、面精査を順次行い、遺物・遺構の検出に努め、地下水層に到達する直上の標高0.8mまで掘り下げた。トレンチ幅は平均で約4mとしたが、調査区の南半分は、隣接する建物や地下埋設物等により掘削可能範囲が制限されてしまった。そのため調査区南壁は、状況に応じて不規則な曲線を描く結果となった。

本地点では、帝国大学期以来の大型建物基礎やその埋設痕跡は確認されなかった。ただし、Lラインより西側には、調査区長軸にほぼ沿う形でほぼ東西方向に延びる排水用ヒューム管と、旧理学部二号館方面から延びる各種配管が錯綜した状態で埋設されていた。また、それらの整備にともなう機械攪拌の影響は各所に及んでいた。今回の調査では、埋設物を撤去せずに掘り下げを行い、地山掘削作業上の安全管理基準を遵守し、掘削深度に制限を設けた。そのため、自然堆積と人為堆積との関係を構造的に捉えるのに十分な深度まで到達していない。そこで、任意地点において重機掘削とハンド・ボーリングを併用した深部調査を行い、箱崎砂層とは起源が異なる堆積層（腐植物層、炭化層、シルト層など）の空間的位置を捉えた。また、必要箇所では炭化物採取を行い、その放射性炭素年代測定を行い、検出土層の時間的コンテクストを考察した。

調査の結果、溝状遺構1基（SD01）、土坑2基（SK01・SK02）、石片散布状況（SX01）が検出された。（福田正宏）

2. 層序と年代

（1）土層堆積状況

HZK1601地点の調査区長軸は約93mと長く、考古堆積物と自然堆積物が複雑に入り組む。説明の煩雑さを避けるため、Lラインを(O)ラインと呼び、26ラインに直行する10m間隔のラインを調査区全体に設定した。これらのラインは、本キャンパス全体にかかる大グリッドを9分割した小グリッドのラインに一致する。(O)ラインから博多湾側（ほぼ西）にむかって(W1)ライン～(W4)ラインとなり、(O)ラインから内陸側（ほぼ東）にむかって(E1)ライン～(E5)ラインとなる（図5参照）。

考古堆積物と関係する自然堆積物はすべて、地質学的には箱崎砂層として包括される。標高0.8mより下部には、地下水層がひろがっている。(E3)～(E4)ライン間の1カ所（B-2地点）で重機による深部掘削を行い、地下水層内の標高約0.6mで砂質シルトの堆積を確認した。同様のシルト堆積は、調査区西端から2.6m離れたB-1地点（(W4)ライン付近）におけるハンド・ボーリングによる深部調査でも、その存在を確認した。ともに、箱崎砂層下に分布する湿地堆積物の可能性がある。

調査区北壁の土層堆積 調査区北壁（SP-A～SP-B）において、博多湾にほぼ直角方向に見通して土層堆積状況を観察した（図5下段参照）。各層の詳細は、以下の通りである。

1a層：舗装路直下の埋め戻し土。

1b層：埋設管の設置にともなう碎石。

2層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂層。粘性中、しまり中。木炭片（4～10mm）を多量に含む。機械攪拌の影響を強く受ける。旧運動場造成時の整地面か。

3層：暗褐色（10YR3/3）砂質土層。粘性弱、しまり中。中・粗礫を含む。2層由来の攪拌の影響

を受ける。

- 4層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。粘性弱、しまり中。3層より含水量多。2層由来の攪拌の影響を受ける。
- 5層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。粘性中、しまり弱。含水量多。2層由来の攪拌の影響を受ける。
- 6層：褐色（10YR4/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。2層由来の攪拌の影響を受ける。
- 7層：暗褐色（10YR3/3）中粒砂層。粘性弱、しまり中。含水量少。炭化粒を含む。2層由来の攪拌の影響を受ける。
- 8層：暗褐色～黒褐色（10YR3/3～2/3）中粒砂層。粘性やや弱、しまり中。腐植土まじり。含水量多。炭化物を多く含む。遺物包含層。上部からの攪拌作用の影響により土層が乱れる。
- 9層：褐色（10YR4/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。極小の炭化粒をまだらに含む。
- 10層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化粒をわずかに含む。
- 11層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細・中礫をまだらに含む。上部から流れ込む。
- 12層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。漸移層。
- 13層：暗褐色（10YR3/3）中粒砂層。粘性中、しまり強。炭化粒をわずかに含む。2層由来の攪拌の影響を一部に受ける。
- 14層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂層。粘性弱、しまり中。遺物包含層。
- 15層：灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。含水量多。遺物包含層。
- 16層：褐色（7.5YR4/3）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。上部から流れ込む。
- 17層：暗褐色（7.5YR3/4）粗粒砂層。粘性中、しまり弱。炭化粒を多く含む。上部から流れ込む。
- 18層：暗褐色（10YR3/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。23層上面を覆う。8層に切られる。
- 19層：褐色（7.5YR4/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化粒を微量に含む。上部から流れ込む。
- 20層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粗粒砂層。粘性弱、しまり中。漸移層。
- 21層：灰黄褐色（10YR4/2）粗粒砂層。粘性中、しまり中。木炭片（5～10mm）を多量に含む。
- 22層：暗褐色（10YR3/3）粗粒砂層。粘性弱、しまり中。含水量多。下部は発掘停止面。
- 23層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。上部（23層か？）からの攪拌により、土層の一部に乱れあり。
- 24層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。23層より含水量多。
- 25層：にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂層。粘性弱、しまり中。炭化粒・木炭片を多量に含む。
- 26層：にぶい黄褐色（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 27層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 28層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂層。ところどころやや灰色がかかる。粘性弱、しまり弱。含水量多い。本層以下の層は、31層直下地下水層の影響により含水量が高まる。
- 29層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量多い。上部から流れ込む。
- 30層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 31層：黄褐色（10YR5/6）中粒～粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。直下に地下水層がひろがるため、含水量が極多。直上に集石をとまう遺物包含層。本層の堆積は地下水層に達する。下部は発掘停止面。
- 32層：褐色（10YR4/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。2層由来の攪拌の影響により、東側が削平

される。

- 33層：灰黄褐色（10YR4/2）中粒砂層。粘性弱、しまり中。小礫・炭化粒を多量に含む。高有機質。配管工事にともなう攪拌の影響を受ける。
- 34層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。配管工事にともなう攪拌の影響を受ける。
- 35層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。含水量やや多。配管工事にともなう攪拌の影響を受ける。
- 36層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。インフラ整備工事にともなう埋め戻し土。
- 37層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。配管工事にともなう攪拌痕。
- 38層：明黄褐色（10YR6/6）細礫層。粘性弱、しまり中。
- 39層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化粒を多量に含む。
- 40層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。土色は39層よりややくすむ。粘性弱、しまり弱。炭化粒をわずかに含む。
- 41層：にぶい黄橙（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 42層：にぶい黄橙（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細礫をところどころに含む。
- 43層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり中。炭化粒を多量に含む。45層に類似する。
- 44層：にぶい黄褐色（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 45層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細礫をところどころに含む。炭化粒を多く含む。遺物包含層。43層に類似する。
- 46層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。

（2）基本層序との対応関係

HZK1601地点で確認された土層・遺構・遺物と、本キャンパス内における遺跡全体の基本層序（本書I章参照）との対応関係は、以下の通りである。

- 0層** 1層および、地下埋設物とそれともなう掘削・充填部。
- I層** 旧運動場造成と関連する2層。
- Ⅲ層** 遺構や遺物包含層としては確認されていないが、SD01埋土上部（8・9層）にはⅢ層相当の遺物が混在する。0層・I層起源の人為攪拌の影響を受ける。
- Ⅳ・Ⅴ層** SD01埋土（8・9・18・23～31層）および、SD01の埋没・崩壊ともなう壁際堆積土（11～20層）。Ⅳ層とⅤ層に相当する遺物が同一層内で混在し、層位区分が難しい。
- Ⅵ層** 45層（遺物包含層）から11世紀以前の遺物が出土した。45層以下の層位はⅣ層相当の可能性が高い。（W3）ライン付近のみで確認された。後述するように、本層に含まれる炭化材の¹⁴C年代は12世紀後半～13世紀半ばとなった。出土遺物の型式年代から、SD01最深部（31層）の掘り込みは、さらに下部に分布するⅥ層相当の包含層にまで到達した可能性がある。

(3) 放射性炭素年代測定結果

HZK1601地点で確認された土層に含まれる炭化材（木炭）3点について、放射性炭素年代測定を行った。コンタミネーションを極力排除するため、考古学的原位置論にもとづき、埋没後攪拌の影響が最小限であると判断した地点で採取した試料の年代を測定した。試料の調製・測定は、株式会社パレオ・ラボに業務委託した。測定には加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用い、 ^{14}C 濃度に関して同位体分別効果の補正を行った。暦年較正年代の算出は、IntCal13を用いた。結果の詳細は表2に明記した。暦年較正結果のうち、 2σ 暦年代範囲（確率95.4%）による年代は、以下の通りである。

B-1地点の箱崎砂層中（標高0.6m）に含まれる炭化材No.1の ^{14}C 年代は 1035 ± 20 BP（PLD-31993）、較正年代は981-1026 cal AD（10世紀後半～11世紀前半）となった。B-2地点の箱崎砂層中（標高1.5m）に含まれる炭化材No.2の ^{14}C 年代は 725 ± 20 BP（PLD-31994）、較正年代は1261-1290 cal AD（13世紀後半）となった。出土状況からみて、これら2点は、木製品などの一部ではなく、何らかの自然作用を受け、砂層中の一部に平面的にかたまった炭化有機物である。10世紀後半～13世紀半ばの、海岸砂丘の発達と関係して堆積した炭化材であろう。

箱崎砂層(W2)－(W3)ライン間の遺物包含層（45層：標高1.2～1.4m）から採取した炭化材No.3の ^{14}C 年代は 835 ± 20 BP（PLD-31995）である。較正年代は1167-1255 cal AD（12世紀後半～13世紀半ば）となり、同層出土遺物の型式年代（11世紀以前）より新しい。年代差の理由は判然としない。

(福田正宏)

表2 放射性炭素年代測定値一覧

No	調査年度	調査地点	試料番号	出土地点	出土遺構	出土層位	試料種類	^{14}C 年代 (BP, $\pm 1\sigma$)	Labo No.	暦年較正年代 (cal AD, 1 σ range) (cal AD, 2 σ range)		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)
1	2016	HZK1601	16R2T-C2	(W4)ライン B-1地点	—	箱崎砂層中 標高約0.60m	炭化材	1035 ± 20	PLD-31993	994-1018 (68.2%)	981-1026 (95.4%)	-28.87 ± 0.20
2	2016	HZK1601	16R2T-C3	(E3)-(E4)ライン B-2地点	—	箱崎砂層中 標高約1.51m	炭化材	725 ± 20	PLD-31994	1269-1284 (68.2%)	1261-1290 (95.4%)	-26.36 ± 0.15
3	2016	HZK1601	16R2T-C4	—	—	45層	炭化材	835 ± 20	PLD-31995	1186-1245 (68.2%)	1167-1255 (95.4%)	-26.74 ± 0.15
4	2016	HZK1603	16CTN-C3	西地区 bーb'ライン	SF01背部 盛土・登地層	30層 自然堆積物	炭化材	900 ± 20	PLD-33075	1049-1085 (41.1%) 1124-1137 (10.4%) 1150-1165 (16.8%)	1042-1105 (50.3%) 1117-1190 (43.7%) 1198-1205 (1.3%)	-23.90 ± 0.21
5	2016	HZK1603	16CTN-C5	西地区 SF01	—	SF01下-0.34m cーc'ライン・19層 箱崎砂層中	炭化材 (針葉樹)	875 ± 20	PLD-33076	1159-1206 (68.2%)	1051-1082 (11.4%) 1151-1219 (84.0%)	-23.90 ± 0.24
6	2016	HZK1603	16CTN-C10	西地区 SF01	—	SF01下-0.47m 箱崎砂層中	炭化材 (針葉樹)	970 ± 20	PLD-33077	1022-1045 (37.9%) 1097-1120 (26.6%) 1143-1147 (3.7%)	1019-1051 (44.6%) 1082-1128 (40.1%) 1135-1152 (10.6%)	-24.89 ± 0.21
7	2016	HZK1604	HZK1604-C2	南地区 B-1地点 北壁	—	B-1地点北壁6層 自然堆積物	炭化材 (複数破片 $\leq 0.2\text{cm}$)	1785 ± 20	PLD-34218	222-258 (42.9%) 296-322 (25.3%)	141-197 (10.7%) 209-263 (48.1%) 276-330 (36.6%)	-16.33 ± 0.23
8	2016	HZK1604	HZK1604-C4	西地区	—	石積み遺構下 dーd'ライン・27層 自然堆積物	炭化材	865 ± 20	PLD-34219	1164-1206 (68.2%)	1056-1076 (4.1%) 1153-1220 (91.3%)	-28.67 ± 0.22
9	2016	HZK1604	HZK1604-C101	南地区 B-1地点 北壁	—	B-1地点北壁6層 自然堆積物	炭化材 (複数破片 $\leq 0.3\text{cm}$)	955 ± 20	PLD-34220	1030-1046 (21.1%) 1092-1121 (37.7%) 1140-1148 (9.4%)	1023-1056 (28.4%) 1076-1154 (67.0%)	-26.40 ± 0.21

3. 遺 構

(1) SD01 (図6)

調査区のほぼ中央部となるK25-⑨区・K26-③区・L25-⑦、L26-①区で検出された。K26-③区、L26-①に埋設されたヒューム管の下部にも遺構の範囲はひろがるが、今回は調査対象外とした。

SD01は、調査区の長軸にほぼ直交して、北東から南西方向に延びる溝状の落ち込みである。検出面上端部は幅約14.0m、中央の最深部で深さ約1.5mを測る。埋土の上部は中粒砂が主体となるが、下部に向かうにしたがい、粗粒砂の占める割合が高まる。埋土は全体的に箱崎砂層により構成されるが、考古残滓が含まれるため、相対的に高有機質である。

埋土は、埋没順に埋土①(31層)、埋土②(23～30層)、埋土③(8・9・18層)に分けられる。ただし、埋没過程で何度も上部からの人為攪拌を受けており、各層の境界は厳密に区別できない。3～6層は、2層由来の攪拌作用を受けた8層に付随する土層と判断した。含まれる遺物の年代幅は、埋土①が11世紀後半～12世紀末、埋土②が12世紀中頃～13世紀前半、埋土③が12世紀後半～15世紀後半にほぼ収まる。埋土①(31層)からは、拳大から人頭大の被熱を受けた礫の集中が検出された。礫の配置関係に規則性はないため、遺構の可能性は低い。

標高約0.8mで地下水層に到達したため、そこで本遺構の掘削を中止した。

(2) SK01 (図6)

SD01の東端部、L26-①区で検出された。平面プランはいびつな楕円形で、長径1.05m、短径0.90m、深さ0.28mを測る。SD01の上層(埋土①)を掘り込んでいる。

埋土中から長さ約14cmを測るウシの上腕骨片1点のほかに、石炭片が多量に出土した。帝国大学期以降に掘り込まれた土坑であろう。

(3) SK02 (図6)

調査区の西寄りの地点、K25-⑦区で検出された。平面プランは楕円型で、長径0.58m、短径0.36m、深さ0.12mを測る。埋土から遺物は出土していない。遺構の性格、帰属時期は不明である。

(4) SX01 (図7)

調査区の西寄りの地点、K25-⑧区で、石片(礫岩・砂岩)の散乱する状況が確認された。石片は、SD01の掘り方西端から約6m西側の地点を東端とし、そこから西に5.7mの範囲内に分布する。

周囲には、埋設管の設置や改修、帝国大学期における旧運動場の整地作業などともなう機械攪拌の影響が大きく及んでおり、これらの石片が考古学的原位置を保っているとはいえない。標高2.4～2.5mの範囲内に石片の垂直分布がまとまっている点は、整地作業にともない、ならされた可能性を示唆する。なお次章で報告するが、HZK1603・HZK1604地点の調査では石積み遺構が検出された。SX01の石片は、この石積み遺構にともなう裏込石と、大きさや材質が類似している。石積み遺構は、本来、本地点にまで延伸していたと考えられる。SX01の石片は、近隣に存在していた石積み遺構が近代以降の攪拌作用を大きく受けて破壊され、旧運動場の整地作業が行われたことで、この地点に移動した可能性が高い。

(森 貴教)

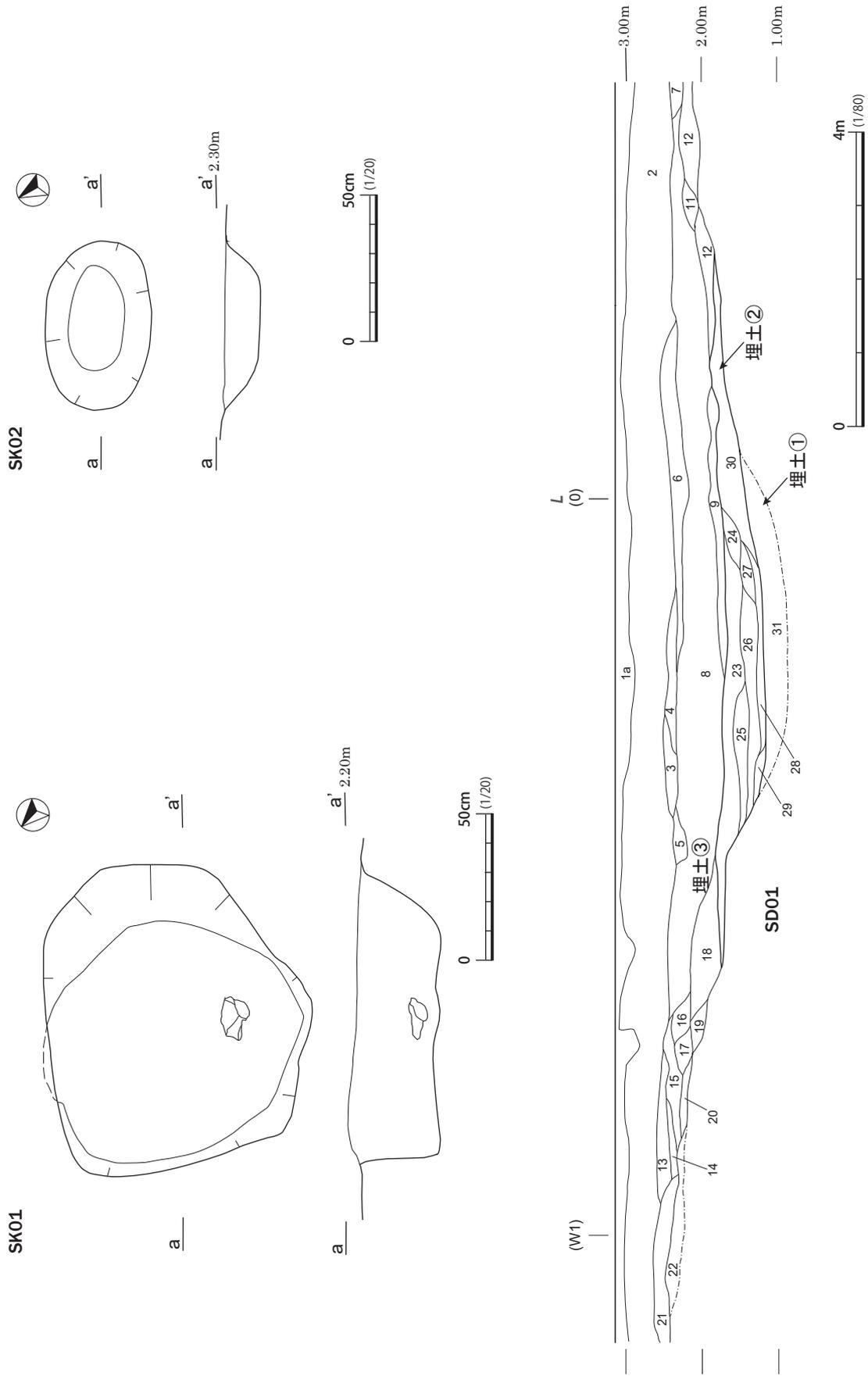


図6 HZK1601地点 検出遺構図1 (SK01, SK02, SD01)

II HZK1601地点（理学部二号館前南地点）の発掘調査

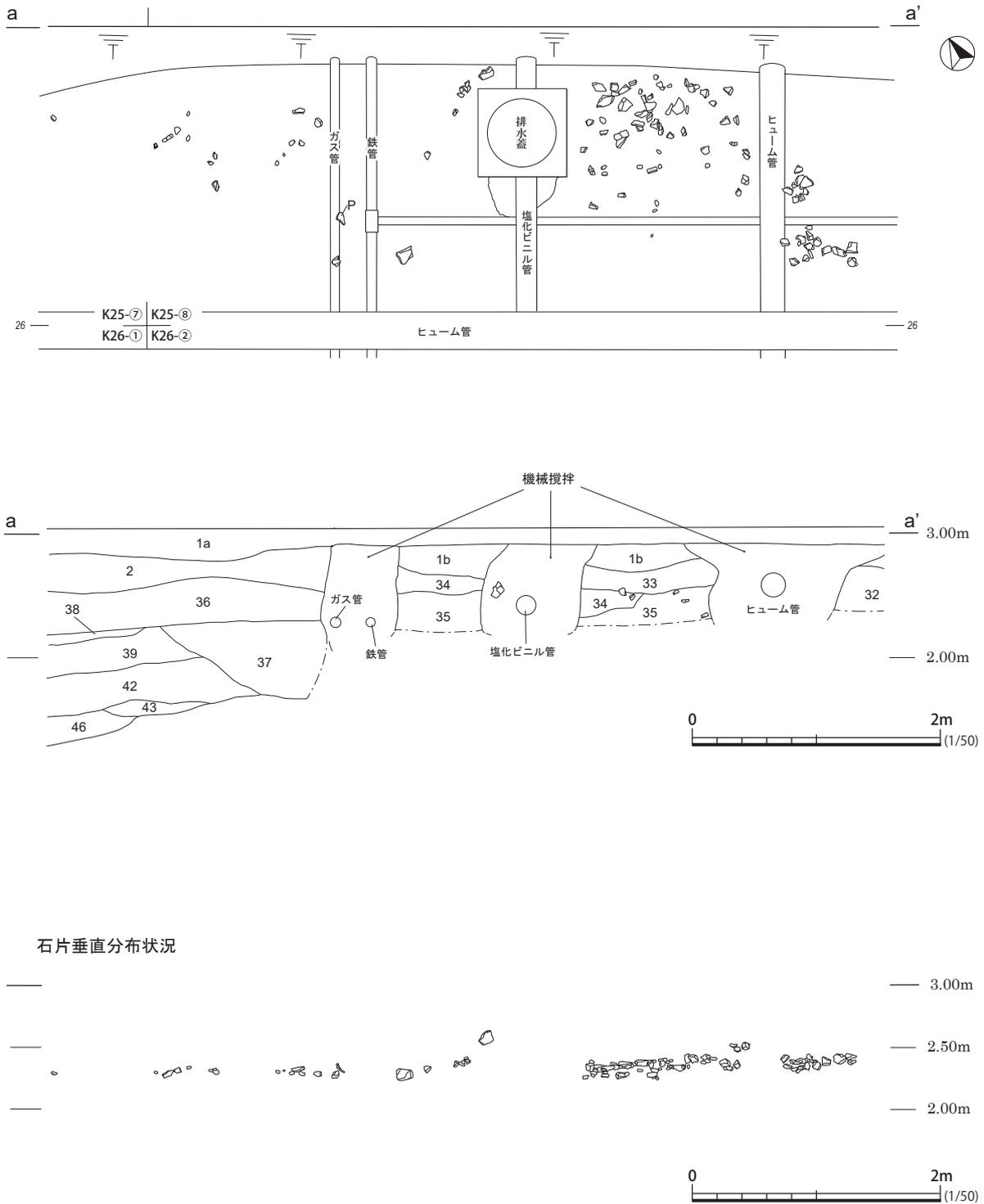


図7 HZK1601地点 検出遺構図2 (SX01)

4. 遺物

(1) 45層 (図8-1~3)

1は土師器の坏で、内外面ともナデ調整である。底部外面はヘラ切りで板状圧痕がのこる。2は須恵器の甕と思われるが、内面にハケメを施す。外面は格子タタキである。3は移動式カマドの底部分である。全体に指オサエが明瞭である。ナデ調整。

(2) SX01 (図8-4・5)

SX01を構成する石片群の周辺から出土した。出土状況から、SX01に共伴するとは考えにくい(図7参照)。4は土師器の甕で、全体に器壁が薄く、胴部に断面三角形の突帯が1条めぐり。内面はヨコハケ、外面はナデ調整で、一部にヨコハケが残る。5は須恵器の短頸壺で、口縁部と底部を欠損する。頸部内面と外面はナデ、胴部内面はヨコハケである。胴部下半部の外面にススが付着している。

(3) SD01埋土③ (図9~12)

6~85は、SD01の埋土③(8・9・18層)から出土した。6~8は土師器の皿で、いずれも内外面ともナデ調整で糸切り底である。6は底部中央に焼成後穿孔がある。7は口径7.6cm、底径6.2cm、器高1.2cm、8は口径8.5cm、底径7.4cm、器高1.4cmにそれぞれ復元できる。9から11は土師器の坏である。9・10は内外面ともナデで糸切り底である。9は口縁部に、10は底部中央に焼成後穿孔がある。10は底径7.0cmに復元できる。11は内外面ともナデで、底部はヘラ切りである。外面にススが付着し、それに対応する部分の内面が黒く変色している。胴部はやや膨らみながら立ち上がり、口縁部は肥厚する。口唇端部を丸くおさめる。12は土師器の甕で、逆L字状の口縁部をなす。胴部の器壁はやや厚い。内外面ともナデで、口縁部の平坦面にハケメが見られる。口唇部は面取りして仕上げ、やや外側に下がる。13・14は土師器の鍋である。いずれも胴部上半で屈曲して頸部を作り、口縁部がゆるく内湾して広がる。13は内面がヨコハケ、外面がナデ調整である。口唇部に内面から外面に向けて、焼成後穿孔している。14は内面がヨコハケ、外面は口縁部がタテハケのちナデ、胴部がナデ調整である。15は土師器の播鉢で、底部から直線的に立ち上がる。摺溝は幅広く、内面は使用により摩滅している。外面はナデ調整である。16・17は土師器の捏ね鉢である。16は注口部分で、内外面ともタテハケのちナデである。口唇部はヨコナデである。17は内外面ともナデである。口唇部は研磨したように磨耗している。18は瓦器の火鉢で平面形は方形を呈し、四隅に短い脚が付くものと思われる。内面は粗いナデ、外面はナデで、口唇端部は平坦に成形する。19は須恵器の坏蓋で、口唇部が少し突出し、器高が低い。20は須恵器の鉢と思われるが、器壁が薄い。内外面ともヨコナデで、口唇部はつまみあげたように成形する。21は須恵器の壺底部である。平底で、胴部は直線的に立ち上がる。内外面ともナデで内面屈曲部には強いヨコナデのため稜線がつく。22・23は須恵器の甕である。22は胴部片で、外面は格子タタキであるが、内面は同心円タタキではない。23は甕の頸部分で、内面はナデ、外面はハケメで、横位に4条の沈線が施される。24は龍泉窯系青磁小碗である。口縁部はゆるく外反し、体部に向かってS字状を呈する。内外面とも施釉する。25~29・32・34は龍泉窯系青磁の碗である。25は口縁部がゆるく外反し、内外面とも厚く釉がかかる。26は鎬蓮弁の碗で、内面は無文である。内外面とも厚く釉がかかる。大宰府編年のII-b類。27・28はケズリ高台の底部で、いずれも内外面に厚く施釉するが、高台部内面の釉を描き取っており、その部分が赤茶色を呈する。27は底径5.8cm、28

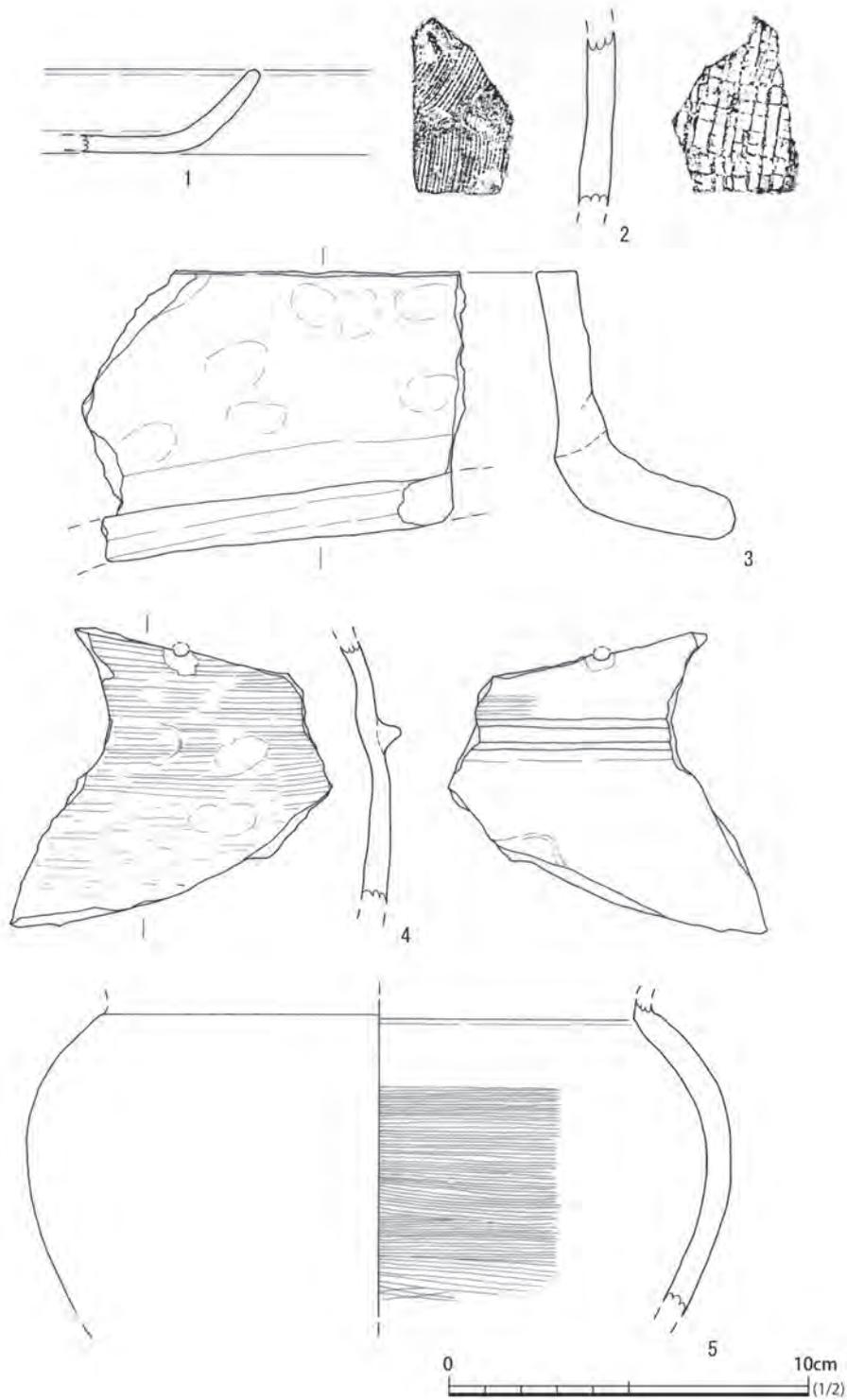


図8 HZK1601地点45層・SX01出土遺物

は底径5.4cmに復元できる。29は外面に蓮弁を片彫りする。内外面とも厚く施釉する。大宰府編年のⅡ類と思われる。32は内面に片彫りで草花文を描き、内外面とも施釉である。34はケズリ高台の底部で、器壁が厚い。内外面とも厚めに施釉するが、高台内側は露胎である。30・31は龍泉窯系青磁の皿である。30は口縁部の立ちあがり直線的で、内外面とも厚く釉がかかる。31の底部は上げ底で高台

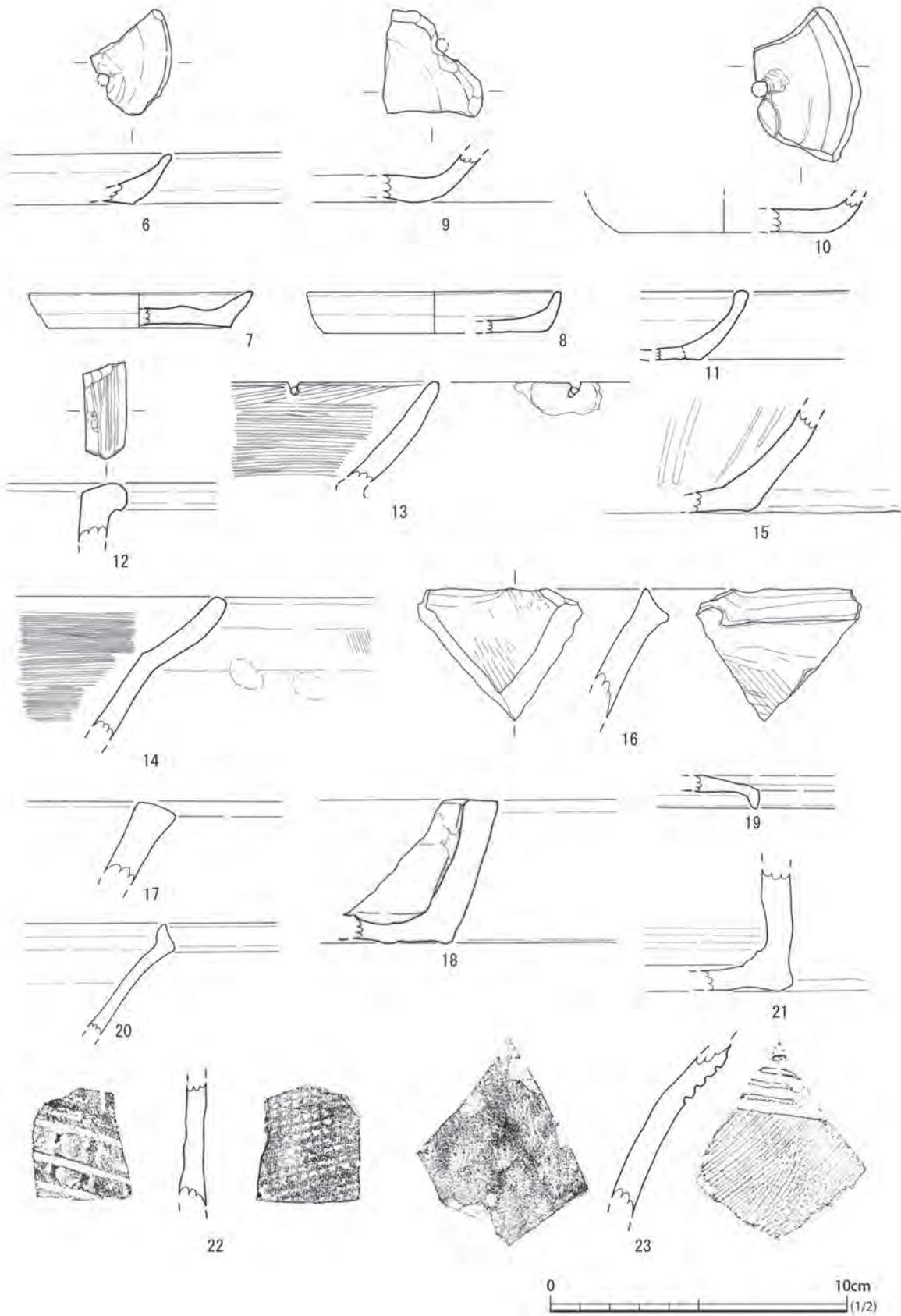


图9 HZK1601地点SD01埋土③出土遺物 1

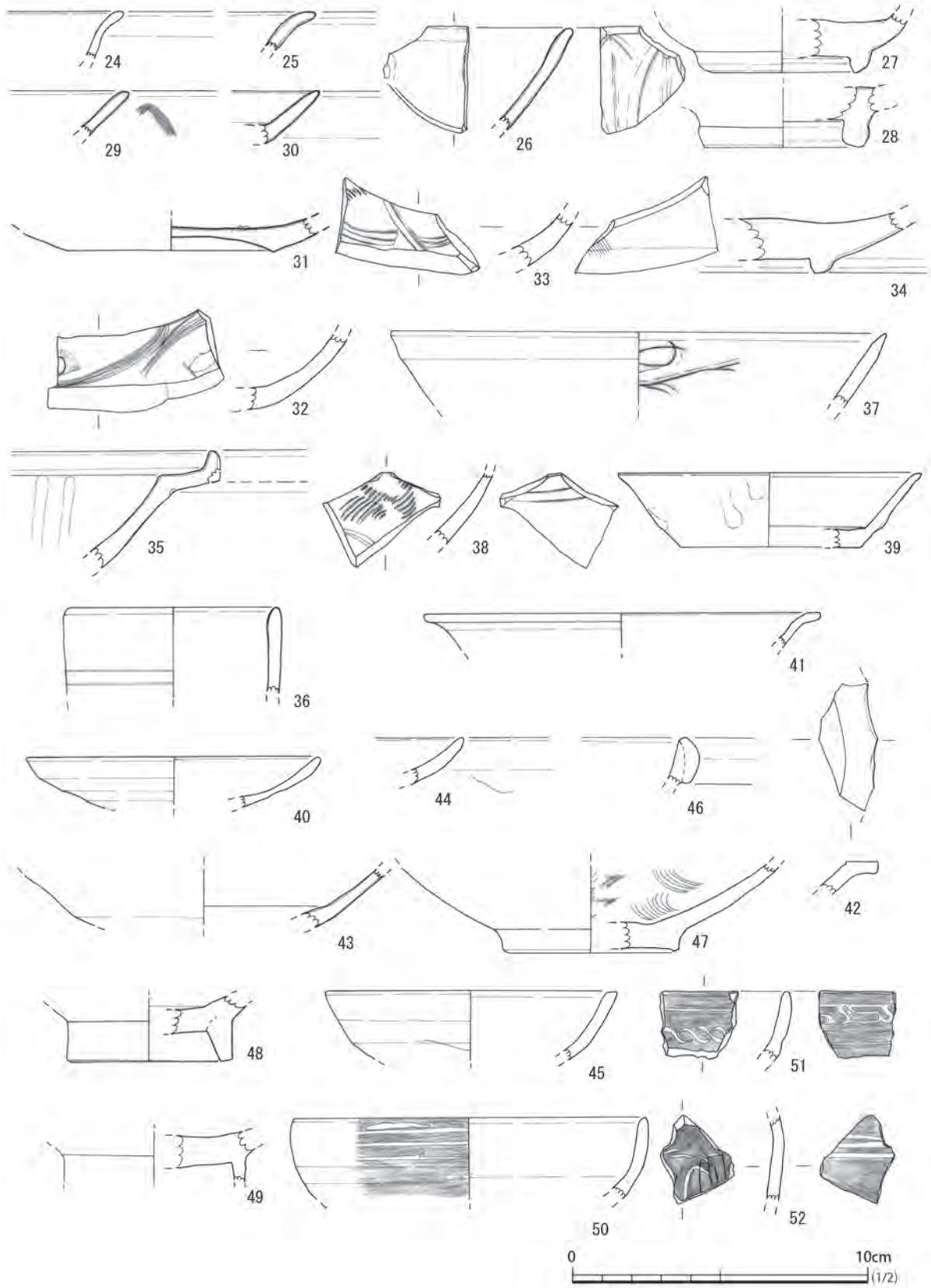


図10 HZK1601地点SD01埋土③出土遺物2

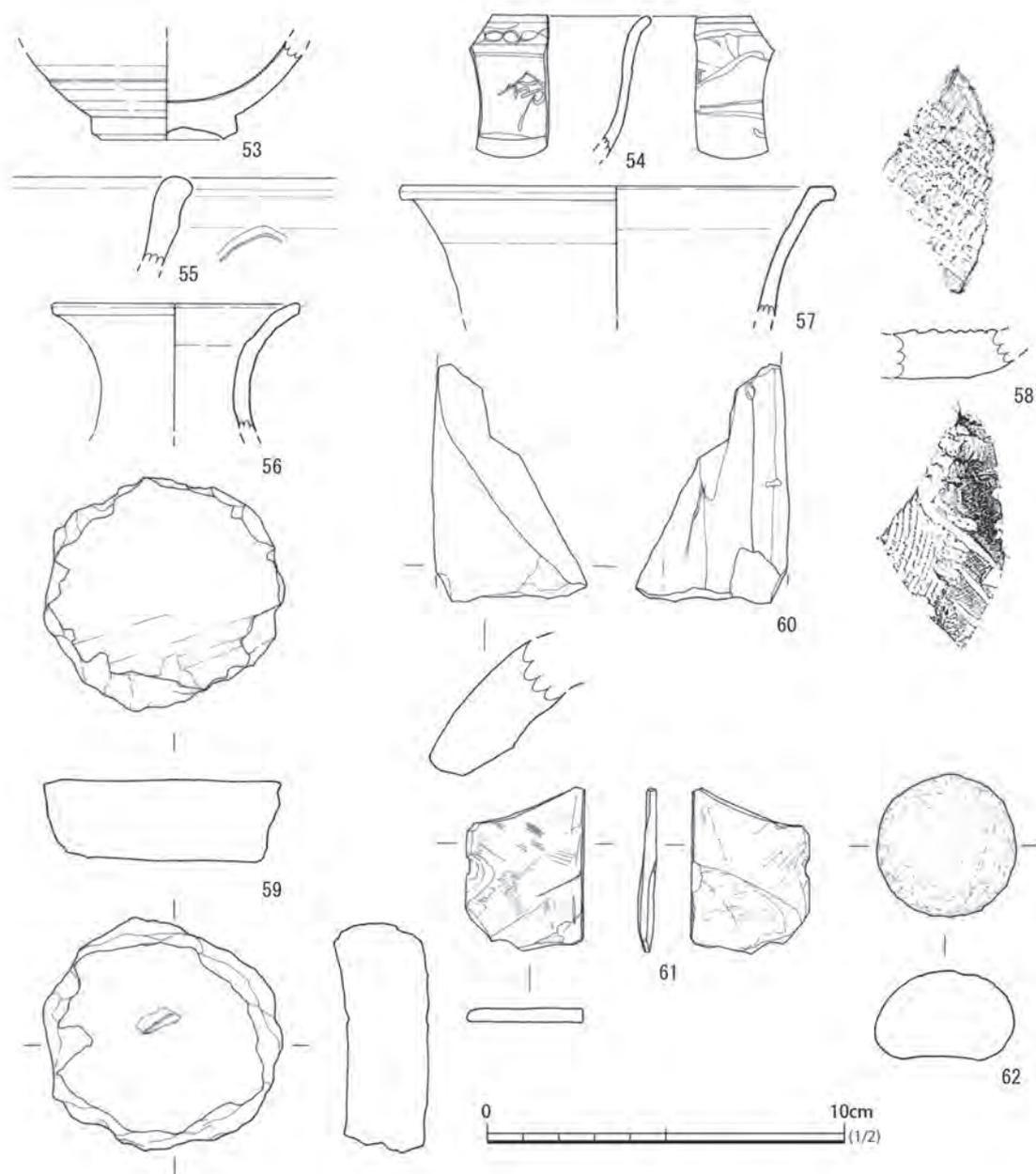


図11 HZK1601地点SD01埋土③出土遺物3

はない。内面は施釉で白色耐火土の目跡がわずかに残る。外面は露胎である。底径7.0cmに復元できる。32は同安窯系青磁碗である。内面は施釉で、片彫りで草花文を描く。外面は露胎で、縦方向の櫛目文を有す。35は龍泉窯系青磁の坏である。口縁部は屈曲して水平になり、端部をつまみあげる。内面を縦方向に削って、花卉形にする。内外面とも厚く施釉する。36は龍泉窯系青磁の筒型容器である。口縁部は直立し、外面に細い沈線が2条めぐる。内外面ともやや厚く施釉する。口径7.1cmに復元できる。37は龍泉窯系青磁碗を模倣したか粗悪品と思われる碗である。口縁部に内面には稜がつく。内面に花文を片彫りしたあと施釉するが、釉が薄く、文様の凹凸が残る。内外面ともところどころ釉がかかりきっていない。口径16.8cm。38は同安窯系青磁碗を模倣したか粗悪品と思われる碗である。内面にヘラ状工具による花文と櫛状工具による点描文を施したあと施釉するが、釉が薄く、文様

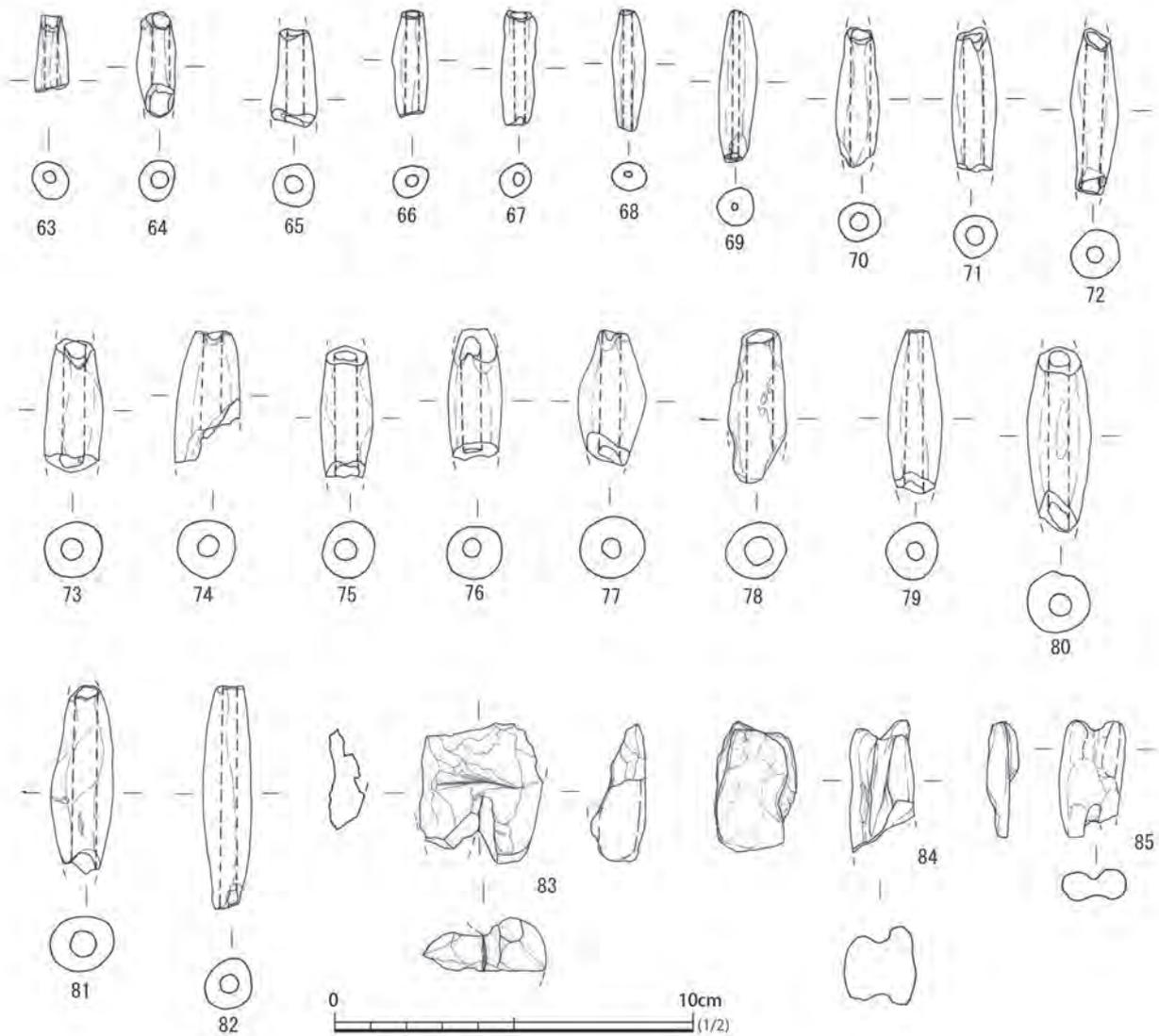


図12 HZK1601地点SD01埋土③出土遺物4

の凹凸が残る。また文様の輪郭線が白色になっているところがある。39～44は白磁の皿である。39は厚い底部から直線状に体部が伸びる形状で、見込み部分に沈線が1条めぐり、外面に釉が垂れた痕跡が見られる。口唇端部は釉を拭き取っており、いわゆる口禿である。口径10.2cm。底径6.0cm、器高2.5cmに復元できる。大宰府編年のⅨ類である。40はやや丸みを持つ器形で、外面下側はケズリを施す。内外面とも施釉する。口径10.0cmに復元できる。41は外反する口縁部で内外面とも施釉する。42は口縁が稜花形になる白磁皿である、口縁部は平坦で、体部との境が段になる。内外面とも施釉する。43はやや丸みをもって立ち上がる体部で、内面は櫛状工具による施文があり、見込みとの境が屈曲する。内外面とも厚めの釉がかかる。44はやや丸みを持つ口縁部で、外面下側はケズリを施す。内外面とも施釉する。45は白磁の小碗である。体部はやや湾曲する。内面と外面上半は施釉、外面過半は露胎でケズリである。口唇端部は平坦に整え、釉を拭き取っている。口径9.8cmに復元できる。46～49は白磁碗である。46は玉縁口縁の破片で、大宰府編年のⅣ類である。玉縁の外面中央部に稜がつく。72は内面に櫛状工具により、草花文が施される。見込みに浅い沈線が1条めぐり、内外面とも

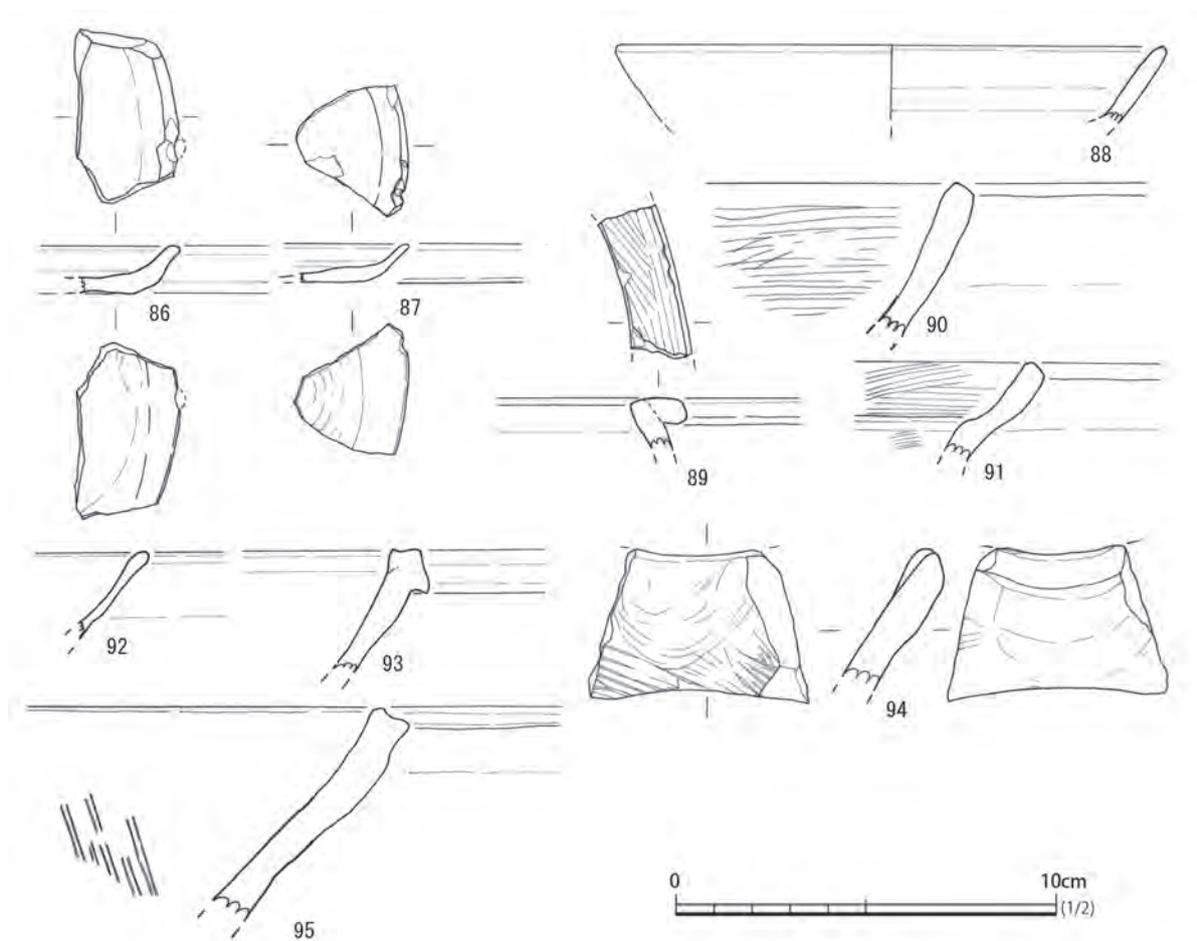


図13 HZK1601地点SD01埋土②出土遺物1

施釉する。ケズリ高台は低く、露胎である。底径6.0cmに復元できる。48・49はケズリ高台で、高台部分が高い。いずれも内面は施釉である。48は外面が露胎で、底径5.6cmに復元できる。49の外面は高台外側が施釉、高台内側が露胎である。50～52は象嵌青磁の碗である。50は外面に白色土で3条の横線と口縁部に不均等な線を表現する。内面は無文である。口径12.0cmに復元できる。51は内面に2条の横線と手綱状の文様、外面に幾何学的な文様帯と1条の横線を施す。外面の文様下に、横位の凹線が1条めぐる。52は内面に白色と黒色で、草花と思われる文様を施す。外面には3条の横線がめぐる。53は天目碗である。内面は黒褐色の釉がかかる。外面はケズリで露胎である。底径4cmに復元できる。54は景德鎮窯の赤絵碗である。内外面ともに文様を施す。内面には、吉祥句の一部と思われる「命」の文字がある。55～57は陶器の壺である。55は広口壺の口縁部で、内外面ともナデ調整で施釉する。56は焼き締め陶器の素口縁の壺で、内外面とも回転ナデ。口径7.0cmに復元できる。57も焼き締め陶器と思われる。内外面とも回転ナデで、口唇部を平坦に整える。口径12.2cmに復元できる。58は瀬戸焼の卸皿である。底部外面にケズリがみられ、工具痕がある。59は瓦玉である。厚さ2.2～2.5cmの平瓦を、直径6.6cmの平面円形に粗く打ち欠いて加工する。60は丸瓦片で、外面はナデ調整で、内面に布目圧痕が見られる。端部はヘラ切りである。61は砥石と思われる。両面とも擦痕があり、側面は面取りされている。長さ4.6cm、幅3.3cm、厚さ4mm、重さ10.27g、石材は泥岩である。62は花崗閃緑岩の石球である。平面形は正円に近く、断面は下側が磨耗していて、平坦な不整楕円

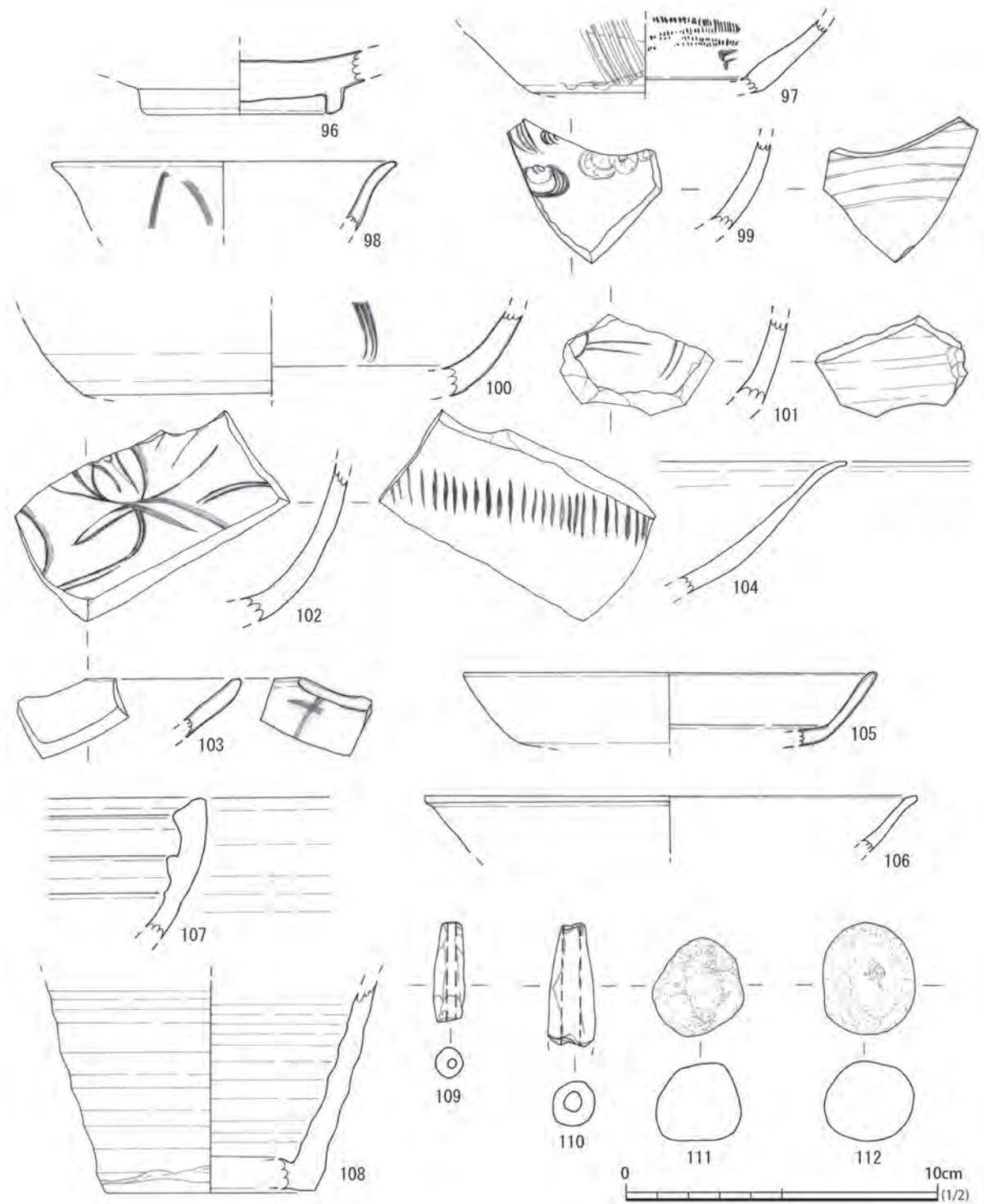


図14 HZK1601地点SD01埋土②出土遺物2

形を呈する。長さ4.0cm、幅3.9cm、厚さ2.5cm、重さ49.03gである。63から82は土錘である。いずれもナデや指オサエの痕が見られる。ほぼ円筒形の形状のものから紡錘形のものまでである。63～72は、最大直径が0.9～1.3cm、現存長が2.2～4.7cmである。重さは1.27～6.04g。73～82は最大直径が1.4～1.8cm、現存長が3.7～6.3cmである。重さは6.32～12.85g。83～85は滑石製の石錘である。いずれも中央部に紐かけ用の溝が彫られており、欠損が著しい。83は現存長3.9cm、現存幅3.5cm、現存

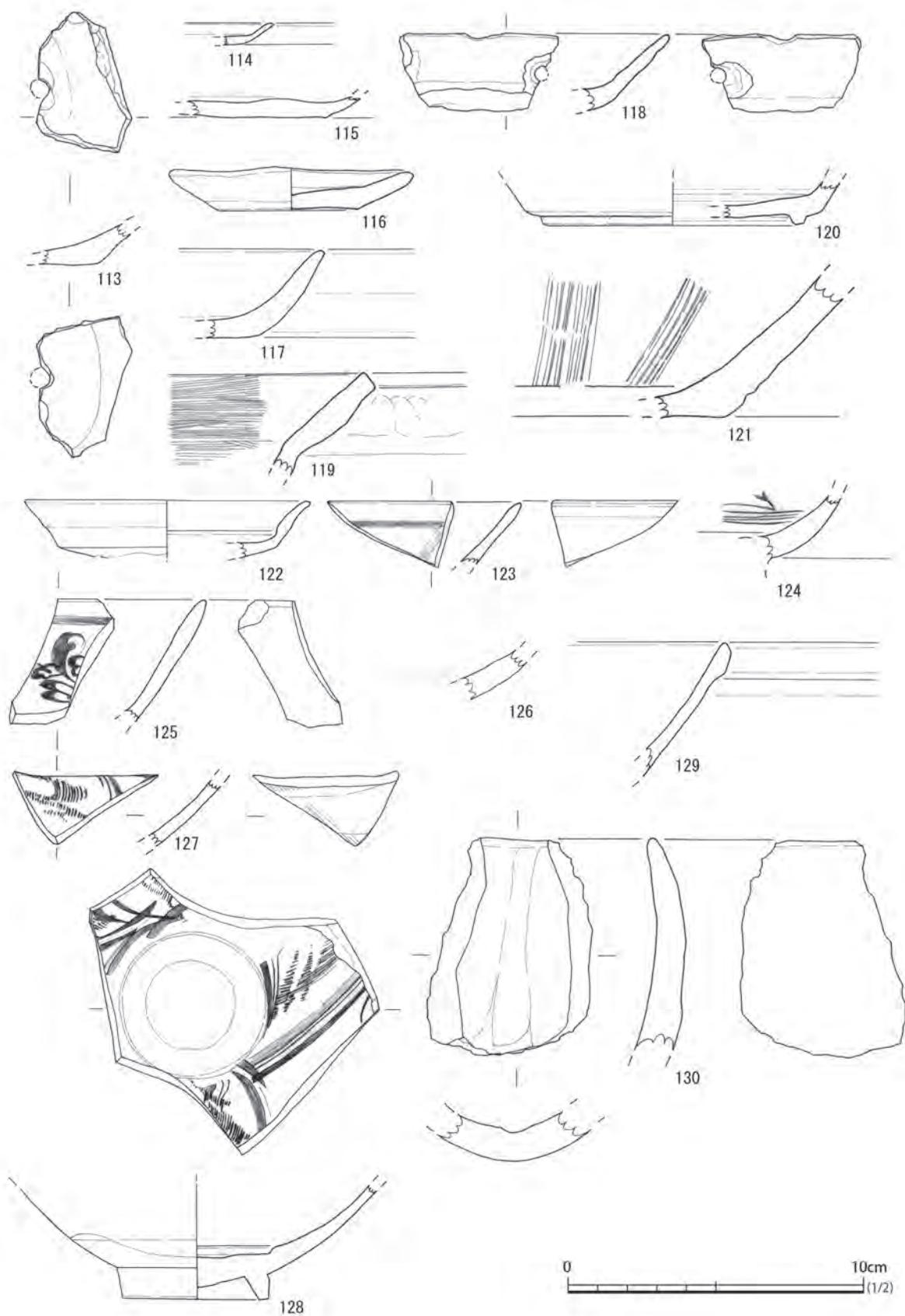


图15 HZK1601地点SD01埋土①出土遺物

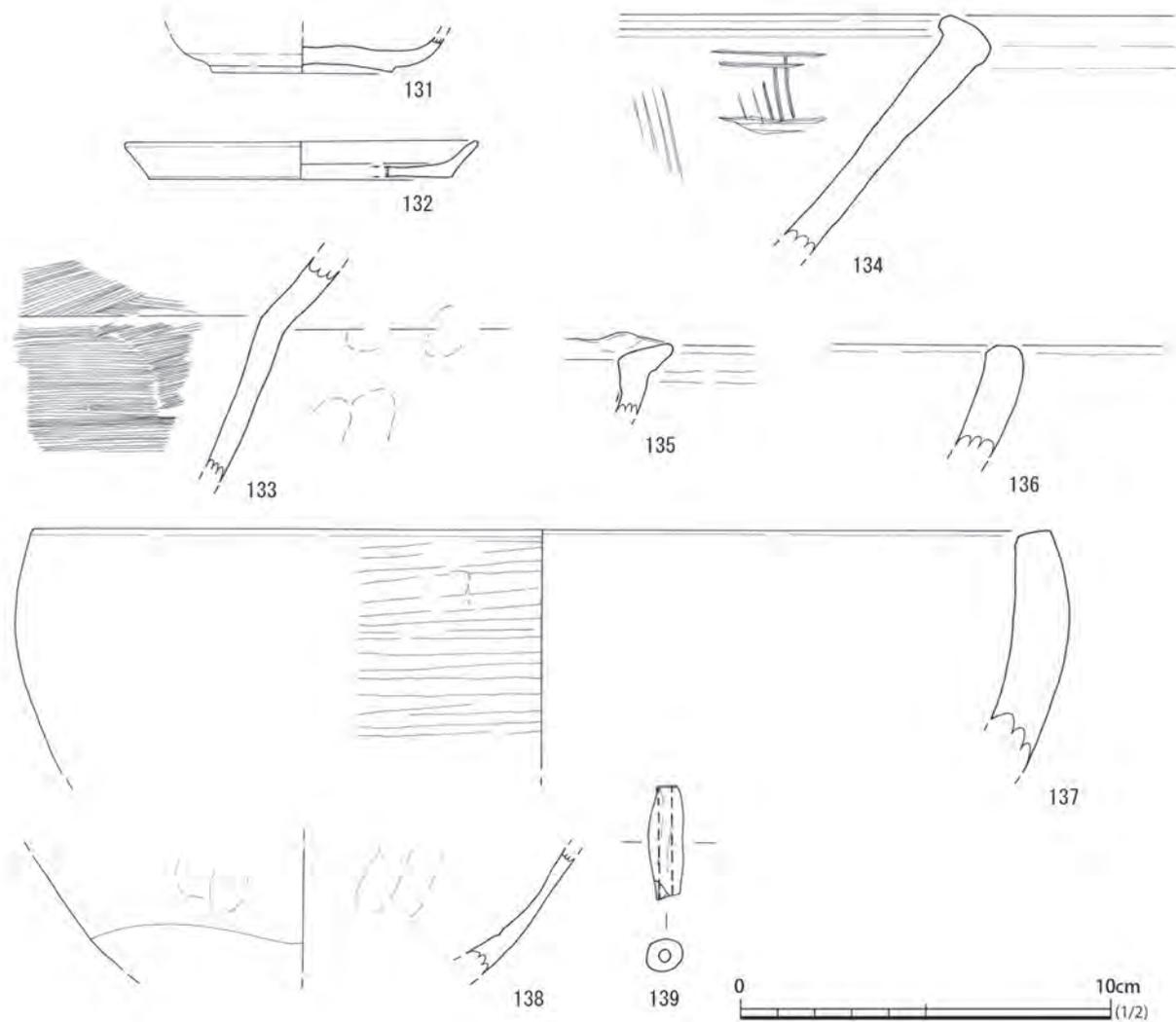


図16 HZK1601地点箱崎砂層中出土遺物

厚1.5cm、重さ20.06g。84は現存長3.8cm、幅1.8cm、厚さ2.2cm、重さ18.34g。85は長さ3.2cm、現存幅1.8cm、現存厚0.9cm、重さ6.77g。

(4) SD01埋土② (図13・14)

86～112は、SD01の埋土②(23～30層)から出土した。86・87は土師器の皿で、いずれも内外面ともナデで糸切り底である。口唇部に内面から外面に向けて焼成後、穿孔しようとした痕跡がある。口唇部の際であり、穿孔には失敗したと思われる。88は土師器の坏で、内外面ともヨコナデで、胴部内面に強いヨコナデが見られる。口径14.4cmに復元できる。89は土師器の甕で、口縁は粘土紐を貼り付けて先端を丸く作り出す。内外面ともナデであるが、口縁部の平坦面にハケメが見られる。90・91は土師器の鍋である。いずれも内面はヨコハケ、外面はナデである。90は口縁部に向けて直線的に立ち上がるタイプである。91は肩部に段がつくタイプである。92は瓦器壙である。内外面ともナデで、器壁は2～3mmで薄く、口唇部がやや厚い。93・94は瓦器の捏ね鉢である。93は口縁部外面に粘土を貼り付け、断面四角形の帯状の口縁部を作り出す。内外面ともナデ。94は注口部分で、口縁部がゆ

るく湾曲している。口縁部は外側を面取りしている。胴部内面はハケメ、口縁部内面から外面にかけてはナデである。95は瓦器の播鉢である。内外面ともナデで口縁部はつまみナデである。口唇部から口縁部外面にかけて帯状の黒色部分がある。96～104は青磁碗である。96は龍泉窯系青磁の碗高台部である。ケズリ高台で畳付は狭く、外側を斜めに面取りする。高台内側の釉を掻き取り、釉を掻き取られた部分が赤変している。97は同安窯系青磁碗である。内面に櫛状工具による点描文、外面に細かい縦の櫛目文を施す。見込み部分に段を有す。大宰府編年 I-1 b 類。98は龍泉窯系青磁の小碗である。口縁部が外反し、外面に蓮弁を施す。口径11.0cm。99～101は龍泉窯系青磁 I-1 類と思われる。いずれも内面には片彫りの花文などが施文される。外面にはヘラケズリが見られる。102は龍泉窯系青磁碗 I-2 類である。内面に片彫蓮華文を有す。外面には短い櫛状の施文が見られる。103は龍泉窯系青磁碗である。外面に片彫蓮弁文を有す。104は白磁碗である。口縁はゆるく外反し、口唇部外面に1段稜が付く。105は白磁の皿である。素口縁で直線的に立ち上がる。見込み部分に段を有す。口径13.2cmに復元できる。106は白磁碗と考えられる。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で屈折し、端部は水平である。口径16.0cm。107は中国陶器の鉢である。口縁部内面は突帯状に張り出しており、さらに内面に1条の突帯がめぐる。外面はヘラケズリの痕跡がかすかに残る。108は中国陶器の壺底部である。内外面とも施釉され、ロク口目の凹凸を残す。底部はやや上げ底気味になる。底部最下段の外面にヘラによる器面調整が残る。底径6.8cmに復元される。109・110は土錘である。いずれも片方の端部を欠損する。ナデ調整である。109はほぼ円筒状を呈し、端部がわずかにすぼまる。残存長3.2cm、最大直径1.0cm、重さ2.80g。110は中央部が膨らむ紡錘形に近い。残存長4.0cm、最大直径1.5cm、重さ7.43g。111・112は砂岩製の石球である。いずれも不整形な楕円形を呈する。111は長さ3.2cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重さ24.88g。112は長さ3.7cm、幅2.9cm、厚さ2.6cm、重さ33.01g。

(5) SD01埋土① (図15)

113～130は、SD01の埋土①(31層)から出土した。113～116は土師器の皿である。113は内外面ともナデで糸切り底である。底部中央に内面から焼成後、穿孔している。114・115は内外面ともナデで摩滅が激しい。115は糸切り底と思われる。116は内外面ともナデで糸切り底である。口径8.2cm、底径4.4cm、器高1.4cmである。117は土師器の坏で、内外面ともナデで摩滅が激しい。118は土師器の坏である。胴部に焼成後穿孔している。口縁部にも穿孔使用としたと思われるが、失敗している。内外面ともナデ。119は土師器の鍋である。頸部がゆるく屈曲する鉢状を呈し、口唇部は平坦におさめる。内面はヨコハケ、外面は指オサエの残るナデである。外面にススが付着する。120は瓦器碗の底部である。高台部分は粘土紐を貼り付けて作る。底部から胴部への立ち上がりは直線的である。底径8.8cmに復元できる。121は焼き締め陶器の播鉢である。内外面ともナデである。6～7本ほどを1単位とした摺溝が見られる。122は龍泉窯系青磁の皿である。やや外反しながら立ち上がる体部の中央外面に1条の稜がつく。内面は見込みとの境の屈曲にかかる釉が剥がれており、全体的に釉が薄い。口唇端部の釉もところどころ剥げており、黒色の付着物がある。口径9.6cmに復元できる。123～126は龍泉窯系青磁碗である。いずれも大宰府編年の I 類に相当する。123・125は内面に片彫りで1条の沈線と花文と思われる文様を施す。外面は無文である。124は内面に片彫りで花文と思われる文様を施す。外面は無文である。126は内外面とも無文である。127・128は同安窯系青磁碗である。127は内面にヘラ状工具による花文と櫛状工具による点描文、外面に細かい縦の櫛目文を施す。大宰府編年の I-1 b 類である。128は内面にヘラ状工具による花文と櫛状工具による点描文を施し、外面

は無文である。ケズリ高台で、胴部過半から高台部分は露胎する。底径4.9cmに復元できる。129は白磁碗である。扁平な玉縁口縁である。胴部下半は露胎で、ケズリである。130は不明土製品である。口縁部と思われる方を上位にすると、内部中央に縦方向の強いナデがある。製作は口縁部が横位の向きで行われている。蛸壺などに用いられたのかもしれないが、破片であり、判断がつかない。

（6）箱崎砂層中（図16）

M25-⑦区の10層直下の箱崎砂層中から遺物が出土した。遺構にともなうものではないので、一括して掲載した。131・132は土師器の皿である。内外面ともナデで、糸切り底である。131は底径4.8cm、132は口径9.6cm、底径8.2cm、器高1.0cmに復元できる。133は土師器の鍋で、内面はヨコハケ、外面は指オサエの残るナデである。134は土師器の挿鉢である口唇部を内側につまみ出す。胴部の立ち上がりは直線的である。内外面ともナデ。摺溝のヘラ描きが内面上部の横位方向にもあり、装飾的である。135は瓦質土器の甕。手捻りでつまみ出したような口縁部である。ナデである。136・137は瓦質土器の捏ね鉢で、いずれも胴部が碗状に膨らみ、口唇端部は平坦に整える。136は内外面ともナデ、137は内面がナデ、外面がヨコミガキで口径27.5cmに復元できる。138は白磁碗で、見込みとの境に小さく段がつく。内面は施釉、外面はケズリで、下半は露胎である。139は土錘である。ほぼ円筒状を呈し、端部がわずかにすぼまる。ナデと指オサエで整形する。長さ3.1cm、最大直径0.9cm、重さ1.94g。

（谷 直子）

5. 小 結

HZK1601地点（理学部二号館前南地点）の調査では、本キャンパス内の全体基本層序Ⅰ・Ⅲ～Ⅵ層に対応する、古代末～近代の遺構と遺物が出土した。

溝状遺構SD01の埋土は12～15世紀代の遺物包含層である。その形成時期は、埋土①～埋土③の3時期に区分することができる。埋土からは、貿易陶磁器（龍泉窯系・同安窯系青磁、白磁など）、土師器、須恵器、土錘、石錘などが多量に出土した。SD01の西端部分から西側（博多湾側）へ約6m離れた地点から幅5.7mの範囲内に、拳大の石片（礫岩・砂岩）が散乱していた（SX01）。後述するHZK1603・1604地点の調査結果から、これらの石片は石積みの背部を構成する裏込石である可能性が高い。旧運動場の整地作業など、近代以降の攪拌の影響を強く受けるため、明らかに原位置は保たれていない。しかしながら、元寇防塁包蔵地推定ラインに近い位置にあることから、本地点で発見された石片群の存在は、本キャンパス内に築かれたとされる箱崎の元寇防塁が付近に存在していたことを間接的に示す可能性がある。またそうだとすると、本地点は旧運動場の跡地であること、中山（1913・1984）が旧運動場脇の隆起が元寇防塁の痕跡であると指摘していることから、従来の元寇防塁包蔵地推定ラインより内陸側となる旧理学部エリア周辺に、本来のラインは存在する可能性がある。

（森 貴教・福田正宏）

文献

中山平次郎 1913 『福岡附近の史蹟一殊に元寇の史蹟一』九州帝国大学医科大学

中山平次郎 1984 [1913] 「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会 [『福岡日日新聞』連載論文] 213-238頁

Ⅲ HZK1603・HZK1604地点（中央図書館前南地点）の 発掘調査

1. 調査の経過と結果

(1) 調査地点の位置と調査に至る経緯

HZK1603地点・HZK1604地点（中央図書館前南地点）は、中央図書館南側の通用路の東西に位置している。南側は旧理学部エリアであり、舗装路を挟んで南には旧理学部本館が接している。通用路の西側となる西地区には、農学部防音講義室の建物が現存している。通用路の東側となる東地区の南東部は、かつて日本庭園として農学部造園学の講義などで利用されていたが、現在は荒蕪地となっている（庭園は昭和30（1955）年頃設計）。HZK1603地点では、西地区の防音講義室より南側の区画（HZK1603地点西地区）と、通用路を挟んで反対側となる東地区の庭園跡のない閑地（HZK1603地点東地区）の調査を行った。HZK1604地点では、西地区の防音講義室の北側に設置されていた仮設トイレを撤去した後の更地（HZK1604地点西地区）、おなじく西地区の防音講義室の東側にある閑地（HZK1604地点南地区）、そして、HZK1604地点西地区の通用路を挟んで反対側となる東地区の閑地（HZK1604地点東地区）の調査を行った（図17参照）。

平成28（2016）年5月19日、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課と本学埋蔵文化財調査室の立会いのもと、旧理学部本館前（北側）の舗装路上でガス配管切替工事が実施された。その際、碎石下約0.1mの位置（標高約2.5m）で、大型礫2点がほぼ南北方向に並んだ状態で発見された（位置は、図17の「石材発見箇所」参照）。礫の長径は最大60cmあり、上面と側面には加工痕のある平坦面が形成されていた。下部には箱崎砂層が堆積していた。可能な範囲内で深部探査を行ったが、石材はほかに確認されなかった。発見された大型礫は人為的に配列された遺構である可能性が高まり、ガス管の迂回路を探する必要が生じたため、発見地点の周囲で緊急に範囲確認調査を行った。その結果、同様の大型礫は発見されなかったが、周辺に拳大の石片が多数散在することが判明した。地下埋設物の工事などの影響を受けており、石片群は原位置を保っているといえない。

一方、同年5月16日～6月8日に実施されたHZK1601地点の調査では、箱崎の元寇防塁が、旧博多湾汀線に並行する形で、旧理学部エリア周辺（旧運動場跡地）に存在する可能性が示唆されていた（本書Ⅱ章参照）。出土地点の場所と石材の特徴から、今回不時発見されたものは、中山（1913）のいう箱崎の元寇防塁の一部である可能性が高い。下部に石材を重ねた痕跡は確認されなかったため、大型礫2点は基底石の可能性もある。周囲から出土した石片群については、HZK1601地点発見のSX01（図7）とおなじく、裏込石として使用された石片が後代の各種攪拌作用の影響を受けたのちに散在したものの可能性がある。

元寇防塁の一部であるとすれば、本キャンパス内で元寇防塁遺構が実際に確認された初例となる。発見石材が元寇防塁の一部であるか否かを確定するためには、①これら石材の南北に連なる石列、②これら石材の裏側（陸側、すなわち東側）における付属構造物、③遺構の築造時期を推定可能な考古資料、の有無について調べる必要がある。

以上の経緯をふまえ、石材が発見された工事箇所の北側に隣接するHZK1603地点で、防塁探査を目的とした発掘調査を実施する計画を立てた。元寇防塁であれば、石積み部の背部には裏込め部や盛

土などがともなう可能性がある。それを検証するため、遺構全体像を博多湾に直交する形で東西方向に見通せる調査区を設定した。ただし、中央図書館通路は現時点において調査対象外である。そのため、HZK1603地点の西地区と東地区との間は5.0mの空白地帯となった。

HZK1603地点西地区の調査では、ガス管切替工事で不時発見された石材と一連のものと考えられる石積み遺構が、きわめて良好な保存状態で発見された。調査の結果、石積みは防音講義室下を通り、中央図書館方面にむかって直線状に延びる可能性が高まった。そのことを確認するため、HZK1603地点の調査後に、HZK1604地点西地区で追跡調査を実施する計画を立てた。また、石積み背部における構造物の有無を確認するため、HZK1604地点東地区と同地点南地区を設定した。

現地調査に先だち、平成28年7月16日付けで福岡県教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出を提出した。この届出は、同月25日付けで受理された。現地調査は、同年8月22日に開始した。

（2）調査要項

調査名	箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス 中央図書館前南地点 (HZK1603地点・HZK1604地点) 発掘調査
文化財名	箱崎遺跡 九州大学埋蔵文化財調査室調査回数：HZK1603、HZK1604 福岡市調査番号：1625、福岡市調査回数：箱崎遺跡第81次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	320㎡
調査原因	学術研究
調査期間	平成28(2016)年8月22日～平成29(2017)年3月30日 第1次発掘調査(HZK1603地点)：平成28(2016)年8月22日～10月14日 第2次発掘調査(HZK1604地点)：平成29(2017)年2月20日～3月24日
遺物量	パンコンテナ2箱(内寸54cm×34cm×15cm)
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室(室長：宮本一夫)
発掘担当	福田正宏、森 貴教
調査作業員	第1次発掘調査 有水知晴、井上光江、田代 薫、田中悦子、田野和代、堤 末子、永濱弘子、 西浦喜久子、宮原ゆかり、武藤マリ子、横谷明美 第2次発掘調査 有水知晴、井上永之、井上光江、浦崎てい子、田代 薫、田中悦子、田中ゆみ子、 田野和代、堤 末子、中村尚美、永濱弘子、西浦喜久子、松下さゆり、松下由希子、 宮原ゆかり、宮元亜希世、武藤マリ子、森 一雄、山本加奈子、横谷明美
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香菜

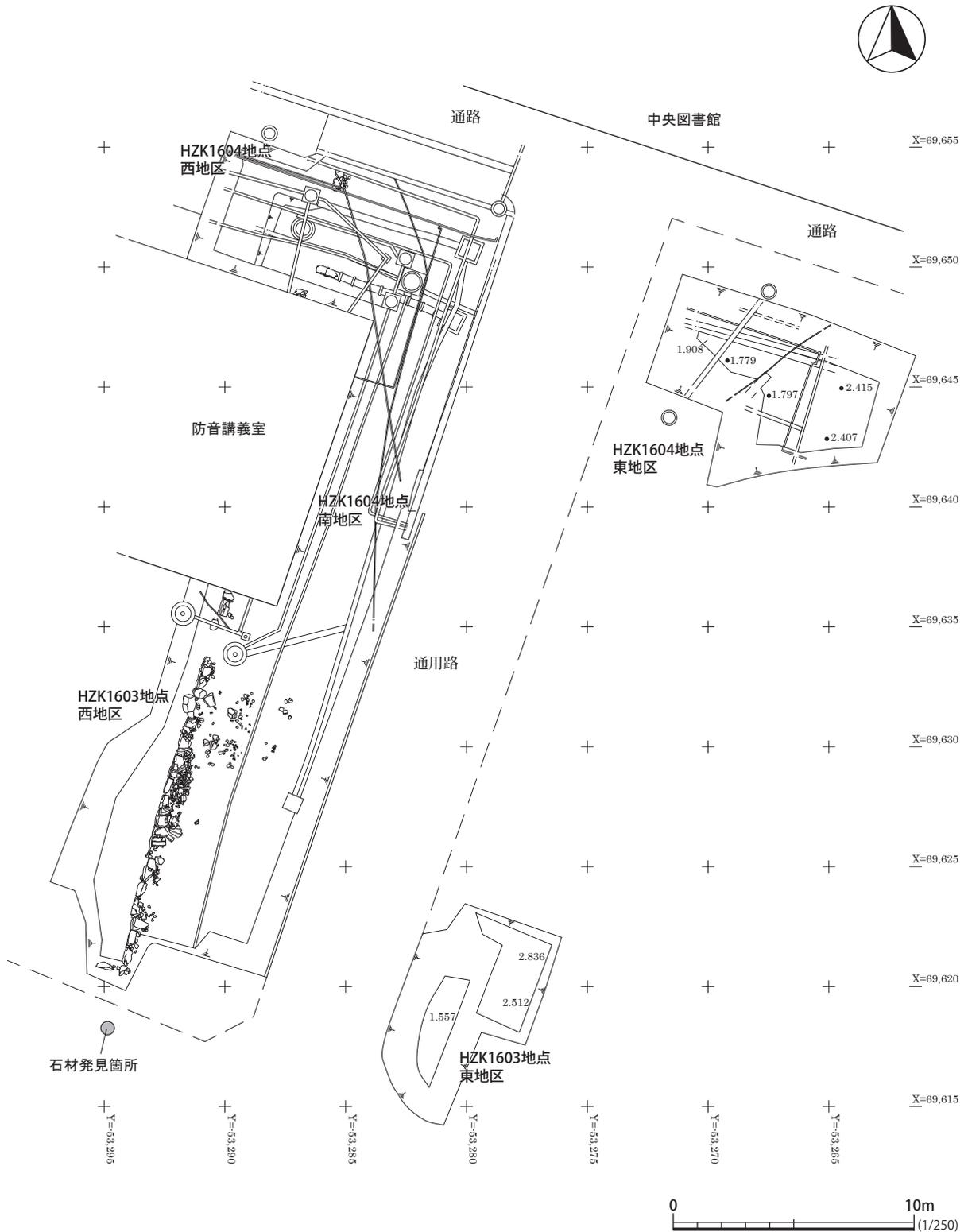


図17 HZK1603・HZK1604地点 調査区配置図

（3）調査の経過

HZK1603地点西地区はJ22区に位置する。同東地区の大半はJ22区内にあるが、その一部はK22区にも及ぶ。一方、HZK1604地点西地区はJ21区にある。同東地区はJ21区、同南地区はJ21区とJ22区にまたがる位置にある。本地点における調査では、重機掘削により表土と現代攪拌痕を除去した後、面精査を順次行い、遺物・遺構の検出に努めた。

HZK1603地点西地区では、石積み遺構（SF01・SF02）が検出された（図18参照）。SF01とSF02は、現代の機械攪拌の影響により分断されているが、本来は一連の遺構であった可能性が高い。本遺構発見後、ただちにその結果を九州大学に報告した。その後、学内で遺構の取り扱いに関する検討が行われ、中山（1913・1984）がその存在を指摘した箱崎の元寇防塁の可能性があり、学術的価値がきわめて高いことから、保存処置を施すことが妥当と判断された。そのため、石積み部とその背部盛土遺構の可能性のある部分の内部調査は行わず、遺構表面を露出・記録するにとどめた。一方、配管工事とともに機械攪拌の影響により、石積み遺構にはほぼ直交する形で、石積み部とその背部が基底部まで破壊された箇所が見つかった。その箇所は、遺構内部の土層堆積状況の観察に適していたため、ほぼ東西方向に断面精査した。HZK1603地点東地区では、重機掘削により、標高1.6m前後まで掘り下げを行った。深部まで近現代の機械攪拌の影響を強く受けていること、遺構がなく、出土遺物は原位置を保っていないことを確認した。

HZK1604地点西地区・同南地区では、地下に各種配管が巡り（図17参照）、その下部から遺構と遺物包含層が検出された。とくに西地区で地下埋設物が多く、それらは複雑に入り組んでいた。現在使用中の配管・施設も多数あることから、基本的には埋設物を除去せずに掘り下げを進めた。ただし、埋設物下部で遺構が確認され、追跡調査が必要と判断されたこともあった。その場合は、そのつど本学施設部との間で協議を行い、現代（基本層序0層相当）に設置された未使用配管を最低限除去した。

地山掘削作業上の安全管理基準を遵守し、掘削深度に制限を設けたため、調査区全体で地下水層以下まで到達しておらず、堆積環境の構造的解釈はできていない。その代わりに、南地区のヒューム管と鉄管との隙間（東西幅1.3m）（B-1地点：図18参照）で、重機掘削による深部調査を行い、標高0.5～2.3mの土層堆積状況を観察した。調査の結果、西地区では、SF01・SF02の延長線上にあると考えられる石積み遺構（SF03・SF04）と帝国大学期の煉瓦積遺構（SQ01）が検出された。

HZK1604地点東地区では、重機掘削により標高1.8m前後まで掘り下げを行った。本地区は、深部まで近現代の機械攪拌の影響を大きく受け、地下埋設物が多数検出された。本地区南東部の標高2.0m前後からは、現在使用されていない帝国大学期の陶製土管が検出された。位置関係から、同西地区のSQ01に付属する配管の一部とみられる。機械攪拌の影響により、大きく破損していた。

HZK1603地点・HZK1604地点の調査により、不時発見された石材から北北東方向にむかって約37mにわたり、石積み遺構が4カ所に点在して残ることが判明した。途中で未調査区画と欠損部を挟むが、すべて直線上に並ぶ。石列ラインの造り方は、国指定史跡元寇防塁（今津地区）などで確認されている石積みのものに類似する。発見された石列は、箱崎の元寇防塁の一部である可能性が高い。ただし共伴遺物が少なく、遺構年代の特定が難しい。そこで、必要箇所で採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、遺構年代の絞り込みを行った。なお、SF01～SF04に関しては、調査終了後、現状を土嚢で固定・養生した後、埋め戻して保存した。

（福田正宏）

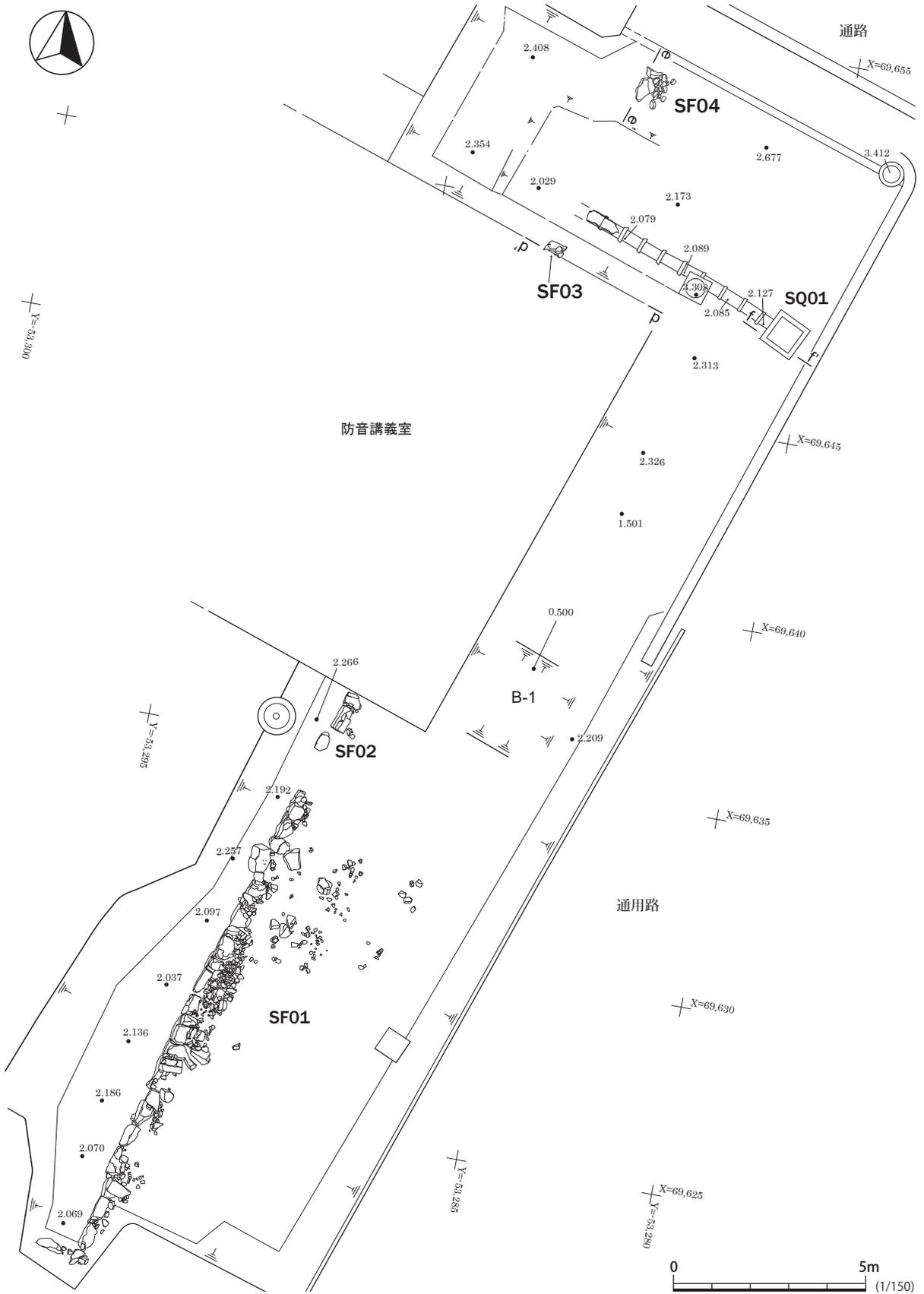


図18 HZK1603・1604地点 遺構配置図

2. 層序と年代

（1）土層堆積状況

HZK1603地点・HZK1604地点で確認された考古堆積物と関係する自然堆積物はすべて、地質学的には箱崎砂層として包括される。HZK1604地点南地区B-1地点で実施した深部調査により、東西方向の土層堆積を見通す北壁（標高0.5～2.3m）で、人為活動と関係しない層がほぼ水平堆積することを確認した。B-1地点の調査結果を以下に記す。

- 1層（1.8～2.3m）：黄褐色中粒砂。大正期以降の人為攪拌の影響を強く受ける。近世以前の考古遺物は含まれない。
- 2層（1.6～1.8m）：明褐色粗粒砂。西側で粗粒砂と高有機質黒色帯が互層をなす。埋没後攪拌の影響は確認できない。炭化物を多く含む。土器小破片（12世紀前後？）が出土。
- 3層（1.4～1.6m）：橙色中粒砂。鉄分が多い。極薄のシルトが互層をなす。遺物は含まない。
- 4層（1.0～1.4m）：黄橙色～赤橙色粗粒砂。部分的に高有機質黒色化する。構成物の特徴と色調から3層に分かれるが、人為活動の時間差を示すものではない。時期判別不可能な極小（約1.0cm角）の土器破片が出土。
- 5層（0.7～1.0m）：明褐色～橙色粗粒砂。鉄分が多く、小礫（礫岩？）まじり。下部で水分量高。遺物は含まない。
- 6層（0.6～0.7m）：にぶい黄褐色～橙色中・粗粒砂。炭化物を含む。水分量高。雲母片・礫岩？片まじり。遺物は含まない。
- 7層（0.5～0.6m）：灰褐色中粒砂。灰色シルトが互層をなす。水分量高。極小（<1.0cm角）の土器片（時期不明）が数点出土。
- 8層（<0.5m）：地下水層（未調査）

2・4・7層はいわゆる遺物包含層であるが、人為活動痕跡をともしない。また、埋没後に文化的変容（人為攪拌）や自然変容（地質学的・生物学的プロセス）を経て変容したコンテキストであるといえる要素はない。B-1地点の位置は、SF02とSF03との間の防音講義室直下に残ると考えられる石列から約2m背部（東側）にある。また、B-1地点に最も接近する石積み遺構SF02の基底石下面は標高2.2～2.4m前後に収まり、SF03・SF04の基底石下面は標高2.4mである。B-1地点の西側に石列があるとすれば、その基底石下面は2.2～2.4m前後と推測できる。そのため1層の成立は、石積みの背面盛土などの遺構と関係する可能性がある。ただし後世の人為攪拌の影響が大きく、堆積過程の説明は難しい。2～7層は、ほぼ水平堆積していた。7層の一部に樹木痕由来の植物攪拌痕があるが、埋没後攪拌の影響を受けた痕跡は確認できない。細片化した土器片が、自然由来の岩石片や有機物などからなる堆積物を構成するひとつの要素となっている。土器片表面の摩耗が著しいことから、2層以下は、石積み遺構の築造期より古い年代に形成された自然由来の堆積物であり、ともなう遺物は、水流などにより流れ着いた堆積物のなかに混在していたものと判断できる。2017年度に実施したHZK1701地点における堆積環境調査の結果（Ⅳ－7章、福田・下山ほか論文参照）から、これは、本遺跡が立地する箱崎の砂州の形成過程に関わる堆積物であるといえる。

(2) 基本層序との対応関係

HZK1603地点・HZK1604の土層・遺構・遺物と、本キャンパス内における全体基本層序（本書Ⅰ章参照）との対応関係は、以下の通りである。

- 0層 地下埋設物と、それにもなう掘削部。全地区で確認した。
- I層 HZK1604地点西地区において、大正期のインフラ設備の一部である枡（SQ01）と、農学部で使用された昭和初期の湯飲み茶碗1点が出土した。
- IV層 HZK1603地点西地区で確認した。SF01の石列前面（西側）傍の崩落土のなかに、対応する段階の遺物が含まれる。出土状況から、SF01の築造期と並行する、またはそれより新しい。
- V・VI層 B-1地点北壁2～7層に、対応する段階の遺物が含まれる。出土状況から、SF01～SF04よりは古い時期に堆積した層である。HZK1603地点西地区・HZK1604地点西地区・HZK1604地点南地区で確認した。

(3) 放射性炭素年代測定結果

HZK1603地点西地区・HZK1604地点西地区・HZK1604地点南地区で検出された石積み遺構SF01～SF04の年代を絞り込むため、関連層に含まれる炭化材（木炭）5点について、放射性炭素年代測定を行った。コンタミネーションを極力排除するため、考古学的原位置論にもとづき、埋没後攪拌の影響が最小限と判断された地点で採取した試料のみの年代を測定した。試料の調製・測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。測定には加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用い、¹⁴C濃度に関して同位体分別効果の補正を行った。暦年較正年代は、IntCal13を用いて算出した。結果の詳細は表2に記載した。暦年較正結果のうち、2σ暦年代範囲（確率95.4%）による年代は、以下の通りである。

HZK1603地点西地区のSF01直下の2カ所で深掘りを行い、遺構よりも下層に含まれる炭化材を採取した。SF01の石列前面とc—c'ラインとがほぼ直交する地点において、基底石下面から0.34m下の箱崎砂層中に含まれる炭化材No.5を採取した（図19・図23中段：C-No.5）。この試料の¹⁴C年代は875±20 BP（PLD-33076）、較正年代は1051-1219 cal AD（11世紀中頃～13世紀前半）となった。また、SF01の基底石下面から0.47m下の箱崎砂層中に含まれる炭化材No.6の¹⁴C年代は970±20 BP（PLD-33077）、較正年代は1019-1152 cal AD（11世紀前半～12世紀中頃）となった（図19：C-No.6）。これら2点は、SF01築造期と並行、もしくはそれより古い位置から出土している。したがって、SF01築造期の年代は11世紀前半～13世紀前半、またはそれより新しい。

HZK1603地点西地区SF01の石列とその背面構造の土層断面を見通すb—b'ライン30層に含まれる炭化材No.4の¹⁴C年代は900±20 BP（PLD-33075）、較正年代は1042-1205 cal AD（11世紀前半～13世紀初頭）となった（図21上段：C-No.4）。この30層は炭化物混じりの粗粒砂層であり、同様の構成物からなるB-1地点北壁2～7層と由来は共通すると判断した。30層は、石積み遺構の築造に関連する整地・盛土活動にともない下部の粗粒砂層が掘り返され、そこから出た土砂が意図的に入れられた痕跡である可能性が高い。そのためNo.4はSF01築造期より古い時期の自然堆積物の構成物であり、SF01の年代は11世紀前半～13世紀初頭よりは新しいといえる。同様の傾向を示すNo.5・No.6の値に関しても、SF01築造期より古い年代を示している可能性が高い。

HZK1604地点南地区B-1地点北壁6層に含まれる炭化材2点の¹⁴C年代は、No.7が1785±20 BP（PLD-34218）、No.9が955±20 BP（PLD-34220）となった。較正年代は、No.7が141-330 cal AD（2

世紀中頃～4世紀前半）、No.9が1023-1154 cal AD（11世紀前半～12世紀中頃）である。No.7の $\delta^{13}\text{C}$ 値（参考値）にはリザーバー効果の影響がうかがわれるので、No.9の数値のほうが信頼性は高いように思われる。いずれにせよ、石積み遺構関連層より下部の堆積物であるB-1地点北壁6層前後は、11世紀前半～12世紀中頃より新しくなることはない。

一方、HZK1604地点西地区SF03の基底石下面から-1.6mの自然堆積物（図24のd-d'ライン土層断面27層）に含まれる炭化材No.8の ^{14}C 年代は 865 ± 20 BP（PLD-34219）、較正年代は1056-1220 cal AD（11世紀中頃～13世紀前半）である。27層の由来は、B-1地点北壁2～7層と共通する。

以上のことから、石積み遺構およびその関連層より下部に位置する自然堆積物は11世紀前半～13世紀前半頃の構成物を含み、石積み遺構およびその関連層はその後に形成されたといえる。なお、石積み遺構の下限年代を示す位置から、年代考証可能な炭化物は採取できていない。（福田正宏）

3. 遺 構

（1）SF01・SF02（図19・20）

検出状況と遺構年代 HZK1603地点西地区のGL-1.3mから、良好な保存状態で検出された。SF01石材no.4—SF02石材no.3間に存在する幅1.0m強の空間は、地下埋設物設置工事にともなう機械攪拌により破壊された箇所である。したがってSF01とSF02は本来、連続する石積み遺構であったと考えられる。

SF01は全長13.7mある。もっとも高い箇所（標高約3.0m：石材no.24・25）で、最高で3段が残る。さらに上段が存在していた可能性もあるが、人為攪拌をとまなう風成砂が石積み部から後背部の傾斜面を厚く覆うため、実際の段数や天端の工法を推定復元することは難しい。

SF01最下段の石材no. 4・6・8・12・15・17・20・26～28・32・34・36・38～41・43・44が、基底石（根石）となる。全長13.7mにわたり、加工痕のある長軸40～70cmの大型角礫18石を、博多湾側（西側）に面を揃えて北北東—南南西方向で直線的に配列する。調査区南壁際で、石列に直交する形で大型礫が1点出土した。これは、SF01の南端に連続して配置されていた礫が、HZK1603地点西地区の南側舗装路脇の側溝（排水溝）設置工事の際に破壊・移動したものである。ガス管切替工事で不時発見された石材（位置は図17参照）とSF01の南端との間に据えられた基底石だった可能性が高い。SF02は3石（石材no. 1～3）残る。no. 3は上面（合端）が機械攪拌により破損し、その上に塩化ビニル管が密着していた。明らかに原位置にはない。石材no. 1・2は、向きと位置がSF01の基底石群と揃うので、大きくは動いていない。ただしno. 2に関しては、面と控えの右側が機械攪拌による破壊を大きく受けている。基底石下面は標高2.20m前後、同上面は標高2.5～2.7mに収まり、部分的に横目地が通る。石材の隙間に拳大の石片を噛ませて、間詰めした箇所もある。

2段目と3段目は、北半部で比較的良好に残る。遺存度がもっとも高いc—c'ラインとの交点における面全体の勾配は82.2°ある。上部を全体的にやや内傾させ、石積み安定化させる。反りは認められない。2・3段目には、1段目より控えの長い石材を積み上げている。

石材no.11下の基底石が抜き取られ、その上に積まれた2段目の控えの長い大型礫（no.11）がバランスを崩して前方に倒れかかっている。この石材の直下から、土師皿1点（図27-1）が出土した。出土位置は、図19中の「P」で示した。この出土状況は、この土器が石積み遺構より新しい時期に埋没したことを示す。楠瀬（2007）の博多遺跡群土師器編年案によると、この土師皿は14世紀前半より

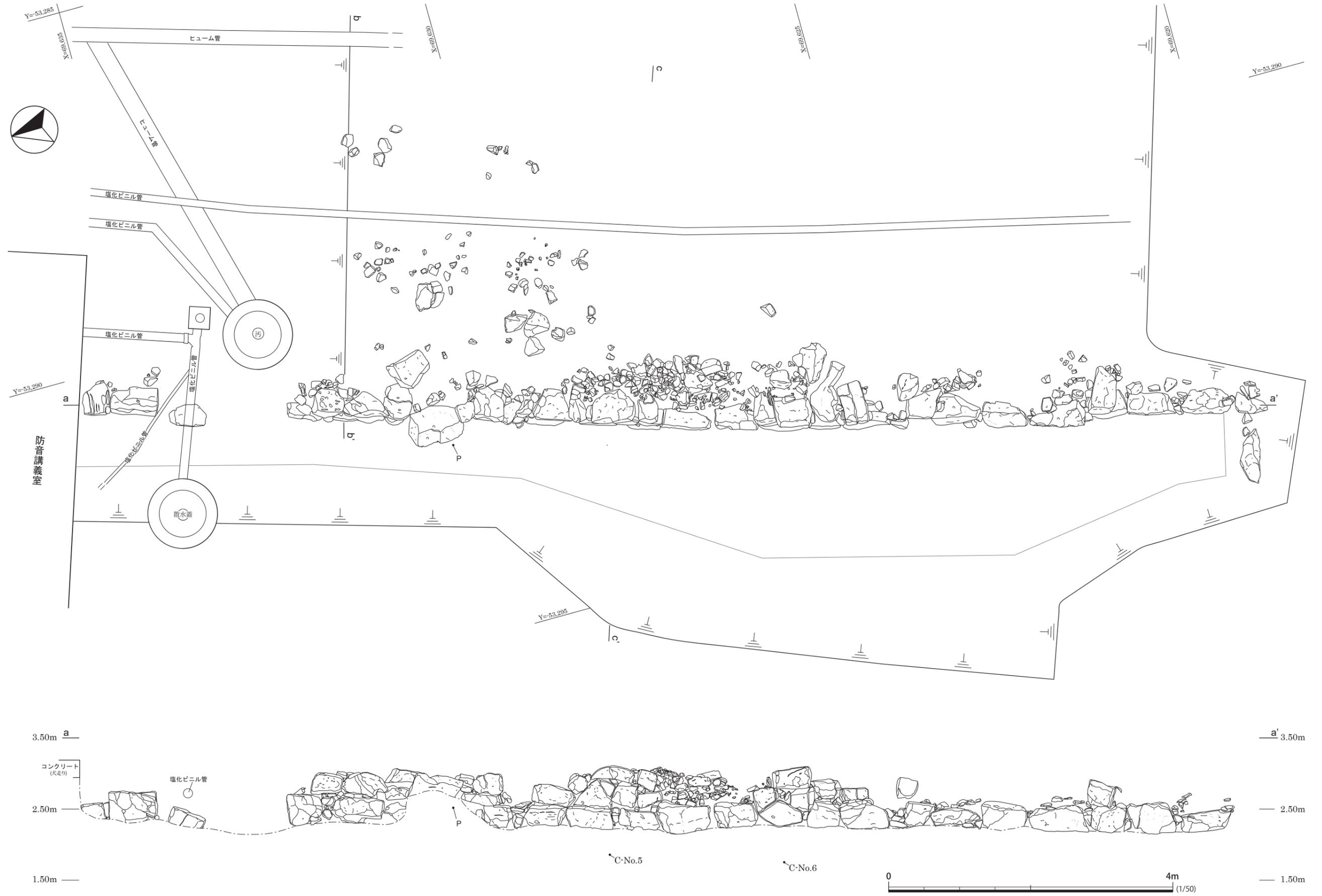


図 19 HZK1603 地点 遺構図 (SF01, SF02)

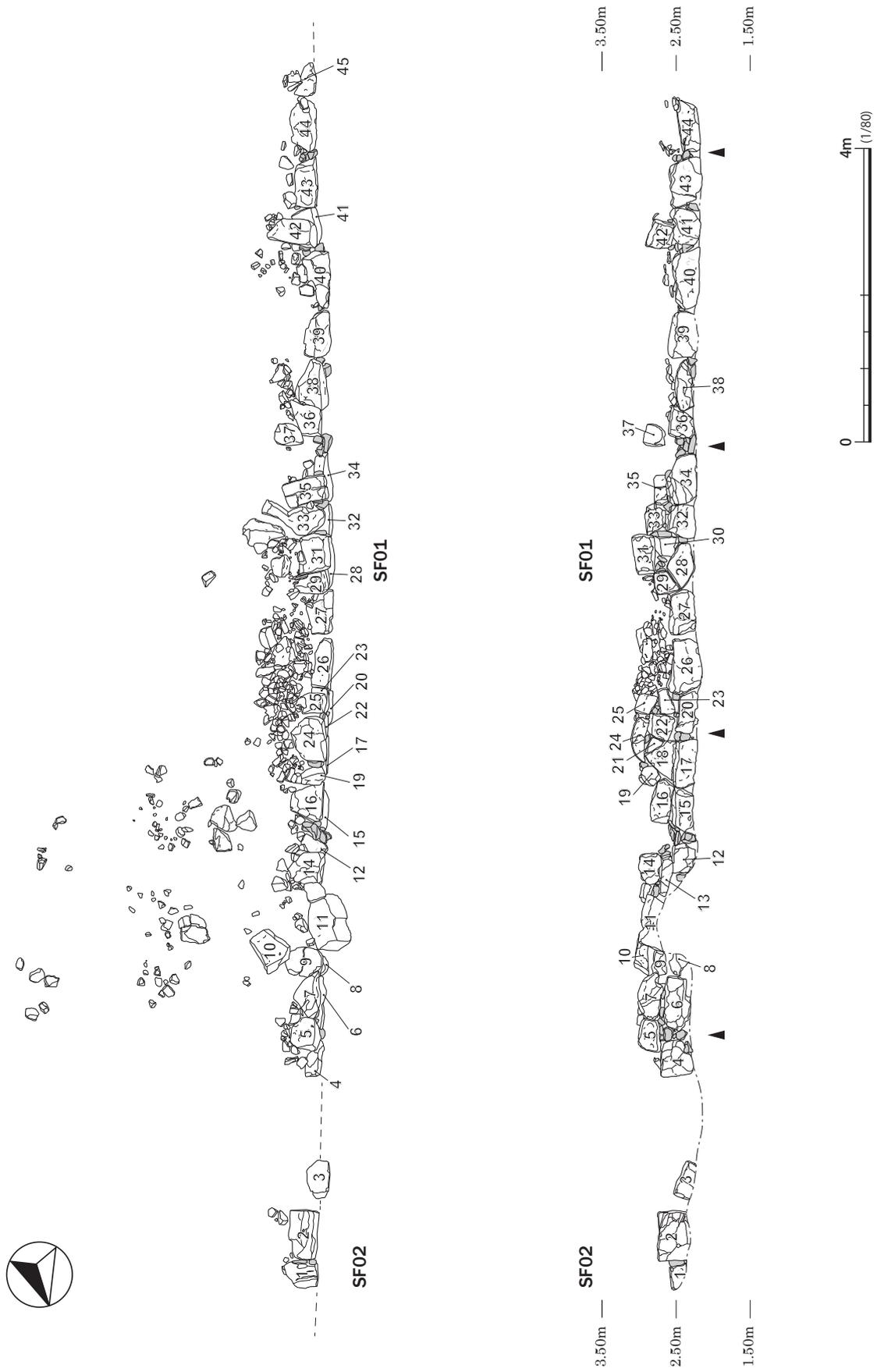


図20 HZK1603地点 石積み遺構 (SF01, SF02) の築石

新しい特徴を有するので、石積み遺構の年代は14世紀前半より古い（IV-3章、谷論文参照）。先述した、石積み遺構より古い時期の自然堆積物から採取された炭化材の¹⁴C年代値を参考にすると、この石積み遺構は11世紀前半～13世紀前半頃と14世紀前半との間となる年代に築造された可能性が高い。

基礎と背面の構造 SF01・SF02は遺構表面を露出した後に埋め戻したため、石積みの基礎や背面の構造に関しては、SF01に付属する背面基盤層（盛土）の存在を確認できる土層断面（図21上段、b-b'ライン）、外側に積まれた石積みのみが脱落してその背面に石片が充填された箇所（no.26・27の上：図20参照）、そして、上記b-b'ライン土層断面と石積みから前面への崩落土断面（図21中段、c-c'ライン）から、部分的にわかる程度である。

まず、b-b'ラインの堆積状況を確認しておく（図21上段）。各層の詳細は、以下の通りである。

- 1層：暗褐色（7.5YR2/4）土層。粘性中、しまり中。配管敷設にともなう腐植土。
- 2層：明褐色（7.5YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。人為攪拌をともなう風成砂。
- 3層：褐色（7.5YR4/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。人為攪拌をともなう風成砂。
- 4層：明褐色（7.5YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。人為攪拌をともなう風成砂。
- 5層：褐色（10YR4/6）中粒砂層。粘性弱、しまり中。裏込石あるいはその碎片、木炭片を多く含む。人為攪拌をともなう風成砂。
- 6層：明黄褐色（10YR6/8）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。石英片が多く混入する風成砂。
- 7層：黄褐色（10YR5/8）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。石英片が多く混入する風成砂。6層より水分量が高い。
- 8層：明褐色（7.5YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。下部に炭化物をわずかに含む。風成砂か。12層に類似する。
- 9層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量がやや高い。8層より木炭片をやや多く含む。風成砂か。
- 10層：橙色（7.5YR6/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 11層：黄褐色（10YR5/8）粗粒砂層。粘性弱、しまり中。水分量がやや高い。
- 12層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり中。8層に類似する。
- 13層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化物をわずかに含む。
- 14層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。ところどころ炭化物をやや多めに含む。
- 15層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。白色鉱物片の混入がめだつ。裏込石の碎片混じり。
- 16層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。木炭片をわずかに含む。水分量が低い。
- 17層：明黄褐色（10YR6/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。白色鉱物片の混入がめだつ。
- 18層：褐色（10YR4/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 19層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。白色鉱物片の混入がめだつ。下部に植物根由来の攪拌を受ける。
- 20層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。19層よりは粒度が大きい。白色鉱物片の混入がめだつ。部分的に植物根由来の攪拌を受ける。
- 21層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。部分的に細砂が互層をなす。
- 22層：黄褐色（10YR5/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。石英片の混入がめだつ。
- 23層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。部分的に植物根由来の攪拌を受ける。

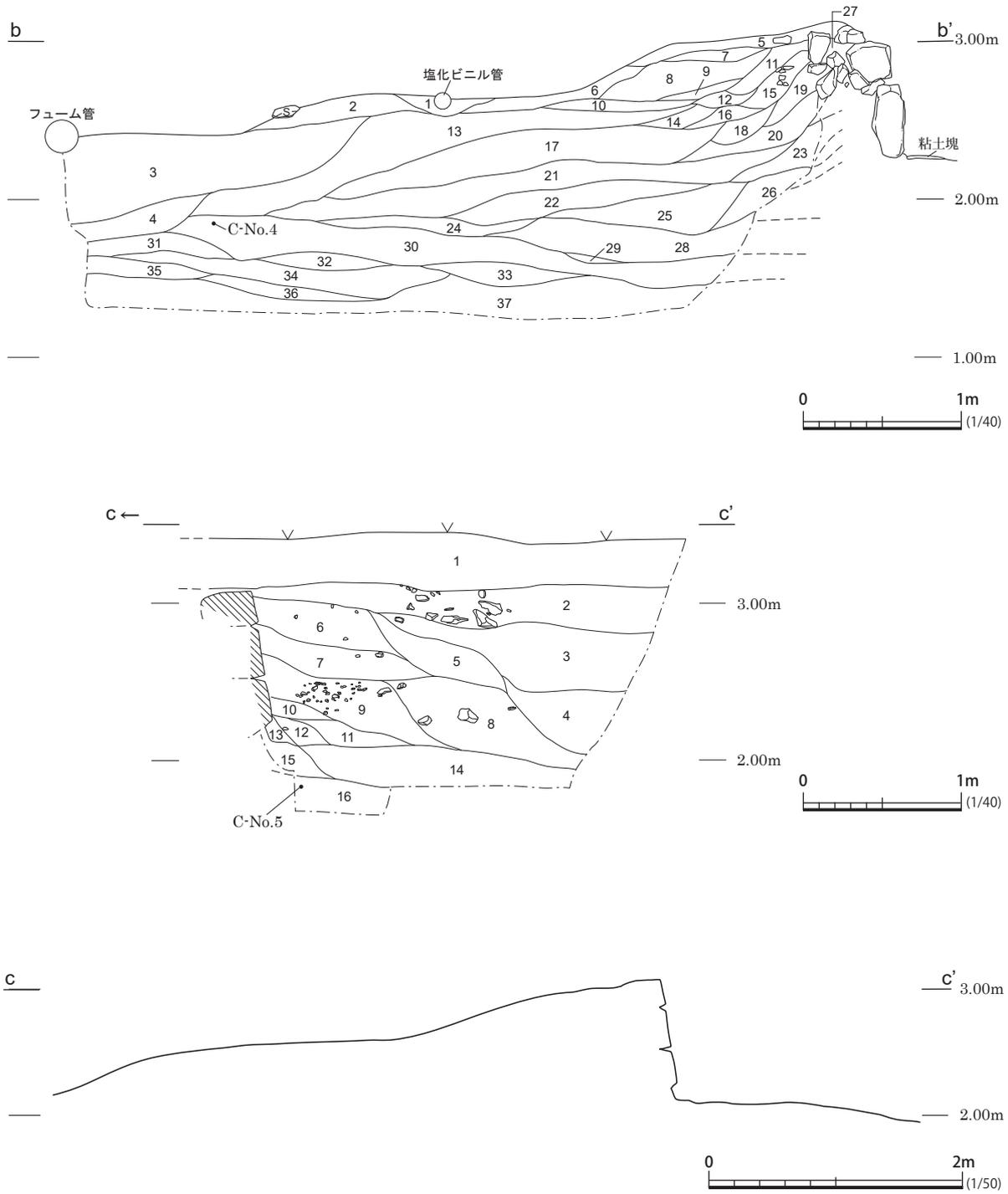


図21 HZK1603地点 土層断面図およびエレベーション図 (SF01, SF02)

- 24層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量が低い。
- 25層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。24層よりは粒子が粗い。粘性弱、しまり弱。炭化物混じりの黒色部がまだらに残る。白色鈇物片の混入がめだつ。
- 26層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粒子がやや細かい。粘性弱、しまり中。水分量が高い。
- 27層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。白色鈇物片の混入がめだつ。
- 28層：褐色（7.5YR4/6）粗粒砂層。粘性弱、しまり強。炭化物まじり。全体的に細い樹木根が入る。
- 29層：橙色（7.5YR6/8）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 30層：橙色（7.5YR6/8）粗粒砂層。粘性弱、しまり強。炭化物混じり。28層に類似する。
- 31層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細砂が互層をなす。
- 32層：橙色（7.5YR6/6）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化物がわずかに混じる。白色鈇物片の混入がめだつ。
- 33層：明褐色（7.5YR5/6）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。白色鈇物片の混入がめだつ。
- 34層：橙色（7.5YR6/8）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細砂が互層をなす。
- 35層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細砂が互層をなす。
- 36層：褐色（10YR4/6）粗粒砂層。粘性弱、しまり弱。
- 37層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。極小（<1.0cm角）の土器片（時期不明）が数点出土。

つぎに、c-c'ライン（石積み前面）の各層の詳細は以下の通りである（図21中段）。

- 1層：表土 灰黄褐色（10YR4/2）土層。粘性弱、しまり中。中砂まじり。植物痕由来の攪拌作用を受ける。
- 2層：にぶい黄褐色（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。小礫片が一部に集中して含まれる。人為攪拌をともなう。
- 3層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量が低い。人為攪拌をともなう。
- 4層：明黄褐色（10YR7/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量が低い。人為攪拌をともなう。3層と類似する。
- 5層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。水分量が低い。3層よりは、粒子がやや粗い。
- 6層：にぶい黄橙色（10YR7/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細砂まじり。水分量が低い。小礫をわずかに含む。
- 7層：明黄褐色（10YR7/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。細砂まじり。水分量が低い。小礫をわずかに含む。
- 8層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。3～5cm大の礫を含む。
- 9層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり中。3～5cm大の礫を多く含む。
- 10層：にぶい黄褐色（10YR5/3）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。3～5cm大の礫を多く含む。
- 11層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。1cm大の礫をわずかに含む。
- 12層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。炭化物をわずかに含む 2～3cm大の礫を含む。
- 13層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。

14層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。粘性弱、しまり弱。

15層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。粘性中、しまり中。13層よりややくすむ。

16層：にぶい黄褐色（10YR5/3）粗粒砂層。粘性弱、しまり中。炭化物を含む。

石積み遺構は、地盤が軟弱な海岸砂丘上に築造されている。そのため、土台木や杭木による補強があったことも想定されるが、観察可能な箇所において、そうした設置痕跡は確認できなかった。b—b'ラインの28・30層以下には粗粒砂主体の堆積が認められ、その構成物はHZK1604地点南地区B-1地点2～7層に類似する。30層の堆積は石列前面まで、ほぼ同じ厚さで水平にひろがることを確認した。c—c'ライン（石積み前面）の最下層（16層）の構成物もまた類似する。つまり、基底石下部より約0.5m以下に自然堆積物を含む層群がひろがっている。

b—b'ラインでは、33～37層の堆積と28・30層の堆積との間に不整合が認められ、ほぼ水平堆積する33～37層と比較すると、28・30層は自然作用による堆積にはみえない。さらに上に堆積する中粒砂層（24・25層）との間にも不整合面があり、これは人為活動による削平面の可能性もある。そのため、28・30層は人為堆積物の可能性がある。基底石下部より-0.5m前後に厚さ数10cmの整地面が設けられた可能性が高い。周辺もしくはこの場所で採取可能な粗粒砂主体の自然堆積物を敷き、列前面から背面まで5m以上にわたり整地した後に、中粒砂で盛土を施し、その上に石積み遺構と背面の盛土を築造した、という作業工程が想定される。粗粒砂主体の整地層は、比較的しまりがある。これが叩き締められたものか、もともと締めやすい自然堆積物が選択利用されたのかどうかは、不明である。自然堆積物に多く含まれる鉱物片などの不純物がめだたないことから、この整地土はある程度の選別過程を経ているとみられる。

b—b'ラインの石積み基底石前面から、厚さ2～3cm、幅15cmの粘土塊が1点出土した。位置は、土層断面図中（図21上段）に示した。石積み築造作業にかかわる痕跡の可能性はあるが、発見されたのは1カ所のみで、傍に接近する樹木の根の発達に関係した土壌の可能性もある。背面盛土の内部構造を詳細に調査していないので、その起源に関して明言することはできない。

b—b'ライン1～9層は、人為攪拌や風成砂の堆積を含むので、石積み背面盛土の一部ではない。したがって、c—c'エレベーションライン（図21下段）は、背面盛土の傾斜面と関係がない。11・12・14・17層以下に、背面盛土が残る。それより上層が存在したのか否かは不明である。介石の機能を有する礫の存在は確認されていない。2段目以上の石材が脱落してその背面が残った箇所（石材no.26・27の上）で、礫岩・砂岩の碎片が密に充填されていた。これは裏込め栗石の機能を有する。

b—b'ライン11・12・14～16・18～20層は、石積み背面での盛土作業の初期段階に一定量の砂が同じ動作で石積みにむかって繰り返し投げ込まれた痕と考える。石の積み上げ作業にともなう背面を固定する工法の存在を示唆する。23・26層も同じ動作に由来するものとみられるが、石積みを現状保存する目的で石積みの背部と下部を掘削していないので、判然としない。（福田正宏）

石材の加工技術と特徴（表3） 基底石は立方体もしくは直方体状をなすものが多く、外面および上面（合端）はおおむね平坦である。それぞれの面の境は稜をなして角張る。石材no.28のみ外面が菱形を呈するが、それ以外の面は長形状をなす。石材no.36のように礫岩の葉理¹⁾面を平滑面として外面に活かしたものが多く、21点中8点（38.1%）の外面が葉理面で構成される（図22下段、表5参照）。脆く風化しやすい礫岩を用いており、矢穴や剝離痕など、加工を明確に示す痕跡は確認できない。しかし、基底石の外面や上面は石材の葉理面で構成されるものが多く、細礫岩²⁾については、

表3 石材観察表

石材 No.	段数 (下から)	石材	面幅 (cm)	面高 (cm)	外面の状態	想定される先後関係(同じ段)	備考
1	1(基底石)	砂岩	41	23	葉理面に直交	no.1→no.2	上面に漣痕
2	1(基底石)	砂岩	65	41	葉理面?	no.1→no.2	
3	1(基底石)	砂岩	48	22	葉理面に直交		
4	1(基底石)	細礫岩	50	45	葉理面に直交		
5	2	中礫岩	42	33	自然面	no.9→no.7→no.5	
6	1(基底石)	細礫岩	70	40	葉理面に直交	no.8→no.6	
7	2	細礫岩	60	36	剝離面	no.9→no.7→no.5	
8	1(基底石)	中礫岩	32	28	自然面	no.8→no.6	
9	2	中礫岩	35	25	自然面	no.9→no.7→no.5	
10	—	細礫岩	—	—	—		
11	—	中礫岩	73	30	—		
12	1(基底石)	中礫岩	—	32	自然面		
13	2	細礫岩	53	20	葉理面に直交?		
14	3	中礫岩	42	15	自然面		
15	1(基底石)	中礫岩	56	27	自然面	no.17→no.15	外面に漣痕
16	2	細礫岩	57	27	葉理面に直交	no.18→no.16	
17	1(基底石)	細礫岩	65	30	葉理面	no.17→no.15	
18	2	細礫岩	50	40	葉理面	no.18→no.16、no.18→no.21	
19	3	細礫岩	26	20	葉理面に直交		
20	1(基底石)	細礫岩	53	26	葉理面	no.20→no.26	
21	2	中礫岩	25	16	自然面	no.23→no.22→no.21、no.18→no.21	
22	2	細礫岩	32	26	葉理面に直交	no.23→no.22→no.21	
23	2	細礫岩	33	18	葉理面に直交	no.23→no.22→no.21	
24	3	細礫岩	57	20	剝離面		
25	3	細礫岩	27	25	自然面		
26	1(基底石)	細礫岩	71	46	葉理面に直交?	no.20→no.26	
27	1(基底石)	中礫岩	60	36	自然面	no.27→no.28	
28	1(基底石)	中礫岩	61	40	自然面	no.27→no.28	
29	2	中礫岩	33	35	自然面		
30	2	中礫岩	26	27	自然面		
31	3	中礫岩	49	32	葉理面に直交		
32	1(基底石)	細礫岩	44	41	葉理面	no.32→no.34	
33	2	中礫岩	35	30	葉理面に直交		L字状に加工
34	1(基底石)	細礫岩	63	42	葉理面	no.32→no.34	
35	2	細礫岩	35	17	葉理面に直交		奥行が長い
36	1(基底石)	細礫岩	34	34	葉理面	no.38→no.36	
37	—	細礫岩	29	32	葉理面		
38	1(基底石)	中礫岩	66	30	葉理面	no.38→no.36	
39	1(基底石)	中礫岩	65	42	自然面		
40	1(基底石)	細礫岩	75	40	葉理面		
41	1(基底石)	中礫岩	46	40	自然面		上面敲打成形?
42	2	細礫岩	35	30	葉理面		
43	1(基底石)	中礫岩	70	47	葉理面		
44	1(基底石)	細礫岩	65	36	葉理面に直交		
45	1(基底石)	中礫岩	50	30	—		

表4 石材と段数

段数	1(基底石)	石 材		
		中礫岩	細礫岩	砂岩
数	2	10	10	3
	3	6	8	
	3	2	3	

表5 外面の状態と段数

段数	1(基底石)	外面の状態				
		自然面	葉理面	葉理面に直交	剝離面	不明
数	2	7	8	5		1
	3	5	2	5	1	
	3	2		2	1	

表6 外面の状態と石材

石 材	中礫岩	外面の状態				
		自然面	葉理面	葉理面に直交	剝離面	不明
材	細礫岩	13	2	2		2
	砂 岩	1	9	8	2	1
				2		

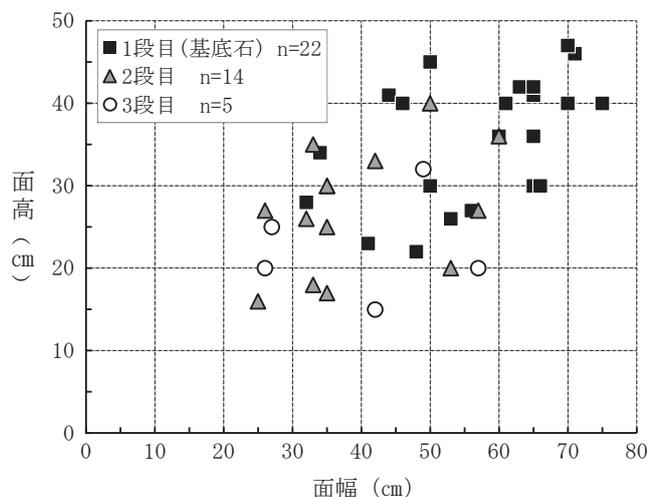


図22 石材のサイズ

葉理に沿って分割するように石材を切り出した可能性が高い。隅角などの調整により生じた石片は、裏込石として再利用されたとみられる（IV-2章、森論文参照）。基底石の石材は、礫岩20点（中礫岩10点、細礫岩10点）、砂岩3点である（表4参照）³⁾。SF02に砂岩3点がまわっており、SF01の基底石には砂岩がみられない。基底石の外面幅の平均値は56.8cm、外面高の平均値は35.6cmである。

2段目と3段目の石材は葉理面に直交する面を外面とするものがやや多く、18点中7点（38.9%）を占める（表5参照）。このことは、石積みの構築において外面を揃えることにより、石材を安定的に積み上げることのほうが優先されたことを示唆する。また、形態として角錐台形や扁平な直方体状をなすものが多く、直方体の小口部分を西側に向けるものもある（石材no.33・35・42）。亜円礫を素材とするものが含まれており、剝離によって外面を平坦に形成したものがある（石材no.7・24：図23上段・中段）。これは、外面を揃えるための意図的な加工といえる。2段目の石材は礫岩14点（中礫岩6点、細礫岩8点）、3段目の石材は礫岩5点（中礫岩2点、細礫岩3点）である。2段目石材の外面幅の平均値は39.4cm、外面高の平均値は27.1cm、3段目石材の外面幅の平均値は40.2cm、外面高の平均値は22.4cmである。段数別に外面幅と外面高の関係性をみると、2段目と3段目の法量はほぼ同じである（図22参照）。

基底石のno.4—no.6間、no.17—no.20間、no.34—no.36間、no.43—no.44間は、それぞれ石材が接続しておらず、拳大～人頭大の石片によってその隙間が充填されている（位置は、図20の▲参照）⁴⁾。また、平面形においてno.34—no.36間には、外面で約10cmのズレがみられる。こうした基底石の不連続の間隔は約4m（1丈3尺2寸に相当）で一定しており、石積みを構築する際の作業単位を示す可能性がある。しかしながら、基底石外面の切合関係にもとづく先後関係の復元からは、必ずしも不連続を挟む基底石から石積みの構築が開始された、すなわち各区間の最初に置かれた石材とはいえない（石材no.6・34・36）。（森 貴教）

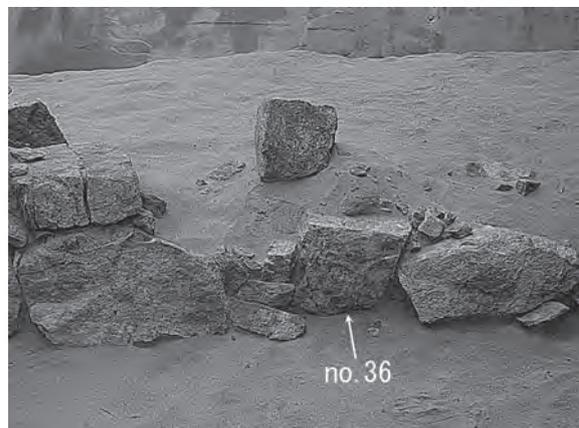
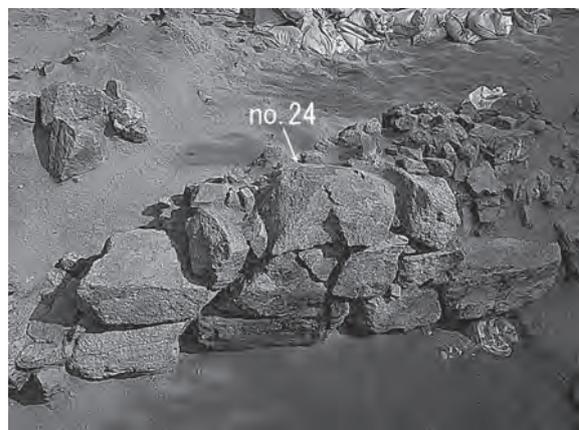


図23 SF01の石材

(2) SF03 (図18・24)

HZK1604地点西地区の、防音講義室北側に接する廊下（コンクリート製の犬走り）の下部、防音講義室北東隅から西側へ3.5m離れた地点で検出された（位置は図18参照）。調査中、基底石と考えられる長径約60cm、短径約30cmの石材が崩落したため、内部の状況を確認できるようになった。

廊下コンクリートの下部には、基底石と考えられる石材が3石以上、南側の防音講義室の下部に向かって並んでいる。最も手前側の基底石と考えられる石材の大きさは長径約30cm、短径約20cmである。すべて礫岩で構成される。SF01・SF02・SF04の石材と同質のものである。内側（東側）には、拳大～人頭大の石片がみられる。現代攪拌の影響を受け、原位置を保つものではないが、石積みの背部を構成する裏込石と考えられる。

d-d'ライン（図24）各層の詳細は、以下の通りである。

- 1層：にぶい黄色（2.5Y6/3）土層。碎石、樹木根を含む。現代攪拌痕。
- 2層：黒褐色（2.5Y3/1）土層。樹木根、コンクリートを含む。現代攪拌痕。
- 3層：にぶい黄橙色（10YR6/4）粗粒砂層。植物攪拌の影響を受ける。
- 4層：にぶい褐色（7.5YR5/4）粗粒砂層。植物攪拌の影響を受ける。
- 5層：褐色（7.5YR4/4）粗粒砂層。現代攪拌の影響を受ける。
- 6層：にぶい褐色（7.5YR5/4）粗粒砂層。現代攪拌の影響を受ける。
- 7層：明褐色（7.5YR5/6）中粒砂層。
- 8層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。
- 9層：明褐色（7.5YR5/6）中粒砂層。樹木根が入り込む。
- 10層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。炭化物をわずかに含む。
- 11層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂層。
- 12層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒～粗粒砂層。炭化物をわずかに含む。
- 13層：黄褐色（10YR5/6）中粒砂層。砂粒度が均質。
- 14層：黄褐色（10YR5/6）粗粒砂層。植物攪拌の影響を受ける。石積み背面の固定作業にともなう人為堆積土か。
- 15層：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂層。植物攪拌の影響を受ける。石積み背面の固定作業にともなう人為堆積土か。
- 16層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。砂粒度が均質。
- 17層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。砂粒度が均質。
- 18層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。砂粒度が均質。炭化物をわずかに含む。
- 19層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂層。
- 20層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。炭化物をわずかに含む。
- 21層：にぶい黄橙色（10YR6/4）中粒砂層。
- 22層：にぶい黄褐色（10YR5/4）中粒砂層。
- 23層：にぶい黄橙色（10YR7/4）粗粒砂層。樹木根由来の植物攪拌の影響を受ける。
- 24層：にぶい黄橙色（10YR7/3）粗粒砂層。植物攪拌の影響を受ける。
- 25層：明黄褐色（10YR6/6）中粒砂層。砂粒度が均質。
- 26層：にぶい黄橙色（10YR6/3）中粒砂層。炭化物をわずかに含む。
- 27層：自然堆積物。細礫、炭化物、土器片、陶磁器片を多く含む。HZK1604地点南地区B-1地点2～7層に対応する。

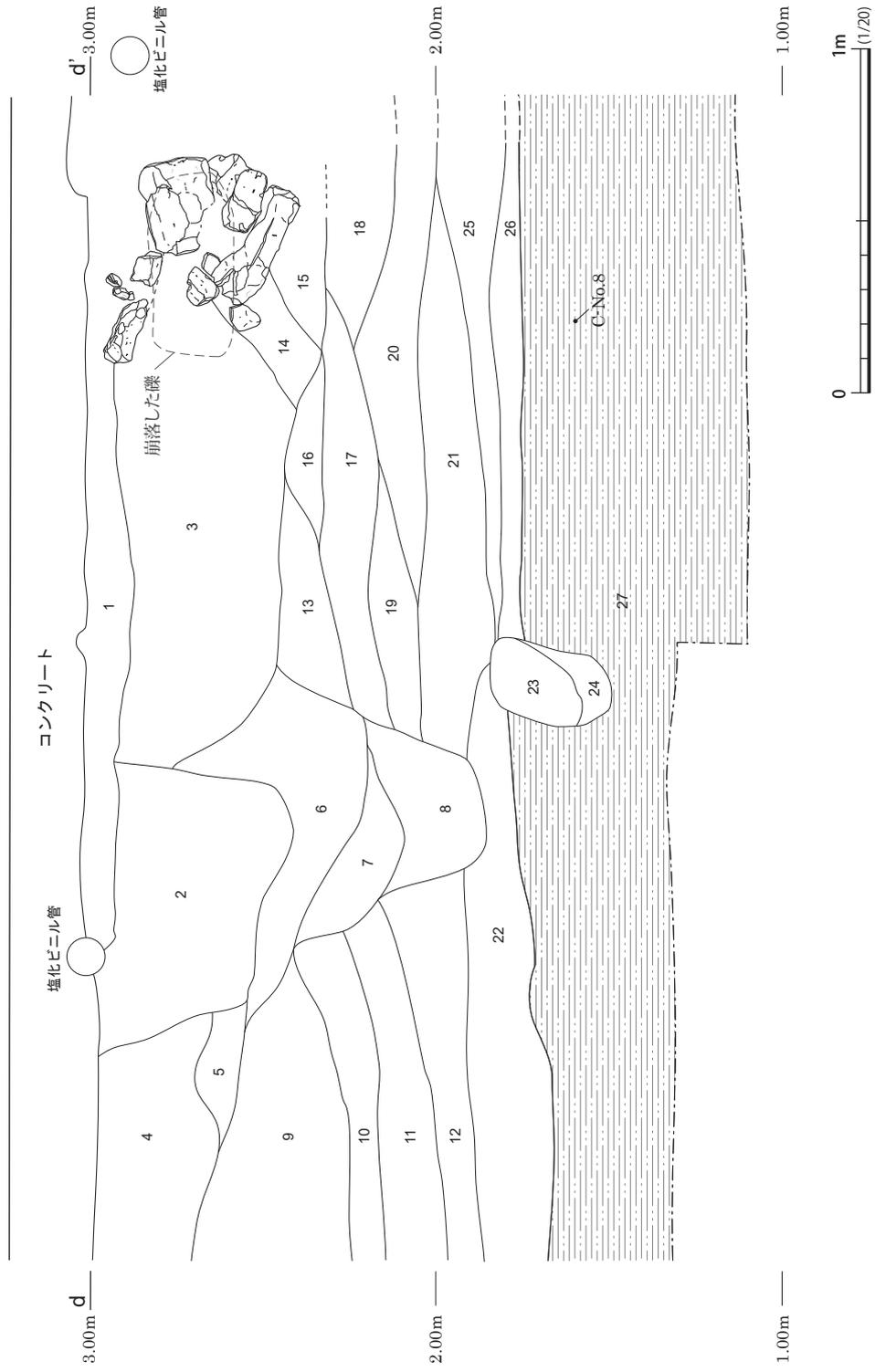


図24 HZK1604地点 土層断面図 (SF03)

(4) SF04 (図18・25)

HZK1604地点西地区の、SF03の北側4.2mの地点で検出された（位置は図18参照）。大型の石材2点が西側（博多湾側）に面を揃えて並び、その内側（東側）に拳大～人頭大の石片約15点が集中する。大型の石材のうち南側のものは長さ67cm、幅45cm、厚さ34cmを測り、ややいびつな直方体状をなす。上面は平坦である。北側のものはインフラ整備の際の機械攪拌の影響を受け、半分以上が失われている。これらの石材の下部に、石材はない。大型の石材は礫岩、その他の石片は礫岩と砂岩であり、SF01・SF02・SF03の石材と同質のものである。大型の石材は石積み遺構の基底石、拳大～人頭大の石片は石積みの背部を構成する裏込石と考えられる。

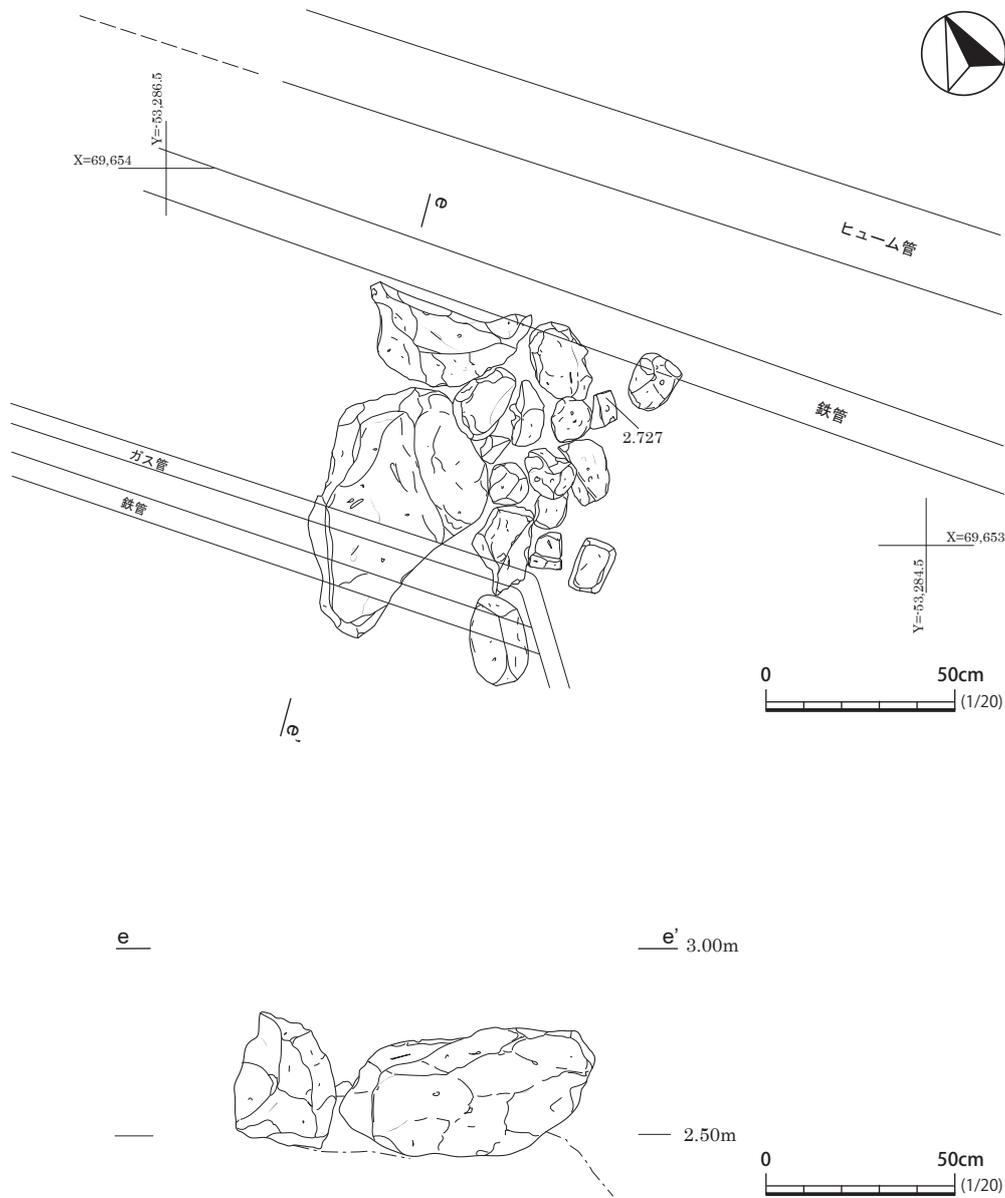


図25 HZK1604地点 遺構図1 (SF04)

(5) SQ01 (図18・図26)

HZK1604地点西地区の、中央図書館通路の Slope 西側に設置されたコンクリート壁の傍から検出された（位置は図18参照）。防音講義室の北東隅から東へ約3mの地点に位置する。煉瓦積の柵とそれに連結する土管10点から構成された地下埋設施設である。基本層序I層相当の遺構である。

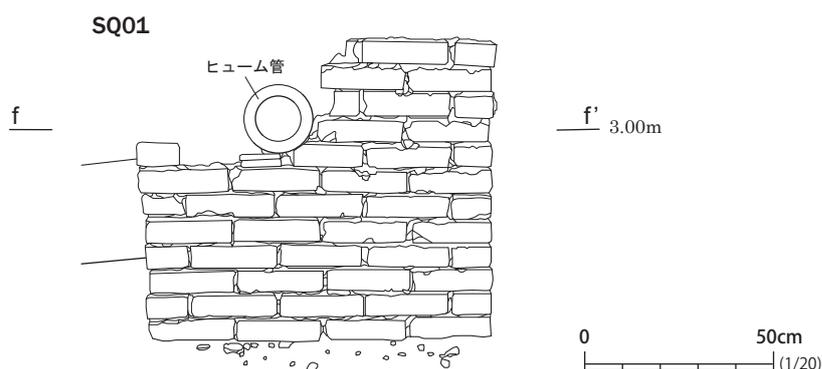


図26 HZK1604地点 遺構図2 (SQ01)

柵の平面形は一辺約95cmの正方形（口字形）をなし、高さは約0.8mを測る。柵枠として煉瓦が用いられており、長手積み（Stretcher Bond）で計12段、1段に一辺4個ずつ積まれている。目地材料はモルタル（セメント、水および細骨材の混合物）とみられる。目地の整形はほとんどされておらず、煉瓦を積み上げた際の上下方向の圧力により、はみ出た目地材料は、掻き取られることなくそのままとなっている。九州大学箱崎キャンパス正門に認められる覆輪目地（断面が半円形になる目地）などのように、見た目のデザインを意識した構造物ではない。

東面、西面にそれぞれ外径約30cmの陶製土管が接続していることから、雨水を集水するための柵であると判断できる。後代になり、ヒューム管および鋼管が南北方向に設置された際、機械攪拌により、上から4段目までの西側半分が破壊されている。

煉瓦は赤褐色の色調を呈する普通煉瓦（いわゆる赤煉瓦）で、焼成は良好である。平手が両面とも平坦なため、機械による成形と考えられる（北山2013）。刻印は認められない。計測可能な煉瓦について法量を計測した（計量単位は1mm）。基礎統計量は以下の通りである。

長さ 平均値 227.1mm、標準偏差 3.7mm（計82点）

幅 平均値 108.6mm、標準偏差 2.2mm（計32点）

厚さ 平均値 58.7mm、標準偏差 2.2mm（計82点）

平均体積 1448.6cm³

現在、日本工業規格（JIS）が定める普通煉瓦の規格は、長さ210mm×幅100mm×厚さ60mmである。これは大正14（1925）年、日本標準規格第8号（JES8）に定められた規格を踏襲している。SQ01に用いられている煉瓦はこれよりも長さが17mm、幅が9mmほど大きいため、大正14（1925）年以前に製造されたものである可能性が考えられる⁵⁾。小野田滋（2004）による煉瓦寸法の分類と対比すれば、Ⅲ群（大高（1905）による分類の東京形）に相当する。大正期に、全国各地においてそれまで主流であったⅤ群（大高分類の並形）が衰退し、煉瓦の寸法はⅢ群にほぼ統一化されることが指摘されている（小野田2004）。

大正期に遡る調査区付近の建物として、動植物学教室・動植物学附属消毒室・動植物学教室温室がある。これらの建物は、現在中央図書館が建っている範囲に、かつて存在していた。動植物学教室は大正10（1921）年7月、動植物学附属消毒室は大正11（1922）年3月、動植物学教室温室は大正11（1922）年11月にそれぞれ竣工されている（土田1969）。SQ01は、こうした九州帝国大学農学部創初期の建築にともなうインフラ構造物の可能性が高い。（森 貴教）

4. 遺物

（1）HZK1603地点西地区・東地区（図27）

1は、西地区SF01の石材no.11直下（図19：P）から出土した土師器の皿である。糸切り底で、内外面ともナデである。口径8.2cm、底径7.4cm、器高1.2cmである。

2～15は、西地区SF01周辺の砂層中から出土した。2は土師器の皿である。糸切り底で、内外面ともナデ調整である。3～7は土師器の坏である。いずれも内外面ともナデで、5・7は糸切り底である。3は口径12.4cm、5は底径9.3cmに復元される。8は瓦器塊である。内外面ともナデで、胎土は緻密である。9は土師質の播鉢である。内外面ともナデで、外面は一部剥離している。10は土師器の鍋で、内面はヨコハケ、外面はナデである。11は土師器の甕口縁部で、器壁が厚い。内外面ともナデ調整である。12・13は龍泉窯系の青磁碗で、12は片彫りの花文が施されており、大宰府編年のⅠ類、13は外面に鎬のある蓮弁が施されⅡ-b類と考えられる。14は白磁碗で見込みに段がつく。外面はケズリで下半部は露胎である。15は青白磁の瓶の肩部である。外面にわずかに凹凸がある。レリーフ状の施文の可能性はある。

16・17は、西地区SF01の背面盛土の砂層中から出土した。いずれも土師器の皿で、糸切り底である。内外面ともナデ調整で、17は摩滅している。17は口径6.6cm、底径5.4cm、器高1.2cmに復元できる。

18は、西地区SF01石積み前面の崩落土（図23中段：c—c'ライン5～13層に対応）に含まれる石片群に混ざって出土した。東播系須恵器の捏ね鉢かもしれないが、内面が良く摩耗している。外面はナデ調整である。

19～22は、西地区の石材no.44・45付近の砂層中から出土した。19は土師器の鉢で、内外面ともヨコナデ調整である。口唇部は丸く整え、器壁がやや厚くなる。20は土師器の甕底部で、内外面ともナデ調整である。胴部は、粘土継ぎ目から剥落し、底部のみ残存している。21は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、片彫りの沈線が1条めぐり、22は玉縁口縁の白磁碗で、口縁部から胴部に内外面とも施釉する。大宰府編年の白磁Ⅳ類である。

23・24は、東地区トレンチ内の砂層中から出土した。23は土師皿で、内外面ともナデ調整であるが摩滅している。24は瓦器塊で、内外面ともナデ調整。口唇部外面は黒色を呈する。

25～30は、西地区における遺構検出時に、黄褐色砂層から出土した。25～27は土師器の坏である。いずれも内外面ともナデ調整で、26・27は糸切り底である。28は土師器の甕胴部で、内外面ともハケメのちナデ調整。29は青磁碗片である。内外面とも施釉で、外面に施文が見られる。30は土錘である。胴部最大径付近から半分ほどが残存する。直径1.7から1.9cm、重さ7.53gである。

31～36は、西地区SF01のb—b'ライン37層（図23上段参照）から出土した。31は土師器の皿で、内外面ともナデ調整であるが、摩滅が激しい。32は土師器の坏で糸切り底と思われるが、摩滅が激しい。33は中国陶器の甕の胴部片と考えられ、内外面とも施釉である。内面はナデ、外面はケズリ調整である。34～36は安山岩の石球である。不整楕円形を呈する。いずれも明瞭な敲打痕などは見られない。投弾などに使用されたものであろう。34は長さ3.6cm、幅3.2cm、厚さ2.8cm、重45.06gである。35は長さ4.5cm、幅3.6cm、厚さ2.6cm、重さ49.49gである。36は長さ3.2cm、幅2.6cm、厚さ1.7cm、重さ17.73gである。

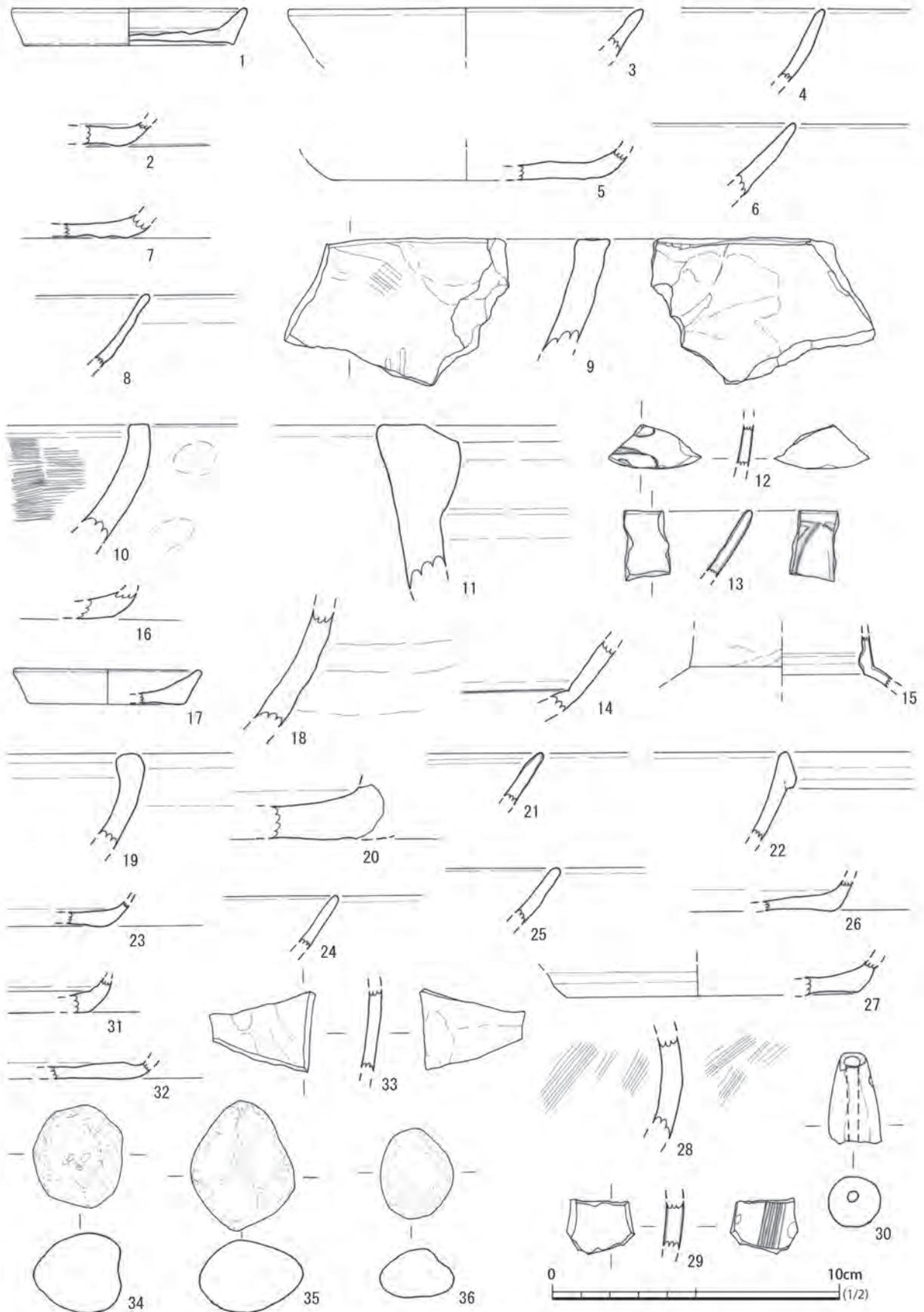


图27 HZK1603地点西地区·東地区出土遺物

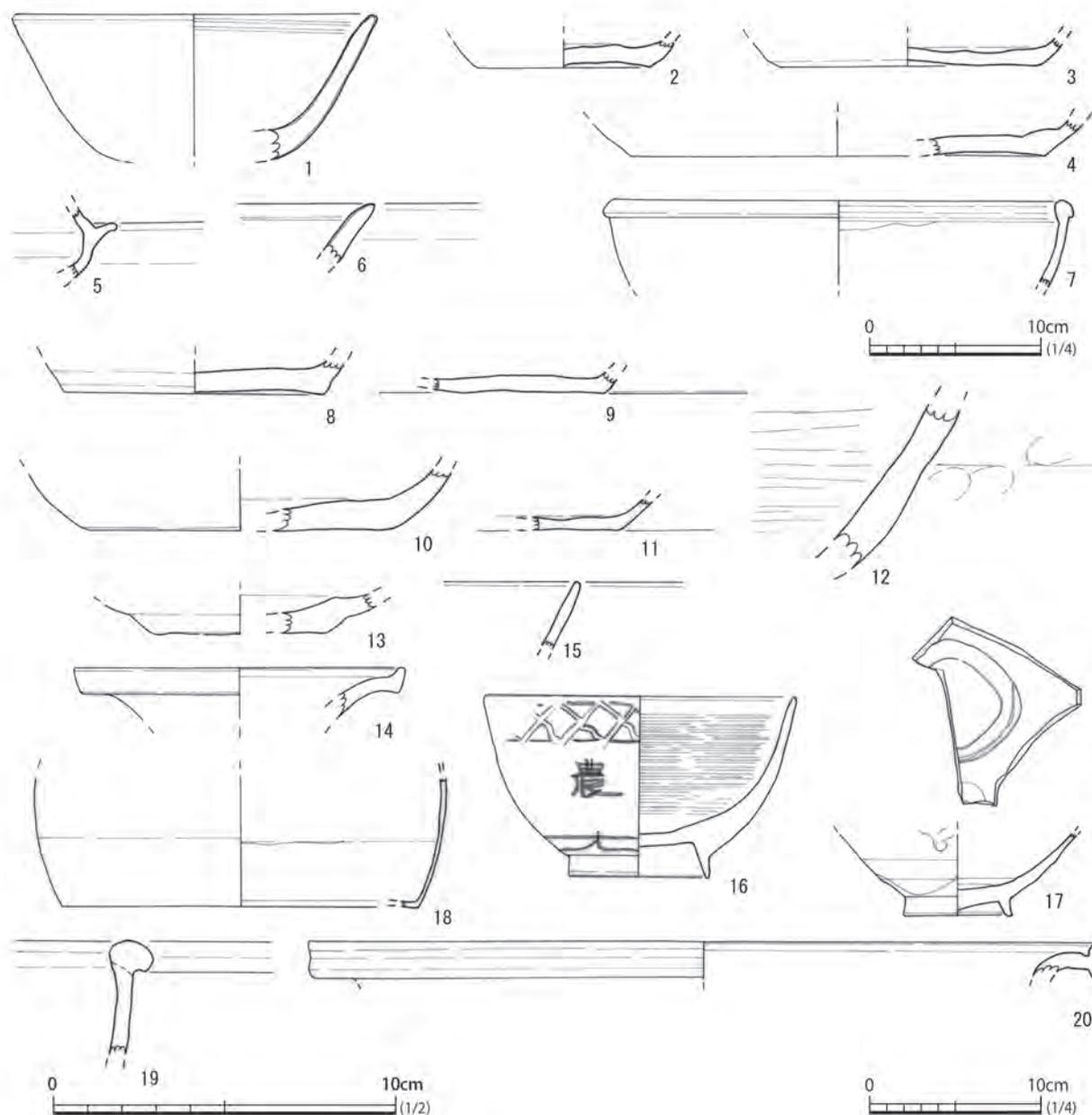


図28 HZK1604地点西地区・南地区出土遺物 1（7・20のみS=1/4）

(2) HZK1604地点西地区・南地区（図28）

1～3は、西地区SF03石積み背面盛土中から出土した。1は龍泉窯系青磁の小碗である。底部から高台部を欠損する。口唇部内面に2条の沈線がめぐる。口径10.6cm。2・3は土師器の皿である。いずれも内外面ともナデ調整で摩滅しているが、糸切り底の可能性が高い。2は底径5.0cm、3は底径7.8cmである。

4～7は、西地区d—d'ライン27層（自然堆積物：図24参照）の上面から出土した。4は土師器の坏である。いずれも内外面ともナデ調整で摩滅している。底径12.0cmに復元される。5は須恵器の坏である。口唇部と胴部以下を欠損する。内外面ともナデ調整で摩滅している。6は龍泉窯系青磁の碗である。口唇部内面に1条の沈線がめぐる。7は中国陶器の鉢である。内面は施釉でナデ調整、口

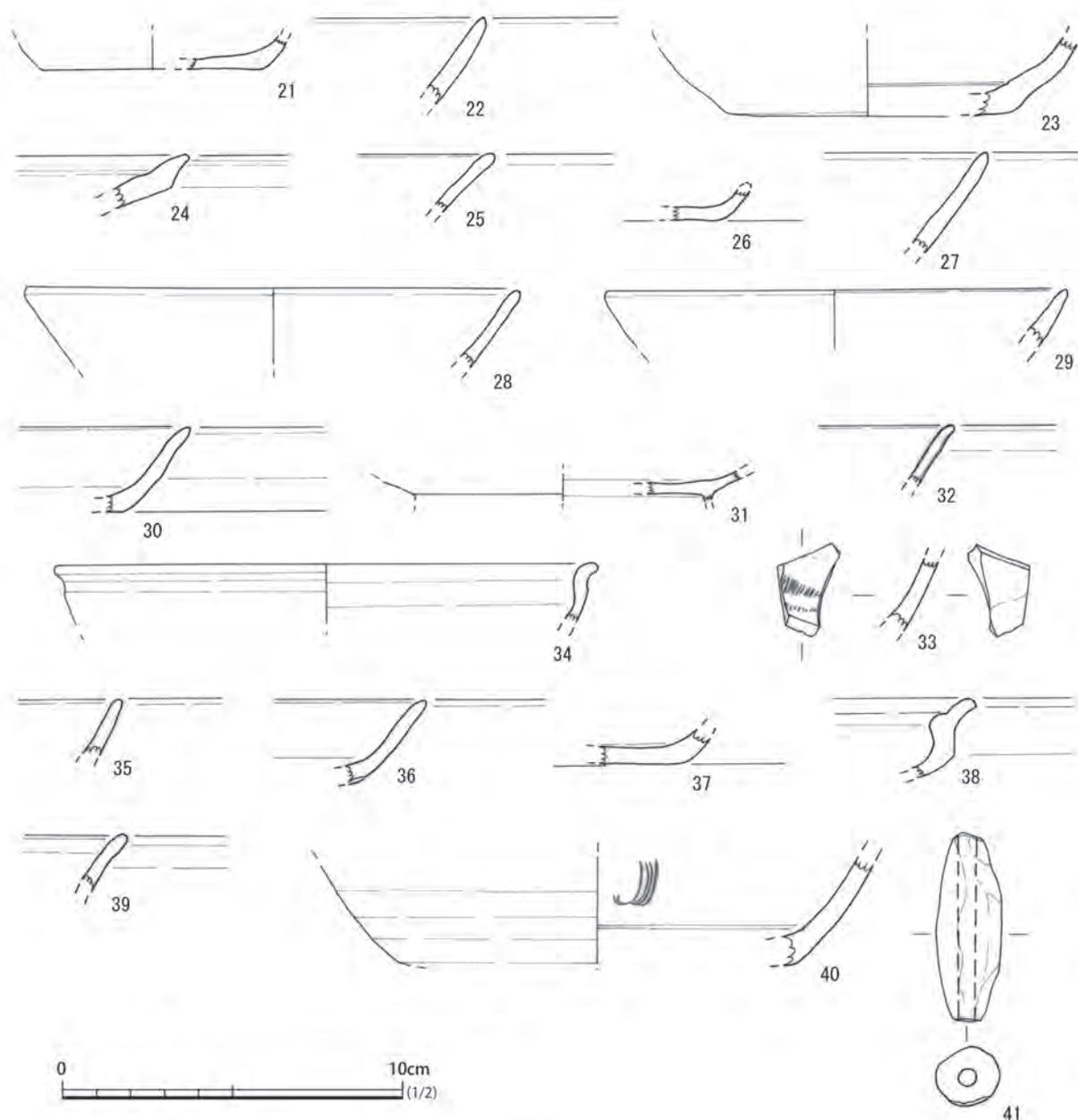


図29 HZK1604地点西地区・南地区出土遺物2

唇部は丸く作り出して、内側を面取りしたあと、全体に化粧土がかかる。外面はヨコナデで、無釉である。口径27.4cm。

8～20は、南地区の自然堆積物中から出土した。8は土師器の皿である。9～11は土師器の坏である。12は土師器の鉢である。13は須恵器の坏底部で、内面と胴部外面付近はナデ調整、底部外面はケズリ調整である。底径5.0cmに復元される。14は須恵器の長頸壺の口縁である。口縁部をつまみ出して成形する。内外面ともナデ調整で摩滅している口径9.6cmに復元される。15は白磁碗の口縁部で、素口縁である。16は昭和初期の磁器の湯飲み茶碗と思われる。染付の施文は手描きと思われる、内面は刷毛目をかけている。口径9.2cm、底径4.2cm、器高4.3cm。九州大学農学部で使用されたものと思われる。文様などの詳細は、IV-3章で詳しく述べる。17は白磁碗の下半部である。内面は施釉した後、

見込み部分の釉を環状に掻き取る。胴部外面はケズリで施釉する。底部はケズリ高台で底径6.4cmである。大宰府編年のⅧ類に相当する。12世紀中頃～後半の所産である。18は焼き締め陶器の底部である。少し胴が張り、底部は平底である。器壁が1.5mmほどと薄く、内外面とも布目痕がある。底径10.4cmに復元される。19・20は陶器の甕である。19は焼き締め陶器の鉢の口縁部と思われる。口唇部は断面円形の粘土紐を接合して丸くつくる。20は大型の甕の口縁部で、素焼の陶器と思われる。内面には自然釉がかかる。口縁部は上下端が突出して、帯状を呈する。口径46.0cmに復元される。

21～25は西地区西地区d-d'ライン27層（自然堆積物：図24参照）の下部から出土した。21は土師器の皿である。内外面ともナデ調整で摩滅する。糸切り底である。底径6.6cm。22・23は土師器の坏である。内外面ともナデ調整で摩滅する。23は底部付近がゆるく外反気味に立ち上がる。底径8.4cmに復元できる。24は須恵器の甕の口縁である。口唇部はつまみ上げたようにやや外反する。25は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。

26～34は南地区B-1地点2～7層から出土した。26は土師器の皿である。内外面ともナデ調整で摩滅している。27から30は土師器の坏である。いずれも内外面ともナデ調整で摩滅している。28は口径14.6cm、28は口径13.6cmに復元できる。31は瓦器塊である。高台部付近のみ残存する。内外面ともナデ調整である。32は龍泉窯系青磁碗で口縁部外面を強くなでたような段がつく。内外面とも厚く施釉される。33は同安窯系青磁碗で、内面は施釉で櫛状の施文具による点描文が見られる。外面はケズリで、破片の上半部は施釉、下半部は露胎である。34は中国陶器の鉢である。口縁部がS字状にゆるく屈曲する。内外面とも薄く釉がかかる。

35～39は、南地区の砂層中から出土した。35～37は土師器の坏である。いずれも内外面ともナデ調整である。37は糸切り底と思われる。38は土師器の鉢と思われる。口縁部が外側に開き、跳ね上がる。胴部中央付近に屈曲部があり、下半部が底部に向かってすぼまる。34のような陶器の鉢を模倣したものかもしれない。39は白磁の碗と思われる。内外面とも施釉する。

40・41は、現代攪拌痕のなかから出土した。40は龍泉窯系青磁碗である。見込みに細い片彫りの文様と1条の沈線を施文し、釉がかかる。外面はケズリで施釉する。41は土錘である。表面に指オサエの痕跡が残る。長さ5.6cm、幅2.0cm、重さ15.78gである。厚さは表面を欠損するため不明確であるが、1.8～2.0cmほどであろう。（谷 直子）

5. 小 結

HZK1603地点・HZK1604地点（中央図書館前南地点）の調査では、本キャンパス内の全体基本層序Ⅰ・Ⅳ～Ⅵ層に対応する、古代末～近代の遺構と遺物が出土した。

HZK1603地点西地区のSF01とSF02は一体の石積み遺構であり、大型礫が少なくとも3段は積み上げられている。一部で横目地が通る積み方は、いわゆる布積み崩しである。裏込め栗石と間詰め石の機能をはたす石片の存在が確認された。後代に、石材の抜き取りや上部の削平を受けており、築造時の遺構全体の原型は復元することができない。基礎構造として、基底石より約0.5m低い位置を平坦化した整地層、背面構造として石列背部からゆるやかに下る傾斜面をもつ盛土があった。整地層および盛土を構成する土砂は、本遺跡が立地する箱崎砂層に由来する。外部から搬入されたのではなく、現地で採取、盛り上げられたと考えられる。SF01・SF02は、石積み、盛土および整地層からなる構造物である。その築造年代は、長く見積もって、11世紀前半～13世紀前半（¹⁴C年代）と14世紀前半

(遺物型式相対年代) との間に収まるといえる。一方、HZK1604地点西地区のSF03・SF04は、防音講義室を挟んで南側のHZK1603地点SF01・SF02のほぼ同一線上に位置する。使用された石材は共通する。また、SF04の大型石材背部に充填された石片群には、SF01で確認された裏込めと同様の機能が認められる。したがって、SF01～SF04は一連の石積み遺構である可能性がきわめて高い。

ほかに、HZK1604地点では、九州帝国大学農学部創立期の建築にともなうインフラ構造物とみられるSQ01が見つかった。(福田正宏・森 貴教)

註

- 1) 葉理とは、異なった粒または組成などの平行な帯または葉層 (lamina) が存在する岩石の構造である。地層の中で1 cm以下の層状のものを指す (鈴木 2005: 91)。
- 2) 構成される礫の粒径 (礫径) により、礫岩を中礫岩 (4～64mm)、細礫岩 (2～4 mm) に細分した (周藤・小山内 2002参照)。
- 3) 岩石の肉眼鑑定については、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・足立達朗氏に現地にて御教示いただいた。岩石記載と岩石学・地球科学的分析については、IV-1章、足立・田尻論文を参照。
- 4) なお、no.12—no.15間の石片はno.12が荷重によって砕けたもので、本来は一石と判断した。
- 5) 水野 (2013) は長さ210mm×幅100mm×厚さ60mmという規格以外の煉瓦が、必ずしも大正14 (1925) 年以前に製造されたものであるとは限らないと指摘する。

文献

- 大高庄右衛門 1905「煉瓦の形状に就て」『大日本窯業協会雑誌』159、大日本窯業協会、471-475頁
- 小野田 滋 2004『鉄道と煉瓦 その歴史とデザイン』景観学研究叢書、鹿島出版会
- 北山峰生 2013『煉瓦生産を通して見た日本近代化過程の考古学的研究』2011～2012年度科学研究費補助金研究成果報告書、奈良県立橿原考古学研究所
- 楠瀬慶太 2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—」『九州考古学』82、21-43頁
- 周藤賢治・小山内康人 2002『岩石学概論・上 記載岩石学—岩石学のための情報収集マニュアル—』共立出版
- 鈴木淑夫 2005『岩石学辞典』朝倉書店
- 田淵実夫 1975『石垣』ものと人間の文化史15、法政大学出版局
- 土田充義 1969「九州大学農学部創立期の建築」『日本建築学会中国・九州支部研究報告1』日本建築学会中国・九州支部、165-168頁
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大学
- 中山平次郎 1984 [1913]「箱崎の石塁」『古代の博多』九州大学出版会 [『福岡日日新聞』連載論文] 213-238頁
- 文化庁文化財部記念物課監修 2015『石垣整備のてびき』同成社
- 水野信太郎 2013『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局

IV 分析と考察

1. 石積み遺構構築石材の岩石学的分析

足立 達朗・田尻 義了

はじめに

遺構を構築する石材についての岩石学的な解析は、その岩石が持つ地質学的な背景を明らかにでき、採取地点に関する手がかりを与える。このことは、遺構構築の材料の調達戦略に関する情報を与える。本稿では、HZK1603地点で出土した石積み遺構の構築石材を岩石学的に解析した上で、石材調達を行った可能性が高いと考えられる多々良川流域の露頭で採取した岩石試料との対比を行った。

1. 遺構構築石材資料の岩石記載

HZK1603地点で出土した石積み遺構の構築石材は、肉眼観察に基づくと、礫岩（構成鉱物・岩片の最大粒径が15mm程度の中礫～細礫礫岩）、円磨度された粒子を多く含む砂岩、円磨度が低く角のある粒子を含む砂岩から主に構成される。このうち、遺構の構造を保持したまま採取できる石材14資料を採取した。採取した地点と資料の写真を図1に示す。以下に資料ごとの記載を記す。各資料の顕微鏡写真は図2に示した。円磨度はKrumbein（1941）の円磨度印象図に基づいた。一部の鉱物は九州大学大学院比較社会文化研究院設置の顕微ラマン分光器（日本分光製・NRS-3000）を用いて同定した。また、礫岩、砂岩についてはポイントカウント法によるモード分析によって、岩片、長石片、石英片、基質の割合から粒子組成を求め、それに基づいてOkada（1971）の区分法により岩石名を決定した。結果を表1に示した。

（1）岩石記載

資料1 最大径4mm程度、全体として1.5mm以下の岩片・鉱物片を含む礫質砂岩（石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。通常の砂岩と比較して、2mmより径の大きな細礫が多く認められる。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩と考えられる円磨された細礫と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなり、わずかに沸石からなるセメントが粒間を充填しているのが認められる。

資料2 直径0.5mm以下の岩片・鉱物片を含む砂岩（長石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。針状、長柱状の斜長石を含む火山岩と考えられる円磨された岩片と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

資料3 直径0.7mm以下の岩片・鉱物片を含む砂岩（長石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩と考えられる円磨された岩片と、自形面を保持するがやや角の取れた形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

資料4 直径0.7mm以下の岩片・鉱物片を含む砂岩（石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩と考えられる円磨された岩片と、自形面を保持しているがやや角の取れた形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

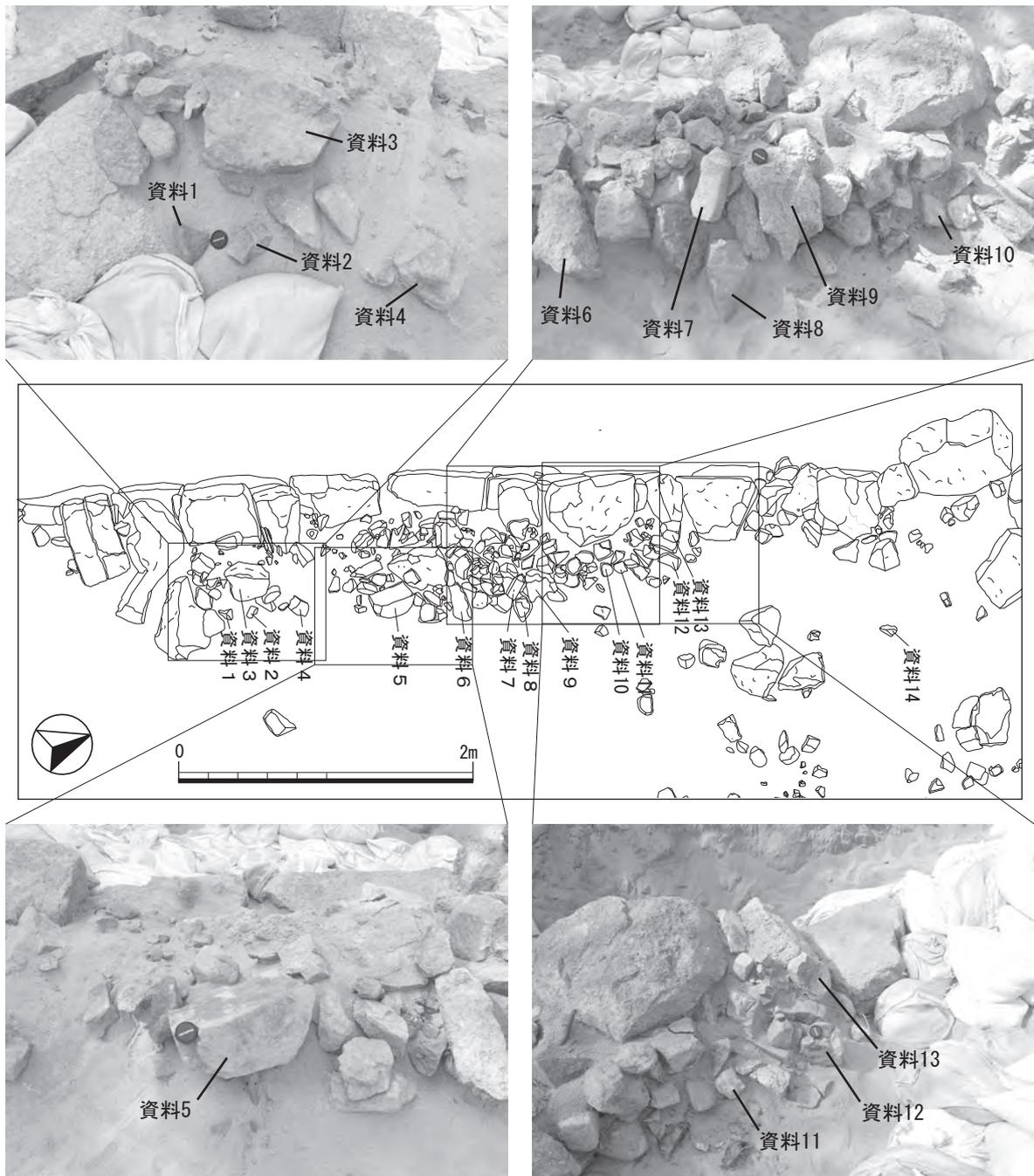


図1 分析対象とした石積み遺構構築石材資料の産状

る。沸石からなるセメントが粒間を充填しているのが認められる。

資料5 直径0.8mm以下の岩片・鉱物片を含む砂岩（石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩と考えられる円磨された岩片と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

資料6 最大径12mm程度、全体として4mm以下の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や、細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。

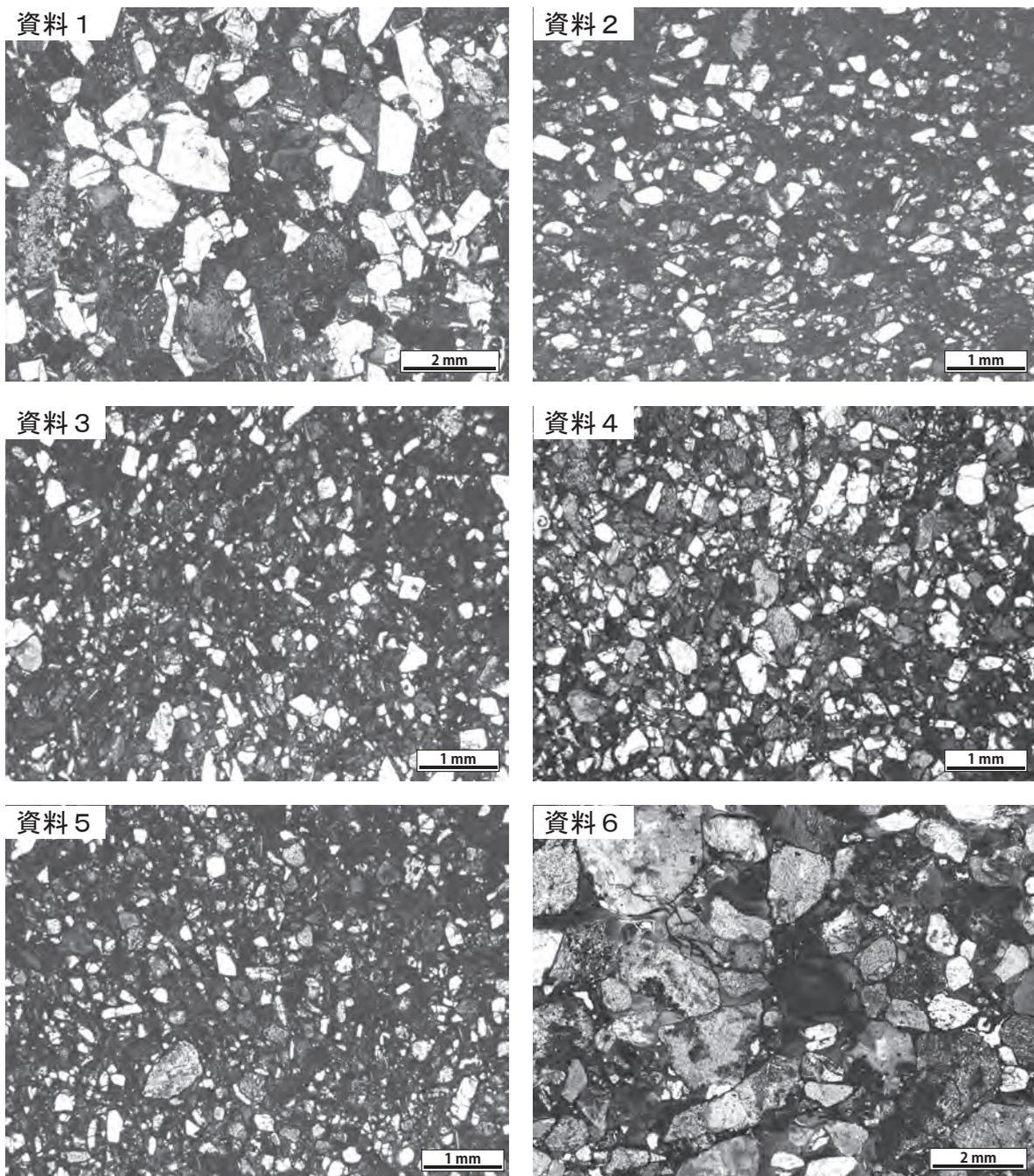


図2 石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真

明白色を呈し、角ばった形状を示すものが、斜長石や石英などの鉱物片であり、丸みを帯び暗色～灰色を呈するものが岩片である。それらの粒間を充填するのが基質である。

石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

資料7 最大径12mm程度、全体として3mm以下の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫と、円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。

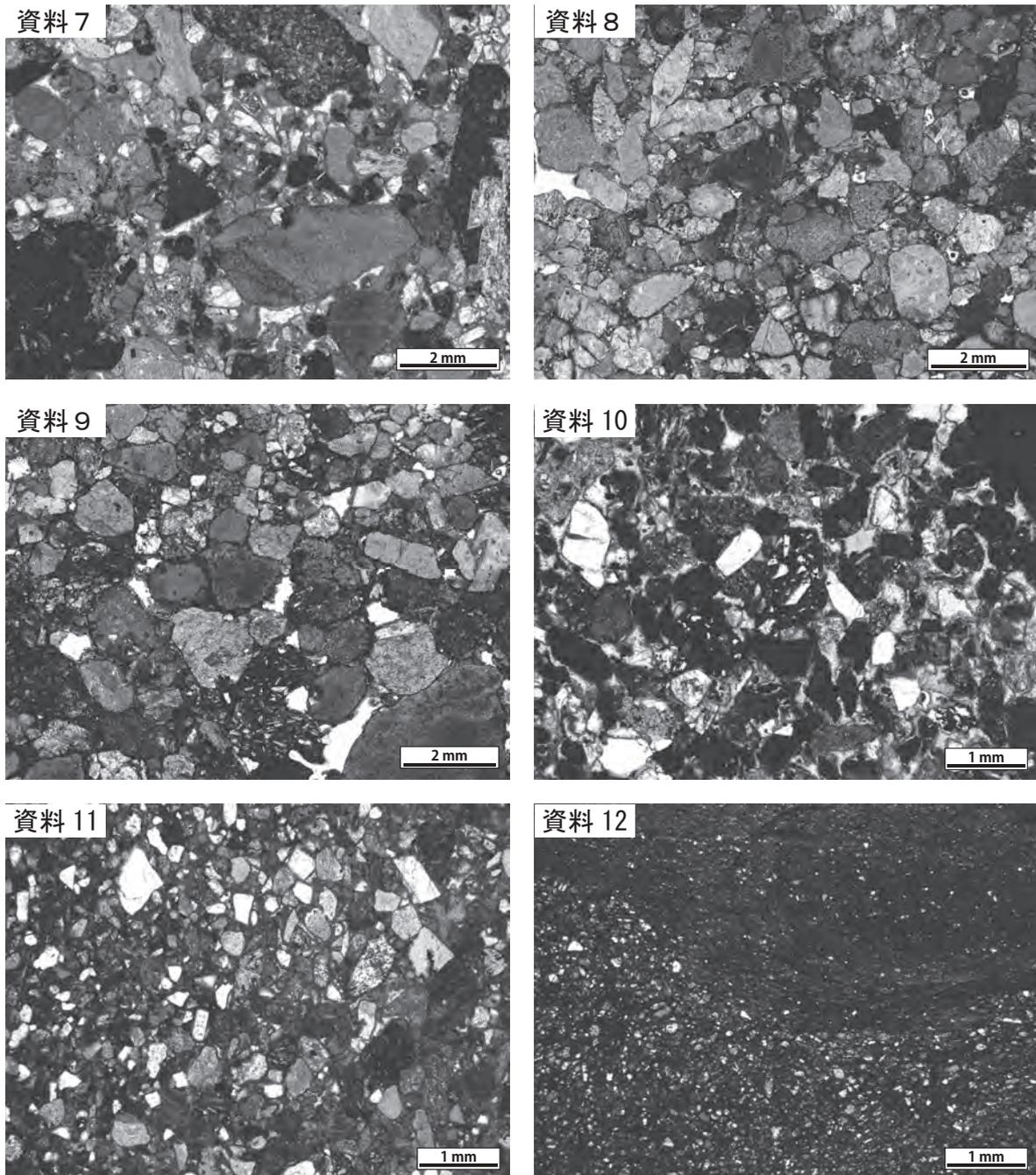


図2 続き (石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真)

資料8 最大径6mm程度、全体として2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

資料9 最大径15mm程度、全体として5mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含むが、これらは変質が進んだ粒子が多い。石英片は微量である。

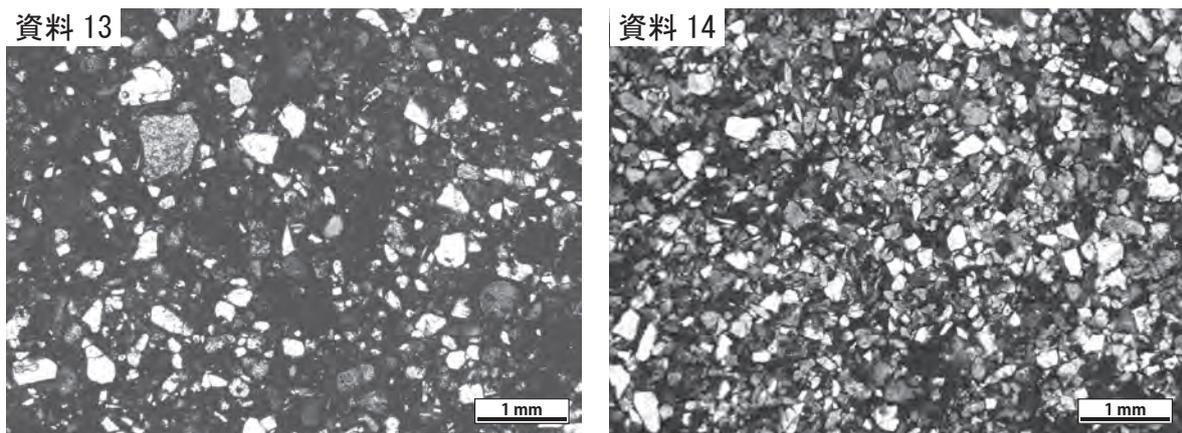


図2 続き (石積み遺構構築石材の岩石薄片を用いた顕微鏡写真)

表1 分析対象資料・試料の岩石名と粒子組成

資料番号	岩石名	岩片	長石	石英	基質
資料1	礫質砂岩 (石質ワッケ)	32%	29%	1%	39%
資料2	砂岩 (長石質ワッケ)	20%	25%	1%	55%
資料3	砂岩 (長石質ワッケ)	15%	26%	1%	59%
資料4	砂岩 (石質ワッケ)	28%	23%	1%	49%
資料5	砂岩 (石質ワッケ)	21%	19%	2%	59%
資料6	礫岩	74%	3%	1%	24%
資料7	礫岩	63%	10%	1%	25%
資料8	礫岩	66%	12%	1%	22%
資料9	礫岩	67%	9%	1%	24%
資料10	礫岩	43%	12%	2%	44%
資料11	礫岩	29%	10%	2%	61%
資料12	泥岩	-	-	-	-
資料13	砂岩 (長石質ワッケ)	9%	20%	1%	71%
資料14	砂岩 (長石質ワッケ)	17%	28%	11%	45%
露頭試料1	砂岩 (石質ワッケ)	58%	6%	0%	35%
露頭試料2	礫岩	45%	14%	3%	38%
露頭試料3A	砂質泥岩	18%	4%	1%	78%
露頭試料3B	礫岩	47%	21%	1%	32%
露頭試料4	礫岩	66%	12%	1%	22%
露頭試料5A	礫岩	83%	1%	0%	17%
露頭試料5B	砂岩 (石質ワッケ)	29%	27%	1%	43%
露頭試料6	礫岩	71%	3%	2%	25%
露頭試料7A	礫岩	77%	2%	0%	22%
露頭試料7B	礫岩	68%	11%	1%	21%
露頭試料7C	礫岩	75%	3%	0%	22%
露頭試料8	砂岩 (長石質ワッケ)	19%	26%	26%	30%

基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

資料10 最大径15mm程度、全体として3mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片は斜長石と石英であり、これらは角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。一部のセメントには、石英の内側にbukovskyite ($\text{Fe}_2(\text{AsO}_4)(\text{SO}_4)(\text{OH}) \cdot 7\text{H}_2\text{O}$) が認められる場合がある。

資料11 最大径15mm程度、全体として2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全

体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含むが、一部は角ばった破片状の形状を示す。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。

資料12 極微細な粒子から構成され、暗黄土色を呈する泥岩である。0.1mm程度の鈰物片・岩片を含むレイヤーとほとんど泥質基質から構成されるレイヤーが互層する組織を示す。鈰物片は、円磨され角のとれた斜長石、石英が認められる。岩片は円磨が進み丸みを帯びた形状を示す。これらの岩片は非常に細粒のため、岩石種を判定するのは困難である。

資料13 直径0.6mm以下の岩片・鈰物片を含む砂岩（長石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し円磨された岩片を含む。鈰物片は、角ばった破片状の形状を示す斜長石、石英が認められる。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

資料14 直径0.4mm以下の岩片・鈰物片を含む砂岩（長石質ワッケ）である。全体として円磨度は低く、淘汰は比較的良好。鈰物片は、角ばった破片状の形状を示す斜長石、石英が認められる。火山岩や堆積岩などに由来し、やや円磨された岩片を含む。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。また粒間に海緑石が認められる。

2. 露頭採取石材試料の産状および岩石記載

遺構構築石材が採取された地点あるいは地層を推定するため、天然産出試料を露頭から採取し、遺構構築石材資料と同様の記載、解析を行った。箱崎キャンパス周辺の地質概要図（唐木田ほか1994）と、試料採取地点を図3に示す。また各試料の顕微鏡写真は図4に示し、モード分析の結果は表1に示した。

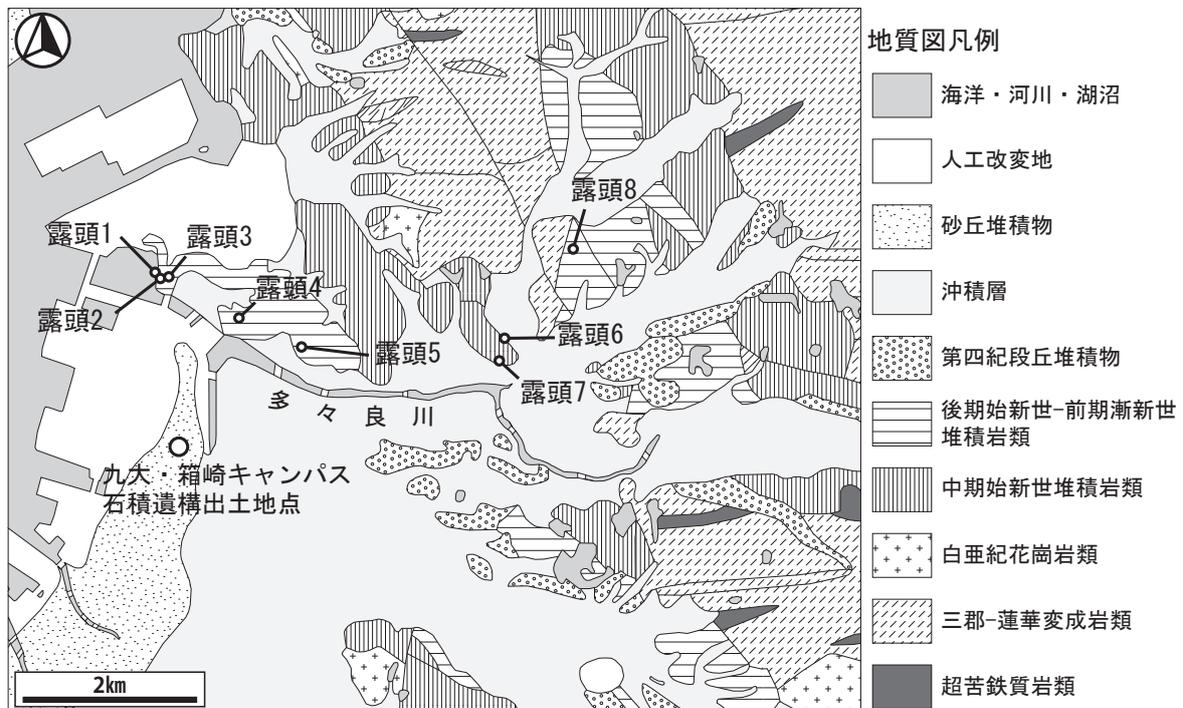


図3 箱崎キャンパス周辺の地質概要 箱崎キャンパスおよび天然産出試料採取地点を白丸で記している。

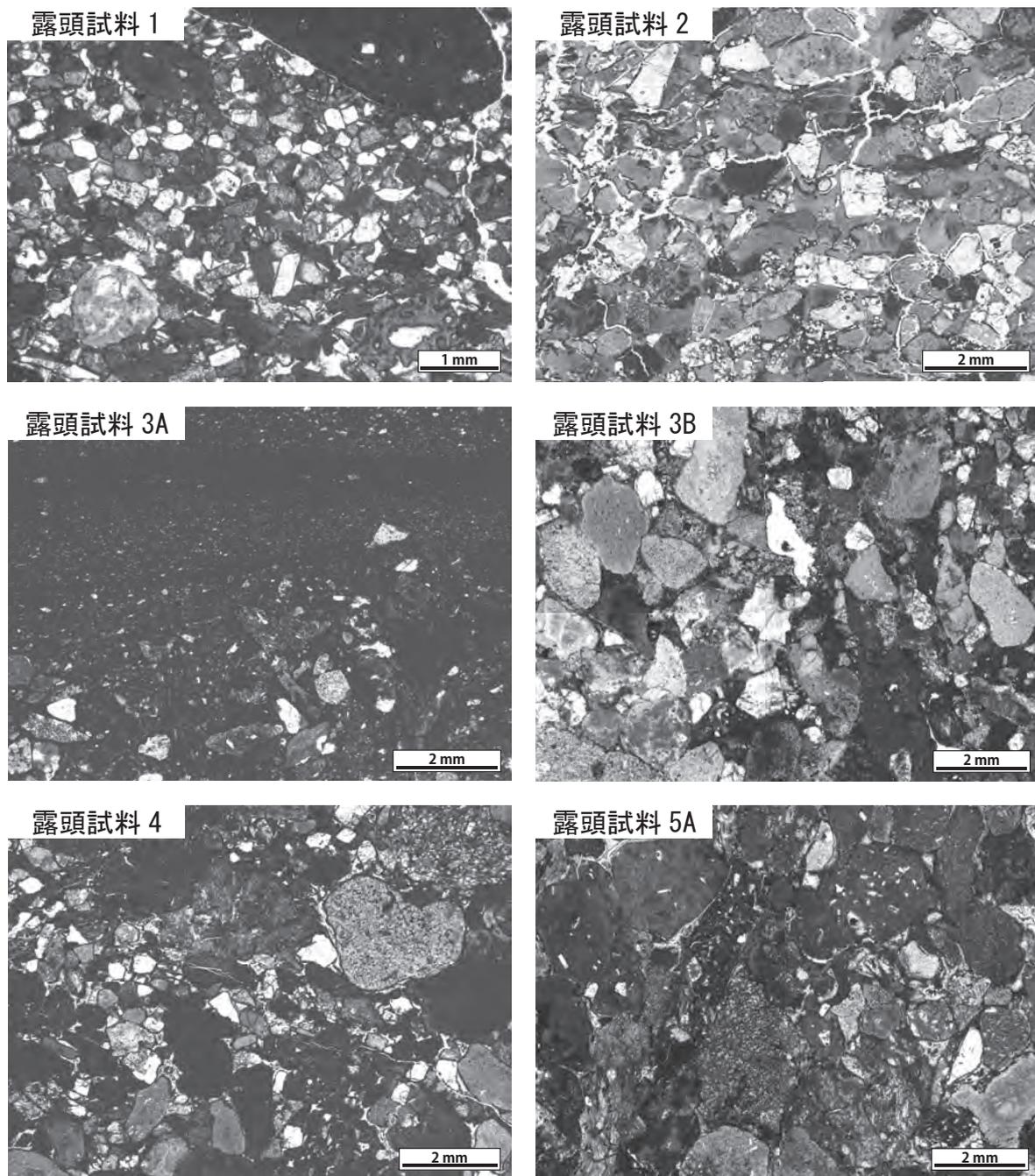


図4 箱崎キャンパス周辺で採取した堆積岩類の岩石薄片を用いた顕微鏡写真

明白色を呈し、角ばった形状を示すものが、斜長石や石英などの鉱物片であり、丸みを帯び暗色～灰色を呈するものが岩片である。それらの粒間を充填するのが基質である。これらの試料は、名島層に相当する堆積岩類である。

(1) 地質概説

箱崎キャンパスは、主に沖積層からなる福岡平野の北東端に位置する。またこの地域は三郡山地の東縁にあたり、三郡-蓮華変成岩類、白亜紀花崗岩類および旧成紀（始新世～漸新世）堆積岩類が分布する（図3：唐木田ほか1994）。このうち旧成紀堆積岩類は、中期始新世の宇美層と、後期始新世～前期漸新世の名島層および須恵層が分布する（長尾1926）。宇美層は全体として礫岩から頁岩に至る上方細粒化サイ

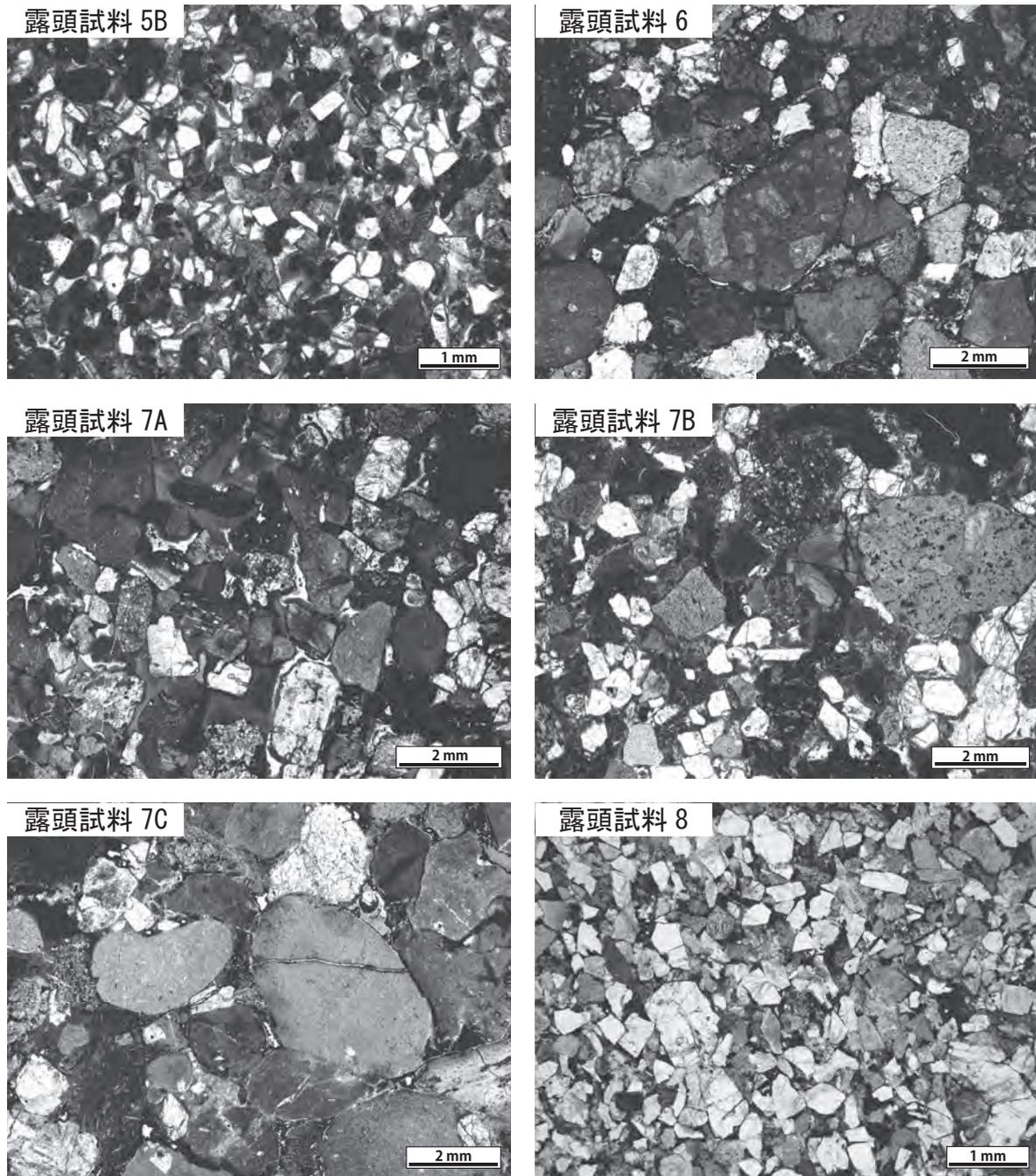


図4 続き (箱崎キャンパス周辺で採取した堆積岩類の岩石薄片を用いた顕微鏡写真)
これらの試料は、露頭試料5Bは名島層、露頭試料6～7Cは宇美層、露頭試料8は須恵層にそれぞれ相当する。

クルの繰り返しからなり、石炭・炭質頁岩が狭在する。礫岩あるいは礫質砂岩から急激にシルト岩に移行する上方細粒化が認められることがある。名島層は宇美層の直上に不整合で覆っていると考えられており、礫岩・砂岩の互層で特徴づけられ、東に向かうに伴い、砂岩・砂質シルト岩の互層に移行する。須恵層は、名島層の上位に位置する新原層のさらに上位に分布しており、単調な岩相で基本的には塊状で粗粒の砂岩で構成される。現在、これらの岩石が分布する地域は住宅地・商業用地で、多くは造成によって消滅してしまっており、露頭を見つけるのが困難であることが多かった。

(2) 産状および岩石記載

露頭試料1 露頭は福岡市東区名島城址麓に分布する礫岩相のさらに下部にあたる、名島層に相当する砂岩層である。岩石は、直径0.3mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩（石質ワッケ）である。2mm程度の細礫も認められる。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。針状あるいは長柱状の斜長石を含む火山岩や細粒鉱物が層状構造を呈する堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。沸石からなるセメントが粒間を充填しているのが認められる。

露頭試料2 露頭は福岡市東区名島神社の参道脇に位置する、名島層に相当する礫岩相であり、直径2mm程度の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

露頭試料3A 露頭は福岡市東区名島神社の参道入り口付近に位置し、名島層に相当するシルト質礫岩および砂岩相であり、この岩石は、直径1～0.3mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩～砂質泥岩である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。明黄土色を呈する極細粒の泥質～シルト質の基質が目立つ。また、火山岩や堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。1mm程度の粒子を多く含むレイヤーと0.3mm程度の粒子を多く含むレイヤーがあり、それぞれは厚さ約10mmで互層する。

露頭試料3B 露頭試料3Aと同露頭であり、この岩石は、最大径6mm程度、全体として2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く自形面を保持した斜長石を含む。石英はわずかである。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

露頭試料4 露頭は福岡市東区名島小学校の南部の斜面に分布する名島層に相当する礫岩相であり、最大径8mm程度、全体として2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く角ばった破片状の形状を示す斜長石を含むが、一部は自形面を保持している。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。沸石からなるセメントが粒間を充填しているのが認められる。

露頭試料5A 露頭は福岡市東区・松崎緑地南方の斜面に位置し、名島層に相当するシルト質の礫岩・砂岩であり、最大径6mm程度、全体として2～3mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片の量が少なく、自形面を保持した斜長石がわずかに認められる。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。一部のセメントには、石英の内側にbukovskiyteが認められる場合がある。

露頭試料5B 露頭試料5Aと同露頭であり、この岩石は、直径1mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩（石質ワッケ）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩と考えられる円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石を含む。石英片は微量である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

露頭試料6 露頭は糟屋郡粕屋町・江辻山の北東麓に位置し、宇美層に相当する礫岩相であり、岩石は最大径12mm程度、全体として2～3mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や堆積岩などに由来する細礫を含む。円磨はあまり進んでおら

ず、角ばった形状を示すものが多い。鉱物片として破片状の斜長石と石英が認められる。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質～シルト質基質からなる。

露頭試料7A 露頭は糟屋郡粕屋町・江辻山登山道脇にあり、宇美層に相当する砂岩・礫岩相であり、この岩石は最大径10mm程度、全体として1～3mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。火山岩や花崗岩類、堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く角ばった破片状の形状を示す斜長石を含むが、一部は自形面を保持している。石英は極わずかである。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。一部のセメントには、石英の内側にbukovskyiteが認められる場合がある。

露頭試料7B 露頭試料7Aと同露頭であり、この岩石は、最大径5mm程度、全体として1～2mm前後の岩片・鉱物片を含む礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。露頭7Aと比較してやや粒径が小さく、鉱物片が多い。火山岩や花崗岩類、堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。円磨度が低く角ばった破片状の形状を示す斜長石を含むが、一部は自形面を保持している。石英は極わずかである。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。粒間を充填するセメントは、中心部に石英が存在し、その周囲を沸石が取り囲む組織を呈する。一部のセメントには、石英の内側にbukovskyiteが認められる場合がある。

露頭試料7C 露頭試料7Aと同露頭であり、この岩石は、最大径10mm程度、全体として5mm前後の岩片から礫岩（細礫礫岩）である。全体として円磨度は中程度で、淘汰は悪い。鉱物片はわずかである。火山岩や花崗岩類、堆積岩などに由来し、それらが円磨された細礫を含む。鉱物片はやや角が取れた斜長石である。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

露頭試料8 露頭は、福岡市東区蒲田・緑のリサイクルセンター付近に分布する須恵層に相当する砂岩相であり、岩石は0.3mm程度の岩片・鉱物片を含む砂岩（長石質ワッケ）である。全体として円磨度は低く、淘汰は比較的良い。火山岩や堆積岩と考えられるやや円磨された岩片と、破片状の形状を示す斜長石と石英を含む。基質部は明褐色を呈する極細粒の泥質基質からなる。

3. 考察

石積み遺構構築石材および露頭採取試料は主に礫岩、円磨度が中程度の粒子を多く含む砂岩、円磨度が低く角のある粒子を含む砂岩、泥岩から構成される。これらの資料の粒子組成を図5に示した。まず、露頭採取試料のうち、名島層で採取された岩石は、礫岩、砂岩、砂質泥岩であり、今回調査した範囲において岩相バリエーションが認められる。特に、同一露頭であっても礫岩と、砂岩や砂質泥岩が認められる（例えば露頭3・5）ことがあり、局所的な岩相変化が著しいこ

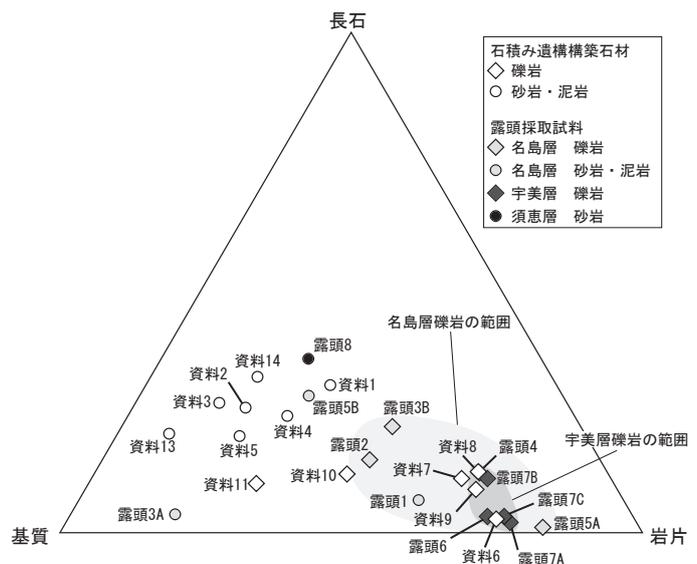


図5 石積み遺構構築石材資料および露頭採取試料の堆積岩類の粒子組成

とがわかる。一方、宇美層では礫岩のみが、須恵層では砂岩のみが認められ、同一露頭内での著しい岩相変化は、今回の調査地点では認められなかった。

次に岩石ごとに見てみると、礫岩は名島層および宇美層で採取可能である。今回分析を行った礫岩は、円磨度が中程度で淘汰が悪く、火山岩を主体とする岩片と斜長石を主体とする鉱物片からなり、シルト質～泥質の基質を持つという特徴を持ち、採取した地層・地点に関わらずおおむね類似した物質構成を示す。しかし、粒子組成についてみてみると、名島層から採取した礫岩は、岩片の割合が45～83%と幅があり、採取地点ごとにバリエーションが大きい。一方、宇美層から採取した礫岩は、岩片の割合が70%程度でまとまっており、他の粒子の割合も互いに類似していて、比較的狭い粒子組成を示す。この宇美層の粒子組成範囲内にプロットされる名島層の礫岩（露頭試料4・5A）も存在する。つまり粒子組成範囲に基づけば、名島層の礫岩の粒子組成範囲に宇美層の礫岩のそれが重なるともいえ、明確に区別するのは困難である場合がある。石積み遺構構築石材資料の礫岩のうち資料6～9は、宇美層と名島層の礫岩粒子組成が重なる領域とおおむね一致する。資料10・11はその粒子組成領域からやや外れるが、資料10は、名島層の露頭試料2と近い粒子組成を示す。

砂岩は名島層と須恵層から採取可能である。名島層の砂岩は、円磨度が中程度で、淘汰が悪く、火山岩を主体とする岩片と斜長石を主体とする鉱物片からなり、シルト質～泥質の基質を持つという特徴を持つ。粒子組成を見てみると、広域にプロットされ、バリエーションが大きいことがわかる。一方で須恵層の砂岩は、円磨度が低く、淘汰は比較的良好、鉱物片が多く含まれ基質が目立たないという特徴を持つ。石積み遺構構築石材の砂岩のうち資料1～5・13は、円磨度が中程度で、淘汰が悪く、火山岩を主体とする岩片と斜長石を主体とする鉱物片からなり、シルト質～泥質の基質を持つという特徴を持つことから、名島層の砂岩と同様の特徴を持つ。粒子組成にはバリエーションが認められるが、名島層の砂岩のバリエーションと類似しているといえる。資料14は、円磨度が低く、淘汰は比較的良好な粒子から構成され、粒子組成の点からも須恵層の砂岩と類似点が認められる。ただし資料14には海緑石が認められ、シルト質から泥質の基質で構成される一方で、須恵層の砂岩にはそれらが認められないという不一致もある。

以上のことを考慮すると、宇美層と須恵層では、局所的な岩相や粒子組成のバリエーションが乏しい一方、名島層では、それらが大きいことが指摘できる。また、名島層の岩石が示す記載岩石学的特徴、岩相・粒子組成のバリエーションは、石積み遺構構築石材資料のそれとおおむね一致するといえる。つまり、石積み遺構構築石材の多くは、名島層で採取可能であると考えられる。現在、名島層が分布する地域では露頭が限られており、また名島層の局所的な岩相バリエーションの多様性のため、今回の分析からでは、岩石がある特定の露頭から採取されているのかについて議論するのは難しい。また、資料14の砂岩は、今回分析した名島層の砂岩とは記載岩石学的特徴が一致しなかった。このことは、名島層以外に由来する岩石が一部使用されている可能性を示唆し、採取地点が特定の露頭だけではなく、河川流域の転石なども採取して使用した可能性があるかもしれない。

文献

- 唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々石一豊 1994『福岡地域の地質 地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所
- Krumbein, W.C. 1941 Measurement and geologic significance of shape and roundness of sedimentary particles. *Journal of Sedimentary Petrology*, 11: 64-72
- 長尾 巧 1926「九州古第三紀層の層序（1）」『地質学雑誌』38：115-130頁
- Okada, H. 1971 Classification of sandstones: analysis and proposal, *Journal of Geology*, 79: 509-525

2. 石積み遺構構築石材の調達について

—裏込石の重量分析から—

森 貴教

はじめに

平成28（2016）年8月から10月に調査した、箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点第1次調査（HZK1603地点）では、石積み遺構の周辺からこぶし大～人頭大の石片が多量に出土した。これらの石片は原位置を保ってはいないが、出土状況から石積み遺構に伴う裏込石と考えられる。

本章ではこれらの裏込石の重量を計測し、石積みの構築のために本地点に調達された石材の総重量と重量分布を明らかにする。そして、岩石の種類による石片の重量の差異を統計的に検討し、石積みの構築に伴う石材調達の在り方について考察する。

1. 資料と方法

（1）分析資料

分析に用いたのはHZK1603地点から出土した石片1,422点である。これらの石片は手作業による遺構検出・掘り下げ時に石積み遺構周辺の砂層中から出土したもので、原位置を保つものではない。石片は一辺が5 cm 大以上のものを採集し、碎片は分析対象から除外した。

（2）分析方法

重量計を用いて、岩石の種類ごとに石片の重量を1点ずつ計測した。重量計はエー・アンド・デイ株式会社製FG-30KAMを用いた（計量単位0.005kg）。石片は筆者による肉眼観察により礫岩、砂岩、その他の3種類に石材を大別した¹⁾。石材の点数はそれぞれ、礫岩499点（35.1%）、砂岩879点（61.8%）、その他44点（3.1%）である。

2. 分析結果

（1）基礎統計量と重量分布

採集した裏込石の総重量は757.375kgであった。石材別にみると、礫岩の石片は363.150kg（47.9wt%）、砂岩の石片は367.875kg（48.6wt%）、その他の石材は26.350kg（3.5wt%）であった。礫岩の石片が出土点数に比して重量比が大きい。

HZK1603地点で検出された石積み遺構は全長16.8mであるため、1 mあたり平均45.1kgの石片が出土した計算になる。本来の石積みの高さは不明であるが、仮に現状の高さの倍（6段程度）存在し同様に石片が用いられたと仮定すれば、1 mあたり平均90.2kgの裏込石が調達されたといえる。また、この石積み遺構が元寇防塁であるとすれば、薩摩国が担当した箱崎地区の防塁の総延長は約3.3kmであることから、裏込石だけで約300 t 以上の石材が構築に際して運搬・調達されたと推計される。

ただし、石積みの内部構造は各地区の工事主体（担当者）により異なることが指摘されている（柳田・

西園2001、大塚2013など)。また、箱崎地区のなかでも構築方法や構造の差異があることも考えられる。そのため、今回の調査区で得られたデータのみから敷衍して地区全体の裏込石の総重量を算出するのは早計かもしれないが、可能性として指摘しておく。

次に礫岩の石片の重量ヒストグラムを図1に示す。0.2～0.4kgに度数分布の最頻値がある。平均重量は0.728kg、標準偏差は1.116kgである。0.4kg以上も一定量存在するため上方（重量の大きい側）の裾野が広く、標準偏差は砂岩に比べ大きい。

砂岩の石片の重量ヒストグラムを図2に示す。礫岩と同様、0.2～0.4kgに度数分布の最頻値がある。平均重量は0.449kg、標準偏差は0.469kgであり、礫岩に比べ0.6kg以下に度数が集中している。

(2) 石材による重量差の統計的検定

礫岩と砂岩という岩石の種類によって石片の平均重量に差異があるかについて、統計的検定²⁾を行う。用いたのは2つの母平均の差のz検定（対応のないデータ）である。

ここで、帰無仮説 H_0 は $\mu_1 = \mu_2$ 、すなわち礫岩と砂岩の石片の平均重量に差がない、というもので対立仮説 H_1 は $\mu_1 \neq \mu_2$ 、すなわち礫岩と砂岩の石片の平均重量に差がある、というものである。

基礎統計量を用いて検定統計量 T を算出すると、

$$T = \frac{\bar{x}_1 - \bar{x}_2}{\sqrt{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}}} = \frac{0.728 - 0.449}{\sqrt{\frac{1.116^2}{499} + \frac{0.469^2}{819}}} = 5.298$$

棄却域5%で両側検定を行うと、 $z(\alpha/2) = z(0.025) = 1.96$ 。 $T = 5.298 > 1.96$ なので、帰無仮説 H_0 は棄却される。したがって、有意水準5%で、礫岩・砂岩それぞれの石片の平均重量に差があるといえる。

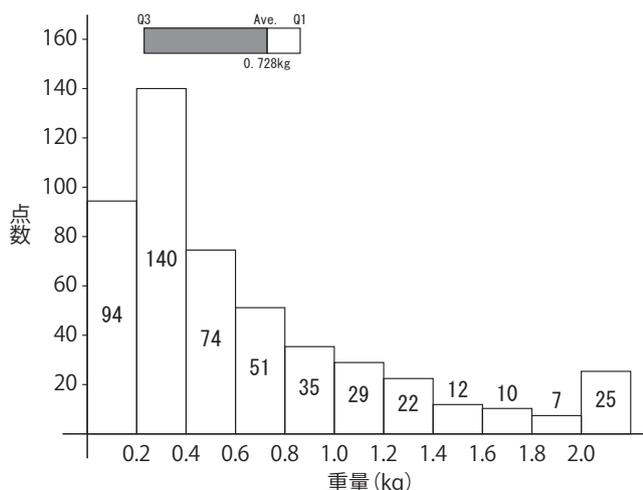


図1 礫岩の石片の重量ヒストグラム (N=499)

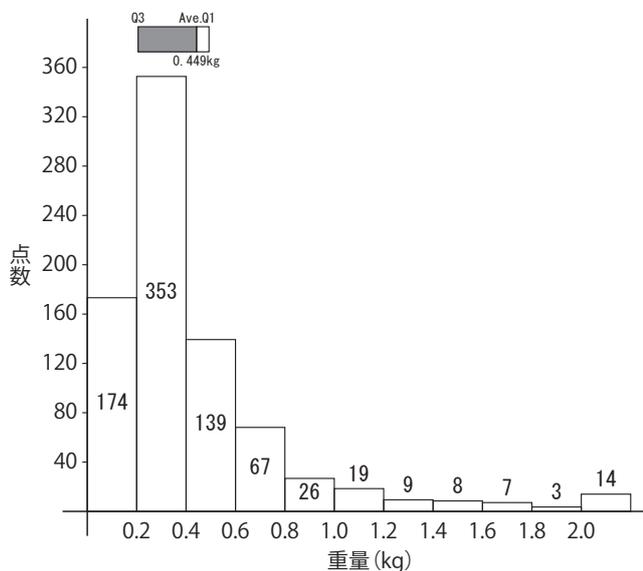


図2 砂岩の石片の重量ヒストグラム (N=819)

3. 考 察

重量分析の結果、礫岩と砂岩で石片の度数分布に傾向の差異があり、平均重量において統計的に有意差があることが明らかになった。このことは何を示しているのだろうか。

あらためて度数分布をみると、礫岩・砂岩ともに0.2～0.4kgのものが多くという点は共通しているものの、上方の裾野の広がり異なっている。すなわち、礫岩の石片は0.4kg以上のものが一定量存在するためなだらかな度数分布を示す一方、砂岩の石片は0.6kg以上のものが少ないため相対的に0.2～0.4kgに度数が集中していることが分かる。

ここで石積み遺構の構築石材を確認してみると、博多湾側に面を揃える大型石材42点のうち、礫岩のものは39点存在し全体の92.9%を占める。したがって石積みには基本的に礫岩が用いられたと考えられる。

裏込石のうち礫岩の石片には、石積みを構築する際に現地での調整により生じた破片が含まれている可能性がある。礫岩の重量の度数分布で上方の裾野が広いことは、こうした調整で生じた破片や石積みの構築に不向きな大型の石片も裏込石として利用したためであったと解釈できる。一方、砂岩の石片は0.6kg以下に集中しており、標準偏差も小さい点から、当初から裏込石として用いることを目的に入手されたことが示唆される。

以上を総合すると礫岩と砂岩で調達方法や目的に差異があったと考えられる。礫岩は調整時に生じた破片を含む二次的な石材利用が主である一方、砂岩は裏込石としての目的的な石材利用であった可能性が指摘できる。

おわりに

本章では裏込石の重量について分析を行い、岩石の種類による重量の差異を明らかにした。そして、石材利用の在り方が岩石によって異なっていることを指摘した。

なお、石材の調達を詳細に検討するためには、起点といえる石材産出地が具体的に明らかにされる必要がある。その基礎的な情報となる、石積み遺構構築石材の記載岩石学的分析についてはIV-1章の足立・田尻論文を参照していただきたい。また、石積み遺構構築石材の採石・加工方法などについては、石片に残存した礫面（自然面）の有無や剝離痕などの検討を含め、今後の課題としたい。

注

- 1) 碎屑物の粒径が2mm以上のものが礫で、礫からなる岩石を礫岩とよぶ。また、粒径が1/16mm～2mmのものが砂で、砂からなる岩石を砂岩とよぶ(周藤・小山内2002参照)。礫岩は礫の粒径(礫径)により、巨礫岩・大礫岩・中礫岩・細礫岩に細分される。裏込石にみられる礫岩は中礫岩(碎屑物の粒径が4mm～64mmの礫岩)が多い。
- 2) 統計的検定の方法について以下の文献を参照した(上田2009、栗原2011)。

文献

- 上田拓治 2009 『44の例題で学ぶ統計的検定と推定の解き方』 オーム社
 大塚紀宜 2013 「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について一」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』 新修福岡市史一特別編、福岡市、302-317頁
 栗原伸一 2011 『入門 統計学一検定から多変量解析・実見計画法まで一』 オーム社
 周藤賢治・小山内康人 2002 『岩石学概論・上 記載岩石学一岩石学のための情報収集マニュアル一』 共立出版株式会社
 柳田純孝・西園禮三 2001 『元寇と博多一写真で読む蒙古襲来一』 西日本新聞社

3. 九州大学箱崎キャンパス地区出土遺物の特徴 —2016年度調査—

谷 直子

はじめに

九州大学箱崎キャンパス地区HZK1601・1603・1604地点からは、土器・陶磁器をはじめ多くの遺物が出土した。九州大学箱崎キャンパス地区の調査は継続中であり、遺物についても今後新たな知見が加わっていくと予想されるが、その際の理解の一助とするためにも、これらの地点で出土した遺物の特徴について、いくつかの所見を述べたい。

1. 遺物の時期と各層の年代観

本報告中の遺物について基本的な報告は本文中で述べたが、各調査地点の出土遺物からみた各層の年代を明らかにすることは、遺跡の形成や、今まで調査が少なく明らかになっていない箱崎遺跡北部の様相を解明するうえで重要と考える。

ここでは、出土した陶磁器を中心に、土師器や瓦器なども参考にしながら、各地区、年代観を述べる。貿易陶磁については、『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』（宮崎編2000）、土師器の皿・坏に関しては「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—」（楠瀬2007）、そのほかの遺物については『概説 中世の土器・陶磁器』（中世土器研究会編1995）を中心に、各報告書についても適宜参考とする。

（1）HZK1601地点の各層の遺物と時期（図1）

HZK1601地点の遺物として時期を特徴付けられるものには、龍泉窯系青磁や同安窯系青磁、白磁といった貿易陶磁を中心に、土師器や瓦質土器などがある。いずれも完形での出土ではなく、小破片資料も多いが、時期比定に資するものから検討を行う。

45層出土の遺物 45層出土の遺物には、ヘラ切りで板状圧痕がのこる土師器の坏と、須恵器の甕の破片、移動式カマドの庇部分がある。遺物が少なく時期の確定は困難であるが、12世紀以前の時期と考えられる。

SX01出土の遺物 SX01出土の遺物には土師器の甕と須恵器の短頸壺がある。やはり遺物が少なく時期を確定するのは困難であるが、土師器の甕の形態から12世紀以前であろう。須恵器の短頸壺は古代に遡るかもしれない。

SD01埋土③出土の遺物 SD01埋土③からは、糸切り底の土師皿・坏、土師器の甕・鍋・播鉢・捏ね鉢、瓦器の方形の火鉢、須恵器の坏蓋・鉢・甕、龍泉窯系青磁の小碗・碗・皿・坏・筒型容器・同安窯系青磁の碗・白磁の皿・小碗・碗、象嵌青磁の碗、天目碗、景德鎮窯の赤絵碗、陶器壺、瀬戸焼の卸皿、丸瓦、瓦玉、砥石、石球、土錘、滑石製石錘が出土した。

青磁は、大宰府編年による龍泉窯系青磁碗のⅡ-b類、同安窯系青磁碗のⅠ-1a類・Ⅰ-1b類が出土しており、12世紀後半から13世紀初頭の所産と考えられる。象嵌青磁は14世紀から15世紀頃であろう。瓦器の方形火鉢は、15世紀中頃から後半のものと考えられる。景德鎮の赤絵碗は15世紀中頃から16世紀の所

産であろう。よって、SD01埋土③の時期は12世紀後半から15世紀中頃を中心とすると考えられる。

SD01埋土②出土の遺物 SD01埋土③からは、糸切り底の土師皿・坏・土師器の甕・鍋、瓦器の碗・播鉢・捏ね鉢、龍泉窯系青磁の小碗・碗・白磁の皿・碗、中国陶器の鉢・壺、石球、土錘が出土した。

青磁は、大宰府編年による龍泉窯系青磁碗のⅠ-1類、Ⅰ-2類、同安窯系青磁碗のⅠ-1b類が出土しており、白磁碗はⅧ類と考えられる。いずれも、他は12世紀後半から13世紀前半の所産である。陶器の鉢も大宰府編年によるⅠ-1b類と考えられ、12世紀後半から13世紀前半とされる。よってSD01埋土②は12世紀後半から13世紀前半を中心とした層とみられる。

SD01埋土①出土の遺物 SD01埋土①からは糸切り底の土師皿・坏・鍋・瓦器の碗・陶器の播鉢・龍泉窯系青磁の碗・皿・同安窯系青磁の碗・白磁碗・不明土製品が出土した。

青磁は、大宰府編年による龍泉窯系青磁碗のⅠ類、同安窯系青磁碗のⅠ-1b類が出土している。白磁は扁平な玉縁口縁の碗で、胴部の立ち上がりがやや直線的な形状である。よって、SD01埋土①は11世紀の末ごろから12世紀の前半におさまると考えられる。

箱崎砂層中出土の遺物 箱崎砂層中からは、糸切り底の土師器の皿、土師器の鍋・播鉢、瓦質土器の甕・捏ね鉢、白磁碗、土錘が出土した。細かい時期を確定できるものはあまりないが、出土した土師器は、楠瀬の分類によるⅢa期からⅣa期にかけてのものであると考えられることから、箱崎砂層中の遺物は、13世紀頃と判断する。

(2) HZK1603地点の各層の遺物と時期 (図2)

HZK1603地点の遺物は多くないが、石積み遺構が検出された地点であり、その年代観についても触れておく必要がある。

HZK1603地点は石積み遺構(SF01)の残存状況が良かった地点である。西地区SF01の石材no.11直下から出土した遺物は図2-1の土師皿である。糸切り底で内外面ともナデである。口径8.2cm、底径7.4cm、器高1.2cmである。形態的には楠瀬氏の分類による皿BⅠ3が、糸切り底の皿で、底部は平底、口径が大きく器高が低い、体部に段を持たないという特徴で、口径8.0～8.5cm、器高1.5cm前後とされており、類似すると考える。時期は14世紀前半より新しくなるであろう。

西地区SF01周辺の砂層はSF01より下位の層であるが、糸切り底の土師皿、坏、瓦器碗、土師器の播鉢・鍋・甕、龍泉窯系青磁碗、白磁碗、青白磁の瓶肩部が出土した。青磁は大宰府編年による龍泉窯系青磁碗のⅠ類、Ⅱ-b類が出土しており、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。

西地区SF01背面盛土の砂層中の遺物は糸切り底の土師皿2点である。時期は確定しにくいだが、楠瀬氏の分類によると、糸切り底の土師皿の口径が6.5cm前後になるのは、Ⅵ期であり、14世紀代に位置づけられている。

西地区北側拡張区の石材no.44・45付近の砂層からは、土師器の甕・鉢、龍泉窯系青磁碗、玉縁口縁の白磁碗は出土している。玉縁口縁の白磁碗は大宰府編年による白磁碗Ⅳ類である。遺物が少なく、時期の確定は難しいが、おおよそ12世紀と考えられる。

(3) HZK1604地点の各層の遺物と時期 (図3)

HZK1604地点の遺物もそれほど多くないが、層序ごとに傾向を示す。

西地区SF03石積み背面盛土中出土の遺物には龍泉窯系青磁の小碗と土師皿がある。龍泉窯系青磁の小碗は、大宰府編年による龍泉窯系青磁碗のⅠ類で、土師皿も摩滅しているが、糸切り底の可能性が高い。

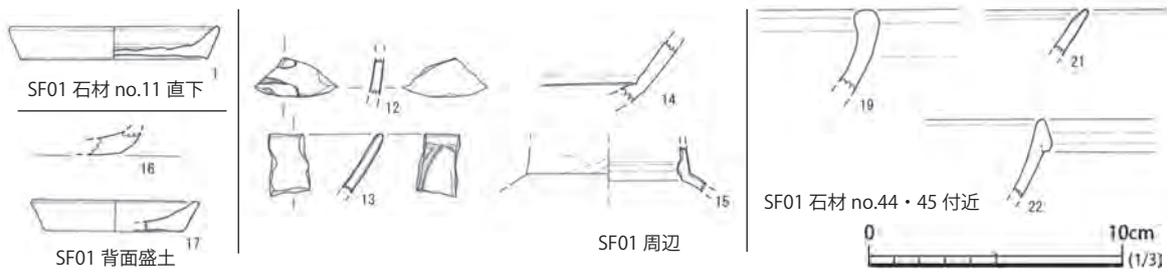


図2 HZK1603地点の年代を示す主な遺物

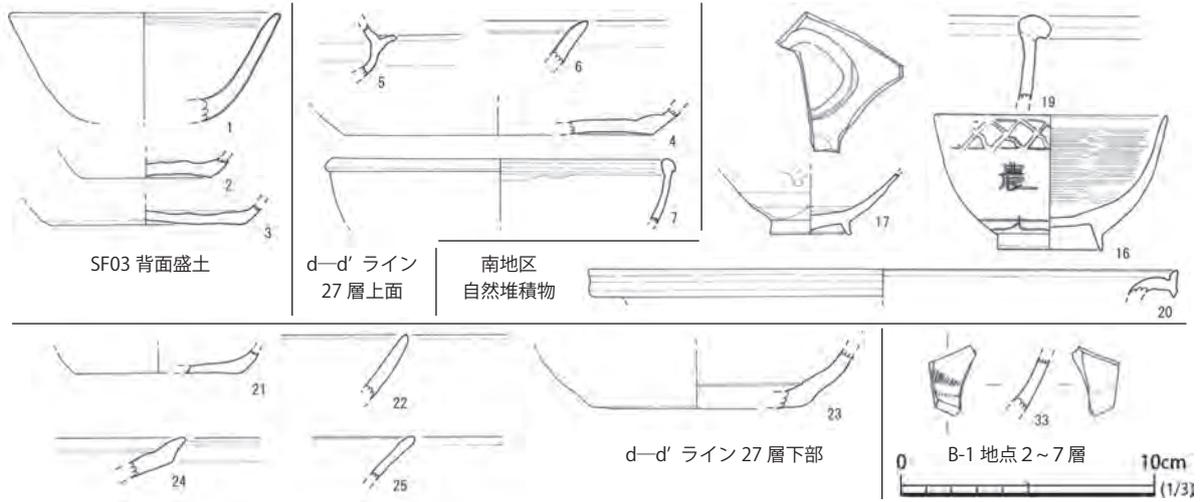


図3 HZK1604地点の年代を示す主な遺物

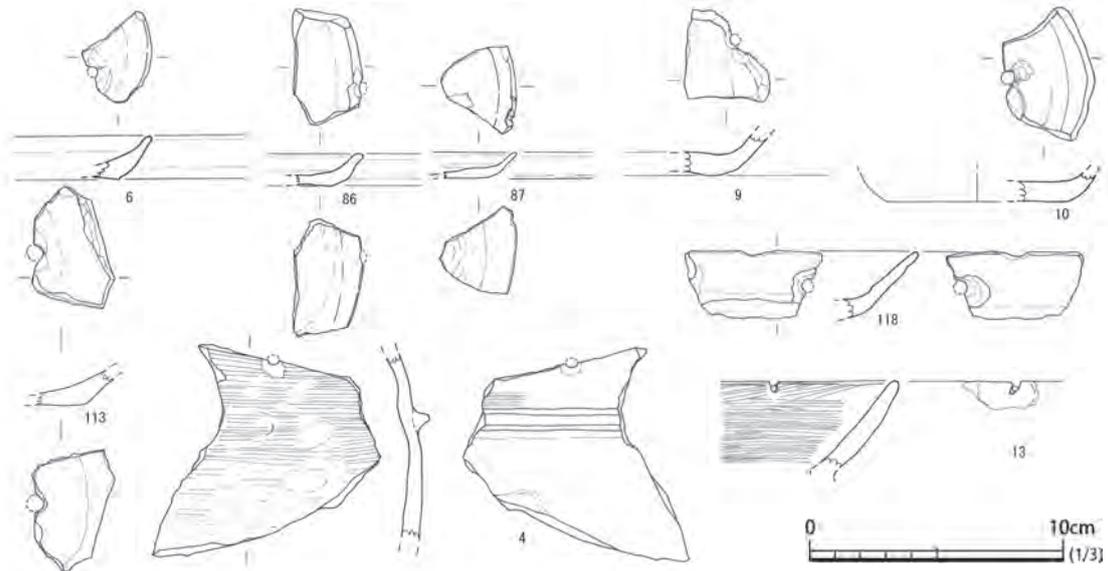


図4 HZK1601地点出土の穿孔のある土師器

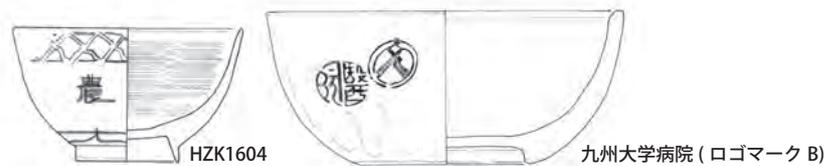


図5 HZK1604地点出土食器と九州大学病院出土食器

よって時期は、12世紀後半から13世紀前半であろう。

西地区d—d'ライン27層（自然堆積物）の上面出土の遺物は、土師器の坏、須恵器の坏、龍泉窯系青磁碗、中国陶器鉢である。須恵器の坏は6世紀後半であるが、他はすべて中世の遺物で、龍泉窯系青磁碗、中国陶器鉢の時期から、12世紀後半から13世紀前半と判断した。

南地区自然堆積物中出土の遺物は、土師器の坏、鉢、須恵器の坏底部、長頸壺の口縁部、白磁碗、焼き締め陶器の鉢、壺、常滑焼の大甕口縁部、九州大学農学部の湯のみ茶碗などがある。

いろいろな時期の資料が混在している層で、層の時期は確定できないが、白磁碗は、見込み部分の釉を環状に掻き取るもので、大宰府編年による白磁のⅧ類に相当する。12世紀中頃から後半の所産である。常滑焼の壺は13世紀から14世紀と考えられる。

西地区d—d'ライン27層（自然堆積物）の上面出土の遺物は、糸切り底の土師皿・坏、須恵器の甕口縁部、龍泉窯系青磁碗の口縁部がある。いずれも小片であるが、12世紀後半から13世紀前半の遺物である。

南地区B-1地点2～7層出土の遺物には、土師皿・坏、瓦器碗、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、中国陶器の鉢がある。同安窯系青磁碗も、櫛状施文具による点描文が見られ、大宰府編年による同安窯系青磁碗1類と判断される。よってこの層は12世紀後半から13世紀初頭の所産と考えられる。

以上のように、3地点の各層の時期をみると、九州大学箱崎キャンパス地区では、12世紀後半から13世紀前半の層を中心に、12世紀以前の層、13世紀後半から15世紀までの層が存在する。筥崎宮の発展に伴い、2度の元寇をはさんでも、付近で交易や生活全般が行われていたと推測されるが、その後、生活の痕跡は認められない。次に人々の生活の痕跡が明らかとなるのは、九州帝国大学の開学以降のことである。

2. 穿孔のある土師器に関して

HZK1601地点の各層から、穿孔のある土器が出土している。器種は土師器の皿4点・坏3点・鍋1点・甕1点である。穿孔される部位は口縁部4点、胴部2点・底部中央3点に分けられる。いずれも焼成後穿孔である。孔の直径は3～5mmであり、口縁部に穿孔されたものの多くは、途中で失敗したようである（図4）。

口縁部に穿孔があるものは皿2点・坏1点・鍋1点である。底部中央に穿孔があるのは皿2点・坏1点、胴部に穿孔があるのは坏1点・甕1点である。

土師器の皿・坏が多く、おおむね口縁部か底部中央に穿孔するという特徴があるが、穿孔後、継続使用されたかどうか分からない。孔部分に紐ズレなどがなく、穿孔部分全体も摩滅していないことから、紐などを通して使用したとは考えにくい。

箱崎73次調査の報告でも、穿孔土器が多く報告されている。いずれも糸切り底の土師器の皿や坏に穿孔されている。穿孔部位は口縁部と底部中央がほとんどである。口縁部の穿孔は、作業途中に破損して、実際には孔を使用できなかった可能性が高い。時期も12世紀代との報告があり、HZK1601地点の時期とはほぼ併行する。報告では、柵列遺構や穿孔された土師器、墨書土器、硯などの出土遺物から、筥崎宮に関連した公的施設の存在を示唆している（井上2017）。

HZK1601地点では、当該期の柵列などは検出されておらず、墨書土器や硯などの遺物も出ていないが、土師器に対する穿孔の様相は類似しており、12世紀においては、筥崎宮の門前町の北端であった可能性がある。

3. 九州大学箱崎キャンパス地区 HZK1604 地区出土の食器に関して

HZK1604の発掘調査において、調査区南側硬化生活面①より、「農」と施文された染付けの湯のみが出土した(図5)。

九州大学内の埋蔵文化財調査において、以前より、九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器、工科大学の食器、滲つくしマークのある湯のみなどが報告されている(田尻2016)。しかし、今回出土した食器は今までに類例がなく、九州大学の農学部で独自の食器が使われていたことを示す初の資料として位置づけられる。

(1) 今回出土した食器の概要

今回出土した食器は、白磁に藍色の染付けで施文されている。口径9cm、器高5.3cm、高台径4.1cmを測る。内面は刷毛調整である。おそらく型作りのあと表面調整と透明釉の施釉、絵付けをしたと想定される。全体の1/4ほどが残存している。大きさや器形から湯のみ茶碗と思われる。

文様構成は、口縁部に帯状の連続文、胴部に「農」の文様、高台直上に帯状の連続文が施される。文様はいずれも、手書きで施文されている。口縁部の文様は、一見、上下の横線の間×印を縁取りして、連続施文したように見える。復元すると11個ほどの×印が施文されていたと思われる。よく観察すると、上下2条の横線は×印ごとに途切れている。また×印と思われた文様は一つ一つが、いずれも、右下方だけヨレたように不自然に屈曲している。これは「×」ではなく「九」であり、これを連続させ、上下を横線でつないで図案化したものと推測される。

また、高台部直上の文様は1条の横線と、花卉状の文様のように見える。しかし、横線は途中で切れており、花卉状の文様の先端は横線を突き抜けている。これは、「大」を横長になるように圧縮して図案化したものである。復元すると、大を横に4つ繋げた形になる。「大」の上端突出部の上方に、「農」の文字が施文されている。復元すると「大」の上端突出部は4箇所になることから、それぞれに「農」と施文されていたものか、あるいは異なる文字が施文されていたのかは不明である。

工学部跡地からは、調整痕や文様構成や書体、顔料などは今回出土の資料とまったく異なるが、「工科大学」と施文された茶碗が出土している。大きさも口径9.5cm、器高5.5cmほどであり、大きさや器形は類似する(未報告)。そのため、「農科大学」という施文である可能性も考えたが、九州大学百年史の資料編には、「農科大学設置運動」のち「農学部」が設置されている記載があるので、「農科大学」と施文された可能性は低いようである(九州大学百年史編集委員会編2014)。少なくとも、今回出土の資料が出土した位置は、「農」の文字があり、出土位置が農学部の敷地付近であることから、農学部用に作成された湯のみ茶碗であろう。

(2) 九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器との類似点

九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器は、田尻義了氏によって報告されており、その中で、「大學醫院」のロゴマーク(A)と「九大醫院」のロゴマーク(B)の大きく2種類があり、それぞれ銅版・ゴム版の違いがある(田尻2013)。

筆者がこのマークの資料を実見したところ、「九大醫院」のロゴマーク(B)の九は、上が狭くて下がひろがる×印の形で、右下側に伸びる線が屈曲して九を表現しており、二重線で丸を表現したようにデフォルメされた形で大を表現している。一見すると、二重〇に九をあしらったようにも見えるが、よく観

察すると線が二重〇の上方に突出しており、下方の線が切れていることから、大の図案化と判断される(図5)。

今回出土した資料と「九大醫院」のロゴマーク(B)を比較すると、九を図案化して、×印の右下が屈曲した表現がよく類似している。また大のデフォルメのしかたも、二重〇状か二重線状かの違いはあるが、横長になるように圧縮してデザインするという点で類似がある。

九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器は、共伴遺物から1911(明治44)年の九州帝国大学開学から1935(昭和10)年頃までに製作・使用されたものであると判断されており、「九大醫院」のロゴマーク(B)のほうが技術的に新しいとされている。

本資料は、手書きであるため、施文の技術によって時期を判断することはできないが、「九大醫院」のロゴマーク(B)との、九と大の図案化の類似性から、おおそ同時期のものと考えられる。また、九州帝国大学農学部の官制上の設置が1919(大正8)年、授業の開始が1920(大正10)年であることから、本資料は、古くとも1919(大正8)年以降の所産である。本資料によって、ほぼ同様の時期に、医学部だけでなく九州大学の各学部において、独自の食器類を製作・使用していた状況がうかがい知れる。

4. まとめ

九州大学箱崎キャンパス地区出土遺物の特徴について述べてきたことをまとめる。

1. 九州大学箱崎キャンパス地区では、12世紀後半から13世紀前半の層を中心に、12世紀以前の層、13世紀後半から15世紀までの層が存在する。次に人々の生活の痕跡が明らかとなるのは、九州帝国大学の開学以降のことである。
2. 九州大学箱崎キャンパス地区HZK1601地点出土土師器には、穿孔のあるものが存在する。箱崎73次調査土師器に対する穿孔の様相と類似しており、12世紀においては、箱崎宮の門前町の北東端であった可能性がある。
3. 九州大学箱崎キャンパス地区HZK1604地点から、「農」の文字の入った食器が出土した。九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器と類似性があり、九州大学の各学部において、独自の食器類を製作・使用していた状況がうかがい知れる。

文献

- 池崎讓二編 1997「博多60—第1次, 4次, 8次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集、福岡市教育委員会
井上蘭子編 2017「箱崎49—箱崎遺跡73次調査報告—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1316集、福岡市教育委員会
大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編 2008『中世都市 博多を掘る』海鳥社
九州大学百年史編集委員会編 2014『九州大学百年史第8巻—資料編I—』九州大学
楠瀬慶太 2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—」『九州考古学』82、21-43頁
田尻義了 2013「九州大学出土の硬質陶器について」『九州史学会発表要旨集』九州史学会
田尻義了 2016「九州帝国大学附属病院跡出土の病院食器に関する考古学的研究」『考古学は科学か(下)』田中良之先生追悼論文集編集委員会、1023-1036頁
中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
宮崎亮一編 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会

4. 九州大学病院キャンパス採集の大型石材について

森 貴教

はじめに

九州大学埋蔵文化財ワーキンググループは平成28（2016）年12月26日に、九州大学病院キャンパス（福岡市東区馬出^{まいだし}3-1-1）・ボイラ棟周辺の給水管新設に伴う掘削工事に際して、埋蔵文化財確認の立会調査を実施した。掘削工事では埋蔵文化財の包蔵は確認されなかったが、掘削した範囲の周辺において人為的な加工痕のある大型石材1点を発見したので報告する。

1. 採集地点について

九州大学は福岡市内に4カ所（箱崎、馬出〔病院〕、大橋、伊都）のキャンパスが存在する。キャンパス内での掘削に伴う工事では、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査および工事立会調査を福岡市経済観光文化局文化財部と連携して実施している。

病院キャンパス内では箱崎キャンパスと同様、元寇防塁の包蔵が福岡市経済観光文化局文化財部により推定されており（登録番号0116）、周辺の掘削工事において特に注意が払われてきた。推定ラインは、キャンパスの南西隅からコージェネ棟、動物実験施設、生体防御医学研究所を抜け、キャンパス北西の運動場西脇にかけての南北約680mの範囲である。しかしながら、病院キャンパス内およびキャンパス周辺ではこれまで元寇防塁とみられる石積みそのものの発見には至っていない。

平成21（2009）年に立体駐車場（動物実験施設北側）の建設工事の計画が持ち上がり、試掘調査が実施された。元寇防塁推定ライン上に位置する。その結果、石積みは発見されなかったものの、近代の所産とみられる土坑が確認され、近年その学術的意義が指摘されている九州帝國大學附属醫院の「病院食器」が出土している。

さて今回大型石材が見つかったのは、キャンパス南西部に所在するボイラ棟南側に設置された原水タンクの下部である（図1・2、写真1）。原水タンクの底部と現地地表は約80cm離れており、石材はその間の地表面上に転がっている状態であった。したがって石材は原位置を保つものではない。過去のインフラ整備工事に伴う掘削により周辺の地中から出土し、その後当地に放置されたものと考えられる。なお周辺の地表面上を精査したがこれ以外の石材や遺物は確認できなかった。

採集地点は元寇防塁推定ラインの東に近接する地点にあたり、元寇防塁を構成する石材であることが示唆される。

2. 採集した石材について

採集した大型石材は長径約40cm、短径約30cmを測り、立方体に近い七面体をなす（写真2）。平面形・側面形は歪な台形であり、それぞれの面の境は稜をなし角張っている。石材は砂岩である。表面の色調は灰黄色を呈し、一部は煤けて褐灰色になっている。九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点第1次調査（HZK1603地点）で検出された石積み遺構の構築石材（基底石などの大型石材）は礫岩が多くを占め

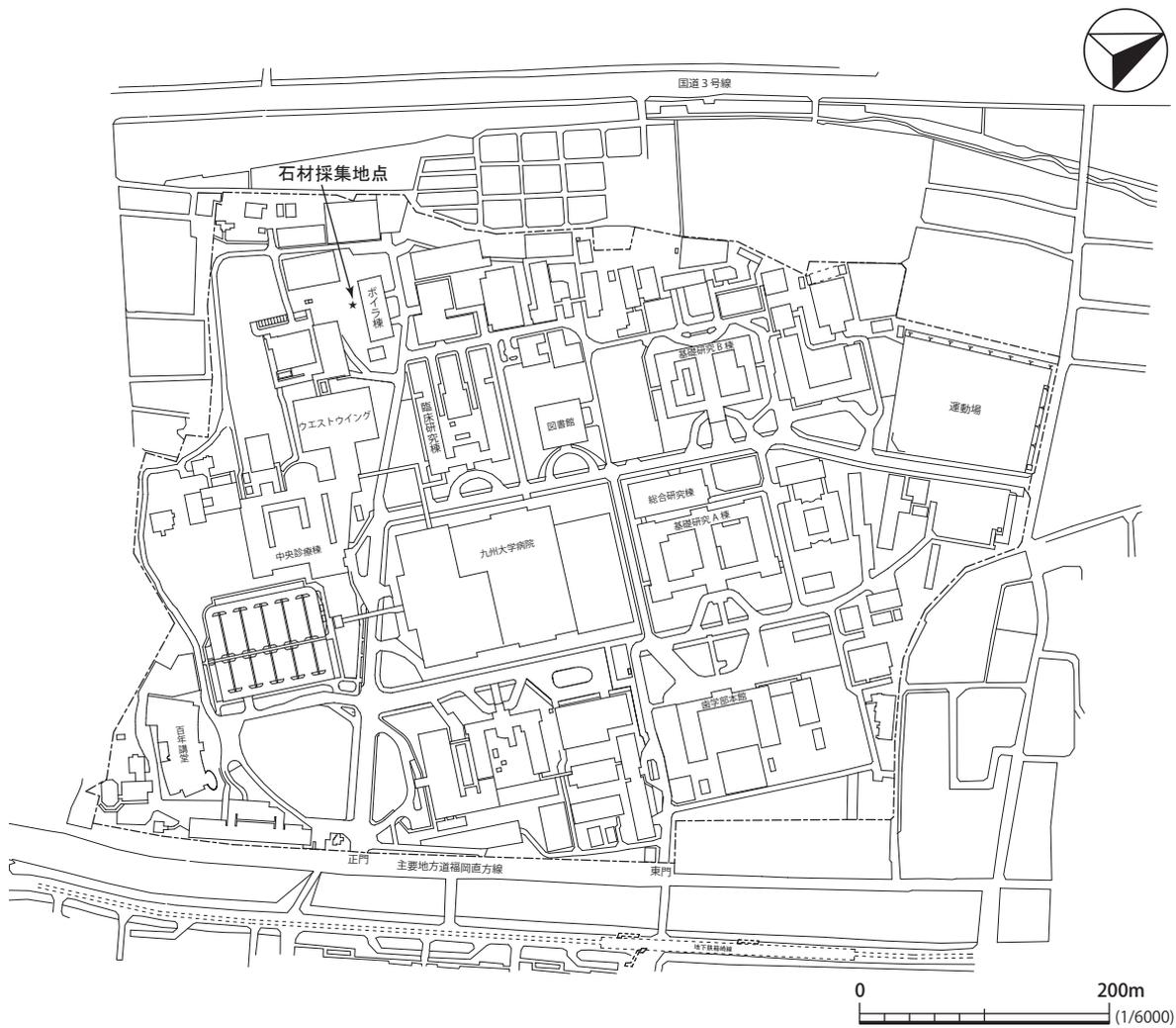


図1 九州大学病院キャンパスと石材採集地点



図2 石材採集地点



写真1 石材発見状況（南西から）

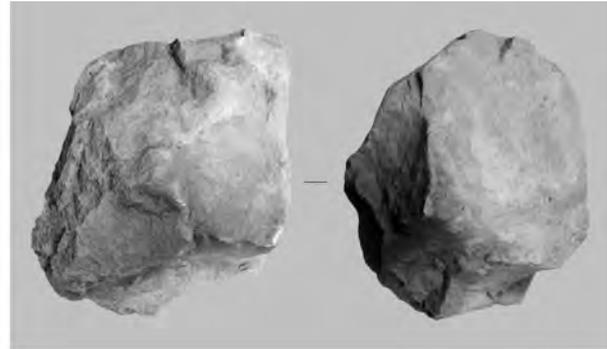


写真2 採集した石材

0 20cm
(1/10)

るが、それよりも構成される碎屑物の粒径がかなり小さい石材である¹⁾。表面の風化により自然面と剝離面を峻別することは難しいが、一部を剝離成形し平滑にしている。

石材の大きさをHZK1603地点で検出された石積み遺構の石材と比較すると、下から2段目・3段目の構築石材に近似する。

おわりに

本稿では、九州大学病院キャンパスで採集された大型石材について報告した。角張った大型の石材であること、面を平滑に成形する点など箱崎キャンパスHZK1603地点の石積みの石材と共通する特徴を持つことから、「元寇防塁」を構成する石材である可能性が高いと考える。近年、病院キャンパス内の各所において給水管・ガス管などのインフラ整備工事が進められているが、掘削工事に際しては埋蔵文化財の有無を確認するための立会調査が望ましいと考える。この場を借りて関係者への周知を依頼する次第である。

なお病院キャンパスを含め、九州大学キャンパス内の元寇防塁位置の推定についてはIV-8章の岩永論文を併せて参照されたい。

注

- 1) 名島層では礫岩から砂岩まで多様な粒径の碎屑物により構成された堆積岩が認められ、この石材も採取可能であると考えられる（IV-1章、足立・田尻論文参照）。

5. 箱崎の元寇防塁と薩摩

佐伯 弘次

はじめに

文永11年（1274）の文永の役と弘安4年（1281）の弘安の役の2回にわたってモンゴル（元）は日本に襲来した。モンゴル襲来（蒙古襲来・元寇）である。同時代においては、蒙古合戦、文永十一年蒙古合戦・弘安四年蒙古合戦、蒙古人合戦、蒙古襲来、蒙古人襲来などと呼ばれた。

モンゴル襲来は、この2回に止まらず、3回目の襲来が予定されていた。日本側でも3回目の襲来を想定していたため、弘安の役以降もモンゴルの襲来に対する対策を継続せざるを得なかった。異国警固番役や石築地役がそれである。そして、このことがモンゴル襲来を複雑化し、長期化させることになった。

ここでは、文献史料から、箱崎の元寇防塁（石築地）とそこでの石築地役・異国警固番役のあり方を中心に考えたい。

1. 元寇防塁（石築地）の概要

元寇防塁（石築地）は、文永の役直後の建治元年（1275）末に企画された異国征伐（高麗を攻める計画）と同時に企画されたとされている（川添編1971、川添1977）。具体的には、建治2年（1276）3月ごろから築造が開始され、同年8月には一応の完成をみたが、一部では、完成が遅れた場所もあった。この石築地の築造は、国ごとに築造地域が割り当てられ、所領（知行地）1段（991.7㎡）につき、石築地1寸（3.03cm）という基準で九州各国に賦課された。国ごとの分担地域は、以下の通りである。

分担地域	分担国
香 椎	豊 後
箱 崎	薩 摩
博 多	筑 前・筑 後
姪 浜	肥 前
生 松 原	肥 後
青 木 横 浜	豊 前
今 津	大 隅・日 向

文永の役（1274年＝文永11年）の直前に、鎌倉幕府の御家人が博多湾を警備する「異国警固番役」が始まった。文永の役直後の建治元年12月、制度が整備され、1月～3月＝筑前・肥後、4月～6月＝肥前・豊前、7月～9月＝豊後・筑後、10月～12月＝日向・大隅・薩摩という季節ごとに分担国が変わるといいう制度となった。ただし、必ずしも原則通りの勤務ではなかったことも指摘されている（川添編1971）。

嘉元2年（1304）、異国警固番役は、九州を5番に分け、1番が1年を警備するような制度に変更された。第1番が筑前（嘉元2年）、第2番が大隅・薩摩（嘉元3年）、第3番が肥前（徳治元年）というところまでは判明しているが、その他の国がどの番に入るのかは分かっていない（川添編1971）。

2. 箱崎石築地と薩摩

蒙古襲来と薩摩の関係を示す早い史料は、次の文書である¹⁾。

被下 関東御教書候異国警固事、自去四月十七日被上府候、迄今月十六日、博多津番役、被勤仕了、恐々謹言、

文永九年五月十七日 (武藤資能) 覚恵 (花押)
(延時忠俊) 盛岡二郎殿「平忠俊」

薩摩国御家人延時忠俊が、異国警固を命じた関東御教書を受けて、文永9年(1272)4月17日に大宰府に到り、5月16日までの1ヶ月間、博多津番役すなわち異国警固番役を勤仕したことを証明する鎮西奉行武藤(少次)資能の覆勘状(勤務完了証明書)である。薩摩の御家人が、鎌倉幕府の異国警固命令にいち早く応じて、博多において勤務したことがわかる。この時点での異国警固番役の勤仕地は博多であった。

この覆勘状以降、延慶3年(1310)まで、薩摩国関係の覆勘状は41通残存している(川添1971)。これは現存する覆勘状の約半数に相当するほど多い。薩摩では中世武家文書の残りがよく、また同国の武士たちが異国警固番役・石築地役を多く勤仕したからであろう。41通の薩摩国関係覆勘状の内、4通が石築地関係の覆勘状である(川添1971)。

次に、箱崎と薩摩の関係が明確になる初見史料は次の文書である²⁾。

箱崎役所築地事、満家院内比志島・西俣・河田・前田、以上四ヶ名分、伍丈壹尺肆寸被勤仕了、仍之状如件、

建治三年 正月二十七日 (島津) 久時 (花押)
(佐範) 比志島太郎殿

建治3年(1277)正月27日、薩摩国御家人比志島佐範が、箱崎(箱崎)の石築地を満家院内4カ名分として、5丈1尺4寸築造したことを、薩摩国守護島津久時が証明した覆勘状である。この5丈1尺4寸という長さは、所領に換算すると51町4段となる(川添編1971)。この史料から、箱崎が薩摩国の石築地築造分担地ということが判明するが、一般的な石築地の完成時期である建治2年8月よりやや遅れて、比志島氏は分担分の築造を終えたのである。

(箱崎) (薩摩国) (結番) (勤)
はごぎのさつまのくにのけちばんの事、十月より四月一日までつとめられ候了、
(弘安) こうあん三年四月一日 (官) 御代くわん信蓮 (花押)
(比志島) (佐範)
ひし、ま太郎殿³⁾

弘安3年(1280)4月1日、比志島佐範の箱崎における薩摩国の結番=異国警固番役の順番の勤務を前年10月から当年4月1日まで約6ヶ月間勤仕したことを証明した信蓮の覆勘状である。薩摩国の武士は、文永9年すなわち石築地築造以前は博多を警固していたものが、石築地築造後は、箱崎を警固するようになっていることがわかる。すなわち、異国警固番役の勤務地が、石築地築造地に限定されるようになったのである。

こうして、石築地築造地と異国警固番役勤務地の一体化は、分担地と勤務する守護・武士の関係を緊密化させた。例えば、香椎(豊後)や今津(大隅)・姪浜(肥前)のように、分担地が守護領となるところもあった(佐伯2000)。

以下、年表風に、箱崎の石築地に関する記事をまとめよう。

- ・ 建治3年（1277）正月27日 薩摩守護島津久時、薩摩国御家人比志島佐範の箱崎役所築地として、5丈1尺4寸を勤仕したことを証明する。（比志島文書）
- ・ 弘安7年（1284）閏4月21日 薩摩守護島津忠宗、比志島佐範の箱崎石築地5丈1尺4寸を勤仕したことを証明する。（比志島文書）
- ・ 弘安9年（1286）10月 薩摩国新田宮政所、「蒙古用心」のため、箱崎小松□□洲崎石築地用途銭の割り当てを書き上げる。（「旧記雑録」権執印文書）
- ・ 正応2年（1289）4月5日 薩摩守護島津忠宗、薩摩国御家人比志島忠範の裏加佐5丈1尺4寸を勤仕したことを証明する。（比志島文書）
- ・ 正応6年（1293）4月12日 「箱崎石築地破損検見注文」が作成される。（比志島文書）
- ・ 正応6年4月21日 北条兼時、薩摩守護島津忠宗に対して、「石築地以下要害構」について、すぐに終わるように命じる。（比志島文書）
- ・ 正応6年4月23日 薩摩守護島津忠宗、薩摩国地頭御家人に対して、4月21日の北条兼時の御教書を伝達し、加佐3尺と裏芝が破損したので、5月20日以前に修理するように命じる。（比志島文書）
- ・ 永仁6年（1298）7月20日、薩摩国入来院分の箱崎要害所石築地の裏加佐（追切末俣・小松原崎・国堺など）の配分（割り当て）を記し、来月20日以前に勤仕するように記す。（入来文書）
- ・ 正安4年（1302）8月28日 薩摩国守護代酒匂本姓、薩摩国御家人延時種忠の延時名分3丈2尺の石築地修理を勤仕したことを証明する。（延時文書）
- ・ 嘉元4年（1306）正月28日、薩摩守護島津氏奉行人、比志島石築地裏加佐並びに破損について、完了したが、末子が難渋していると惣領が述べていることを記す。（比志島文書）
- ・ 徳治2年（1307）7月27日 薩摩国山門院地頭兼物郡司代盛明、永仁2年（1294）以来、石築地・楯・旗の用途を勤めていないことを記す。（来崎文書）
- ・ 元亨元年（1324）7月、薩摩国国分寺神官ら、申状を記す。中に、「博多津石築地並びに警固役」は、神社・仏寺・権門勢家の領を問わず催促をされたが、薩摩国分寺領は免除されたことを述べる。（薩摩国分寺文書）
- ・ 元亨4年（1324）8月21日 「伊作庄并日置北郷領家・地頭和与状」が作成される。「異国警固并箱崎石築地用途」に関して、警固役は先例通りに両方が沙汰し、石築地用途は両方が寄り合い、等分の沙汰とすることを規定する。（島津家文書）
- ・ 正中2年（1325）10月7日 「関東裁許状」（鎌倉幕府の判決書）が作成される。中に、「異国警固并箱崎石築地用途」に関して、警固役は先例通り、両方の沙汰であり、石築地用途は、両方が寄り合い、等分の沙汰とすることを記す。（島津家文書）
- ・ 元弘3年（1333）8月10日 比志島義範、文書目録を記す。中に、「二十八通 京都大番并石築地以下ふかん（覆勘）請取状正文」の記述あり。（比志島文書）

3. いくつかの論点

(1) 薩摩国による石築地の築造について

先述のように、石築地の築造は、建治2年8月ごろには一応の完成をみたとされているが、比志島文書によると、建治3年(1277)正月と弘安7年(1284)閏4月⁴⁾に、比志島佐範分の筥崎石築地5丈1尺4寸を勤仕した覆勘状が出されている。建治3年の覆勘状は、前年の勤務を証明したものとも解釈できるが、弘安7年の覆勘状は、建治2年から8年後に当たる。8年後まで箱崎地区の石築地は完成しなかったという解釈もできるが、建治3年にも覆勘状が出ていることからすると、建治2年に一旦築造され、その後、未完成分の追加築造か完成分の修理があったとも解釈できる。

(2) 加佐と裏加佐、修理

石築地築造後に、「加佐」、「裏加佐」という文言がよく登場するようになる。「加佐」は、石築地の上部をさす用語、石築地の付属物、裏加佐の裏を省略したものなどと解釈され、裏加佐は、石塁の後方に土砂を盛って、陸地から石塁に緩やかに登れるように作った所と解釈されている(川添編1971)。

薩摩国の場合、正応2年(1289)と永仁6年(1298)、嘉元4年(1306)に裏加佐(比志島文書、入来文書)、正応6年(1293)に加佐と裏芝(比志島文書)の史料が出てくる。築造後、石築地は、破損分の修理や加佐・裏加佐といった増築がなされ、より強固で使い勝手が良いものにされていった。

薩摩国役所筥崎石築地満家院内比志島分五丈一尺四寸裏加佐、去年五月被勤仕畢、仍執達如件、

正応二年
四月五日
(忠範)
比志島孫太郎殿⁵⁾

忠宗(花押)

この文書は、正応2年(1289)4月5日、比志島忠範が薩摩国役所である筥崎石築地裏加佐5丈1尺4寸を前年の5月に勤仕したことを述べた島津忠宗覆勘状である。この5丈1尺4寸という長さは、比志島氏の所領である薩摩国満家院内比志島分に基づくものであった。これは、先の建治3年・弘安7年の石築地分担分と同じ長さであり、満家院内の比志島氏の所領51町4段に対して、1段につき1寸という割合で賦課されたものであった。

石築地以下要害構事、自関東度々雖被仰下、無沙汰云々、不日可終其功、於難洪所々者、可注申之旨、可被相触薩摩國中候、仍執達如件、

正応六年四月廿一日
(北条兼時)
越後守御判
(島津忠宗)
下野三郎左衛門尉殿⁶⁾

正応5年(1292)の高麗使金有成の来日によって、鎌倉幕府はモンゴルの再襲を警戒し、翌年、北条兼時・同時家を九州・博多に派遣した。臨戦体制下である。鎌倉幕府は、「石築地以下要害構」の事について命令を発したが、無沙汰であったので、下向した兼時が、すぐにその作業を終えるように命じたものである。その中身は次の薩摩守護島津忠宗の文書から判明する。

筥崎石築地以下要害構事、今月廿一日(北条兼時)越後守殿御教書案如此、度々所相触之加佐三尺并裏芝及破損事、来五月廿日以前可終功、若猶令違期者、可令注進、仍執達如件、

(正徳六年)
四月廿三日(島津忠宗)
左衛門尉在判薩摩国地頭御家人御中進申⁷⁾

この文書によると、北条兼時からの指示は、「加佐三尺并裏芝及破損事」を5月20日までに完成するよ
うにということであった。この「加佐」「裏芝」「破損」の関係をどのように理解するか、いくつかの解釈
が可能であるが、取りあえず、加佐3尺・裏芝と破損というように、並列的に理解しておきたい（川添編
1971）。

比志島文書には、この時の「宮崎石築地破損検見注文」⁸⁾が後欠であるが残っている。薩摩国の永利・
甕島・光富・伊集院・荒田庄・額娃郡・谷山郡・鹿児島東方等の破損分の長さが書き上げられている。し
たがって、薩摩国に関しては、宮崎石築地破損分の調査が実施された上で、守護を通して、破損分の修理
等が同国の地頭御家人に命じられたのである。他国に関してもこのような命令が出たのかどうか、史料が
残っていないが、北条兼時書下の冒頭は、薩摩国の石築地に限定していないことから、それ以外の九州各
国にも同様の命令が出されたのではなかろうか。

裏加佐については、薩摩国入来院に関する永仁6年（1298）7月20日の入来院分宮崎要害所石築地配
分状⁹⁾が残っている。入来院は、御家人渋谷氏の所領であったが、この配分状には、「裏加佐 追切末俣、
小松原崎、国堺等配分」とあり、渋谷氏が分担した宮崎の追切末俣、小松原崎、国堺等における裏加佐の
賦課が記されている。具体的には、清色・塔原・中村・倉野・楠本といった入来院渋谷氏領の所領に対し
て、計14丈5尺2寸5分の賦課が所領ごとになされ、8月20日までに勤仕するように記されている。史料
中に、「任御教書并注文」とあるように、鎌倉幕府や鎮西探題の命令によってこの賦課がなされたことが
わかる。なお、この「小松原崎」が「宮崎小松洲崎」と同一地名であり、地蔵松原といわれる旧九州大学
工学部付近の地名であるとされている（川添編1971）。

肥前国要害構石築地以下并高事、急速可修固之由、先度催促之处、于今無沙汰之条、甚無謂、所詮、来月
十日以前、可被終其功也、更々不可有緩怠之儀状如件、

永仁六年八月一日 在御判¹⁰⁾

この史料は、肥前国関係の史料であるが、同じ永仁6年に「肥前国要害構石築地以下并高」を急速に修
固すべきことを命じている。入来文書と同じ文脈で考えることができる史料である。

（3）石築地をめぐる社会的関係

比志島石築地裏加佐并破損事、先度自惣領成其功之处、末子難洪之由、雖被申之、重破損式丈、猶以自惣
領被経入、有末子難洪者、以使可有沙汰之状如件、

嘉元四

正月廿八日 阿忍（花押）
本性（花押）比志島殿¹¹⁾

嘉元4年（1306）正月28日の比志島氏が勤める石築地裏加佐と破損に関する文書である。この史料も、
石築地の増築・修理に関するものであるが、従来の関係史料とは内容を異にする。この石築地裏加佐と破
損に関して、惣領が庶子に対して負担分を配分していたが、末子が配分の勤仕を拒否したので、重破損2

丈は惣領が立て替えて修理を行った。もし今後、末子が拒否することがあれば、使者をもって沙汰あるべきことを示している。石築地役における勤仕忌避の傾向と惣領と庶子の間の矛盾が明らかになる。

この他、異国警固に事寄せて、他人の所領を押領する事態も進行した¹²⁾。次の文書は、異国警固番役をめぐる社会的な矛盾が、御家人側から主張されている。

(端裏書)

「かまくら殿御まいりの時申状のあんもん御をんの事」

嶋津下野三郎左衛門尉忠長謹言上

所領薩摩国伊作庄分限厄弱上者、且依重役勞、且任傍例、預御計、弥欲抽異国警固忠勤間事、件条、亡父下野入道道忍、去建治元年、被仰付警固役、被差下鎮西畢、而道忍弘安七年、於役所死去之後者、雖為不肖、宛于身二十余箇年、令勤仕彼役畢、加之、豊後国守護上使事、被仰付之日、雖可令言上無力之由、辞退之条、依有其恐、謹期後訴、同所致沙汰也、爰当庄者、田数百余町也、為領家進止地之間、有名無実之上、除仏神人給田、所殘地頭得分給加徴最少分也、其上薩州与筑州宮崎役所者、其堺為遼遠之処、当所為領家進退之地、不及召仕人夫官駄、旁以難令合期之条、可足御還迹者哉、且防戰要害之習、云親類、云郎従、不令扶持者、難達戰場之本意、愁訴之至何事如之哉、且如傍例者、就歎申不階之子細、浴御恩之族在之、然早被優年来重役勞効、且任傍例、預御計、弥欲致警固之忠節、仍恐々言上如件、

嘉元三年二月 日¹³⁾

嶋津氏の庶家である伊作嶋津氏の文書である。嶋津忠長（久長）の父道忍（久経）は、建治元年に異国警固役を仰せ付けられ、鎮西に派遣された。道忍は、弘安7年に役所（箱崎）で死去し、その後、忠長が20年にわたって警固役を勤仕してきた。薩摩国伊作庄は、田数100余町であるが、領家が支配している土地であるから、嶋津氏にとっては有名無実であり、仏神人給田を除けば、残るところの地頭得分は最も少分である。そして、年来の重役の勞を減免し、料所を給付されれば、いっそう異国警固の忠節を致すと主張している。自分の所領が少なく、異国警固番役が十分に勤仕できないことを訴えているのである（川添編1971、相田1982）。

さらに、「薩州与筑州宮崎役所者、其堺為遼遠」という箇所も注目される。本拠地がある薩摩と筑前国宮崎の役所（番役勤務地）が「遼遠」であり、異国警固番役の勤仕が困難であると述べているのである。こうした地理的・社会経済的な事情によって、御家人たちは石築地役を含む異国警固番役を忌避しつつあった。

(4) 石築地築造料の銭納

石築地役が課されると、九州各地から実際に博多湾に人を派遣し、石築地を築造したのだが、銭による納付（代銭納）も見られた。弘安9年（1286）10月、薩摩国新田八幡宮は、蒙古用心のため、宮崎小松□□洲崎の石築地築造に関して、勢万以下8カ所の所領に関して、分銭の負担を決めている¹⁴⁾。1町=114文に換算されている。合計すると5貫710文になる。こうして集められた銭は、新田八幡宮で集積され、新田八幡宮による箱崎の石築地築造費に充てられたのか、あるいは新田八幡宮から守護に納められ、守護の責任で石築地の築造がなされたのかは不明である。

(5) 箱崎と薩摩守護領

石築地築造地＝異国警固番役勤務地は、担当国の守護領となった事例があることを先に指摘した。薩摩守護島津氏と箱崎の関係はどうであったのか。箱崎が薩摩守護島津氏領となったという史料は残存しない。

島津氏は、南北朝時代、大隅守護領である筑前国今津を所領として所有していた¹⁵⁾。それと同時に、薩摩守護職や薩摩国内の所領の他、「筑前国今田村薩摩役所」を所有している¹⁶⁾。「役所」は異国警固番役・石築地役に関わる場所によく使用される語である。筑前国今田村は、筑前国国衙領であり、安楽寺領でもあったが、席田郡平尾村内に比定されている（平凡社地方資料センター編2004）。もしこの今田村が鎌倉後期から島津氏領であったとすると、箱崎の地は薩摩守護領とはならず、近隣の席田郡今田に薩摩守護領が設定されたものと考えられる。

おわりに

薩摩の石築地関係史料の中には、箱崎の小さな地名が登場する。「筥崎小松□□洲崎」（権執印文書）、「追切末迫」「小松原崎」「国堺」（以上、入来文書）などである。これらは、具体的な石築地築造担当箇所がわかる点で貴重なものであるが、現在の地名には残っておらず、今後の解明が待たれる。

注

- 1) 「旧記雑録前編」五延時文書、武藤資能覆勘状、『鎌倉遺文古文書編』14巻11034号（以下、『鎌遺』14-11034のように略す）。なお、文書史料については、便宜上、『鎌倉遺文古文書編』の巻数と文書番号を示すが、主として川添昭二編『注解元寇防塁編年史料』（福岡市教育委員会1971年）及び池田栄史・佐伯弘次・森平雅彦・船田善之編『《元寇》関係史料集（稿）I 日本史料編』（九州大学2010年）、同編『《元寇》関係史料集（稿）III 日本史料・中国史料補遺編』（九州大学2011年）に拠った。
- 2) 比志島文書、島津久時覆勘状、『鎌遺』17-12654。
- 3) 比志島文書、代官信蓮覆勘状、『鎌遺』18-13906。
- 4) 比志島文書、弘安7年閏4月21日宗忠覆勘状、『鎌遺』20-15182。
- 5) 薩摩川田家文書、島津忠宗覆勘状『鎌遺』22-16952。
- 6) 比志島文書、北条兼時書下、『鎌遺』23-18178。
- 7) 比志島文書、島津忠宗書下、『鎌遺』23-18179。
- 8) 比志島文書、筥崎石築地破損検見注文、『鎌遺』23-18167。
- 9) 入来文書、『鎌遺』26-19749。
- 10) 青方文書、某書下、『鎌遺』26-19753。
- 11) 比志島文書、薩摩守護奉行人連署奉書、『鎌遺』29-22514。
- 12) 斑目文書、徳治2年10月蓮性陳状案、『鎌遺』30-23077。
- 13) 島津家文書伊作家文書、島津久長申状『鎌遺』29-22111。
- 14) 「旧記雑録前編」権執印文書、弘安9年10月日新田八幡宮石築地用途支配状、『鎌遺』21-16019。
- 15) 島津家文書、貞治2年4月10日島津道鑑讓状、『南北朝遺文九州編』4-4466。
- 16) 島津家文書、貞治2年4月10日島津道鑑讓状案、『南北朝遺文九州編』4-4467。

文献

- 相田二郎 1982『蒙古襲来の研究増補版』吉川弘文館
 川添昭二編 1971『注解元寇防塁編年史料』福岡市教育委員会
 川添昭二 1971「覆勘状について」『史淵』105・106合輯
 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
 佐伯弘次 2000「中世の香椎と香椎宮」『香椎B遺跡』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書621、福岡市教育委員会
 平凡社地方資料センター編 2004『日本歴史地名大系41 福岡県の地名』平凡社

6. 史跡元寇防塁地蔵松原史跡指定地について

堀本 一繁

文永の役（1274年）後の建治2年（1276）、蒙古軍の再襲来に備え、その上陸を阻止するために、博多湾沿岸一帯に石塁が築造された。所謂「元寇防塁」である。この呼称は、大正2年（1913）、防塁調査の折、九州帝国大学医科大学教授・中山平次郎によって仮称されて以来定着したもので（川上1941：59）、蒙古襲来当時の史料上では「石築地」「要害石築地」と表現された。昭和6年（1931）の国史跡への指定においても指定名称として「元寇防塁」が採用され、現在に至り通用する呼称となっている。

元寇防塁は、弘安の役（1281年）後においても、蒙古軍の再々襲来に備え、鎌倉幕府が滅んだ後も維持管理が続けられたが、貞和2年（1346）12月7日付、宮内少輔（九州探題・一色直氏）宛足利直義御教書案に添えられた鎮西沙汰条々（「入来院文書」）において「一、異賊防禦構以下事」の一条が掲げられ、先規に任せ計い沙汰するよう命じたことを終見として、史料上の所見がなくなる。

蒙古軍の襲来に備えるという歴史的使命を終えた元寇防塁は、漸次砂中に埋もれ、人々の記憶からも薄れていく¹⁾が、近代における元寇記念碑建設運動や発掘調査によって再び認識されるようになる。さらには、戦前・戦中の時局を背景に外国の圧力を跳ね返した国防の記念碑として大いに注目を集めることになった（川添1971：105-220）。

本稿では、箱崎地区の元寇防塁としてつとに知られている地蔵松原の史跡指定地について、未公開資料もまじえてこれまでの調査・発掘の成果を紹介する。

1. 中山平次郎による防塁ラインの推定

明治45年（大正元・1912）夏、中山平次郎は箱崎界隈を踏査し、箱崎地区の防塁ラインを推定している。箱崎付近の防塁はすでに湮滅してしまったと伝えられていたが、中山は一応踏査してみても容易に防塁の残址と思われるものを発見したとして、以下のようにその概況を記している（中山1913b：219-220）。

千代の松原の医科大学²⁾の裏堺に沿ふて、一の低き凸地があり、又箱崎網屋の墓地より、工科大学構内³⁾を貫いて、地蔵松原新墓地に達する一の低き凸地がある。此両凸地を連結したる線は、現時の海岸線と、略平行したる一線を画し、海との距離は、約二町乃至二町半位の処にあるのである。予は此凸地を以て、防塁の土堤の崩れ広がつたものと、考ふるのである。

此の凸地を連ねたる線が、箱崎汐井浜に於ては奈辺を過ぐるかといへば、丁度浜辺の鳥居⁴⁾の、直ぐ前に当たるのである。（下略）

防塁の石列は確認できないものの、微高地のラインが九州大学病院キャンパスの裏堺から九州大学箱崎キャンパスを貫いて地蔵松原に至り連続する様相が確認されている。同様の事例は、福岡市中央区の地行から唐人町においても確認できる。平成29年3月刊行の『「蒙古襲来」ジュニアガイド』、『「蒙古襲来」史跡めぐりマップ』を作成するにあたり現地を踏査すると、旧海岸線と平行にかつての砂丘のピーク、すなわち防塁推定ラインが連続して残っていることを確認した。防塁推定ラインに沿って道が通り、この道から左右に分岐する道は緩やかに傾斜している（堀本2017a・2017b）。元寇防塁は海浜の砂丘のピークが海側にやや降り始めようとする地点に構築されている（堀本2010：194-195、堀本2017a：10）。役目を終え

た元寇防塁は海風によって吹き寄せられた砂に覆われ、砂中に埋もれて現代に伝えられた。したがって、市街地となって石列は地中に埋まったり抜き取られていたとしても、元寇防塁に由来する地形の起伏や段差は意外に残されているのである。いまだ現地の地形を精査する余地が残されている。

2. 近代における元寇防塁の調査・発掘

(1) 『伏敵編』所収「石塁遺址図」・「荒戸山石塁図」

明治19年(1886)年以降、湯地丈雄の主唱によって元寇記念碑建設運動がおこり、日露戦争が勃発した明治37年(1904)にようやく結実し、11月8日、日蓮聖人像の除幕式、同12月25日、亀山上皇像の除幕式が行われ、完成に至る。この運動の一環で、明治24年(1891)、元寇関連史料集として重野安繹監修・山田安栄編纂『伏敵篇』が刊行された。同書卷之三、建治2年(1276)3月条に「幕府、将ニ高麗ヲ征セントシ、鎮西ノ将士ニ令シテ、兵ヲ調セシム、又九州ノ諸豪族ニ課シ、石塁ヲ博多沿岸ニ築カシム、諸氏各国ノ郡邑ニ命シ、徒ヲ発シ工事ニ任ス、八月ニ至テ略竣」との綱文を掲げ、関係文書等を列挙し、次いで福岡元寇記念碑建設事務所からの報告に拠って「石塁遺址図」「荒戸山石塁図」等を附載する。地蔵松原を含む箱崎は、名島・千代松原・博多・福岡とともに「石塁遺址図」に「石塁遺址ニシテ其形存セサル地」として掲げられている。この他、石塁残存地として伊崎・小戸・生の松原・今津を、土塁残存地として地行・百道原・姪浜・今宿を図示している(山田1891:26-40)。名島以東、勝浦まで石塁があったとする口碑を紹介するが、実際に防塁が築かれたのは香椎までである。「荒戸山石塁図」は荒戸山の麓、伊崎に当時存在した石塁を図示したものである(中山1913a:29)。

(2) 大正2年(1913)今津の発掘

大正9年(1920)に地蔵松原の元寇防塁が発掘されるが、その先駆けとなったのは、大正2年(1913)7月、福岡日日新聞が主催した史蹟現地講演会による発掘である。目的は「北筑における元寇史蹟の研究」であった。第1回は7月19・20日、糸島郡今津村(現福岡市西区今津)において、元寇防塁と東西の蒙古塚(万人塚・千人塚)の発掘が行われ、勝福寺において史蹟現地講演会が開催された。次いで7月26・27日には糟屋郡志賀島村(現福岡市東区志賀島)において第2回が開かれ、唐人墓と金印発掘地の発掘、志賀島尋常小学校にて講演会が举行された(史蹟現地講演会1915、川添1977:147-154)。発掘調査の成果と現地講演会の内容は、2年後に『元寇史蹟の新研究』として刊行された。竹内栄喜「蒙古軍上陸に関する新研究」「弘安役に於ける志賀島の地位」、中山平次郎「元寇史研究の三参考文献」「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」、木下讚太郎「海外交通と今津」「宗教方面より観たる元寇役」「元寇防塁の石」「禅宗と元寇」「元寇史蹟の概観(博多湾附近に於ける)」、竹田雅弘「史蹟現地講演会記録」が収録された。蒙古襲来関係の地元研究者による大正時代蒙古襲来研究の代表的著作として評価されている(川添1977:147)。

この年、1月10日、明治19年(1886)以来、元寇記念碑建設運動を推進してきた湯地丈雄が、4月23日には、湯地の運動に元寇図を提供して援助してきた矢田一嘯が相次いで没した。次いで、両名と入れ代わるようなタイミングで武谷水城等が5月25日、筑紫史談会を結成した。翌大正3年(1914)4月15日には『筑紫史談』第1集を創刊し、これ以降、昭和20年(1945)6月の第90集まで冊を重ねた(日比野2004:240・249-272)。投稿された論稿の主要テーマの一つが蒙古襲来関係であり、蒙古襲来関係地の地元における研究を牽引していった。

(3) 大正9年(1920)地蔵松原の発掘

大正9年(1920)、箱崎の東端⁵⁾、地蔵松原において元寇防塁が発掘された(武谷1922:33-34)(図1参照)。翌大正10年(1921)、香椎浜男で発掘された石土混塁が元寇防塁ではないとする説に反論するため、元寇防塁と認められた地蔵松原と香椎浜男とを比較する形で地蔵松原の元寇防塁の概況が記されている。全文を引用しよう(正字は新字体に改めた)。

一、此の地蔵松原の石塁は高さ二尺乃至三尺四五寸(発掘長さ約四間半)にして石塁の上部(地面の高低一様ならざるも)約一尺五六寸乃至二尺、

上部の石は他に取去られしものとして、全高四尺乃至五尺余(香椎石塁を以て元寇防塁に非らずと為す説に拠れば、元寇防塁は底部の盛土七八尺の上に石塁の高さ少くも一間ならざるべからず。而して香椎の石塁は全高約五尺三四寸なり。)に過ぎず。

二、同上石塁の巾(厚さ)現存二尺乃至二尺三四寸に過ぎず、上記の説⁶⁾に拠れば、巾一丈以上ならざるべからず、而して香椎石塁の巾は五尺七八寸にして、其の後側に赤土を充慎する事約八尺余なり。

三、同上石の大なるもの天然石にして巾二尺八寸、高一尺、厚一尺五寸のものあり。(同上の説に拠れば二人持位の割石ならざるべからず。)

地蔵松原における発掘の成果を、①石塁の高さ、②石塁の幅(厚さ)、③石の大きさ、の3点について要約している。下記にメートル法に換算して整理する。

①石塁の高さ：発掘された石塁の長さは約8.1mで、高さ約60.6cmないし103.0～106.1cmの石塁を検出している。取り去られた上部の石を勘案し、元の高さを約121.2～151.5cmと推定。

②石塁の幅(厚さ)：現存約60.6cmないし69.7～72.7cm。

③石の大きさ：大きなもので幅約84.8cm、高約30.3cm、厚約45.5cm。しかも割石ではなく天然石である。

地蔵松原の元寇防塁は、海側に面した前面のみに石を積み上げた状況を示している。九州大学箱崎キャンパスで発掘された防塁の状態と等しい。海側・陸側の両面に石積みを施し、幅が約3mある今津⁷⁾・百道・西新地区の防塁と異なる。この形状は、海側前面のみに石積みを施し、陸側はスロープ状に傾斜させる生の松原地区の防塁の構造に等しい(福岡市教育委員会2001:24、堀本2017a:10)。

(4) 香椎浜男・紅葉松原(百道原)・姪浜・西新での発掘

大正年間、今津や地蔵松原の他に、いくつかの地点で発掘が行われた。大正9年(1920)10月30日、教育勅語御下賜三十周年記念会当日、西新尋常高等小学校の生徒が紅葉松原の砂丘を発掘し、元寇防塁を発見している(武谷1922:巻頭写真、川上1941:74・85)。西南学院大学体育館南側に位置する西新の元寇防塁である。同年、西南学院旧本館・講堂(現西南学院大学博物館・ドージャー記念館)の建設工事にともない、北側隣接地から偶然に元寇防塁が発見され、戦前までは長さ約7m、幅約3.5mが公開されていた

壘石掘發原松藏地方東崎箱 (丙)



図1 箱崎東方地蔵松原発掘石塁(武谷1921より転載)

た（伊藤2017：132-140）。

翌大正10年（1921）には、香椎浜男（現福岡市東区香椎駅東2丁目）（武谷1921：巻頭写真・36-41）、姪浜町字向浜（現福岡市西区小戸3丁目、小戸公園）（武谷1921：巻頭写真・36・39）、姪浜町字阿隈（現福岡市西区小戸1丁目）（武谷1922：巻頭写真・36）において石塁が発掘されている。

大正13年（1924）12月、西新において、西南学院の構内を貫き、市立西新尋常高等小学校新築予定地に南北方向の道路を新設するにともない元寇防塁を開削することになり、地元の西新町青年会や軍人分会によって発掘が行われた。道路の両側面に防塁の横断面が現れ、白砂と粘土を交互に重ねた版築状の様子が観察された（島田1925：44-45）。

（5）『元寇史蹟（地之巻）』の刊行

昭和16年（1941）3月31日、福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書の第14集として、『元寇史蹟（地之巻）』が刊行された。執筆者は福岡県嘱託の川上市太郎である。天之巻（精神動員、気象関係）、人之巻（戦闘関係）も計画されたが未刊に終わっている。本書には「蒙古軍船碇石」「元寇防塁」「多可島考」の3編を収める。「元寇防塁」は、防塁の構築、防塁実査、石塁砂丘埋没と発掘、史蹟指定について記述する。「(三) 防塁実査」では、大正11年（1922）以来、内務省の考査官が来県し、各地の防塁の実査を県係員とともに各郡役所に依頼実施した内容をまとめている（川上1941：67）。

地蔵松原の元寇防塁については、「大部は工学部農学部内にあり」として位置・長さ・高さ等を下記のように報告している（正字は新字体に改め適宜並列点・読点を補った、細字双行は〈 〉内に記し改行位置を／で示す）（川上1941：77-78）。

位置 一光寺裏より防塁線は大学工学部の構内松林の内椽に沿うて北進し、運動場を経過して農学部との境界に於て著しき隆起線あり、農学部に入りて尚隆起線を連続し、夫より消えて農学部の動植物教室・農学教室を経過し右折して東北に向ひ、柵外に出て箱崎町共同墓地に於て約四間発掘せられて築石の露出せるを見たり、地蔵松原の防塁は之にて終る。

長さ 工学部構内 約二百七十六間 内隆起線約十六間
農学部構内 約百四十三間 内隆起線約三十二間
農学部構外より墓地の終端迄 約五十七間
計七丁五十六間（四百七十六間）

高さ 農学部構内隆起線 〈十間を隔て、西方より測れば高さ四尺／六間を隔て、東方より測れば高さ三尺〉
海汀線との距離

工学部構内 百十八間
農学部高地 九十八間
農学部東方屈折地 九十八間

築石の種類 主なるもの

工学部内に保存の築石三ヶあり名島産の蛮岩なり。

農学部隆起線附近より出たる石塊は蛮岩と花崗岩にして、此岩石は立花山、或は志賀島産のものなり。

共同墓地に発掘せられし石質は名島産の蛮岩を主とし、玄武岩と花崗岩とを混入せり。

（註説）

地蔵松原共同墓地の辺〈石築地露／出の箇所〉は往時多々羅の入江の深く湾入せしヶ所にてし

て、附近の田野松原の大部は往時の海面なりしことを首肯し得べし、此入江に乱杭を樹て、賊船の近づくことを拒みしは中村文書で追想せらるる。

位置の「箱崎町共同墓地に於て約四間発掘せられて築石の露出せるを見たり」や、註説の「地蔵松原共同墓地の辺〈石築地露／出の箇所〉」の記載からは、大正9年(1920)に地蔵松原の元寇防塁が発掘され、その後も川上市太郎が本稿を執筆した昭和15年(1940)⁸⁾まで、埋め戻されずに石塁が露出していたと読めなくもないが、「(四)石塁砂丘埋没と発掘」の末尾で「現今防塁見学者の実地見学するは、前述の西新町防塁及び今津防塁の二ヶ所にて、他は指定せられ居れど石塁の存在するなく、唯防塁趾線なると推知するに過ぎざるものである」(川上1941:86)とあるので、発掘後に埋め戻されたとみておきたい。

3. 地蔵松原地内元寇防塁東方起点実写図について

筥崎宮の旧座主家である筑紫家に箱崎地蔵松原の元寇防塁の実測図が所蔵されている(図2・3参照)。本図はこれまで存在が知られていなかった、今回、初めて公表される資料である。

現当主・筑紫頼尚氏によると、中央の標題と実写図左側の地番・面積・土地所有者の記載はともに御尊父・筑紫頼定氏の筆跡とのことである。標題と実写図の筆は同筆であるので、図面も頼定氏が書き起こしたものとみられる。法量は縦43.1cm、横55.9cm。薄様紙に書かれ、標題と実写図はペン書きで、土層部分に茶色の淡彩を施す。実写図左側の地番・面積・所有者は墨書きされている。実写図右下には「筑紫」の朱印が捺されている。

図面上部中央に標題が記され、「糟屋郡箱崎町地蔵松原地内／元寇防塁東方起点／実写図／縮尺貳拾分之壺」(／は改行位置を示す)とある。標題の下、中央に20分の1縮尺図を図示し、その左側には下記の通り、地番・面積・土地所有者が記載されている。

地 番 三千五百七十五番ノ三
反 別 一町八反六畝廿四歩
所有者 箱崎町有

面積は現在のメートル法では約18,525.6㎡となる。実写図に図示された石列の幅は下部で37.6cmを測り、縮尺20分の1であるから、実際の長さは7.52mとなる。石列の両端に地表面からの深さが示され、左端で1.5尺(約45.5cm)、右端で2尺(約60.6cm)とある。

実写図は防塁の前面、すなわち海側(北側)から眺めた景観が描かれている。実写図の右端は石塁が途中で切れた状態となっているので、発掘されたのがここまでであったことを示していよう。図示された石列は実写図の左端で終わり、それより左側は石材のない土層となっている。また、標題には「地蔵松原地内元寇防塁東方起点」とあることから、箱崎地区の防塁がここから始まっていることを示しているのである。「東方」とあるが、実際には北端である。これは、箱崎地区で学生生活を過ごした体験上、感覚的には博多湾側を北、博多方面を西とする認識があるので、「東方」と記されたのであろう。すなわち、本図は九州大学箱崎キャンパスに列なる元寇防塁の起点地の構造を図示した貴重な資料と評価できる。

実写図に描かれた防塁は、西方の博多湾側ではなく、北の多々良川河口を向いており、九州大学箱崎キャンパス内で発掘された防塁の向きとも異なる。現在の地形から判断すると違和感を感じるであろうが、元寇防塁築造当時、地蔵松原が博多方面から長く伸びた砂州の先端地であったためであり⁹⁾、実写図が示す通り、ここを起点に箱崎地区の防塁が構築されたのである。

使用された石材の大きさは、右端の石が最大で、図面上、縦2.5cm、横3.6cmであるので、実際は縦

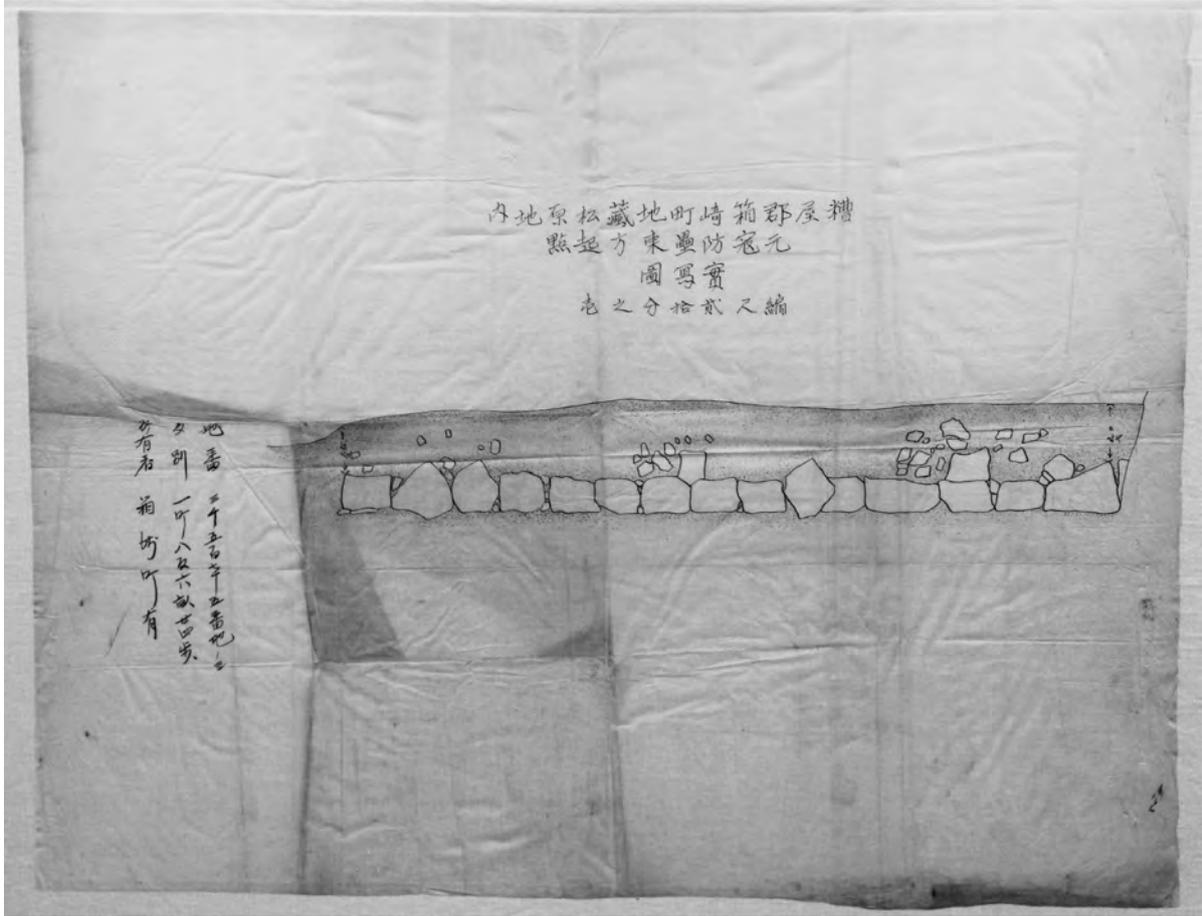


图2 地蔵松原地内元寇防塁東方起点实写图（筑紫家藏）



图3 地蔵松原地内元寇防塁東方起点实写图（部分）

50cm、横72cmの大きさとなる。防塁の上部の石材はほとんど取り除かれた状態であるが、基底部に根石的に大きな石材を配置し、その上に順次小振りの石を積み上げていった様相が観察できる。九州大学箱崎キャンパスで発掘された元寇防塁の構造と同じ状況を呈している。

先述した通り、地蔵松原の元寇防塁は、大正9年（1920）に発掘が行われ、概況が武谷水城によって報告されている（武谷1922：33-34）。掘り出された状況は『筑紫史談』第24集に巻頭写真として掲載されている（前掲、図1）。武谷の報告によると、発掘の長さ約4間半（約8.1m）、石塁の高さ2尺～3尺4～5寸（約60.6cm～103.0～106.1cm）、石塁の上部約1尺5～6寸～2尺（約45.5～48.5cm～60.6cm）とあり、実写図に図示された情報と一致する。また、巻頭写真の景観ともよく一致する。これらのことからして本図は大正9年の発掘に際し、図面化されたものとみられる。実写図が作成されたのが大正9年となると、本図を作成した筑紫頼定氏は当時25歳である。本図は平成12年（2000）の発掘調査まで箱崎地区防塁の唯一の実測図であった。

4. 国史跡の指定

地蔵松原の元寇防塁は、「糟屋郡箱崎町地蔵松原地内元寇防塁東方起点実写図」に記載された地点（字地蔵松原3575番の3）から、JR鹿児島本線を越えて字地蔵松原3575番の1と合わせて、昭和6年（1931）3月30日、史蹟名勝天然紀念物保存法により、①糸島郡今津村大字今津字口戸・同字長浜（福岡市西区今津）、②同今宿村大字横浜字カンノン前（同横浜2丁目）、③同大字青木字松原（同今宿駅前1丁目）、④早良郡壺岐村大字下山門字生ノ松原（同生の松原1丁目）・同姪浜町字生ノ松原（同小戸5丁目）、⑤同字向浜（同小戸3丁目57、小戸公園内）、⑥同字脇（同小戸1丁目34、粕浜）、⑦福岡市西新町807番ノ1（早良区百道1丁目10）、⑧福岡市西新町798番ノ1（同西新7丁目4）、⑨福岡市地行西町71番内（中央区地行2丁目1219）の9ヶ所とともに「元寇防塁」として国の史跡に指定された¹⁰⁾（図4参照）。指定面積は2筆あわせて15,755.96㎡である（福岡市教育委員会1978：34）。

史跡指定がなされた昭和6年（1931）は弘安の役（1281年）から650年の節目の年にあたり、伯爵・松浦厚を会長とする元寇弘安役六百五十年記念会の主催により、同年7月1



図4 「元寇防塁」地蔵松原史跡指定地
（福岡市教育委員会1978所収、図面18を一部改変）



図5 「元寇防塁」地蔵松原史跡指定地現況
（2017年2月27日撮影）

日の東京での記念祭典をはじめ、京都・鎌倉・名古屋・福岡・満州等で記念祭が挙行された（元寇弘安役六百五十年記念会1934）。

現在、史跡指定地は地蔵松原公園として整備され、昭和6年10月に建てられた「史蹟元寇防塁」の石碑と、福岡市教育委員会による文化財案内板が設置されている（図5参照）。

5. JR 鹿児島本線高架工事にともなう発掘調査

筥崎土地区画整理事業にかかわるJR鹿児島本線の立体交差事業にともない、地蔵松原の史跡指定地内において2回発掘調査が行われた。

1回目は平成5年（1993）5月13～31日に実施された。JR鹿児島本線の西側、九州大学農学部演習農場（福岡市東区箱崎6丁目3575-12）に仮設線路が敷設されることから、工事区域内の元寇防塁の遺存状況を確認し、盛土高と建設工法を検討するために調査が行われた。地表下1.8mで防塁を構成するとみられる約50cmほどの大きさの石材（花崗岩もしくは礫岩）を検出した（福岡市教育委員会1995：95）。

2回目は平成12年（2000）9月4～13日に実施された。JR鹿児島本線と史跡指定地が交差する地点（福岡市東区筥松3丁目3575-47）に鉄道高架が建設されることにより調査が行われた。発掘前の標高は約2.5mで、地表面から約1.2m掘り下げたところで砂丘基盤を検出した。人頭よりやや大振りな自然礫10数個が北東—南西方向に直線的に連なる石列を検出した。防塁の基底の一部とみられる。石列の上面は標高1.3～1.4mを測る。その南側後背部からは石列の裏込め石とみられる拳大の小礫が石列より浮いた状態で見ついている。調査区は記録後に埋め戻して保存された。調査の結果を受け、鉄道高架用の橋脚は設計変更により調査区外に設置されることになった（福岡市教育委員会2002c：52-54）。

箱崎地区において薩摩国の分担により元寇防塁が築かれたことは、文献史料により明確であったが、防塁そのものの存在が確認されたのは、大正9年（1920）、地蔵松原で発掘されたのが最初であった。その後長らく、地蔵松原の元寇防塁は、九州大学箱崎キャンパスにおいて防塁が発掘調査されるまで、約3kmあったとみられる箱崎地区の唯一の確認事例であった。擱筆にあたり、今後、箱崎キャンパス内の発掘調査が可及的広範囲に実施され、その成果が後世に至るまで広く公開されることを祈念する。

注

- 1) 役目を終えた元寇防塁の歴史の変遷については拙稿（堀本2010：191-194）参照。
- 2) 現在の九州大学病院キャンパス。
- 3) 現在の九州大学箱崎キャンパス。
- 4) 老朽化により撤去されて現存しない。筥崎宮グラウンド入り口公衆トイレ付近に貞享元年（1684）、福岡藩3代藩主・黒田光之が寄進した石造の鳥居があった。
- 5) 武谷水城は本文中で「箱崎の東端」とするが、実際には北端に当たる。前年報告した「多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就て」（武谷1921）の巻頭写真でも表題を「箱崎東方地蔵松原発掘石塁」としている。
- 6) 武谷水城は、香椎浜男の石塁を元寇防塁ではないとする説における防塁認定の要件を「元寇防塁に具備すべき要約（一部の人の唱ふる処、仮りに名附く）」（武谷1922：33）と表現している。
- 7) 平成28年（2016）に今津地区の東端に近い地点で行われた確認調査では、陸側に石積みをも有さない海側片面のみの石塁を検出した。
- 8) 末尾にある「昭和十五年（紀元二六〇〇）十二月稿」の記載による。
- 9) 地蔵松原の防塁の向きについては、武谷水城がすでに指摘している（武谷1922：35-36）。
- 10) 指定書の全文は、川上市太郎「元寇防塁」（川上1941：87-92）に紹介されている。

文献

- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構—大学博物館北側の元寇防塁—」『西南学院大学国際文化論集』31-2、121-144頁
- 川上市太郎 1941『元寇史蹟（地之巻）』福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14集、福岡県
- 川添昭二 1971『注解元寇防塁編年史料』福岡市教育委員会
- 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
- 元寇弘安役六百五十年記念会 1934『元寇弘安役六百五十年記念会紀要』
- 史蹟現地講演会 1915『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
- 島田寅次郎 1925「西新町（百道原）新発掘元寇防塁の横断面」『筑紫史談』34：44-45頁
- 武谷水城 1921「多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就て 附香椎発掘の石塁」『筑紫史談』24：32-41頁
- 武谷水城 1922「多々良以東元寇防塁有無に就ての補足—香椎発掘の石土混塁と地蔵松原発掘の石塁—」『筑紫史談』25：33-36頁
- 中山平次郎 1913a『福岡附近の史蹟（殊に元寇の史蹟）』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 中山平次郎 1913b「箱崎の石塁」『福岡日日新聞』6月12～14・16・18～20日連載（後に中山平次郎著・岡崎敬校訂 1984『古代の博多』九州大学出版会、213-236頁、所収）
- 中山平次郎 1914「筥崎の防塁」『筑前史談会講演集』1：51-79
- 中山平次郎 1915「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」史蹟現地講演会『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社、309-335頁
- 日比野利信 2004「筑紫史談会の成立と活動」太宰府市史編集委員会編『「古都太宰府」の展開』太宰府市史通史編別編、太宰府市、239-303頁
- 福岡市教育委員会 1968『福岡市生の松原元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告第3集
- 福岡市教育委員会 1969『福岡市今津元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告第4集
- 福岡市教育委員会 1970『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告第11集
- 福岡市教育委員会 1978『史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書』
- 福岡市教育委員会 1995『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.8（平成5（1993）年度）、95頁
- 福岡市教育委員会 2001『国史跡 元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告第694集
- 福岡市教育委員会 2002a『博多85—博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』福岡市埋蔵文化財調査報告第711集
- 福岡市教育委員会 2002b『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告第726集
- 福岡市教育委員会 2002c『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.15（平成12（2000）年度）、52-54頁
- 堀本一繁 2010「蒙古襲来と博多—元寇防塁の築造と異国警固体制—」高橋慎一郎編『史跡で読む日本の歴史6 鎌倉の世界』吉川弘文館、186-211頁
- 堀本一繁 2012「『『蒙古襲来絵詞』の復原に見る竹崎季長の移動経路』『交通史研究』78号、1-18頁
- 堀本一繁 2017a『『蒙古襲来』ジュニアガイド』福岡市博物館
- 堀本一繁 2017b『『蒙古襲来』史跡めぐりマップ』福岡市博物館
- 山田安栄 1891『伏敵編』吉川半七

7. 九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境

福田 正宏・下山 正一・市原 季彦・森 貴教・谷 直子

1. 経緯と目的

(1) 調査に至る経緯

九州大学箱崎キャンパス埋蔵文化財調査の一環として、2017年5月8日～同年6月30日に旧理学部エリア内の旧理学部中庭（HZK1701）地点で発掘調査を実施した。HZK1603・HZK1604地点の発掘調査（本書Ⅲ章参照）により、中山（1913など）がその存在を指摘した「箱崎の元寇防塁」の一部とみられる石積み遺構は、農学部防音講義室周辺（HZK1603地点西地区）から旧理学部エリア東部の会議室付近を通過して、ほぼ南北方向に直線的に延びる可能性が高いと考えられた（図1）。

HZK1701地点では、旧理学部本館と旧理学部二号館とに挟まれた中庭エリアで、ほぼ東西方向に5カ所のトレンチ調査区（Ⅰ区：200㎡・Ⅱ'区：100㎡・Ⅱ区：100㎡・Ⅲ区：200㎡・Ⅳ区：100㎡・Ⅴ区：100㎡）を設定した（図2）。安全対策等を考慮したため断続的な調査区となったが、これにより、全長60mの範囲内において遺跡に関わる土壌形成環境を、博多湾の旧汀線に対してほぼ直角方向に見通すことが可能となった。発掘調査の結果、本地点は現代機械攪拌（disturbance）の影響を随所に受けるが、Ⅱ区においてHZK1603西地区・HZK1604西地区でも検出された石積み遺構と遺構下部の盛土整地層、また、Ⅱ区～Ⅱ'区においてHZK1601地点でも検出された溝状遺構の存在が確認された。出土状況は、これらが一体の構造物であることを示唆する（九州大学埋蔵文化財調査室2017）。

石積み遺構は、現代攪拌に由来する途切れはあるが、大型礫が7石並んだ状態で検出された。HZK1603地点西地区・HZK1604地点西地区の石積み遺構のラインをそのまま直線的にのびした地点に、ほぼ位置する。石積みはその最下段の石列とみられ、2段目以上は存在しない。間詰め石と考えられる拳大礫が築石間に充填されていた。背部と周囲には石片が散在していた。周囲に散在する石片のなかに、裏込め栗石や間詰め石の類いも含まれると考えられる。しかしながら、石積み背面は、東側に接するコンクリート製建物基礎設置にともなう機械掘削により大きく削りとられている。この現代攪拌の影響により、石列に接する石片以外は粉碎されている。

石積み遺構の海側となるⅢ区（東西約20m）で、標高約0.8mまで重機による全面掘削を行い、北側掘削壁面（北壁）に西傾斜となる風成砂層を確認した（図3）。これは、古博多湾にむかって緩やかに傾斜する浜堤層の地層面である。壁面観察の結果、石積み遺構はこの浜堤の頂部付近に設置され、溝状遺構はこの浜堤の背面窪地に形成されていることが判明した。これにより、石積み部と付属構造物からなる「箱崎の元寇防塁」が立地した当時の地形を復元できる見通しが得られた。本地点の調査結果の詳細については次年度刊行予定の報告書に譲り、本論では、埋蔵文化財調査とあわせて実施した堆積環境調査の結果を報告する。

本論の内容は、埋蔵文化財調査を福田と森、地質学的調査を下山と市原、出土遺物の分析を谷が担当した。福田と下山が議論を行い、全体調整と論点整理を行った。

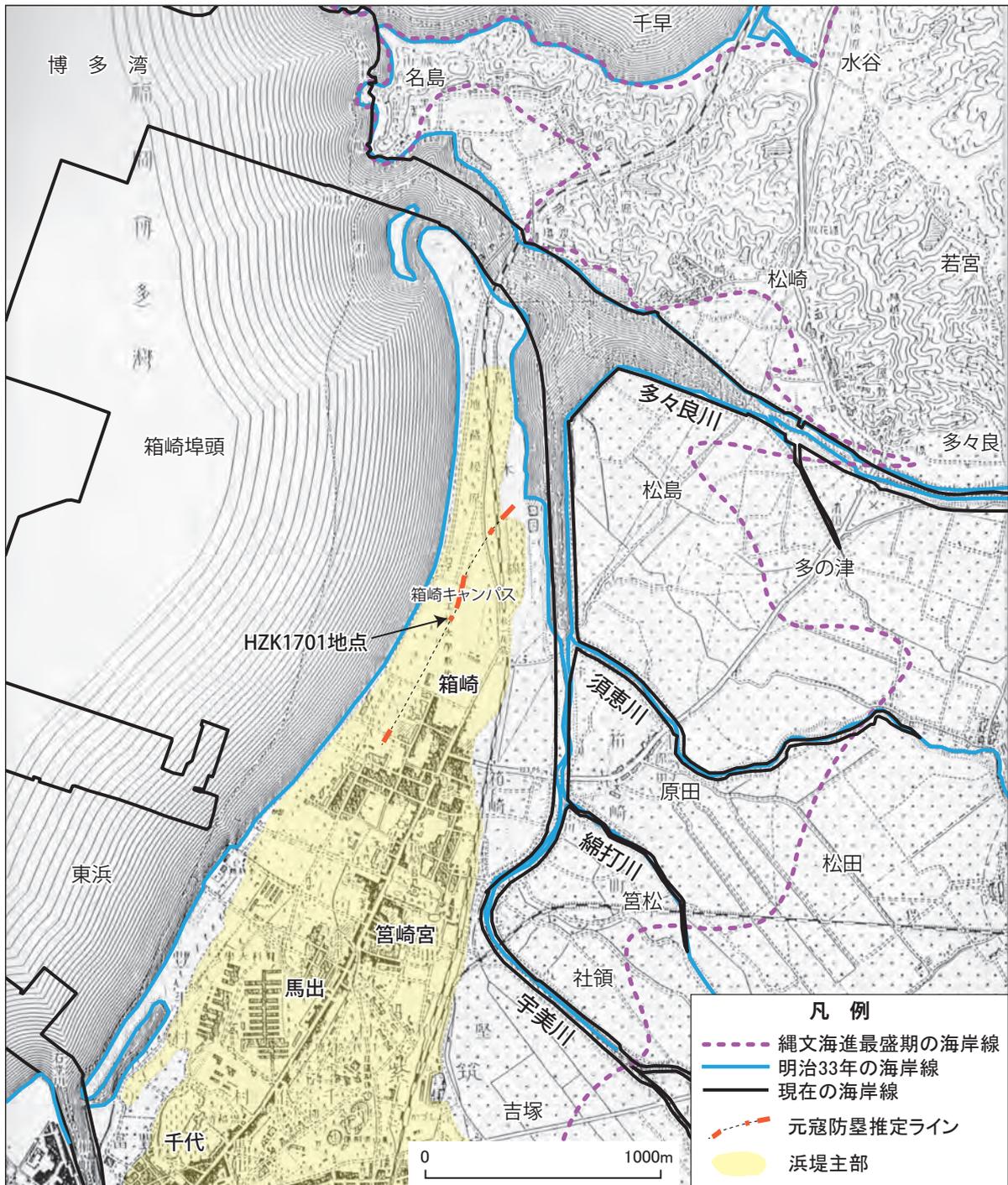


図1 明治33年測量の地形図と現在および縄文海進最盛期の海岸線
元寇防塁推定ラインは、本報告書作成時現在の九州大学埋蔵文化財調査室の見解による

(2) 調査の目的

博多湾沿岸には、1281年の弘安の役直前に建設された元寇防塁という石垣列の遺跡が点在する。文献史研究（川添編1971、川添1977）によると、これは元の軍船からの上陸攻撃を阻止するため、博多湾沿岸一帯の砂浜の水際に建設された。その効果は絶大で、弘安の役では上陸攻撃を許さなかった。元寇防塁の石垣列は弓矢の射程を考慮した水際の上陸阻止線であるともいえるので、すぐ前に汀線があったとしてもお

かしくない。元寇防塁の位置が海上や海浜にいる外敵との戦闘に備えて計算されていたとすれば、防塁から汀線までの距離は当時の兵法や技術力を示す貴重なデータとなりうる。元寇当時の博多の海岸地形に人々の強い関心が寄せられるゆえんである。その反映なのかもしれないのが、室町時代に元寇当時の博多の海岸地形について描かれたといわれる「博多古図」なる絵図である。博多古図はさまざまな種類が伝存されており、権威ある歴史資料としてしばしば引用されている。しかし、博多古図を詳細に研究した中山(1984:177-212)の未発表論文によれば、写本で伝わったため、「博多古図」は一つとして同じものがなく、写本の都度に精巧になっている。「博多古図」は、1281年の弘安の役から時代が下る江戸時代の明和年間(1764～1772年)前後に描かれたものであり、信頼性のある歴史資料ではない。

「箱崎の元寇防塁」頃の汀線に関しては、柳田(1984・1988)と柳田・西園(2001)が、中山(1913など)の指摘内容、明治期の地形測量図、中世の宮崎宮門前町の字図などを駆使した推定を行っている。しかしこれまで、その位置を具体的に示す深部堆積状況が報告された例はなかった。築造が割り当てられた海岸の状態は、材料となる石の供給地までの距離や浜堤の高低差など、きわめて多様であったと思われる。箱崎地区での石積み遺構の連なりは、いくつかの川の河口を閉塞するように北にむかって延びた砂州の狭い部分にのっている(図1)。九州大学箱崎キャンパスが立地する砂州は更に先端にあるため、砂州の輪郭は、博多湾からの海砂の供給と河川による侵食の繰り返しにより、絶えず変化したはずである。そのため箱崎キャンパスでは、他時代の汀線から当時の汀線を直接推定することは難しく、遺跡深部に続く地層の連続性や上下関係から推定することが求められた。

2. ジオスライサー調査と地層解析の結果

(1) 調査の方法

地形は、時代とともに変化していく。遺跡が形成された時代の自然地形について検討するためには、遺跡が形成されるまでの地形発達を調べる必要がある。そのためには、地層(堆積物)の堆積環境を調べ、その分布を検討する必要がある。今回の調査区は現在の地下水位が高く、通常の発掘調査方法による掘削では直接的な地層観察ができない。そこで、水辺に接する遺跡における地層堆積環境調査方法として全国的にも実績のある定方位地層連続採取調査法(ジオスライサー調査法)を導入した。

この調査法では、矢板型のサンプルトレイとシャッタープレートを地中に別々に打ち込み、その間に挟まれる地層を抜き取る。そのため、ボーリングコアに比べて幅広く地層を採取でき、地下水位以下の人為掘削できない深部の地層断面を定方位で観察できるため、地層の堆積環境が復元しやすい。また採取試料については、年代測定用試料や火山灰層などの分析試料を採取しやすく、ボーリングコアと比較して遺物が高確率で混入する。遺物包含層や遺構の存在のみならず、遺物との共伴関係を確認しやすい点に注目される。

ジオスライサー調査は2017年6月19日～21日に実施した。今回は、HZK1701地点Ⅲ区の北壁(約20m幅)に接する4カ所(GS-1～GS-4)にジオスライサーを挿入し、博多湾に直角方向となる定方位地層を採取した(図4)。挿入箇所を選択は下山との議論を経て福田・森が選択し、調査は市原が行った。使用機材はクローラクレーン(35t吊り)、バイブロハンマー(10馬力)、ジオスライサー(特製ステンレス製4.2m、幅44cm、試料採取幅約35cm)である。採取試料を室内に移動してから、市原が堆積学的な地層解析を行い、含有化石や生痕化石にもとづいて、より詳細な堆積環境を推定復元した。

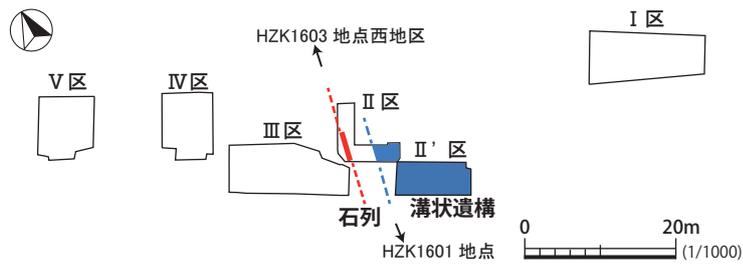


図2 HZK1701地点調査区配置平面図

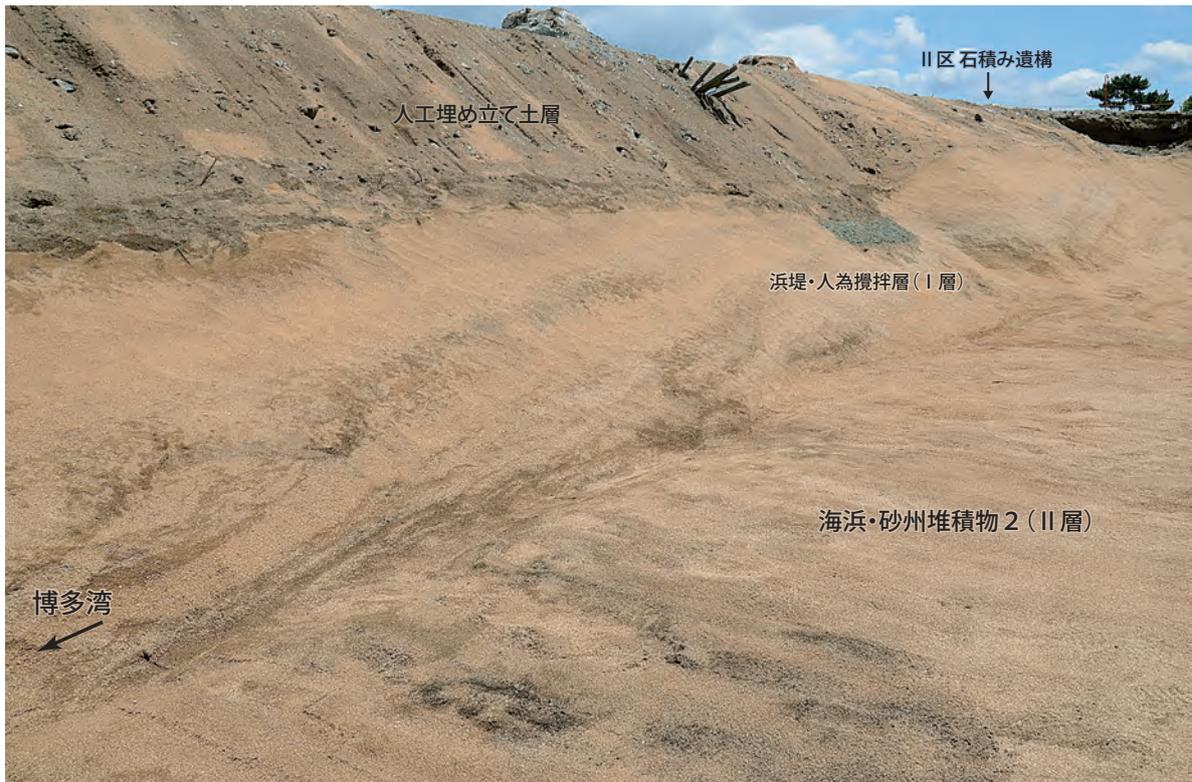


図3 HZK1701地点Ⅲ区北壁 浜堤断面検出状況(西から)



図4 ジオスライサー調査風景

(2) 地層解析結果 (図5)

HZK1701地点Ⅲ区におけるジオスライサー調査によって、上から下に、次のような地層の特徴が認められた (図5)。

風成砂堆積物 主として中粒ないし粗粒砂からなり、細礫を含む。Ⅲ区の北壁で高さ約2mの大型の平板型斜交層理が見られる。ジオスライサー試料においても最上部で観察される。調査区壁面およびジオスライサー試料において、この砂層は海岸方向に約20°傾斜していることが観察される。こうした層相は、現世の浜堤に発達する砂丘相に酷似している。浜堤の前面は地層堆積時の地形の傾斜に沿って砂が付加して堆積し、その傾斜面が不安定になると砂雪崩を発生させる。そのため、平板型斜交層理砂層の下部は傾斜が緩やかになり、風成リップル砂層を覆う場合もある。なお、本層堆積時に海側には古博多湾がひろがっていたため、博多湾の海成層部を覆うように堆積していると思われる。本層は、浜堤の主たる堆積物であると思われる。

塩性湿地堆積物 主としてシルトと砂からなり、植物片を多く含み、植物根の痕跡 (rootlet) を多く含むことで特徴づけられる。本層は、GS-2の深度0.95m付近およびGS-3の深度0.9～1.05mにおいて観察される。上位は先述した風成砂堆積物に覆われる。本層の特徴のみからは塩性である証拠は示せないが、後述する干潟堆積物の直上に認められることから、干潟の縁辺部に発達する塩性湿地堆積物であると判断できる。

干潟堆積物 主として砂とシルトからなる。生物攪拌 (擾乱: bioturbation) が著しく、堆積構造は不明瞭である。直径が1～2cmの生痕化石 *Thalassinoides* isp. がみられる。貝殻遺骸を含む。後述の潮下帯堆積物との境界ははっきりとしないが、本層はサルボウ・テリザクラ・シオフキ・イソジミ・マテガイ・ムラサキガイ・オオノガイ・スガイ・アラムシロガイ・イボキサゴ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ウミニナ・ヘナタリなどの貝殻遺骸を多く含むことで特徴づけられる。貝の種構成から干潟堆積物であると判断できる。

潮下帯堆積物 淘汰が良好な砂とシルトよりなる。GS-3では深部において、わずかに級化をともなう層厚約20cmの単層が数枚観察される。本相にはシズクガイが点在する。GS-3で観察される単層は、洪水などにともない河川から運搬された砂泥が一度に堆積したものであると考えられる。つまり、河川からの碎屑物供給が充分にあるような河口の沖側の環境が想定される。

河川堆積相 淘汰の悪いシルト混じり砂を主体とする。木片などの植物片を多く含む。砂層にはしばしばリップル葉理が認められる。今回地層採取を実施した箇所なかで一番陸側に位置するGS-1の下部に、わずかに確認される。このことから、浜堤の背後に位置する河川の影響を受けやすい環境がその下位にあったと推定できる。塩水湿地堆積物とした層相は、一部河川氾濫による堆積物起源となると思われ、本相と一部は漸移的な関係にあると思われる。

上述した分類のなかの干潟堆積物の上限付近が、石積み遺構が頂部に築造された浜堤にともなう旧汀線であるのが妥当である。Ⅲ区の調査区下面から掘削したGS-2・GS-3・GS-4では、いずれもGL-1m付近がその上限となる。海成層と判断した部分には、貝殻遺骸が豊富に含まれた。しかし、上限付近において、貝殻は化学的に不安定になり溶脱してしまう。ここでは生痕化石 *Thalassinoides* isp. が見られたため、それをもって海成層上限とした。*Thalassinoides* isp. は現世において、主に甲殻類のスナモグリ類によって形成される巣穴形状と酷似している。その特徴として、壁面のシルトによる裏打ち構造、巣穴の分岐構造などが挙げられる。とくに現在の干潟などで見られるニホンスナモグリ、ハルマンスナモグリは小型のスナモグリであり、その個体数も多く、形成する巣穴の大きさも今回地層中で観察された生痕と同様のものである。そのため、今回観察された生痕化石 *Thalassinoides* isp. はスナモグリ類の生痕である

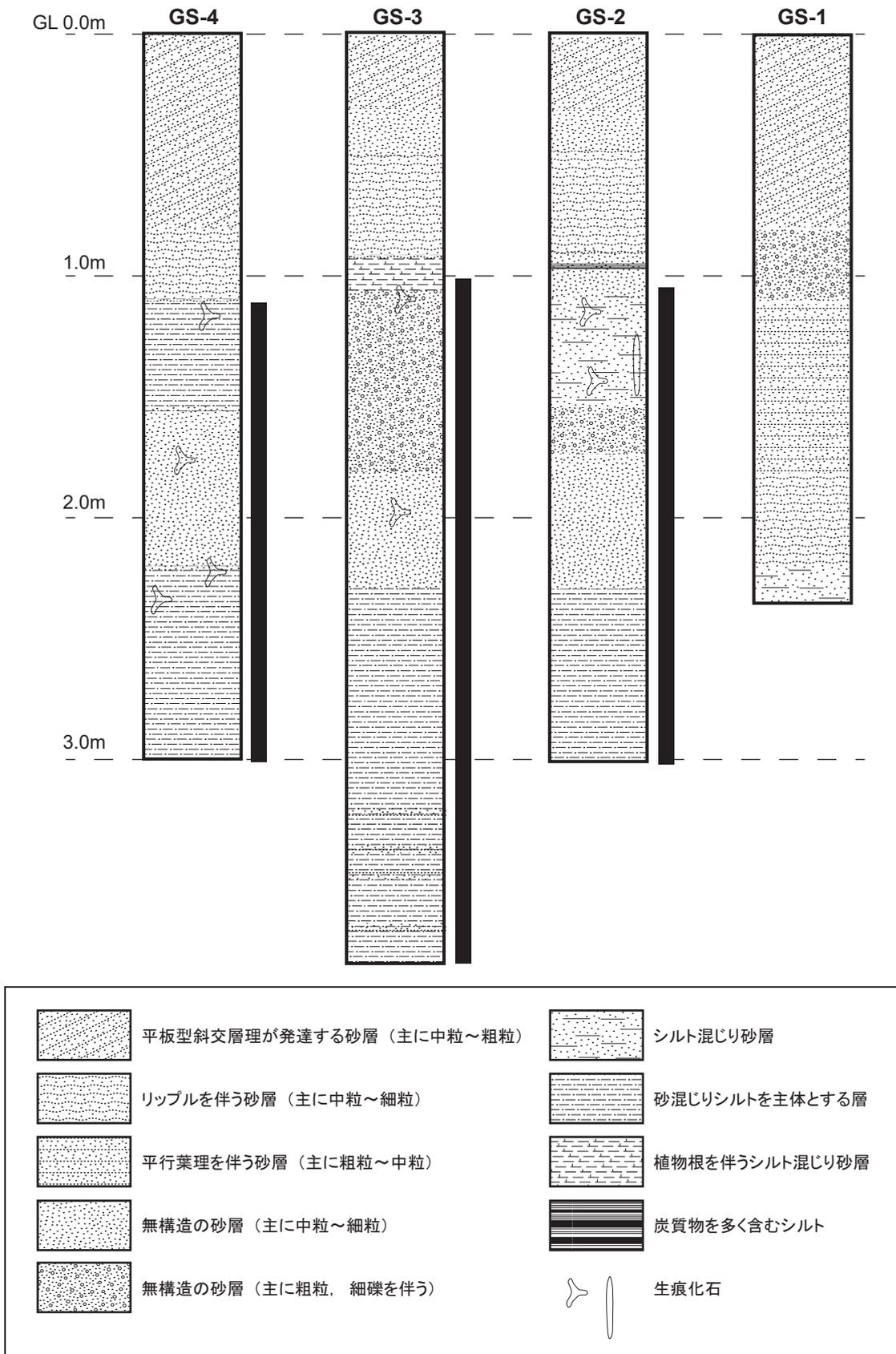


図5 堆積柱状図 (縦の太線は海成層部分を示す)

可能性が高く、海成層の証拠として用いることができると判断した。

海成層の上位は浜堤の風成層が覆うように堆積しており、遺跡産出層準から風成砂層の見た目の傾斜（堆積時の地形傾斜）を延長して海成層上限と交差する部分が遺跡形成当時の汀線付近である、という推定が可能である。

3. 放射性炭素年代と古環境変遷

（1）放射性炭素年代測定結果とその適合性について

各層の形成時期を明らかにするため、ジオスライサー調査により採取された4本のコア（GS-1～GS-4）と、石積み遺構の基底石下から背面にむかって分布する整地層から試料を採取し、 ^{14}C 年代測定（AMS法）を行った。測定はすべて株式会社パレオ・ラボに依頼した。測定結果を表1に示す。

年代測定に用いた試料は、木片と貝殻の2種類である。測定結果から、この場所での年代モデルを作成して、年代値の適合性をチェックした。その結果を、図6の深度・年代曲線で示す。2種類の試料のうち貝殻は海洋リザーバー効果の影響で、実際より200～300年ほど古くなる傾向がある。これに対して、生材と炭化木の測定値はリザーバー効果がほとんどないと考えられ、より信頼性が高い。このため、生材と炭化木の測定値を結んだライン（図の破線）を深度・年代曲線として採用できる。

すべての値をプロットしてみると、ほとんどの貝殻が深度・年代曲線から古い方にずれている。通常、海に棲む貝の年代が古くなることは、再堆積以外にも、海水に重炭酸イオンとして古い炭素がリザーブ（蓄え）されているので、当然起こりうる。貝殻は陸由来で、海水中に長期間リザーブされている古い炭素でつくられるため、 ^{14}C 年代の値は全体的に古くなる。この海洋リザーバー効果は海域ごとに異なり、博多湾では、200～300年程度のローカルリザーバー効果がある（古くなる）ことが知られている（Nakanishi, et al. 2017）。貝殻の年代値がリザーバー効果の影響を受けたと考えられる数値よりも著しく古くなる場合は、一旦堆積した貝殻が移動して再堆積したと説明できる。

ただし、海棲貝殻試料PLD-34839のみが若い方に大きくずれる現象（若すぎる年代値）については、説明不可能である。このケースでは若い炭素が測定されたことになる。その主たる原因として、①採取位置が本当はもっと浅かった、②現代炭素で貝殻試料が汚染された、③計算を誤ったことが考えうる。そのうち①については、調査時に慎重に採取しており考えにくい。採取試料を確認しても、ジオスライサー挿入の際に押し込まれた形跡は残っていない。今回の調査で判明した事実として、870 y BP（15世紀前半～後半）という時代のこの場所は、海がなく陸地となっている。そのため、この場所にサルボウという海に棲む貝が存在すると考える根拠がない。また、②についてであるが、測定者のパレオラボからの回答では③の実験過程に問題はなく、「サルボウの生態」や「淡水によるリザーバー効果」が原因としている。しかし、これは古すぎる年代値の説明にはなるが、若すぎる年代値の説明にならない。もしもサルボウの生態で淡水の影響があるならば、同様の現象がほかの貝殻試料でも当然起こるはずだが、ほかの貝の年代はすべて古く出ている。年代モデル曲線から大きく逸脱し、測定値が異常な理由が説明できないため、PLD-34839の年代値を採用しない。

表1 ジオスライサー調査に関する放射性炭素年代測定値リスト

地点or GSコア	測定番号	試料	深度 m	¹⁴ C年代 year.B.P ± 1σ	誤差 ± 1σ	歴年較正值 cal year (2σ)	備考
GS-1	PLD-34835	生材	2.3	1265	20	678-774AD (95.4%)	若すぎる
GS-2	PLD-34836	生材	0.93	930	20	1035-1158AD (95.4%)	
GS-2	PLD-34837	シオフキ	1.52	3875	20	1976-1781BC (95.4%)	
GS-2	PLD-34838	ツメタガイ	2.05	2440	25	206-37BC (95.4%)	
GS-2	PLD-34839	サルボウ	2.57	870	20	1424-1495AD (95.4%)	
GS-3	PLD-34840	カシパン	1.83	2560	20	361-200BC (95.4%)	
GS-3	PLD-34841	生材	3.84	2465	25	765-477BC (93.3%)	
GS-4	PLD-34842	ハマグリ	1.65	2040	20	111BC-22AD (94.7%)	
盛土層	PLD-34843	炭化木	0	785	25	1209-1279AD (95.4%)	

参考 石築地の築造 1276AD (建治2年) から
 参考 弘安の役 1281AD (安永4年)

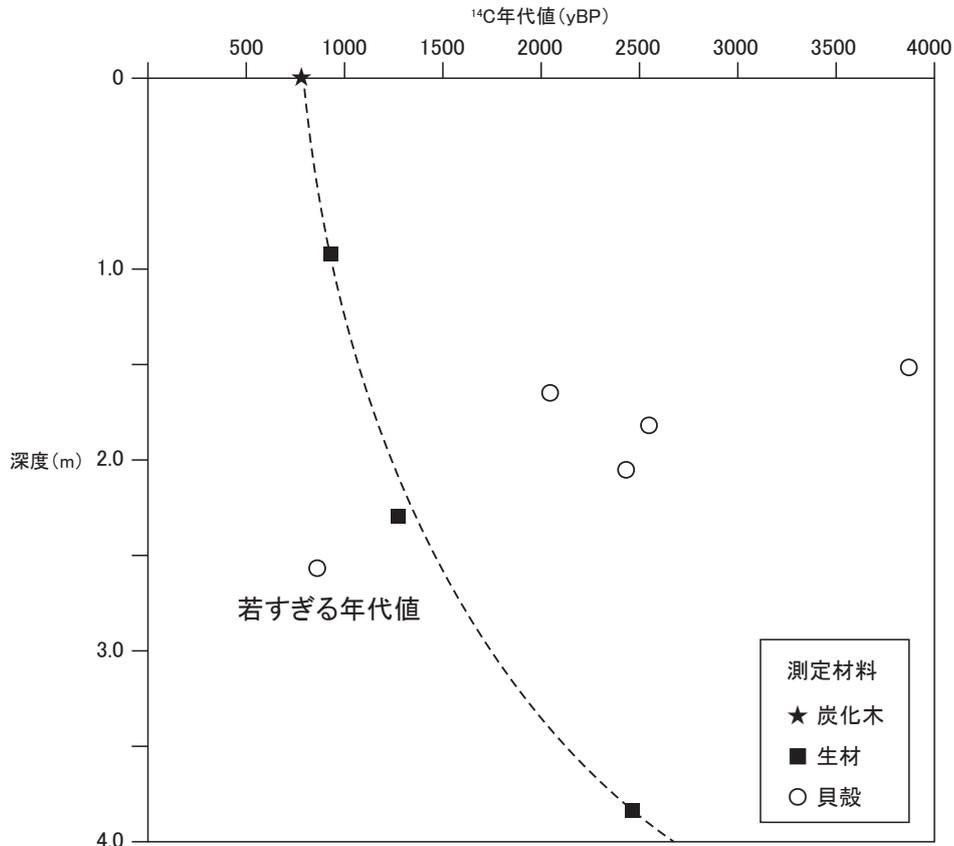


図6 ジオスライサー調査コアでの深度・年代曲線と測定値の適合性

(2) 盛土整地層出土木炭の年代

PLD-34843は、埋没後攪拌postburial disturbanceの影響がほぼないと判断した石積み遺構下部の盛土整地層 (Ⅱ区) から、横倒しの状態で出土した瓦器片の下面に接して出土した最終年輪外の木炭片 (広葉樹) である¹⁾。共伴遺物は、口縁部から胴部にかけての瓦器碗の破片である。型式年代を絞り込みにくいが、中島 (1995) によると、北部九州では瓦器碗は12～13世紀を中心に使用された。元寇防塁の築造時期 (13世紀後半) もしくはそれより古い可能性が高い。

採取木炭は、その出土位置から、埋没後に上部から落ち込んだものではなく、石積み遺構の築造にともなう盛土・整地時に、瓦器片とともに紛れ込んだものであるといえる。つまり、余所で掘り返された後、

この地点に運搬・盛土された土砂に混入した木炭片である。暦年較正年代（1209-1279 cal AD）は、元寇防塁築造の開始した1276 AD前後からさほど離れない時期にあることを示唆する。相伴遺物の型式年代に近いと考えられる。したがって、防塁築造直前の人間による整地活動にともなう木炭である可能性がきわめて高い。

（3）古環境変遷

今回の調査では、元寇防塁の一部とみられる遺構が検出され、弘安の役当時の汀線位置を探る試みがなされた。横断方向の掘削範囲が長く、元寇防塁の基部の地層を海側に追うことで当時の汀線と防塁の位置関係がわかるチャンスであった。この目的のため、石積み遺構と直角方向でその海側にトレンチを掘削して遺構基部の土層をトレンチ壁面に沿ってトレースしたほか、トレンチ内の4地点（GS-1～GS-4）でジオスライサーを用いて定方位試料を採取した。その結果、地層は下から、博多湾堆積物、干潟・湿地堆積物、海浜・砂州堆積物2（Ⅱ層）、浜堤・人為攪拌層（Ⅰ層）の順に重なり、これらの地層を元寇防塁が構築された鎌倉時代中期以後の地層である海浜・浜堤堆積物1層と人工埋め立て土層が覆う（図7）。

埋蔵文化財調査とジオスライサー調査で得られた地層区分と標高との関係から、元寇当時の海岸線位置を推定した（図8）。防塁建設当時存在した最新の地層は浜堤・人為攪拌層（Ⅰ層）であり、その最上部に防塁基部の整地層を含む。浜堤・人為攪拌層（Ⅰ層）のうち、防塁の基部を1281年の弘安の役直前の時間断面と考えて、浜堤・人為攪拌層（Ⅰ層）の最上部と大潮低潮位線の交点を干潮時汀線とすると、防塁前面から約20～30m西側の位置が当時の干潮時旧汀線と推定される。

防塁が築造された鎌倉時代中期（13世紀後半）に至るまでの古環境を復元する（図9～12参照）。GS-2～GS-4では、潮下帯→干潟→砂州→浜堤という変遷が認められる。暦年較正結果から、GS-2深度-0.93mの生材（PLD-34836）は11世紀前半～12世紀半ばとなり、佐藤（2013）による箱崎遺跡Ⅰ・Ⅱ期（平安時代中期～後期）前後の本地点には干潟があったといえる。GS-1深度-2.3mの生材（PLD-34835）は7世紀後半～8世紀後半となり、箱崎遺跡で生活痕跡が希薄となる古代（Ⅰ-3章参照）の本地点には干潟があったといえる。GS-3深度-3.84m採取の生材（PLD-34841）の2465 y BPについては、暦年代を絞りにくい、縄文晩期～弥生前期の本地点は潮下帯にあったといえる。潮下帯から干潟への移行は、全体的に古い年代が出ている貝殻試料の測定値のみであるが、全体的な分布傾向から、紀元前1千年紀後半とみておく。干潟から砂州への移行期は、GS-2の泥炭薄層に含まれる生材（7世紀後半～8世紀後半）よりは若くなる。次節で述べるように、干潟・湿地堆積物を覆う海浜・砂州堆積物2（Ⅱ層）には12世紀後半～13世紀前半の遺物が含まれる。そのため、9～12世紀頃に風成砂堆積物の形成が始まり、浜堤の発達を経て13世紀後半の防塁築造期に至ったという経過を想定することができる。

4. 風成砂堆積物以下出土の考古遺物

（1）遺物の出土状況

HZK1701地点・Ⅲ区の遺物包含層Ⅱ層（海浜・砂州堆積物2）は、標高0.7～1.5mに当たる。東から西（博多湾側）にむかって次第に薄くなり、緩やかな斜行層理をなす。標高約0.6mで地下水層に達したため、掘削を中止した。遺物包含層Ⅱ層からは非常に細かい土器片（小さいもので長径1cm程度）や陶磁器片が出土した。手掘り掘削では採取困難なほど細片化した遺物が圧倒的多数を占めたため、フルイによる選別回収を行った。

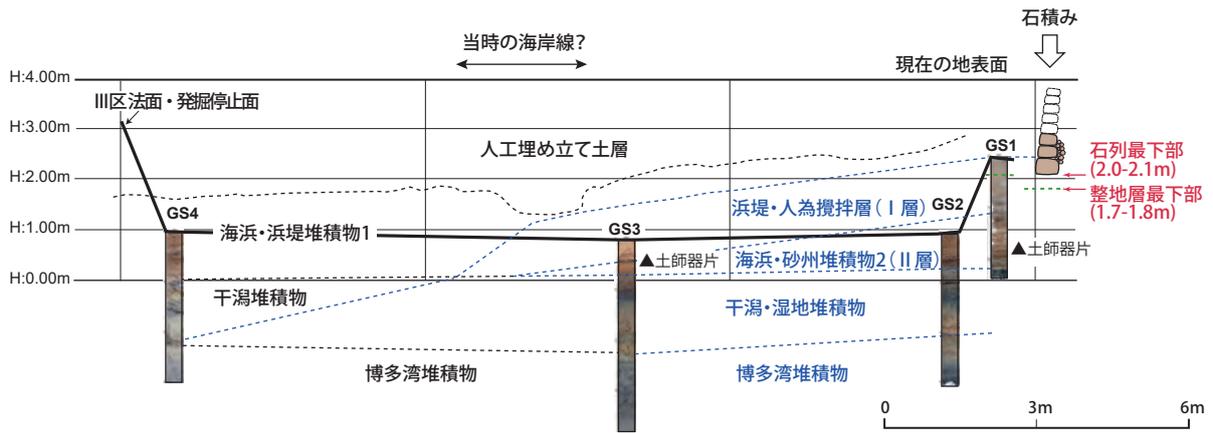


図7 防塁築造当時の海岸線位置の推定 (左が博多湾側)

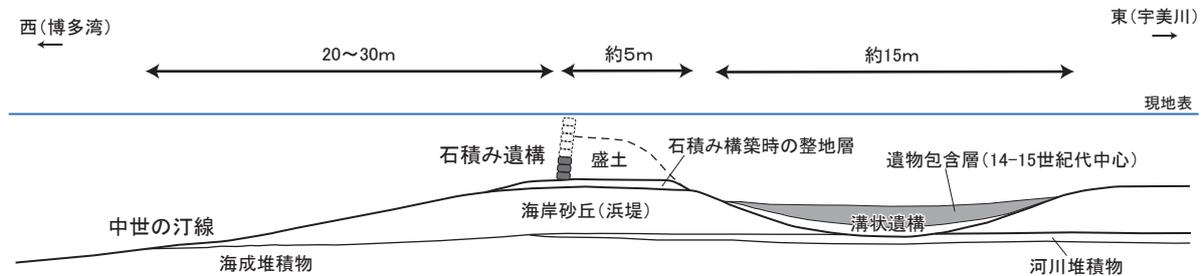
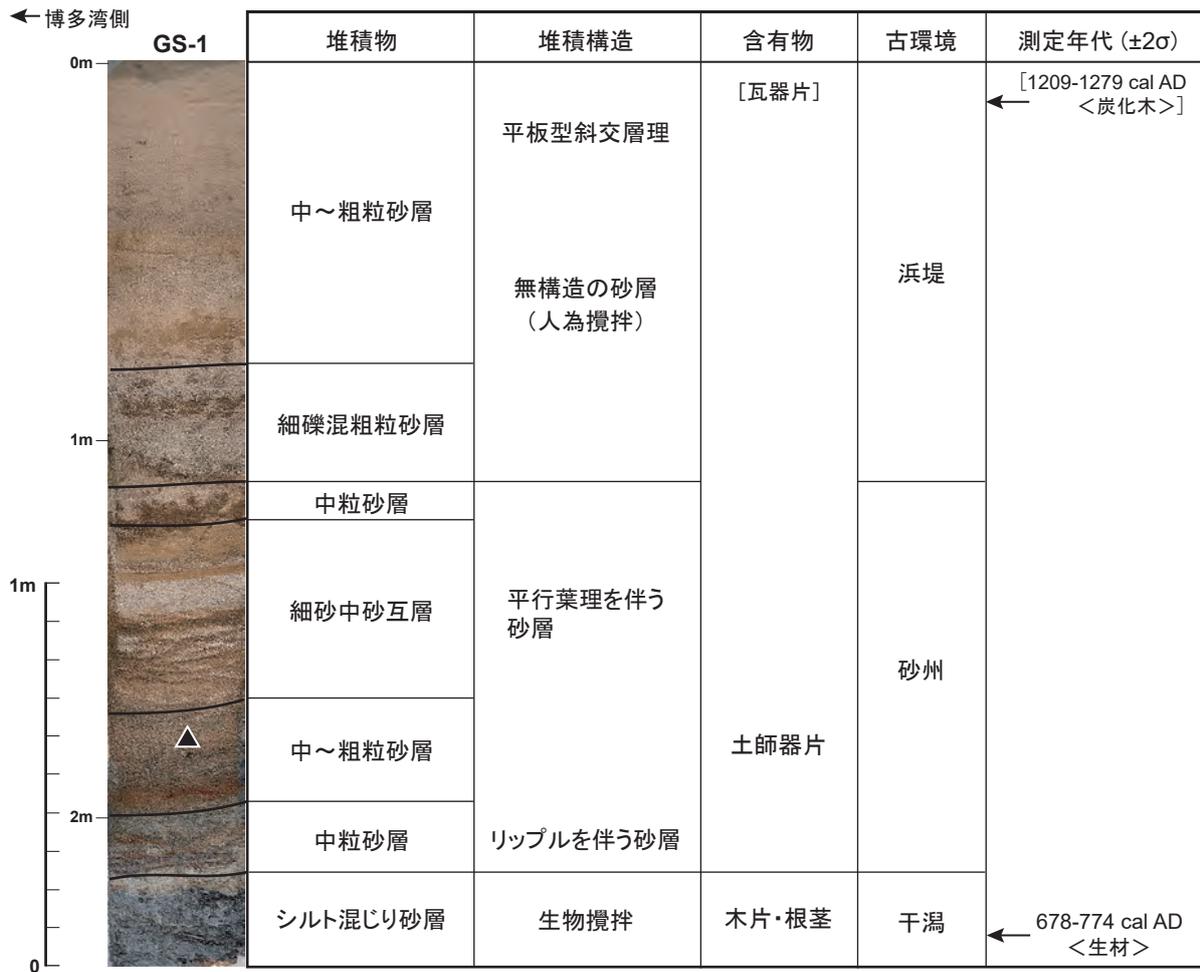


図8 発掘調査とジオスライサー調査から推定された模式断面

Ⅲ区のなかでは、石積み遺構に近い東側の標高1.0～1.3m付近で、陶磁器類が多く、西側の標高0.7～1.0m付近では土師器の細片が多い、という傾向がある。遺物包含層Ⅱ層から出土したほぼすべての土師器片の表面と端部は、著しく摩滅していた。海岸や氾濫原などの立地条件にあった遺跡が水の作用により浸食され、各種物質とともに水中を移動して再堆積する過程で、これらの土器片は種々の接触により破碎され、ローリングを受けた後、自然堆積物を構成する要素の一部として、陸域に供給された砂礫のなかに埋没したと考えられる。つまり土師器片は、堆積物の供給後の砂州上における人為活動にともなう遺物ではない。ほかに、Ⅲ区西側の遺物包含層Ⅱ層中（標高約0.7～1.0m）の複数地点において、黒色物の堆積範囲（長径約1m、厚さ約5cm）が確認された。遺存状態が悪く原型をとどめないが、植物起源の有機物である。これらについては、同層中に含まれる土器片と類似した出現由来が想定され、いわゆる考古堆積物（archaeosediment：e.g., Butzer 1982）ではない。水中環境に一定期間おかれた有機物が、この場所に打ち寄せられたものと判断した。

遺物包含層Ⅱ層の下部となる地下水層直上からも、陶磁器や土師器の破片が複数出土した。これらは、遺物包含層Ⅱ層出土品にくらべて破片が大きく、ローリング痕跡があまりない。地下水以下は安全対策のため発掘調査対象外としたため、遺物の垂直分布範囲を確認できていないが、その出現由来はおそらく遺物包含層Ⅱ層上部とは異なる。下部の干潟・湿地堆積層の形成過程と関係すると推察できる。



TP 0m→

図9 堆積構造と古環境変遷① (GS-1) ([] 内は参考情報)

(2) 遺物包含層Ⅱ層 (海浜・砂州堆積物2) の遺物 (図13)

Ⅲ区Ⅱ層から、土師器の皿・坏・捏鉢、白磁の皿・碗、青磁の皿・碗、磁竈窯をはじめとした中国陶器の盤・鉢・四耳壺の耳などが出土した。遺物群は12世紀後半～13世紀前半のものである。

図13に代表的な出土遺物を示す。1～3は土師器の皿である。いずれも内・外面ともナデ調整で、底部外面に回転糸切り痕がある。2は底部に糸切り後、板状圧痕がある。口径は8.4～8.8cm、器高は0.8～1.0cmである。4・5は土師器の坏である。いずれも内・外面ともナデ調整で、底部外面には回転糸切り痕がある。それぞれ、口径14.2cm、13.0cm、器高2.1cm、2.7cmに復元できる。6は瓦質の捏鉢である。内外面ともにナデ調整である。胴部の色調は灰白～淡橙色であるが、口唇部は帯状に灰色を呈する。7は白磁碗である。ケズリ高台で、豊付の幅が細く、底部の器壁が厚い。高台部から胴部下半にかけて露胎。見込みに1条の沈線がめぐり、蛇の目状に目跡が残る。釉は灰色を帯びた乳白色。高台径4.1cm、残存高2.2cm。8～11は龍泉窯系青磁碗である。8は小碗で内・外面とも無文である。底部はベタ底型である。大宰府編年 (太宰府市教育委員会2000) のI-1'a類。口径10.3cm、器高4.2cmである。9は碗で口縁部を欠損する。内面に片彫草花文を施す。高台部はケズリで削りは浅く、露胎する。断面四角形に近い。

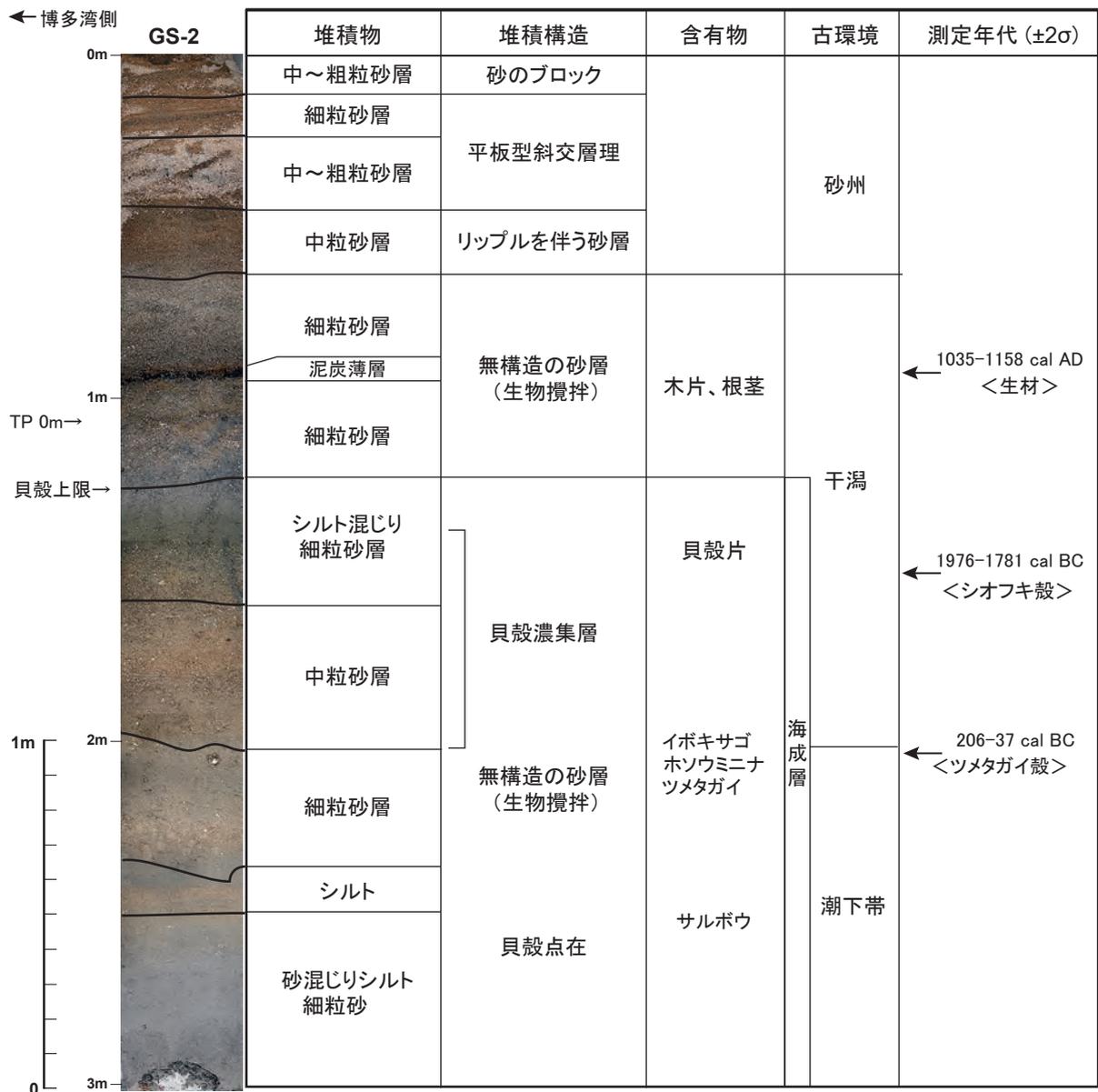


図10 堆積構造と古環境変遷② (GS-2)

I - 2 a' 類。高台径4.9cm、残存高3.8cmである。10は碗の胴部のみで、大宰府編年の I - 2 a 類と思われる。11は碗の口縁部で内面は無文、外面に蓮弁文を施す。蓮弁に鎬はなく、蓮弁の輪郭線は左右対称ではない。II - a 類か。12は天目碗である。口縁部、高台部ともに欠損している。内面には黒色の釉が厚くかかる。外面は黒色釉の一部が暗茶褐色を呈す。高台部付近は露胎である。13・14は磁竈窯の盤の破片である。いずれも内面は淡黄色の釉がかかり、外面は露胎である。13は口縁部、14は底部である。15は中国陶器の鉢と考えられる。口縁部が内側にすぼまっている。口唇部を丸く作る。内面は淡黄色の釉が薄くかかり、外面は露胎である。

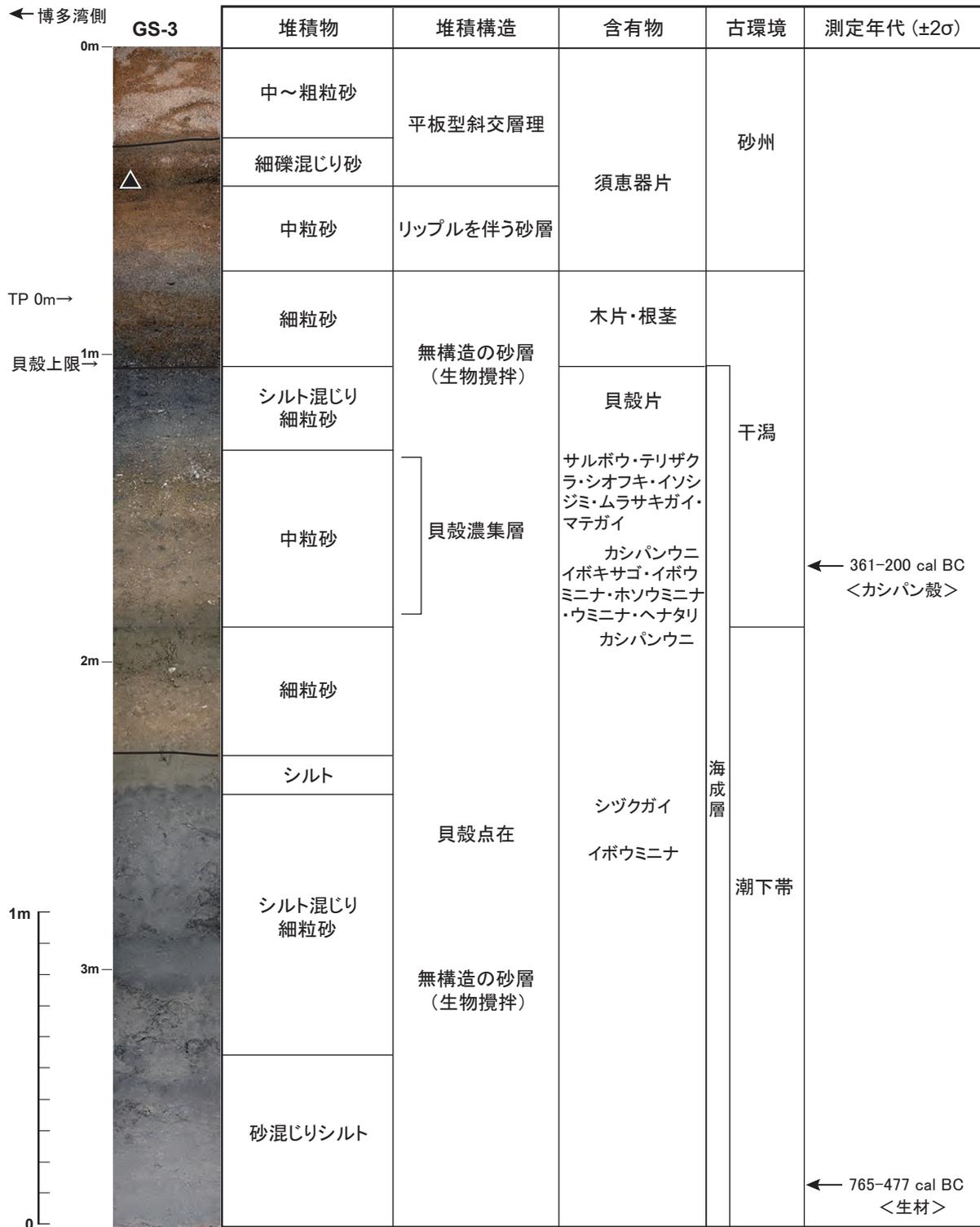


図11 堆積構造と古環境変遷③ (GS-3)

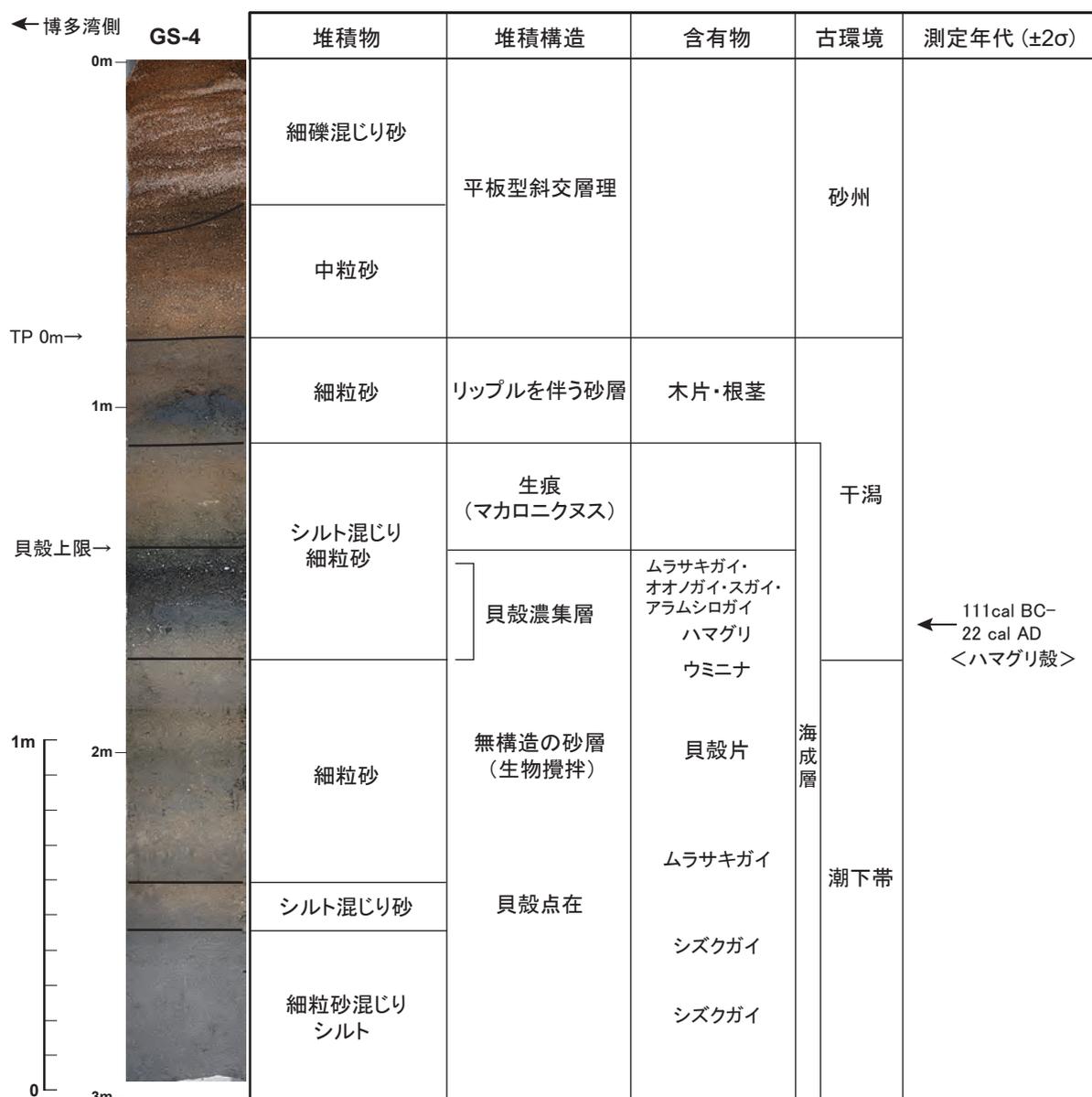


図12 堆積構造と古環境変遷④ (GS-4)

5. 砂州の発達と箱崎の元寇防塁

(1) 旧汀線から見た砂州の発達

図1には、明治33年測量の大日本測量図「箱崎」に、現在の海岸線を黒実線で、明治33年測量の大日本測量図「箱崎」の旧海岸線を水色の実線で、博多湾の縄文海進最盛期 (ca. 4200-3000 cal BC²⁾) における最大海域から復元された旧汀線 (下山1989) を紫色の破線で記入している。これまでに発見された箱崎付近の防塁遺構の位置を赤線で示し、浜堤の高まりを黄色で着色してある。明治33年の海岸線や地形図と比較すると、新たに増えた陸地はほとんどが埋め立て地で、現在の海岸線は人工の海岸線となっている。

縄文海進最盛期の旧汀線と明治33年測量の大日本測量図「箱崎」の海岸線の位置との比較から、箱崎キャンパス付近の浜堤・砂州の発達を考えてみる。まず縄文海進最盛期の旧汀線は、多々良から多の津、

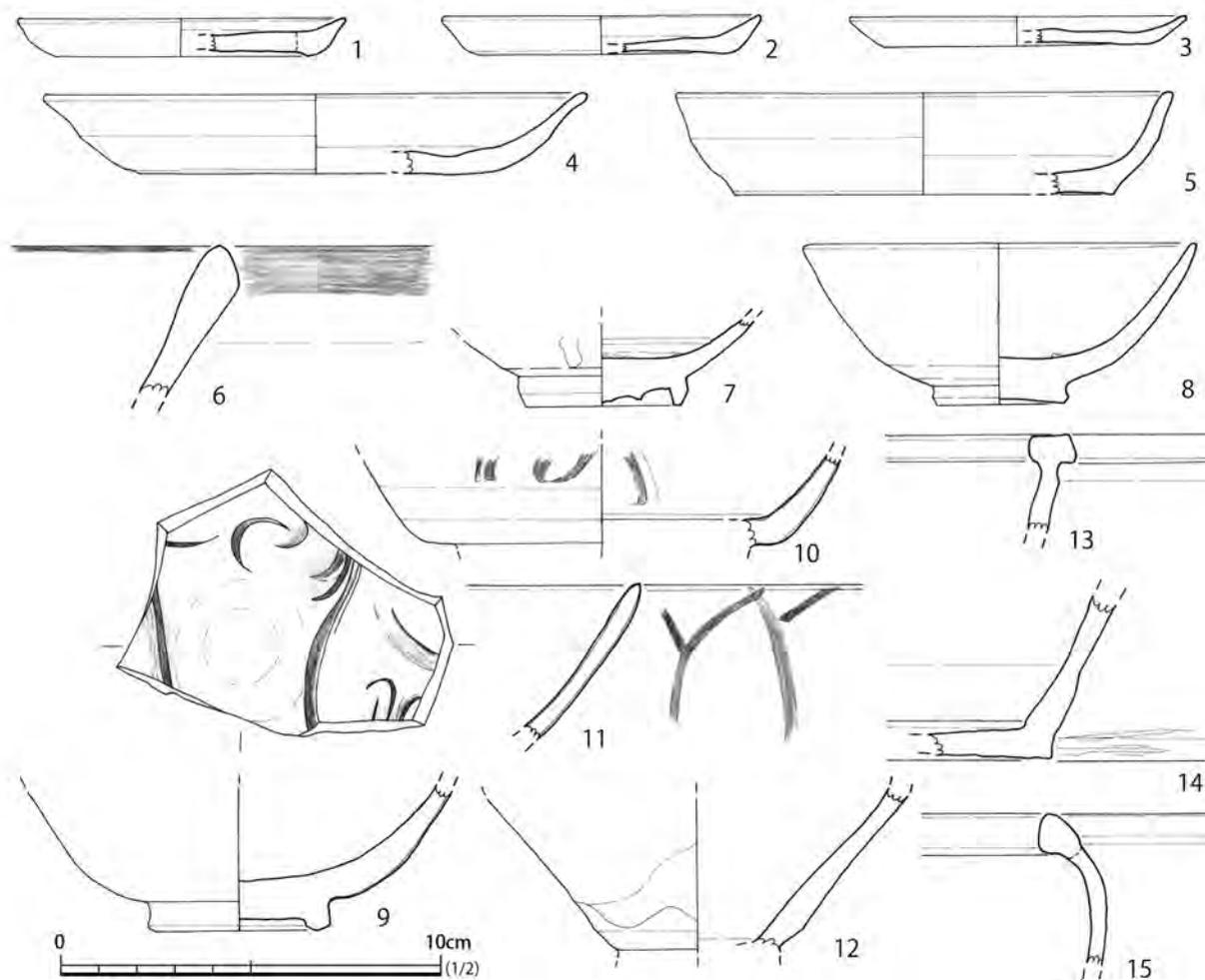


図13 HZK1701地点Ⅲ区Ⅱ層出土遺物

原田、社領を経て吉塚に延びている。縄文海進最盛期の旧汀線には、多々良川、宇美川、綿打川、須恵川の各河口に対応する入り江が存在する。縄文海進最盛期の旧汀線の西側地下には海成堆積物が広く分布しているため、浜堤や砂州はなく、汀線は縄文海進最盛期の博多湾の旧汀線そのものであったと考えられる。明治33年測量の大日本測量図「箱崎」をみると、宇美川、綿打川、須恵川の流路は箱崎の浜堤に流路を妨げられ、その手前で方向を変えて北上し、次々に合流し、最終的に多々良川と合流した後、砂州の先端を迂回して博多湾に流入している。箱崎の浜堤と縄文海進最盛期の旧汀線とに挟まれた領域は、縄文海進最盛期には海域であったが、明治33年には陸地となっている。海成層を覆う湿地（河川）堆積物の存在は、この領域が箱崎の浜堤の発達によって博多湾から遮断され、河川堆積物によって湿地が埋め立てられて陸地化した場所であることを示唆している。明治33年には箱崎以南の浜堤主部は広がっており、筥崎宮付近では浜堤が古くから存在したことを暗示している。

図8の模式断面では、防塁基底部分が標高の低い標高約2mにあり、海成層と浜堤層の間に河川堆積物層が挟まれている。図1では、防塁ラインが箱崎キャンパスの北（農学部エリア）で東に屈曲している。箱崎キャンパスでの当時の旧汀線は元寇防塁前面の20～30m博多湾側にあるので、これを防塁ラインに沿ってトレースすると、明治に比べて短く狭い浜堤の姿を想像できる。箱崎の元寇防塁は浜堤の先端近くに造られたのだろう。ただしその後の発達を考えると、平均海面下の砂州は名島方面に延びていたに違いない。

博多湾沿岸で検出された元寇防塁はその築造の目的上、地形を考慮し、当初は防御前線として海岸線に隣接して造られたはずであるが、現在では浜堤の最高地点を占めており、海岸線から遠くなっているケースもある。玄界灘沿岸における浜堤の成長における主な営力は、冬季に吹く北西の強い季節風である。元寇防塁の出現後は砂が風下へ移動拡散するのを妨げる浜堤上の障害物となり、海岸砂丘（浜堤）の成長に大きく寄与したものと思われる。

（2）箱崎の元寇防塁の位置

博多湾の防塁遺構は、いずれも海岸線に近い砂丘上に設置されたことが知られている。石垣基部の標高に注目した大塚（2013）の推定によると、汀線までの距離は今津地区・今宿地区が約100m、生の松原地区が約50m、姪浜・脇地区が約30mとなる。ただし、この推定は海岸線がさほど変化していないことを前提としており、今回の調査結果とは比較できない。一方、基底石の標高は、今津地区で4m強、生の松原地区・西新地区で3m前後となる。元寇防塁の可能性が高い博多小学校内の石塁（博多遺跡群第111次調査：佐藤・井上編2002）も、標高3m前後である。箱崎地区ではそれらより標高が低く、HZK1603・HZK1604地点の事例をあわせ考えて2.0～2.5mとなる。ただし、これは基底部の標高である。防塁の機能を考えると、兵士が控える石列最上部の高さが重要になるので、現存しない天端の高さを基準に比較すべきだろう。大塚（2013）は、汀線までの距離ではなく立地条件や標高が重視され、防塁の位置が決められた可能性を指摘した。防塁遺構が完存していない現状において他地区との比較を行うためには、箱崎地区と同様に、他地区でも石積み前面における深部の堆積環境を復元することが求められる。

6. まとめ

箱崎地区では、標高2.0m前後の浜堤頂部を整地した上に箱崎の元寇防塁が設置されたこと、また、防塁の20～30m先に当時の汀線があったことが判明した。これにより、防塁築造当時の海浜景観や戦法・兵法を理解する手がかりが得られた。防塁の存在は、その後の箱崎周辺の地形変遷に大きく影響した可能性がある。中山（1913など）が元寇防塁の痕と考えた九州大学構地内の隆起（凸地：Ⅳ－8章、岩永論文参照）は、浜堤上の障壁となった防塁ラインを中心に、海岸方面から移動拡散した砂がひときわ厚く堆積してできた砂丘の一部であったのかもしれない。その検証のためには、箱崎の旧地形に関する調査がさらに必要となる。

元寇防塁は、博多湾の歴史を象徴するユニークな歴史建造物であり、当時の海岸線位置と密接に関係していた。一方、防塁は海岸と内陸の間の交通を妨げる存在となった。また、石が点在していたり、基部のみが残されていたりすることは、防塁の石積み部が砂丘地域における石材の簡便な供給源であったことも暗示する。今後、博多湾における元寇防塁の発掘調査にあたっては、防塁遺構そのもののだけでなく、当時の地形や海岸線の位置関係についても考慮した調査が必要とされる。

注

- 1) この採取方法は、福田がこれまで実践してきた「土器型式相対年代」+「層位区分・一括性認定」+「出土木炭による¹⁴C年代（AMS）」による年代認定と、遺跡埋没・崩壊過程の構造的解釈とを組み合わせた発掘調査方法にもとづく（e.g., 福田2013、福田ほか編2014、Грищенко, Фукуда 2017、Фукуда 2017）。
- 2) 下山（1994）、下山ほか（1991）にもとづく年代幅。

文献

- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について―」『自然と遺跡からみた福岡の歴史』新修福岡市史一特別編、福岡市、302-317頁
- 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編 2008『中世都市 博多を掘る』海鳥社
- 川添昭二編 1971『注解元寇防塁編年史料』福岡市教育委員会
- 川添昭二 1971「覆勘状について」『史淵』105・106合輯、1-37頁
- 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
- 九州大学埋蔵文化財調査室 2017『箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス理学部中庭地点 記者発表資料』
- 佐藤一郎・井上蘭子編 2002『博多85―博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集、福岡市教育委員会
- 下山正一 1989「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告（地質）』16-1：143-163
- 下山正一 1994「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」『第四紀研究』33-5：351-360
- 下山正一・磯 望・野井英明・高塚 潔・小林 茂・佐伯弘次 1991「福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程」『九州大学理学部研究報告（地球惑星科学）』17-1：1-23
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V―陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中島恒次郎 1995「12. 九州北部」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、187-196頁
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟―殊に元寇の史蹟一』九州帝国大学医科大学
- 中山平次郎 1984『古代の博多』九州大学出版会
- 福田正宏 2013「日本列島北辺域における新石器／縄文時代の土器」『古代文化』65-1：21-42
- 福田正宏・Shevkomud I・森先一貴・熊木俊朗編 2014『環日本海北回廊の考古学的研究 I』東京大学常呂実習施設
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」『古代の博多』九州大学出版会、365-394頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世 1―東アジアの国際都市博多一』平凡社、180-194頁
- 柳田純孝・西園禮三 2001『元寇と博多―写真で読む蒙古襲来一』西日本新聞社
- Butzer K.W. 1982 *Archaeology as Human Ecology*. Cambridge University Press.
- Nakanishi T., Takemura K., Matsuyama H., Shimoyama S., Hong W., Okuno M. 2017 Radiocarbon age offset between shell and plant pairs in the Holocene sediments under the Nakata Bay, western Japan. *Radiocarbon*, 59: 1737-1748.
- Грищенко В.А., Фукуда М. 2017 Культура наконичников на пластинах – Ранний неолит островного мира северо-восточной Азии (Сахалин, Курильские острова Хоккайдо. V (XXI) всероссийского археологического съезда. Барнаул-Белокуриха: АлтГУ, ИАЭ СО РАН, ИА РАН, ИИМК РАН.
- Фукуда М., 2017 Культурная хронология Нижнего Приамурья и ямхтинская культура раннего неолита. *Археология CIRCUM-PACIFIC*: 100-111. Владивосток: «Рубеж».

8. 中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス

岩永 省三

はじめに

1912（大正元）年、九州帝国大学の医科大学・工科大学構内で元寇防塁らしき高まりを最初に発見したのは中山平次郎であった。中山は当時断続的に残っていた高まりの踏査で確認ないし推定した防塁の位置を「医科大学の裏境」―「箱崎網屋の墓地」―「工科大学構内」―「地蔵松原墓地」と記述した（中山1913a）。1920（大正9）年、九州帝国大学農学部（大正8年創設）の東側・地蔵松原で元寇防塁が発掘され、1931（昭和9）年に国史跡に指定された。

地蔵松原の指定地から南南西方向に延長した九大農学部・旧工学部構内、さらに医学部構内に至る区間に元寇防塁が存在したことは間違いないが、その厳密な位置は、九州帝国大学・九州大学の各種建物・施設の建設や、学外市街地の開発に伴う削平によって地上の痕跡がすべて失われてしまったことから、全く不明となっていた。

特に九大箱崎地区では、中央図書館（1972年竣工）の建設時に石列が発見されたものの、発掘調査が行われず、何らの記録も残されずに破壊されたため、位置が不明であった。近年、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課は、地蔵松原指定地、農学部1号館中央、中央図書館西半、情報基盤センター、旧工学部4号館、博物館第1分館を結ぶラインを防塁位置と推定し（図4）、九州大学が箱崎地区の売却・移転計画を明らかにして以来、2014～2015年にかけて、元寇防塁の探索のために、この推定ライン上およびその南側で数か所のトレンチ調査を行ってきたが、防塁の発見には至らなかった。そのため、箱崎キャンパス内では、元寇防塁がすでに削平され消滅した可能性もささやかれていた。ところが2016年8～10月に、九州大学埋蔵文化財調査室の調査によって、地蔵松原防塁の南西約300mの中央図書館南側地点で、福岡市文化財部埋蔵文化財調査課による推定位置より若干陸側において、石積み遺構の下半が良好な状態で発見された（本書Ⅲ章で報告）。2017年には、その北側・南側で延長部が確認されるに至った。2016・2017年の発掘調査によって発見された石積み遺構が元寇防塁であるのかどうかは、遺構自体の構造的特徴や出土遺物などの証拠から、本書において検討されているが、その検出位置が福岡市文化財部埋蔵文化財調査課による推定線から東にずれ、方位の振れも異なることから、あらためて九大箱崎地区内およびそれ以南での防塁線の位置を検討する必要性が生じてきた。ここでは、中山平次郎が調査した頃の九州帝国大学キャンパスの姿と近年の状況との対応関係を検討し、中山が医科大学内・工科大学内・農学部内で実見して元寇防塁とみなした遺構の位置を推定し、それが今回報告する石塁たることを結論付ける。

1. 中山平次郎の元寇防塁研究と防塁の位置推定

（1）考古学者・中山平次郎

中山平次郎は、1871（明治4）年、京都の侍医中山家に生まれた。兄が一人（森彦）、弟が4人、妹が一人（小春）いた（岡崎1985）。父・徳輝が東京に出たため、3歳で東京に移り、兄と東京帝国大学医学科を卒業し、助手に任官した。病理学研究のためのドイツ・オーストリア留学から帰国後、1906（明治39）年に福岡医科大学（現在の九州大学医学部）の初代病理学教授となり、1931（昭和6）年まで病理学

を担当し、日本住血吸虫の人体内での発育史研究など大きな業績を遺した。

すでに少年時代から、弥生町貝塚報告を読んで考古学に興味を持って遺跡に通い、東大では人類学の坪井正五郎博士を知った。福岡医科大学着任後、1912（大正元）年（41歳）から考古学・古代史研究を本格的に始め、大正から昭和初期にかけて九州における考古学研究をリードした。発掘は行なわず、徹底した現地踏査と表面採集によって資料を収集し、遺物と遺跡の関係を明らかにする方法をとった。中山の主要な研究テーマは、「漢委奴国王」金印（中山1914）、「先史原始両時代中間期間」の提唱（中山1917）、弥生時代の金属器、弥生時代の石器製造所跡（中山1931）、博多の都市史（中山1984）、鴻臚館跡の探索（中山1915d）、古代・中世の古瓦、など多岐にわたる（岡崎1985、小田1988）。その中でも、元寇防塁は中山の考古学研究の最初期の成果であった。

（2）元寇防塁研究の開始

中山は1907（明治40）年に、元寇を中心に外寇関係史料を編年的にまとめた史料集である『伏敵編』（山田編1892）を読んで以来、元寇防塁の探索を開始した（中山1913a）。1912（大正元）年夏に現地踏査を行い、その成果を著作として発表し始めるのは1913（大正2）年である。すでに「元寇防塁」と呼び、構造や石材を論じ、残存箇所の踏査を綿密に行っている。今津長浜・生松原・小戸山東・伊崎（西公園西南側：『伏敵編』に防塁として図を掲載）の状況を検討するとともに、「伊崎以東の遺跡の有無」、特に「千代の松原以東の検査」に注力し、「我医科大学の構内にあり、又我兄弟なる工科大学の地を貫いて居る」と述べている（中山1913a）。以下、医科大学構内、医科大学と工科大学の間、工科大学構内ごとに、1912（大正元）年の踏査成果を再確認しつつ、現在のどこに当たるのかを検討する。中山の表現のニュアンスを伝えるために原文の引用を多くした。

（3）1912（大正元）年における医科大学構内の防塁（図1）

医科大学の「正門を入れて大学裏境の近く」で「防風松林内にそれと思ふ凸地を発見した」。「此の凸地は今高さ三四尺位のものに変じて居るが、（幅は不明なれども二三十間 [36～54m：岩永注] 位の間に崩れ広がり居るが如し…尚ほ此凸地の直ぐ内側に一の堤状の積土あれども形状不正にして此地が以前耕地たりし時鋤去せられたりし表土を積みたるものなる事疑を容れず）海岸線と平行して東北に向って走り、其の状今宿付近にて見たる煙滅に瀕して居る防塁とよく似て居る」。「此の凸地は西南に向ては火葬場附近の堤防と連らなつては居るが此の部分は大学構内のものと同時代に出来たものか否かは明かでない」。「防風林内の凸地は海岸線と平行し、東北に走りて居ることは明白ではあるが、山形の地として見えて居るは解剖学教室の裏の辺迄にて、其の以東は内面の大半が鋤去せられ（医化学教室裏の桑畑の存在より考ふれば既往より斯くなりて居りしが如し）」。「大学の『テニスコート』の近くに至れば其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ、唯大学の北境に幅狭き土手を遺して居るに過ぎぬ」。（中山1913a）

以上の記述では西南から東北に、薬物学教室の裏から解剖学教室の裏くらいまでは「凸地」が残るが、それ以北はほとんど削平され、医化学教室の裏では桑畑になっている。1913（大正2）年の医科大学構内図（図1）には基礎医学教室群の北側に松林の境界線が描かれている。医化学教室の裏では実験室と松林との間の距離は10mしかない。防塁を削って造られた桑畑は、実験室と松林の間にあるはずであるから、防塁が通る範囲はこの幅約10mの隙間に絞り込まれる。

問題はその南側であるが、幸いなことに中山自身が医科大学構内における防塁推定位置を示した図があ



図1 1912(大正元)年の医科大学構内と防塁推定線

る（図2）。医科大学構内で大井戸が掘削された際に出土した土器類の堆積年代を、海岸線の前進速度から推定するために、元寇防塁の推定位置と1900（明治33）年時の汀線を、1911（明治44）年測の2万分の1地形図に記入したものである（中山1915c）。小さな図ではあるが、医科大学の海側に薬物学教室・病理学教室・解剖学教室・生理学教室・医化学教室・衛生学教室・法医学教室などの基礎医学教室が表示されており、その背後に防塁推定線が点線で記入されている。その点線の端は、病理学教室の建物の主軸延長線の所で止まっており、その位置は、病理学教室建物の規模（桁行長約90m）からみて、その西端から約75m海側の位置から発している。この位置から防塁線を南に延長すると、2016年の給水管新設工事に伴う立会調査で元寇防塁の構築に使用された可能性がある石材が発見された場所に近い（IV-4章、森論文参照）。なお中山（1915b）の地図では、防塁推定線の延長部が医科大学の西南隅と約30mしか離れていないように見えるが、戦前期の地図では医科大学の西南部の西方への突出部が表現されていないので注意を要する。

中山（1915c）の地図（図2）では防塁推定線は病理学教室の西側で止まってしまい、それ以南には伸びていない。しかし中山（1913a）の記述では、「此の凸地は西南に向ては火葬場附近の堤防と連らなつては居るが此の部分は大学構内のものと同時代に出来たものか否かは明かでない」とある。大正2年段階の「火葬場」は校地の西南隅にある。上記の点線をそのまま伸ばしても校地の西南隅から東に約70mの地点に至り火葬場の東側に当たる。「火葬場附近の堤防と連らなつては居る」の意味が掴みにくい、どう考えられるか。当時の地図では（図2）、火葬場の西側には中山が「到る處白砂の博多湾沿岸に稀なる奇怪の地なり」「石堂川に通じて居る一の奇怪なる汐入」（中山1913a）と述べた「泥沼地」（大正2年時に「目下大学の石炭殻を以て埋立てられつゝあり」）があり、その東岸から少し離れて、岸に沿った道路が表現

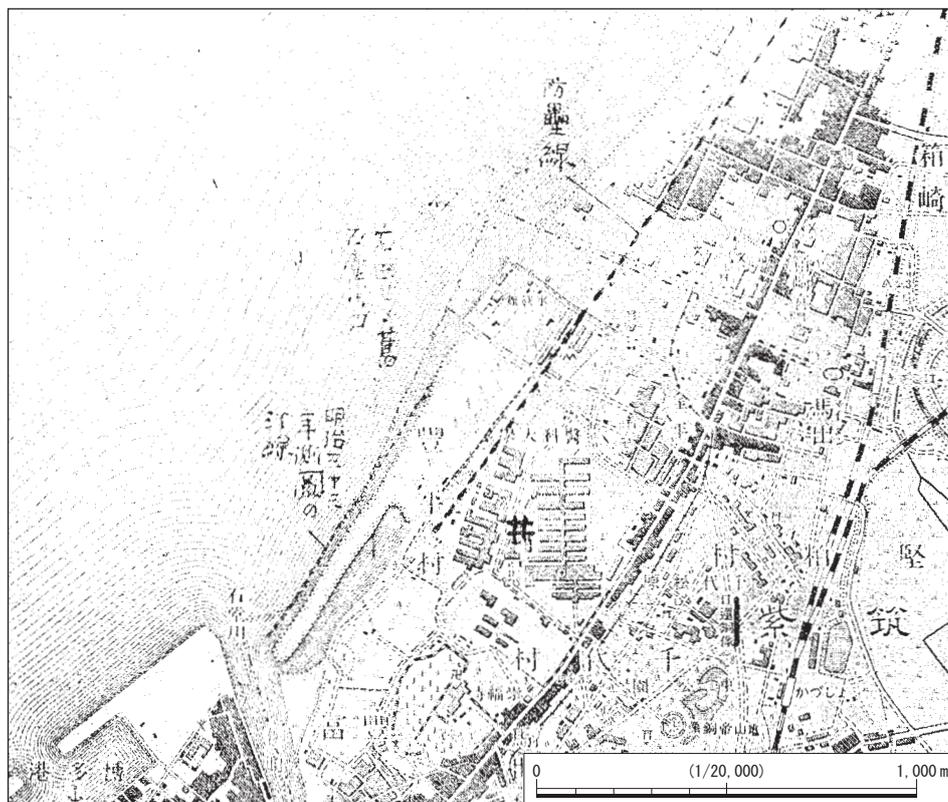


図2 中山平次郎自筆の防塁推定線（「瓷器に就て」『考古学雑誌』5-11）

されている。この道路が堤防状をなしていたとすると、医科大学西南隅より少し東側で大学境界とぶつかっているから、防塁推定線延長部と近くなる。その堤防と防塁推定線延長部との間に両者をつなぐ高まりができていたが古いかどうかかわからないので、わざわざ「大学構内のものと同時代に出来たものか否かは明かでない」と書いたのであろう。

病理学教室以北の防塁の位置については、中山（1913a）の記述では、「大学の『テニスコート』の近くに至れば其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ、唯大学の北境に幅狭き土手を遺して居るに過ぎぬ」とあり、残りが悪かったようだ。テニスコートが近かったようだが、1912（大正元）年時点のテニスコートの位置は不明である。1941（昭和16）年のテニスコートの位置は、航空写真によれば、大正期の衛生学教室・法医学教室の位置に1934（昭和9）年から建設され始めた法医衛生細菌学教室（現在の基礎研究B棟）の西方であり、明らかに防塁線より西にずれている。かりにこのテニスコートの近くに防塁線が来たとしても「其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ」るはずはないから、大正期のテニスコートは、もっと北で運動場寄りであったと推定できる。医科大学構内における防塁北端部の状況は、「唯大学の北境に幅狭き土手を遺して居るに過ぎぬ」とある。ここでの「北境」は実際の方位では西境である。先に触れた中山（1915c）の地図（図2）によれば、防塁推定線は、運動場西南隅の西側の大学外郭線入隅部近くから学外に出ていくようである。これなら防塁が入隅部から北に行くにつれ「其外面」が「構外の耕地として鋤去せられ」る部分が多くなり、構内に残る部分は北に行くほど「幅狭き土手」となってしまうのが納得できる。現在、医学部運動場ではその西側に幅も高さもしっかりした立派な土塁があり、あたかも防塁が遺存しているように見える。しかし大正2年段階で防塁がそのような残り方をしていれば中山が記録しない筈がないから、この土塁は新しいものであろう。ただし、その土塁の南端部は上記の大学外郭線入隅部であるから、その内部に「幅狭き土手」となった防塁が隠されている可能性がある。将来発掘調査で確認したいものである。

（4）1912（大正元）年における医科大学と工科大学の間の防塁（図2）

「凸地は大学以東の地にては頗る低くなって居るが尚ほ暫くはそれと気が付く」。「即ち以前陸省の建築物のあった明き地がそれであるらしい」。「彼の地は中辺が他地の面より二尺内外位高くして海及び内地に向ひ緩傾斜をなして下って居る」。「此凸地の線は丁度宮崎宮の海辺の鳥居の前辺を過て網屋町に至るのであるが此附近にはそれと思ふ物が遺って居らぬ」。「網屋町では防塁が何處を過って居たか跡を遺して居らぬ様であるが、町を過ると防塁は明瞭なる土手として顕はれて来る」。「即ち同地の東北にある墓地の土手がそれである」。「以上の土手は東北に向かって走り、工科大学の柵の近くに至りて消滅して居る」。（中山1913a）

「陸軍省の建築物のあった明き地」の場所は、1911（明治44）年測の2万分の1地図と1926（大正15）年測の2万5千分の1地図を比較すると、現在の馬出4丁目2～5番地である。中山の言う「宮崎宮の海辺の鳥居」は、大学通りに面した宮崎宮境内入口の鳥居から約360m海側にあった鳥居で、当時の地図には表記されているが、現在は無くなっている。その鳥居の「前」すなわち海側を防塁線の通過地と考えている。網屋の東北にある「墓地の土手」は別の論文では「一光寺裏の低き墓地」と明記されている（中山1915b）。一光寺裏の墓地は現在もあり、東西に75mほどの長さがあるから、そのどの辺が土手であったのかが知りたいが、昭和16年撮影の航空写真では判らず、現在の平坦に整備された墓地からも窺い知れないのは残念である。ただし、第二次大戦前の墓地は現在よりも広くL字形を呈していた。L字の第一画が東西方向で現在の墓地に当たり、南北方向の第二画に当たる部分が戦後に宅地化された。「2. 1926（昭

和元)年の「箱崎方面元寇防塁平面図」における防塁の位置」で述べるように、第二画の東端に当たる位置に土手があったとすれば、現在の一光寺墓地のほぼ中央に当たる。

(5) 1912(大正元)年における工科大学構内の防塁(図3)

「工科大学内には今連続した土手状の隆起を存して居らぬが、防塁の一部は明らかに遺って居る」。「同大学運動場の東側に二つの隆起がある」。「其中海に近き方の隆起は土手の断面を表したものであって、其上に生へて居る松は根元が深く土中に没入して居る、即ち後に土が堤の上に更に盛り上げられたことを示して居る」。「後方の隆起は狐穴のあるもので、単一の土饅頭として存し防塁とは無関係のもの様である」。(中山1913a)

工科大学内で最も良好に防塁が残るのが、「運動場の東側」の「二つの隆起」のうちの「海に近き方の隆起」であるという。これが現在のどこに当たるかが重要である。「運動場」の位置は、1941(昭和16)年撮影の垂直写真(九州大学大学文書館蔵)から正確に知ることができる。トラックの範囲を2015年時点のキャンパスに当てはめると(図4)、北端が理学部本館の北端、南端が工学部3号館北翼の南縁、東端が学際教育・研究交流棟(リセウム悠遠)の東外、西端が人工分子集合組織体研究棟の中央に位置する。中山はここでは海側を北、陸側を南と表現し、運動場の長軸を東西方向と見ていることから、その「東側」で「海に近き方の隆起」は、実際の方向ではトラックの西北側にあたる。これを2015年時点の位置に直すと、理学部本館西半部の北側で中央図書館との間となり、まさに2016年に石積み遺構が発見された場所となる。

「以上の土手の断面と構外の網屋の墓場の土手とを連結した線は略同大学裏の松林の縁を経て居て、此の防塁線の中央の処に古製の板碑を頂いて居る高さ三尺許の微小なる土塊の取残されが存して居る。之に由て此線には以前低き土手状の隆起があった様に推測せらる」。

「此防塁線の直前の松林内は学生假控所が建てられて居る」。「其の前に三個の稍大なる石が置かれてある」。「此の三石は其の形式が余の伊崎以西で見た石塁築石に符合して居る」。「故に工科大学事務員に尋ねて見たら運動場を平げる時其北側の土中から発掘せられたといふ事であった」。「運動場の北側の邊は丁度防塁が過ぎ居た地に符合する」。「故に余は彼の三石を以て石塁の遺石と信じて居る」。「石は三個共に名島産のもの、如くである」。(中山1913a)

網屋の墓地と工科大学運動場東側の隆起との間には土手が残ってはいないが、「運動場の北側の邊」を通り、ほぼ松林の縁に当たるという重要な指摘がなされている。

先に述べたように中山は1913a論文では運動場の長軸を東西方向と表現していることから、「防塁が過ぎ居た地」である「運動場の北側の邊」をトラックの西側の部分とすると、旧理学部大会議室の東半部から人工分子集合組織体研究棟附近を通る。「運動場を平げる時其北側の土中から」「三個の稍大なる石」が発掘されている。これらの点に関して別の論文では、「工科大学建設当時の状況を訊すに、同大学運動場の西側には、以前低き隆地ありて、運動場は之を平げて造られたりと。隆起の断面は今尚運動場北側に明に遺存せるのである。此運動場を設くるに際し、隆起の地中より今津其他に見ると類似せる塁の築石と見ゆる割石三個発見せられ、此石は現今旧学生假控所の前に置かれたり。」(中山1915b)とある。この論文では運動場の長軸を南北方向と表現しているから、運動場の西側の隆起が削平されたが、その北側ではまだ残っており断面が観察できる、とより明確に表現されている。

工科大学構内の松林の縁の位置は、1921(大正10)年以前の「工科大学平面図」に記載されており、1941(昭和16)年撮影の垂直写真と比較すると、その頃まで、ほぼそのまま保たれていることがわかる。これを2015年時点のキャンパスと対照させると(図4)、北から南へ、工学部の材料工学実験室と工学部

九州帝國大學工科大学平面圖

地坪 六萬坪六合貳勺五才
 建坪 貳十九百坪
 内
 煉瓦造 壹千〇九拾九坪貳合五勺
 木造 壹千八百坪七合五勺
 外
 工事着手中 〇
 煉瓦造 七百貳拾八坪
 木造 九拾四坪

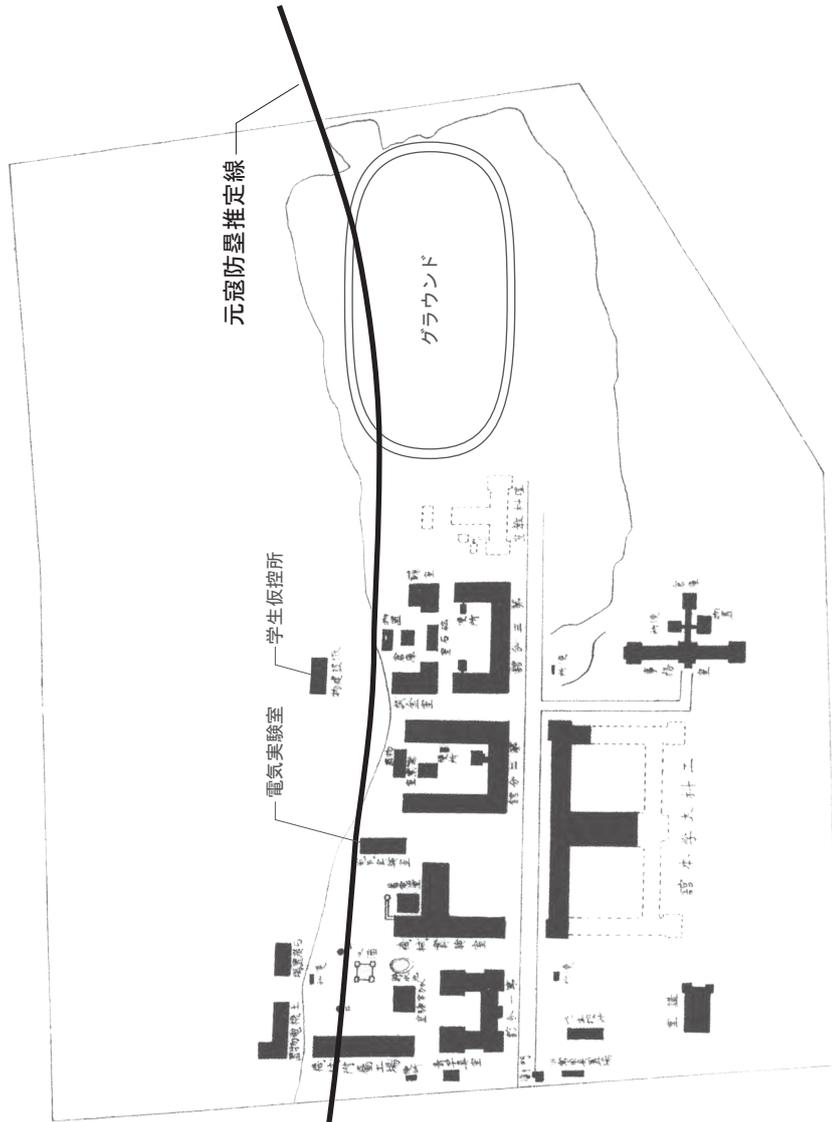


図3 1913(大正2)年の工科大学構内と防塁推定線

3号館の間⇒50周年記念講堂の西辺⇒工学部2号館の西辺を通る。

「此防塁線の直前の松林内」にある「学生假控所」とは、1913（大正2）年の工科大学平面図にある「假設建物」であり、2015年時点では五十周年記念講堂の西南コーナーに当たる。「直前」がその建物の東側と西側のどちらに当たるのか問題であるが、中山は宮崎宮参道の鳥居については海側（西側）を前としているから、ここでも西側を前とすれば、防塁線のすぐ西側に「学生假控所」がある、つまり防塁線は「学生假控所」のすぐ東側であり、五十周年記念講堂の西半を通るということになる。

「此の防塁線の中央の処に古製の板碑を頂いて居る高さ三尺許の微小なる土塊の取残されが存して居る。之に由て此線には以前低き土手状の隆起があった様に推測せらる」について別論文では、「応用化学実験室の裏の辺にも室町時代と推定すべき古碑を頂きたる高三尺許の小堆土遺存しあり。以前此部の邊にも高三尺許なる隆起ありて、大学敷地地ならしの際、他部は鋤去せられたれども、古碑存在の為、其周囲のみが残されたる如く推せらるゝ」とのべ（中山1915b）、「応用化学実験室の裏」と場所を特定している。残念ながら、1915（大正4）年の「工科大学平面図」には「応用化学実験室」が記載されていないが、「電気実験室」の誤りの可能性が強い。仮にそうであれば、防塁がその裏（西）を通るなら、「学生假控所」のすぐ東を通る事と辻褄が合い、防塁の位置はかなり絞り込めることになる。

1915（大正4）年に元寇防塁の石材について報告した木下讚太郎は、「九州帝国大学工科大学が、敷地開墾当時より、史蹟保存に注意が拂はれ由緒ある地藏堂跡の如き一碑一石も丁重に保存せられ研究の参考となるのは、洵に感謝に堪へないのである」と述べており、中山が注意した「古碑を頂きたる高三尺許の小堆土」に注目している（木下1915）。

「学生假控所」の前に置かれた3石について木下は、「尚同大学中に三ヶの岩石が保存せられ其側に、『此三石は本学運動場地平らし工事の節、其北側より発掘したるものにして、此部元寇防塁所在地に相当せるが如くなれば或は防塁築石の残存物なるやの疑あり九州帝国大学』の標札が掲げられて居る其岩石を見れば名島産の変岩である」と述べている（木下1915）。木下が見た時点では、中山の記述に基づくとみられる由来を説明する「標札」が建てられていた。中山は「以上の三石及小堆土並に同大学構内より多く検出せらるゝ古碑類は、余の出願により今尚保存せられつつあり」（中山1915b）と述べるから、中山が手配したものであろう。

しかしながら「三石」も「標札」も「古碑類」も、その後煙滅してしまい今日に伝わらず、中山の努力や木下が九大にささげた感謝の念がすべて無駄になってしまったのは誠に遺憾である。九州帝国大学の見識の無さがうかがわれるのである。

（6）1912（大正元）年における工科大学北隣（後の農学部構内～地藏松原）の防塁

「運動場の東側にある土手の断面の上に登って見れば、土手が東に向かって如何に走って居るかが甚だ容易に知られる」。「即ち土手は工科大学内の残部から箱崎避病院の少しく内方を過て地藏松原の新墓地の附近に終って居る」。（中山1913a）

大正元年は農学部の建設前で、工科大学の北側には松林が続いていたので、「運動場の東側にある土手」の北延長部が、その松林の中に弧を描きながら地藏松原まで伸びていく状況が良く観察できたのであろう。なお「避病院」とは伝染病専門病院で「箱崎避病院」は後の農学部正門に近いところにあったと推定できる。したがって防塁は、2015年の中央図書館中央部、農学部1号館中央部、農学部2号館東端部を通して、地藏松原の史蹟指定地に至ることになる（図4）。史蹟指定地から約100mで当時の宇美川左岸に達し、鎌倉時代には以東は入り江であったから、地藏松原が多々良川以南の防塁の終点となるが、ここでの防塁の

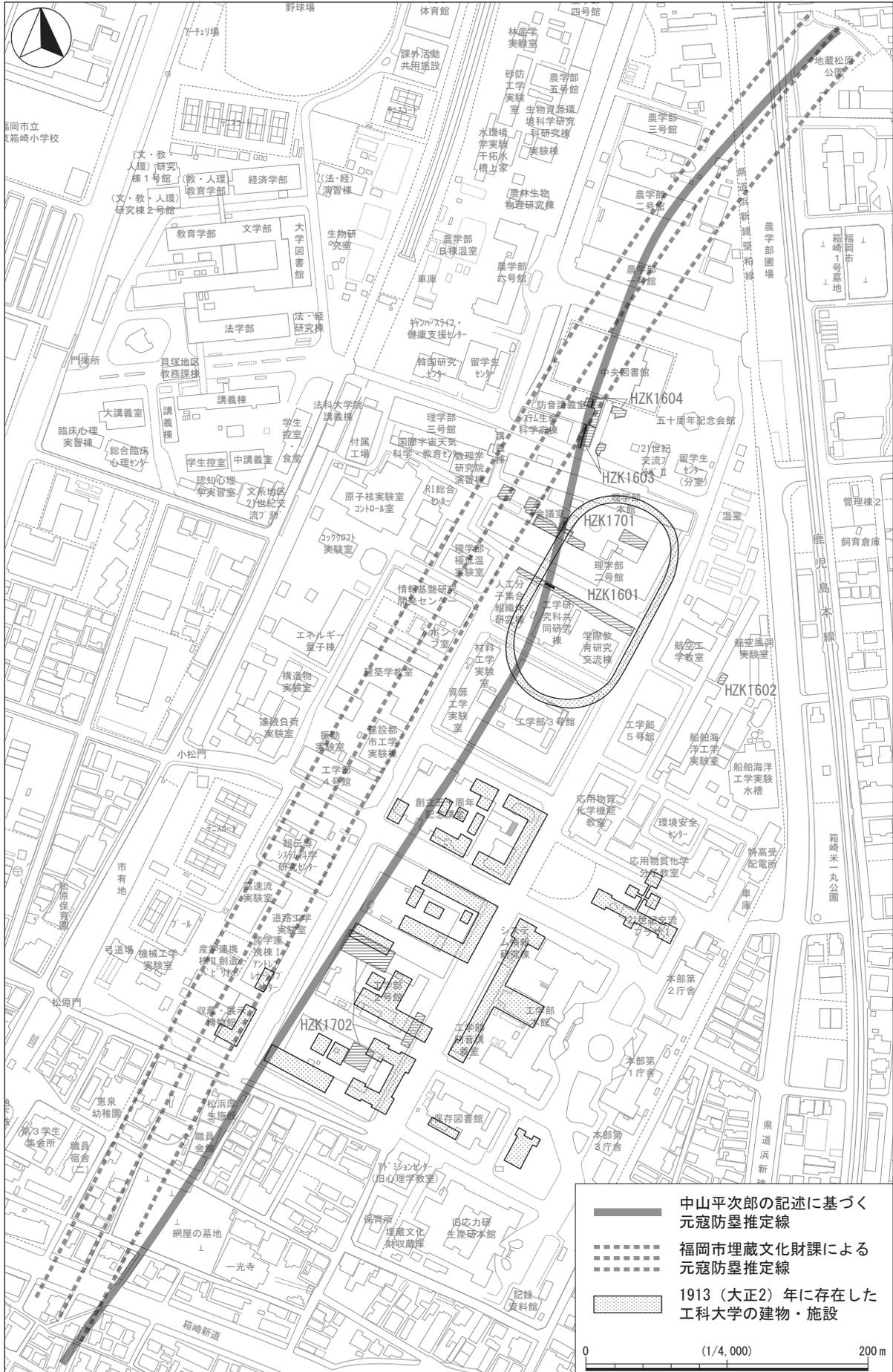


図4 1913(大正2)年と2015(平成27)年の箱崎地区比較図

走行は北東であり、元寇時の海岸線の向きが戦前期と45°異なることを示している。大正元年の海岸線は貝塚方面に向かって嘴状に長く伸びており、元寇以後の砂嘴形成が盛んだったことを示している。(7)で述べるように、中山はこの点に注目し、砂嘴形成の原因、箱崎などで防塁が海岸から遠くなった原因の解明を、博多湾内の潮流方向、川と岬の位置関係の分析から進めた。

中山は1920(大正9)年に内務省の久松信正と共に、地蔵松原の防塁を発掘しているが(中山1925)、なぜか中山自身ではその報告は残さず、武谷水城が記述している(武谷1921・1922)。現存石列高60～105cm、石列幅60～72cm、石材は大きいもので幅84cm、高さ30cm、厚さ45cmとされている。発掘当時の状況は武谷論文の写真1点で窺うしかないが、石材の雰囲気は九大キャンパス内で発見された石積み遺構とよく似ている。この場所は1931(昭和6)年に、今津・今宿・生ノ松原・西新町・地行西町などとともに国史跡に指定されているが、現在、地上には遺構が見えていない。

(7) 元寇防塁と海岸線との距離(図5)

中山は元寇防塁の位置を根拠に博多湾の海岸線の復元に注力していたので、防塁と海岸線との距離に注目した。

「最初のうちは、防塁址を単なる元寇の史蹟として調査して居たが、或る日百地原方面の調査を終わって、その両隣の姪ノ浜方面に移った際、^(ママ) 塁址の海に対する位置関係に、非常の相違あるに驚いて、終にこの塁址を以て、博多湾沿岸の地形研究に、有力なる標準と為し得ることを悟った。」(中山1925)

「愛宕山を堺として其以西にある防塁が現今でも海に近き処にあるに拘らず其以東に於けるものが海を距る二町乃三町余の処にある」。「かかる差等が起つたのは河水作用の強弱に関係ある事」、「愛宕以西に於ては川が甚だ少いのであつて又川が甚だ小さい」、「愛宕より西に川が少きに反して東には川が多く、又其大きさが比較的大」、「諸川より排出せられた土砂が博多湾の満潮時に起る左転の廻潮に従つて海底を埋め海岸に堆積して行く事、これが東部防塁前に広き新地が出来た主な理由」(中山1913c)。

「博多湾東半部に於て遠浅の形成が顕著にして、元寇役防塁址が此部に於ては著しく現今の汀線を下りて存するは、全く河流の影響を被むる事大なる事情を有する為である」(中山1915b)

「医科大学の裏堺」の「低き凸地」と「工科大学構内を貫いて、地蔵松原新墓地に達する一の低き凸地」を「連結したる線は、現時の海岸線と、略平行したる一線を画し、海との距離は、約二町乃至二町半位の処にある」(中山1913b)

「百道原は、其西に土砂の流出顕著なる、室見川の濁出口を有する為、其他金屑川、稲塚川、油山川が此川口に近く会流する為に、川の影響を受くる事、最も著しく、博多湾南岸に於ける、陸地新生の最も強盛なる部分であつて、百道原西端部に於ける、防塁前の砂浜は、約三町余である。」「仮令比恵川口を西に有するとも、百道原西端部に於けるよりも、川の影響を被ること微弱なるべき、箱崎浜の自然的陸地新生の程度が、百道原西端部と同等、若くはそれ以上であるべき道理が無い」「箱崎浜に於ける陸地新生を、幅二町半と見る事は、少しく大に失する嫌ひがあるやも測られぬが、決してそれ以上であったとは思ひ難い。」(中山1913b)

医科大学から工科大学にかけての防塁は、大正期には海岸から約150～200m離れていたが、それは元寇以降にどんどん土砂の堆積が進んだことを意味する。2017年5月～6月の旧理学部構内の発掘において、元寇防塁が載る浜提の外側の場所、2015年時点で言えば理学部3号館の付近に、新たに浜提が形成された状況が把握できた(IV-7章、福田・下山ほか論文参照)。これは宇美川・須恵川・多々良川によって運ばれた土砂が室町時代以降に海岸に堆積して形成されたものであるが、流量が大きい川が付近に存在する



図5 1900年の医科大学以北の地形

防塁はその前面に新しい浜堤が形成され、海岸から遠くなってしまったというのは、中山の主張の通りであろう。中山は博多湾岸における砂嘴の形成や河口の右曲の原因を「満潮時に起こる左転の廻流」(中山1913c)で説明している。では、箱崎の場合、西方に河口がある那珂川や御笠川が運んだ土砂の堆積であって、多々良川(中山論文では名島川)はあまり関係ないかということ、中山は博多湾沿岸では「岸に突出物がある時、潮流よりいふて上流の岸が前進し、下流の岸が後退し、分明に喰違を生じて居る」ことから、「西公園の西に百道原、地行の砂浜が斜めに形成せられつつある」と同様に、「名島の西の箱崎の砂嘴が斜に延長し、且つ此部に著大の遠浅を形成しつつある」と説明している(中山1913c)。つまり、多々良川が運んだ土砂が名島の突出部に遮られ、多々良川河口の西側、つまり箱崎に堆積したと解している。箱崎の元寇防塁が、百道原や地行の防塁と同様に大正期の海岸線から「約二町乃至二町半位」も離れ、元寇時の浜堤の外にさらにもう一本の浜堤が形成された理由はこれで説明できるのである。

なお、明治～大正初期には(図5)、医科大学の敷地の西南側に、中山が「到る處白砂の博多湾沿岸に稀なる奇怪の地なり」「石堂川に通じて居る一の奇怪なる汐入」(中山1913a)と述べた「泥沼地」があり、その海側には「幅狭き砂州(水泳部小屋所在地)」ができています。「海岸の砂州は其幅が僅に満潮時に三十五六歩位[63～69m:岩永注]のもの」であって、「彼の奇怪なる沼地は往時[元寇時:岩永注]海であった」(中山1913a)。この砂州こそ、工科大学構内で、元寇防塁が乗る浜堤の外側に形成された新しい浜堤の南延長部にあたるのであって、「彼の奇怪なる沼地」は、二本の浜堤の間がラグーン化しつつある状況を示していたのである。室町時代には工科大学構内もそのような状態であっただろう。この沼地は「大学の石炭殻を以て埋立て」られてしまった(中山1913a)。

(8) 1913(大正2)年の元寇防塁発掘とその後の研究

中山が元寇防塁の研究を開始したのが契機となり、1913(大正2)年7月に今津長浜で福岡日日新聞社主催の発掘・現地講演会が実施され、中山は講演をおこなった(中山1915a)。この時の発掘は学術発掘と言うよりかは、講演会に伴う見世物の観を呈し、この発掘直後に現地を訪れた黒板勝美が「古墳を発掘するに当つては非常に緻密な注意が必要で、多人数に見せたり、又其の際講演をするなど、云ふ事は、余程考へ物であろうと思ひます。眞に学術的に研究するには、御祭り騒ではいけません。発掘の方法から申しましても、彼の石塁の如き内側を更によく研究するやうにしなかつたことなど遺憾の事と思ひます」、「蒙古襲来の絵巻によると、石塁の蔭に乗馬の武人が隠れて居る図があります。上に述べた此の石塁の高さではそれが出来たであらうか一寸疑はるゝ、その全部が今日発掘されて居る部分だけであるか、或はその下に土で固めた部分がないか。それらも猶ほ調査の必要があります。そして上部の工合では、後世崩れたと思ふ形蹟はみえませんから、無論此石塁は完全なものと考えますが、まだ発掘の方法が不足ではないかと思ひました。」と批判を行った(黒板1914)。

中山は「余は壘址発掘傍観者の一人として、爰に壘の構造に就て説叙するに當り、博士及一般識者に対して、発掘當時に於ける余の所見を語るべき要あると信ずる。」と述べ、当日の観察所見を動員しつつ、「壘には石垣の他に、尚之に付帯せる高き土堤あり。此物を考ふれば、[黒板:岩永注]博士が説述せられたる疑問の如きは、其容易に解釈し得らるべきに由り…[以下略]」、「黒板博士は蒙古襲来の絵巻を引用して、壘の蔭に乗馬の武人が隠れ得たるや否やを疑はれたれども、石墻下の土堤を念慮し来れば、上事は疑題に上るべき事項ならざるやに思惟せらるゝ。」などと反論した(中山1915b)。中山の言う「土堤」は防塁がのる浜堤のことであろう。中山が発掘自体にどのように関わったのか判然としないが、図面や記録が残されず不十分なものであったことは確かである。黒板からの批判が、中山がその後ほとんど発掘に関与しなくなっ

た原因である可能性もある。中山は1915（大正4）年まで、元寇防塁の位置に基づいた博多湾の地形変化の研究に注力しているが、その後は古瓦・鴻臚館・金印・青銅器などに関心対象を移していき元寇防塁について書くことはなくなった。中山の生前に防塁が何がしかの変化を蒙ることがなかったからであろう。

2. 1926（昭和元）年の「箱崎方面元寇防塁平面図」における防塁の位置

福岡市文化財部埋蔵文化財調査課には「箱崎方面元寇防塁平面図」なる測量図が所蔵されている。今回、九州大学埋蔵文化財調査室が所蔵する写真複製版をトレースした（図6）。この図は九州帝国大学の医科大学から農学部に至る範囲の、元寇防塁の推定位置付近を実測したものである。測量期日と担当者名は記載されていない。しかし、工科大学・農学部の構内の建物で、図示されている物の建設年代を、九大所蔵の「工科大学平面図」（毎年更新）に基づき比較検討した結果、1925（大正14）年から1926（昭和元）年にかけての制作と特定できる。この時点での防塁の測量図作成の意図は何であったのだろうか。制作時期は、箱崎地蔵松原での発掘（大正9年）の後であり、防塁遺跡の史跡指定（昭和6年）の前である。史跡範囲の確定など指定に備えるためであったろうか。

この図には、防塁推定線を中心とする幅150mほどの範囲に入る建物・道路・松林・畑などが記入され、その外側は省略されているから、制作者がどこを推定線とみなしていたかの認識がかなり明瞭に判明する。結論的には中山平次郎の認識とほぼ同じであって、中山の記述を念頭にした作図であろう。

この図を北から南へとみてゆこう。地蔵松原の発掘地から農学部の農学科教室・動植物学科教室の中央を通り、工科大学運動場西北隅の北、農学部と工科大学の境界線まで円弧状の実線が引かれている。この範囲は防塁線が確かに確認できるので実線としたのであろう。その先は線が見えにくくなるが、緩いカーブを描きつつ運動場の端を通り、運動場を出たところで点線は消える。それ以南は松林の端が細い実線で表現され、その両側の建物が部分的に描かれるから、松林の境界線付近を防塁の位置と見ていたことが判る。

工科大学南端の塀を超えると、現在の箱崎3丁目30・32番地の境界に松林の境界線約100m分とその東側の畑が描かれる。28番地東端には一光寺本堂があるはずだが表現されていない。1900（明治33）年測量の陸軍陸地測量部作製の仮製2万分の1地図には一光寺本堂の裏から18番地まで逆L字形に墓地が続いていたはずであるが、この図では28番地西端と18番地のみに墓地の表現（vv）があり、28番地東半は畑地の表現となっている。一光寺墓地内には中山平次郎が防塁の痕跡として注意した「土手」あるいは「低き^{（ママ）}墓地」があったはずである。この図で18・28番地の端に直線が引かれている。これが墓地と他の地目との境界線を意味している可能性もあるが、防塁痕跡を表現しているとも見られる。

その南、現在の箱崎3丁目14・21番地、箱崎2丁目14・36番地から同17・21番地くらいまでは、南北道路とその両側の街区が描かれる。2丁目16番地に「箱崎町」「網屋町」と表記がある。その南、現在の箱崎2丁目18・19番地および南北道路を挟んで東の箱崎2丁目1・2番地は空地として描かれる。2番地は箱崎小学校にあたる。

その南が宮崎八幡宮参道であり、当時の海岸線から東へ約350m分が描かれる。海岸から約220mの位置に鳥居があり、中山はこの鳥居の「前」（海側）を防塁推定線が通るとして注目したのである。参道の南、馬出4丁目9～15番地は緑地として描かれる。東西道路を挟んでその南、現在の馬出4丁目1の称名寺は建物が描かれ「称名寺」と表記がある。馬出4丁目2～7番地はほぼ緑地である。同2番地付近に防塁推定線が破線で描かれ南に続く。同8番地には「水族館」と表記があり、かつて存在した水族館の場所が知られる。この水族館が海岸を埋め立てて海に張り出すように造られたため、海流の流れが変わり、宮崎

宮参道の北側の海岸に作られ、日露戦争戦利品の火砲を据えた記念砲台が波に基礎を抉られ崩壊した件は、中山が博多湾内の潮流の旋回方向、および砂州が伸びていく方法を示すものとして何回も記述している(中山1913b・1913c・1915b)。

東西道路を挟んでその南が医科大学であるが、敷地の西端境界線を中心とする幅150mほどの範囲のみが描かれ、工科大学・農学部と異なり、医科大学の建物は全く描かれていない。境界線の東側に松林の境界線とともに防塁の推定線が示される。防塁推定線は、運動場西北隅から解剖学講座の西側くらいまで破線で示されている。この推定線が運動場西北隅を通る点は、本論1-(3)の「1912(大正元)年における医科大学構内の防塁」の項に記した点から見ると問題がある。中山(1913a)の記述および中山(1915b)の地図によれば、推定線は運動場の西北隅でなく、そこから約120m南の運動場西南隅の西側の大学外郭線入隅部近くから学外に出ていくからである。この図で防塁推定線が運動場西側の土手の中を通るように表現したのは、この土手があたかも防塁の残りであるかのように見える(それは現在もそうである)のに惑わされたからではなかろうか。

この図は、製作された1925(大正14)年から1926(昭和元)年にかけての防塁の依存状況の新たな観察結果が含まれているというより、中山の大正初期の記述を念頭に描かれたものと見たほうが良いであろう。なお、1941(昭和16)年には川上市太郎が箱崎方面の元寇防塁の現状紹介をしており、新たに現地を踏査したようであるが、農学部建物との位置関係、および地蔵松原史跡指定地の状況が付加された点を除けば、大正初期の中山の記述からの変化はない(川上1941)。

おわりに

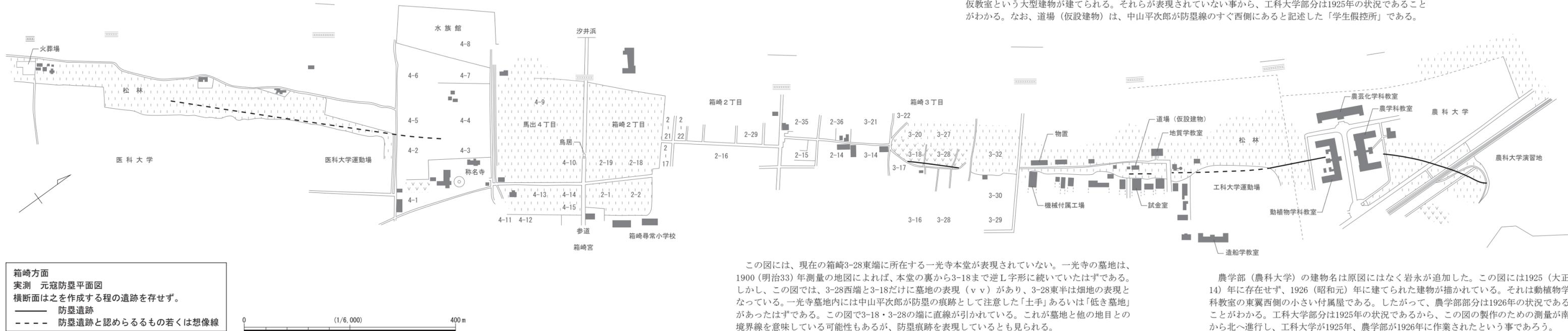
1931(昭和6)年に、今津・今宿・生の松原・西新・地行西町・箱崎の元寇防塁が史跡指定され、1941年には川上市太郎による遺跡所在地の現状把握と紹介がなされた(川上1941)。その後、第二次大戦前の時期には遺跡に大きな変化がなかった。しかし昭和30年代から開発による破壊の危機にさらされるようになり、生の松原地区の防塁については、1967年に鏡山猛を団長とし九大考古学研究室等からなる調査団が発掘調査した(福岡市教育委員会1968)。今津地区の防塁については、1957年に福岡県教育委員会の渡邊正氣が調査し、1968年に生の松原と同じ調査団が発掘調査した(福岡市教育委員会1969)。1970年以後は今津・姪浜・生の松原・西新・博多において福岡市教育委員会が整備あるいは開発に伴う調査を行い(福岡市教育委員会1970・1992・2002a・2002b、井澤・長家1995、榎本2000、松村・池田1998)、造営担当者ごとの構造・工法の違いが明らかにされるに至っている(柳田1984・1988、大塚2013)。しかし、御笠川から箱崎地蔵松原の史跡指定地に至る約3.3kmについては、地上に遺構・痕跡がまったく残っていないことから、元寇防塁は後世の開発によって壊滅した可能性も囁かれていた。しかし今回の九大箱崎地区の調査結果によって、地上の痕跡が無くても、地下には石積み遺構の下半部が良好な状態で残っていることが確かめられた。今後、九大箱崎地区内において、石積み遺構の南北延長部を確認する調査が実施される予定である。中山が推定した「防塁」が、その後の大学の造成で壊滅していたのではなかったことが確認できたのは誠に幸いであった。

小稿において、中山が踏査によって得た情報から組み立てた元寇防塁の位置推定をほぼ復元し得た。もちろん、中山の推定は未検証仮説であって、発掘調査による検証が必要である。その一端を九大埋蔵文化財調査室による調査が実行したのであり、さらにそれが継続されねばならない。

いずれにせよ、泉下の中山は、自身が踏査した「防塁」が、地上の痕跡が壊滅したとしても地下には遺

かつて箱崎浜には水族館があった。第13回九州沖縄八県連合共進会の付帯施設として建設され、1910（明治43）年に開館した。九州初の本格的な水族館で、敷地面積2300㎡、2階建てであった。しかし敷地の大部分が国道3号線の拡張にかかったため、1930年代に閉館した。この水族館は箱崎浜の海岸線に突出した形で建設された。中山平次郎の記述によれば、水族館の突出部が築造されたため、博多湾の左転の海流の作用によって、水族館西方の海岸が斜めに著しく前進するとともに、水族館東方の土砂が洗い流され、海岸が曲線を描きつつ後退し、汐井浜に設けられていた日露戦争戦利品の巨砲を載せていた砲台が崩れ去った（中山1913b・1915b・1925）。なお、1957（昭和32）年には、筥崎宮参道脇に福岡水族館が開館したが、これも1968（昭和43）年に閉館した。

工科大学の建物名は原図にはなく岩永が追加した。この図には1925（大正14）年に存在した建物はあるが、1926（昭和元）年に建てられた建物はない。例えば、機械付属工場の西（海側）に南北棟の物置があるが、この物置と北方の地質学教室との間の空き地には、1926（昭和元）年に南北棟の機械科付属工場第一付属屋、3棟の東西棟の仮教室という大型建物が建てられる。それらが表現されていない事から、工科大学部分は1925年の状況であることがわかる。なお、道場（仮設建物）は、中山平次郎が防塁線のすぐ西側にあると記述した「学生假控所」である。



この図には、現在の箱崎3-28東端に所在する一光寺本堂が表現されていない。一光寺の墓地は、1900（明治33）年測量の地図によれば、本堂の裏から3-18まで逆L字形に続いてははずである。しかし、この図では、3-28西端と3-18だけに墓地の表現（v v）があり、3-28東半は畑地の表現となっている。一光寺墓地内には中山平次郎が防塁の痕跡として注意した「土手」あるいは「低き墓地」があったはずである。この図で3-18・3-28の端に直線が引かれている。これが墓地と他の地目との境界線を意味している可能性もあるが、防塁痕跡を表現しているとも見られる。

農学部（農科大学）の建物名は原図にはなく岩永が追加した。この図には1925（大正14）年に存在せず、1926（昭和元）年に建てられた建物が描かれている。それは動植物学教室の東翼西側の小さい付属屋である。したがって、農学部部分は1926年の状況であることがわかる。工科大学部分は1925年の状況であるから、この図の製作のための測量が南から北へ進行し、工科大学が1925年、農学部が1926年に作業されたという事であろう。

図6 「箱崎方面元寇防塁平面図」（描き起こし図。一部省略し、表現方法を変更した。現在の番地を記入。）

構が残っていること、中山自身が見ることはできなかった地下遺構が明らかになった事を知り、安心するとともに、「してやったり！」と喝采していることであろう。

謝辞 小稿の執筆に当たり九州大学埋蔵文化財調査室の福田正宏氏・森貴教氏、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの田尻義了氏、九州大学大学文書館の折田悦郎氏にお世話になりご教示を頂いた。挿図では九州大学埋蔵文化財調査室の三阪一徳氏を煩わせた。記して謝意を表する。 2017年6月11日提出。11月17日追記

文献

- 井澤洋一・長家 伸 1995「地蔵松原防塁 (GKB-1)」『福岡市埋蔵文化財年報』8 (1993年度)、95頁
- 榎本義嗣 2000「元寇防塁跡第9次調査 (GKB-9)」『福岡市埋蔵文化財年報』15 (2000年度版)、52-54頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造と戦略的機能について」『新修 福岡市史一特別編』302-317頁
- 岡崎 敬 1985「中山平次郎先生と考古学」『中山平次郎集』日本考古学選集11、築地書館、2-9頁
- 川上市太郎 1941「元寇防塁」『元寇史蹟 (地之巻)』秀巧社印刷所、57-95頁
- 小田富士雄 1988「中山平次郎論」『弥生文化の研究10』雄山閣、53-63頁
- 木下讚太郎 1915「元寇防塁の石」『元寇史蹟の新研究』丸善、336-352頁
- 黑板勝美 1914「福岡地方旅行談」『考古学雑誌』4-6、325-342頁
- 武谷水城 1921「多々良川以東に於ける元寇防塁の有無に就て」『筑紫史談』24、32-41頁
- 武谷水城 1922「多々良川以東元寇防塁有無に就ての補足」『筑紫史談』25、33-36頁
- 中山平次郎 1913a「福岡付近の史蹟一殊に元寇の史蹟一」九州帝国大学医科大学雑誌部
- 中山平次郎 1913b「箱崎の石塁」『福岡日日新聞』[中山1984『古代乃博多』に収録、214-236頁]
- 中山平次郎 1913c「元寇防塁の価値」『福岡日日新聞』[中山1984『古代乃博多』に収録、238-249頁]
- 中山平次郎 1914「漢委奴国王金印の出所は奴国王墳墓に非らざるべし」『考古学雑誌』5-2、53-71頁
- 中山平次郎 1915a「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」『元寇史蹟の新研究』309-335頁
- 中山平次郎 1915b「元寇役防塁址と博多湾沿岸の地形変化 (上) (中) (下)」『歴史地理』25-3・25-4・25-5、293-319頁・425-450頁・542-552頁
- 中山平次郎 1915c「盗器に就て」『考古学雑誌』5-11、725-739頁
- 中山平次郎 1915d「鴻臚館の所在に就て再び藤井学士の示教に答ふ」『考古学雑誌』6-1、1-15頁
- 中山平次郎 1917「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て (一) (二) (三) (四)」『考古学雑誌』7-10・7-11・8-1・8-3、595-632頁・667-700頁・16-41頁・129-161頁
- 中山平次郎 1925「博多湾の海岸線」『地球』3-1 [中山1984『古代乃博多』に収録、252-292頁]
- 中山平次郎 1931「今山の石斧製造所址」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』、福岡県、53-69頁
- 中山平次郎 1984『古代乃博多』九州大学出版会
- 福岡市教育委員会 1968「福岡市生の松原元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代 (13世紀) における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第3集
- 福岡市教育委員会 1969「福岡市今津元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代 (13世紀) における蒙古襲来に対する石築地の第二次 (昭和43年度) 調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 福岡市教育委員会 1970「福岡市西新元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代 (13世紀) における蒙古襲来に対する石築地の第三次 (昭和44年度) 調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 福岡市教育委員会 1992『博多32：博多遺跡群第68次発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集
- 福岡市教育委員会 2002 a『博多85：博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集
- 福岡市教育委員会 2002 b『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集
- 松村道博・池田祐司 1998「元寇防塁第6次調査 (GKB-6)」『福岡市埋蔵文化財年報』11 (1996年度)、70頁
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」『古代の博多』九州大学出版会、365-394頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世1』平凡社、180-194頁
- 山田安栄編 1892『伏敵編』吉川半七

V まとめ

平成28（2016）年度にHZK1601・HZK1603・HZK1604地点で埋蔵文化財発掘調査を実施し、その結果の整理・分析を行った。本年度調査によって、九州大学箱崎キャンパス地区に、古代末～近世の福岡市東区箱崎地区にひろがった箱崎遺跡の分布が及ぶこと、また、鎌倉中期の蒙古襲来に備えて薩摩藩が築造分担した元寇防塁（石築地）に比定可能な石積み遺構が部分的に残ることが判明した。

後者に関しては、平成29（2017）年度も引き続き、追跡調査を行っている。本書刊行時の見解によれば、本キャンパスを南北に貫いて延々と築かれたとみられる石積み遺構は、本キャンパス北部となる旧理学部～農学部エリアで、比較的よく残っている。また、大学敷地の北東に接する元寇防塁史跡指定地（地蔵松原地区）の防塁遺構（IV－6章参照）と連続的な位置関係にある。本キャンパス内の石積み遺構は、中山平次郎が大正期以来、その存在を場所とともに具体的に指摘してきた「箱崎の元寇防塁」の位置とまさに一致する所から、次々と発見された。中山は、実際に発掘をしなかったが、地表観察から地形判読を行い、博多湾の海岸線変化などを考慮した上で、箱崎の元寇防塁ラインを推定していた。本調査室による調査成果は、その視点が的確であったことを証明した（IV－8章参照）。

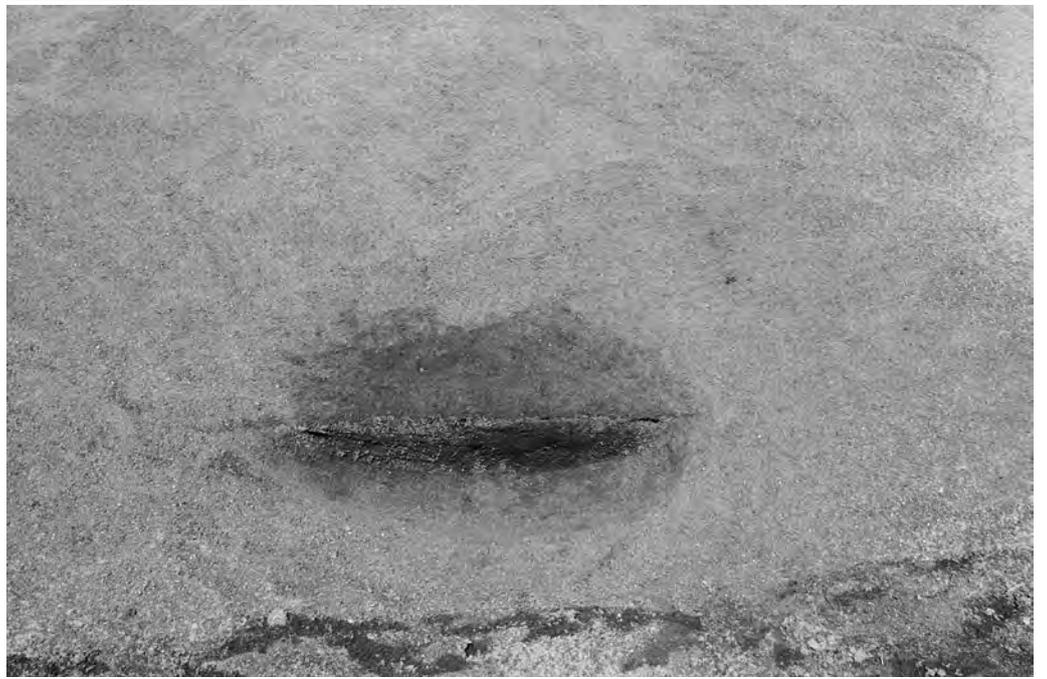
平成29年度HZK1701地点発掘調査で行った堆積環境調査は、中山の視点を継承発展させたものである。箱崎の元寇防塁築造期の汀線復元と本キャンパスが立地する砂州における海岸砂丘の形成過程復元を目的としたジオスライサー調査と構造解析を行い、石積みは海に面した浜堤頂部付近を整地した上に築造され、そこから当時の汀線までは20～30mと、かなり接近していたことを明らかにした。北部九州の堆積環境史研究に長年の実績のある下山正一先生に協力を仰ぎ、遺跡形成史を考古学・地質学の両面から捉えようとした。本件に関しては、平成29年度事業成果として次集報告書で解説されるべきであるが、平成28年度に確認された土層堆積を説明するに不可欠な地学的情報を取得しているため、本書では先行して、堆積環境の解析結果と、それにもとづく考察を掲載した（IV－7章）。

調査結果から、箱崎の元寇防塁は、築石列（1列3段以上）＋裏込栗石／間詰め石＋背面盛土（文献に記される「裏加佐」か？：IV－6章参照）＋下部整地盛土によって構成されることがわかった。岩石学的分析によると、石列を構成する石材は、近隣で採取可能な礫岩・砂岩である（IV－1・2章）。また、HZK1601地点で発見された溝状遺構は単独遺構ではなく、石列が載る浜堤の背部（鞍部）に付随する遺構であることもわかった。これも、防塁遺構を構成する一部として認定すべきである。福岡市西区生の松原地区の元寇防塁と類似した構造であるが、本遺跡で箱崎地区に独特の特徴も認められることは、特筆に値する。溝状遺構は平成29年度調査の複数地点でも発見されており、機能等を解明するため、現在、調査成果の整理途中にある。その詳細に関しては、次集報告書で説明される。

箱崎の元寇防塁は、今日までの学内における大型基礎を要する建物の増改築や配管工事の際にも検出されていたという。かつては、埋蔵文化財の重要性が学内で十分に認知されていなかったこともあり、すでに多くの地点が破壊・消滅の危機に瀕している。その点からすると、本学調査室には、九州大学統合移転推進事業の完了前に、丁寧な埋蔵文化財調査により現時点での保存状態を漏れなく記録報告し、最善の方法で遺跡の全貌を明らかにする必要がある。それとともに、開発か記録保存かという二項対立的な枠組みに拘束されることなく、学術的な価値評価を行い、保護・活用のあり方についても真剣に考えていく責任がある。福岡市と地元箱崎地区に住む人たちの貴重な地域文化資源として、箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス地区が適切に取り扱われていくことを願う。（福田正宏）



(1) HZK1601地点
土坑SK01 (西から)



(2) HZK1601地点
土坑SK02 (南から)



(3) HZK1601地点
溝状遺構SD01
埋土①礫集中 (南東から)



(1) HZK1603地点
西地区石積み遺構SF01
検出面裏込石出土状況
(西から)



(2) HZK1603地点
西地区石積み遺構SF01
検出面裏込石出土状況
(南から)



(3) HZK1603地点
西地区石積み遺構SF01
(西から)

(4) HZK1603地点
西地区石積み遺構SF01
石材no.11直下
土師皿出土状況(西から)



(5) HZK1603地点
西地区b—b'ライン土層断面
(北東から)



(6) HZK1603地点
西地区c'—cライン土層断面
(南から)





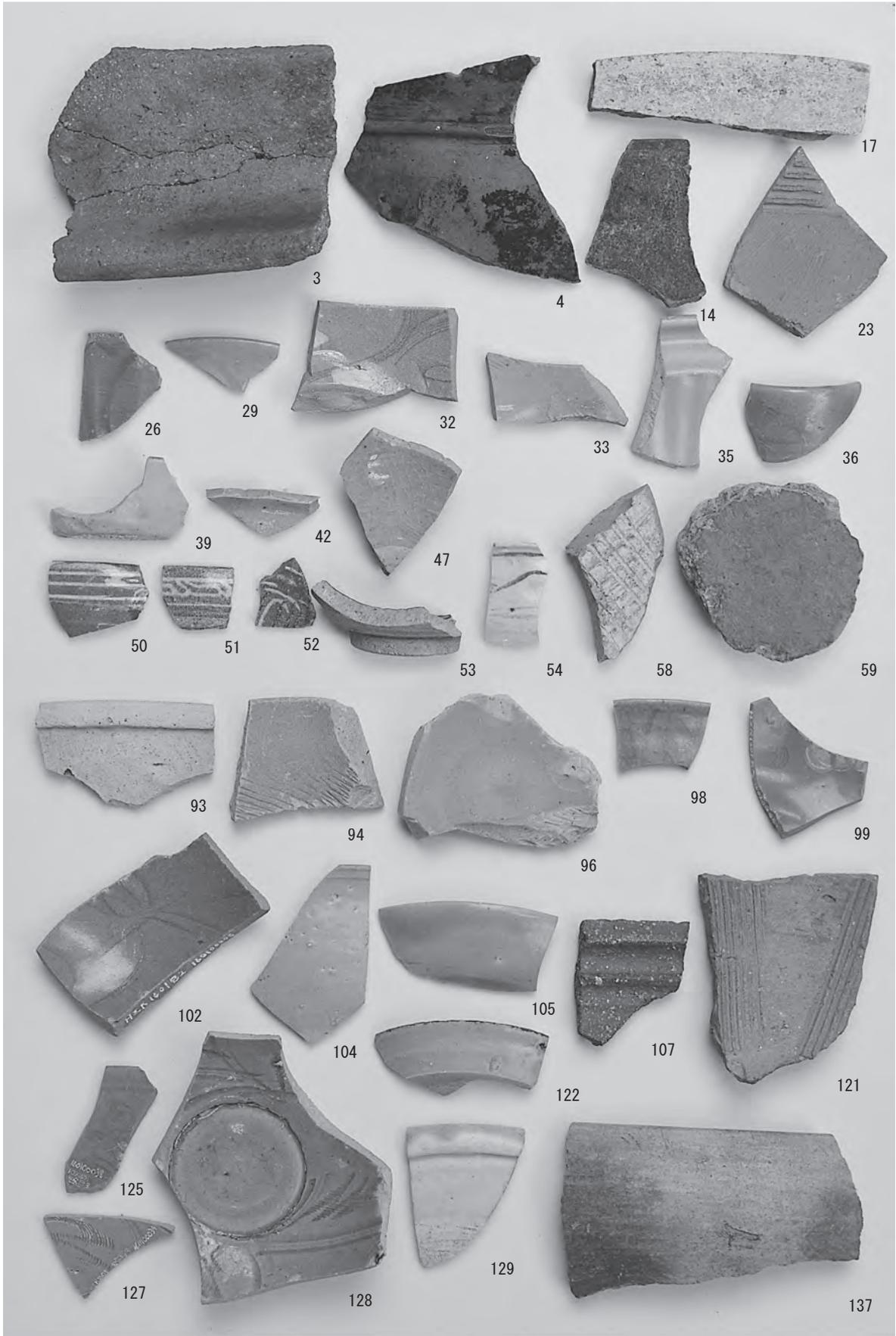
(1) HZK1604地点
西地区上面石材出土状況
(南西から)



(2) HZK1604地点
西地区近代遺構 SQ01
(南から)



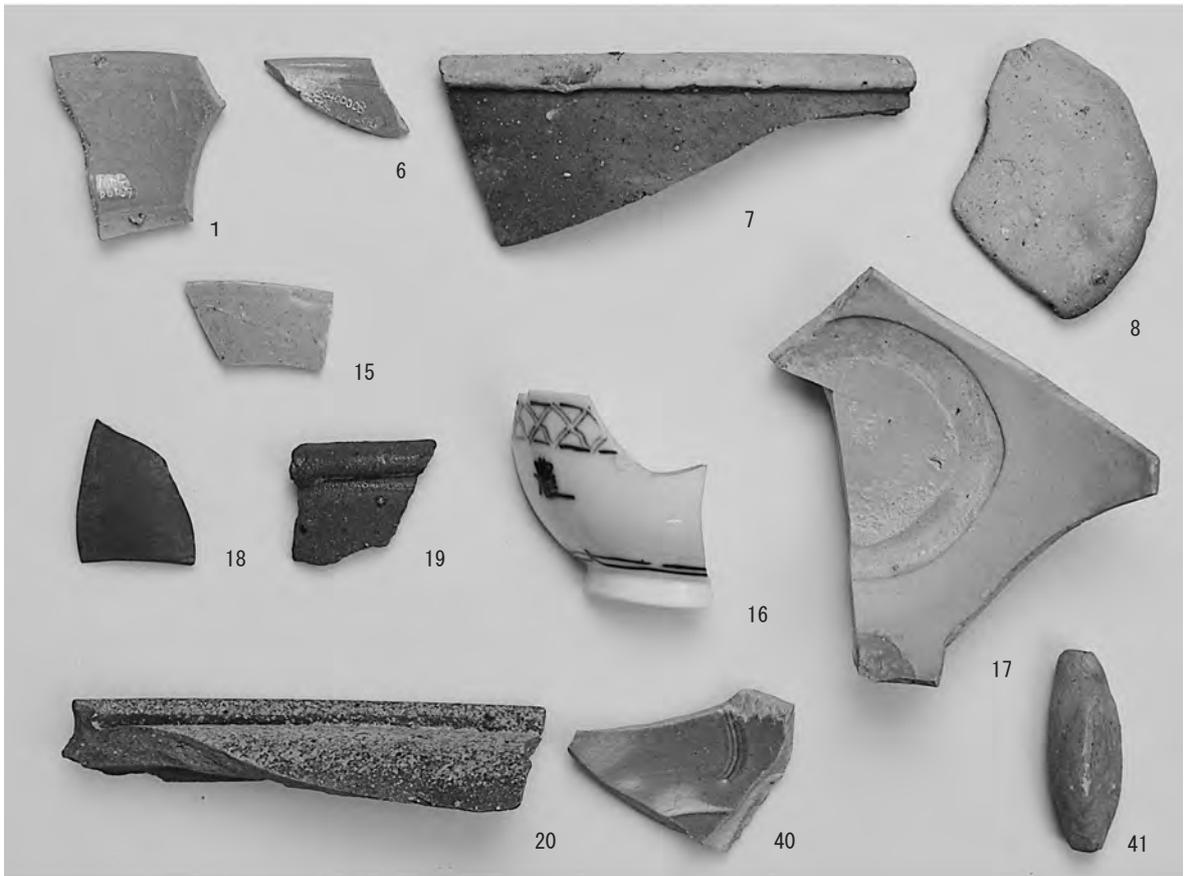
(3) HZK1604地点
西地区d-d'ライン土層断面
(北から)



(1) HZK1601地点 遺物写真



(1) HZK1603地点 出土遺物



(2) HZK1604地点 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はごぎいせき—HZK1601・1603・1604ちてん—							
書名	箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—							
副書名	九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1							
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	福田正宏・森 貴教							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1							
発行年月日	2018年1月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はごぎいせき 箱崎遺跡 HZK1601ちてん HZK1601地点	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はごぎ6ちょうめ 箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 32"	130° 25' 32"	2016.5.16) 2016.6.8	530	学術研究
HZK1603ちてん HZK1603地点	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はごぎ6ちょうめ 箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 35"	130° 25' 32"	2016.8.22) 2016.10.14	150	学術研究
HZK1604ちてん HZK1604地点	ふくおかしひがしく 福岡市東区 はごぎ6ちょうめ 箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 36"	130° 25' 32"	2017.2.20) 2017.3.24	170	学術研究
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
HZK1601地点	集落跡・散布地	中世	溝状遺構	陶磁器、土師器		石片散布、溝状遺構を発見		
HZK1603地点	集落跡・散布地	中世	石積み遺構	陶磁器、土師器		石積み遺構を発見		
HZK1604地点	集落跡・散布地	中世	石積み遺構	陶磁器、土師器		石積み遺構を発見		
要約	<p>箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパスで、計3地点の発掘調査を行った。旧理学部二号館の南側に位置するHZK1601地点では、幅14m、深さ1.5mの溝状遺構(SD01)が検出された。その埋土から、中国産陶磁器、土師器、須恵器、土錘、石錘などが出土した。調査区西寄りの地点(幅約4m)で、拳大～人頭大の石片の散布(SX01)が確認された。元寇防塁の構成物(裏込石)が後世の人為攪拌の影響を受けて散在した可能性がある。中央図書館南側・防音講義室の南側に位置するHZK1603地点では、博多湾旧汀線に並行する浜堤の最上位付近(標高2.0～2.1m)で、石積み遺構(SF01・SF02)が検出された。最下段には、大型石材(40～70cm大)が、博多湾側(西側)に面を揃えて23石以上、南北17m以上にわたり直線的に並び、大型石材が3段(高さ約90cm)積み上げられた箇所も、一部に残る。大型石材の面は平坦になるように形成されている。各々の隙間には、小型石片が充填されている。防音講義室の北側・東側に位置するHZK1604地点では、HZK1603地点で発見された石積み遺構の延長線上にある石積み遺構(SF03・SF04)と小型石片が検出された。大型石材は原位置を保っている。これにより、防音講義室を挟んで全長約35mの範囲にわたり、石積み遺構が存在したといえる。</p> <p>立地条件・帰属年代・構築方法から、HZK1603地点、HZK1604地点の石積み遺構は、鎌倉時代に薩摩国が造営分担したと記録に残る、箱崎の元寇防塁の一部である可能性が高い。HZK1601地点の石片散布、溝状遺構は石積み遺構に関係すると考えられる。</p>							

箱崎遺跡

—HZK1601・1603・1604 地点—

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第1集

2018(平成30)年1月23日

発 行 九州大学埋蔵文化財調査室
福岡市東区箱崎6-10-1

印 刷 株式会社ミドリ印刷

